

2022 年 3 月 10 日

2022 年度 学位論文（博士）

古代日本庭園の底流にあるアニミズム的要素
—祭祀空間の造形と文化的営みから—

Animistic elements in Ancient Japanese Gardens
—Research into forms and cultural activities of the space for divine
service—

指導教員

尼崎博正 教授

町田 香 准教授

京都芸術大学大学院
芸術研究科芸術専攻
博士課程
52011002 高宮さやか

目次

序章 研究の背景と目的、方法	1
第1節 研究の背景	1
第1項 日本庭園の形成に影響を与えた外来思想	1
第2項 庭園に関わる発掘遺構の先行研究	3
第2節 研究の目的	9
第3節 研究の方法と構成	9
第4節 ニワの概念、発音と表記と語義	12
第1項 ニワの概念	12
第2項 ニワの発音と表記と語義	14
第1章 聖なる親水空間	19
第1節 水辺の祭祀—流れと州浜—	21
第1項 縄文時代から古墳時代の湧水と流れをもつ祭祀遺構	21
第2項 縄文時代から古墳時代にかけての祭祀の様相	24
第3項 飛鳥時代の祭祀空間と庭園の造形	27
第4項 奈良・平安時代の祭祀の名残	31
第5項 大陸・半島の古代園池	37
第2節 造形のモチーフと変遷	39
第1項 流れと州浜、溝と石敷き	39
第2項 州浜でおこなわれた祭祀	42
第3項 州浜の復活と国風化という評価—東院庭園の改修についての推測—	44
第3節 池に迎えるもの	45
第1項 農耕神事の池	45
第2項 鑑賞の池	48
第3項 池の役割	49
第4節 小結	52
第2章 古代庭園における島と州浜	54
第1節 本章の目的、方法	54
第2節 祭祀空間の造形とそのモチーフ	55
第3節 祭祀空間の庭園化—「島」の出現	57
第1項 「島」の出現とその造形	57
第2項 「島」のモチーフとイメージ	59
(1) 外来文化の影響の程度について	59
(2) 古代中国における「島」—神仙島—	61

(3) 外来の「島」のイメージとわが国に実際に造られた「島」の違い	62
第3項 「島」の意味と「州浜」との不可分性	63
(1) 国としての「島」—『古事記』	63
(2) 庭としての「島」—『萬葉集』	65
(3) 「島」と「州浜」の不可分性—『作庭記』	66
第4節 庭園の国風化とそのモチーフ	67
第1項 東院庭園にみる国風化	67
第2項 国風庭園のモチーフとしての難波津	68
第5節 古代庭園の「島」と「州浜」にみるアニミズム	71
第3章 『作庭記』の底流にあるアニミズム—立石を中心に	74
第1節 本章の目的、方法	74
第2節 『作庭記』と石に関わる表現—「靈石」、「三尊仏の石」	76
第1項 『作庭記』の作者と年代、その流布	76
第2項 「靈石」と「三尊仏の石」および禁忌	77
第3節 「乞はんにしたかひて」の解釈	78
第4節 日本的アニミズム	80
結章 古代日本庭園の底流にあるもの—日本的アニミズム	84
第1節 「ニワ」の祭祀的性格	84
第1項 「ニワ」という広場	84
第2項 宮城のニワの文化的営み—行事と節会	87
第3項 ニワの特質—清浄性と仮設性	98
第4項 わが国の饗宴と芸能の祭祀的性格	99
第2節 沈潜する祭祀の記憶	101
第1項 ニワの造形とモチーフ	101
第2項 州浜の重要性	106
第3項 立石のアニミズム	109
第3節 結語	113
注釈	119

参考文献

資料一覧・資料

図版一覧・図版

発表論文リスト

序章 研究の背景と目的、方法

文献における日本庭園の初見とされるのが、飛鳥時代（7世紀）に朝鮮半島の百済から渡来した技術者が宮城の南庭に須弥山をつくり呉橋をかけたという『日本書紀』の記述であり、日本庭園のはじまりに外来文化の影響があること、また、庭園につくられた蓬莱島に見られる神仙思想や浄土庭園のような仏教などの外来思想の影響があることが指摘されてきた。しかし、外来の文化や思想の影響があるとされながら、日本でつくられた庭園は外来の庭園の完全な複製ではない。なぜ、完全に複製されなかったのだろうか。その要因として日本的なアニミズムがあるのではないかと考える。本研究は、古代の日本庭園の造形と文化的営み（機能・利用）を先史時代までさかのぼって調査・分析することによって、日本庭園の底流にアニミズムがあることを明らかにするものである。

第1節 研究の背景

第1項 日本庭園の形成に影響を与えた外来思想

日本庭園の形成に影響を与えたとされる神仙思想や仏教は、庭園内では蓬莱三山や禅宗寺院の枯山水庭園としてよく知られている。「蓬莱三山」とは「蓬莱山」「方壺山または方丈山」「瀛州山」の三山で、東海に浮かぶ島にそびえる山である。江戸時代成立の『築山庭造伝』には「山水の中央に蓬莱山あるべし。是祝言なり。」¹とあり、わが国の庭園においては池泉内の蓬莱島としてみられるものが多い。仏教の影響としては平安時代に作庭されたいわゆる浄土庭園のデザインが、周辺の景観まで取り込んで西方浄土を表現したことや、庭園内の石組みや立石には「三尊仏の石」²あるいは大日如来を表す「両界石」³といった仏教由来の名をもつものは多い。また中世の禅宗寺院で作庭された石組みと白砂敷きの枯山水庭は禅僧が修行のために作庭した禅の宇宙観をあらわすものとされている。

従来の造園史学においては、飛鳥時代（7世紀）に朝鮮半島の当時の百済から渡来した技術者が宮城の南庭に須弥山をつくり、呉橋をかけたのが日本庭園の始まりであるとし、奈良

時代を庭園史の起点としてきた。日本の庭園は大陸文化の受け入れによって始まったのであり、「日本庭園の原型は中国庭園ですから」⁴ という説は現在でも主流であろう。日本庭園の造形意匠としての「流れ」「州浜」「島」「池」そして「立石」について、その起源やモデルが大陸・半島にあり、その影響を大なりとする論調には金子裕之、岩永省三、田中淡、小野健吉らの研究がある⁵。田中淡は毛越寺庭園の遣水を普朝王義之の蘭亭の「流觴曲水」につながるものと見ており、『作庭記』についても中国の風水・陰陽五行思想関係の専門方術書の影響を重くみている⁶。池や流れの州浜護岸について小野がそのモデルを中国洛陽上陽宮の卵石護岸である⁷とする説や、金子が平城宮東院庭園について、この時期に我が国の園池が半島型から中国型に転換した⁸と見ていることなどである。こうした論調が現在の日本庭園史観の主流を形づくっているとみられる。

一方で外来文化の影響を限定的であったと見る論調もある。平城宮東院庭園の下層園池の蛇行溝で大陸風の「曲水の宴」が行われていたという見方について奈良文化財研究所の高瀬要一、今江秀史、他の研究者からは「曲水の宴説」に疑義がだされており⁹、このことはわが国の「曲水の宴」の実態について再考を迫るものとなっているし、中国、韓国の古代庭園を研究した高瀬要一は「奈良時代庭園の特色」の中でわが国の古代園池と比較して

日本の飛鳥時代園池の様相も、奈良時代園池の在り方も唐や百済、新羅をまねて作ったものとは言い難い。それではどこから来たのか？（後略）¹⁰

と結論を保留にしている。また中村一が東院庭園の州浜について、「自然風景の象徴的表現」¹¹として「庭における日本風の誕生」¹²とする評価や、森蘊の須弥山、蓬莱三山、九山八海等の遺構を検証して

要するに須弥山にせよ、蓬莱山にせよ、その思想の導来された上代に於いても日本庭園の形態の上に全く何等の影響も及ぼさず、（中略）一般の庭園に就いてはほとんど影響がなかったといっても差支えなからう。¹³

とする見方もあり、田中正大は『作庭記』に援用された陰陽五行思想を「同書の重要性には預からない」¹⁴としている。このように、大陸文化のわが国の庭園への影響度については研究者によって温度差があることがわかる。

第2項 庭園に関わる発掘遺構の先行研究

従来、造園史研究においては飛鳥時代に焦点があてられてきたのであるが、昭和の後半から平成にかけて、全国的な土地開発の過程で日本各地の古墳時代以前、弥生時代、縄文時代にまで遡る遺構が検出されるようになった。その発掘遺構の中には、祭祀遺構と推定され、しかもその造形が後代の日本庭園によく似た造形をもつ遺構が検出されてきた。いくつか代表的なものを挙げると、昭和47年（1972）に中国縦断自動車道の建設に伴って調査が開始された岡山県真庭郡の下市瀬遺跡では湧水点を井戸とし、その前に祭壇を設け銅鐸を吊るして祭祀を行ったとみられる弥生時代の遺構や、平成4年（1992）に調査が開始された群馬県月夜野町の矢瀬遺跡では湧水点から流れをとったうえ一部を石列で囲い、隣接する祭壇とみられる石敷きには石組がみられるものであった。これと相前後して平成3年（1991）調査が開始された最も重要な遺構が三重県の城之越遺跡である。古墳時代の祭祀遺構とされ、3か所の湧水点から流れをとり、水に降りる州浜や石段、要所の立石は日本庭園の造形に酷似している。この城之越遺跡は平成4年に国の名勝及び史跡に指定されたが、その文化庁の指定解説文には「飛鳥時代以降に次第に形成されていく伝統的日本庭園の造形美と技術の系譜を考える上で庭園史上の価値が極めて高い。」と日本庭園との関係性が城之越遺跡の評価として明示されている。このことから、現存遺構における日本庭園の造形が見られる最初の事例として取り上げられることが多い。

平成8年（1996）には、日本考古学協会1996年度三重大会の「シンポジウム1 水辺の祭祀」において26例の祭祀遺構が報告され、平成13年（2001）～平成16年（2004）の奈良文化財研究所における「古代庭園に関する調査研究会」では、これらの祭祀遺構を庭園にかかわる遺構として取り上げている。こうした遺構は祭祀遺物が出土する状況や、建物との位置関係や軸線、一帯の清浄性等から祭祀遺構と推定されたのであるが、そこにみられる造形

の意匠と技術は、後の庭園の意匠・技術の初期的段階とみられるようになった。

これらの庭園の初期的段階と位置付けられた遺構について、城之越遺跡や六大 A 遺跡（いずれも古墳時代祭祀遺構）の発掘調査を担当した穂積裕昌は、「古墳時代祭儀空間の成立—古墳時代の庭状遺構の評価をめぐって—」（『研究紀要第 15-1 号—特集古墳時代—』三重県埋蔵文化財センター、2006 年）などでこれらの考古学における「祭祀遺構」に「庭状遺構」という語を用いて庭園史への位置づけや評価を積極的に行っている¹⁵。

一方、造園学分野において奈良文化財研究所は平成 13 年度から始まった「古代庭園に関する調査研究」の初回に「古墳時代以前の泉・流れ遺構」として矢瀬遺跡、城之越遺跡、大柳生宮ノ前遺跡、阪原阪戸遺跡、南紀寺遺跡、三ツ寺 I 遺跡、南郷大東遺跡を取り上げ、「これらの遺構を用いてここでなんらかの祭祀が行われたことは、出土遺物から明らかである。それでは、これらの遺構を形の上から後世の庭園と区別することができるであろうか。討議の中でも議論されたように群馬県の矢瀬遺跡や三重県の城之越遺跡などを形態上から庭園と区別することは困難である。また、水を用いていない環状列石や配石遺構、人工的な磐座なども形のみからでは庭園の石組と区別することはできない。」とし、この年度では祭祀遺構を含めて広く庭園と考え、特に後世の庭園と形態的共通性の高い泉と流れからなる上記の祭祀遺構を取り上げて検討を行っている¹⁶。こうした発掘成果の研究は、考古学分野と造園学分野さらには文献史学、民俗学の分野にも波及し、以下のような論文が発表されてきた。

造園学分野では、平成 5 年（1993）、牛川喜幸が「古代庭園の研究—水をめぐる造形とその系譜—」において、5 世紀から奈良時代にかけての遺構とされる「山の神遺跡」（三輪山西麓）を筆頭に城之越遺跡、飛鳥時代の遺構、奈良・平安時代の庭園の他、16 世紀の「一乗谷朝倉氏遺跡」（石川県）及び 18 世紀末とみられている「伊江殿内庭園（巢雲園）」（沖縄）までの遺構や現存庭園を取り上げて主にその平面形態から「流れ」を「遣水型」「流杯溝型」等に分類し、水をめぐる造形の系譜について考察し、日本庭園の萌芽と評価している。また、神社や寺院が占地に際して清水の出る場所を選ぶことは祭祀時代の水の聖性が引き継がれたものと述べ、東大寺の阿加井（閼伽井）の儀式を取り上げて考察している¹⁷。水辺の祭祀

に着目し、造形を追った先駆的研究である。筆者は東大寺の閼伽井が二つ並んでいることは古墳時代の水辺の祭祀遺構である南紀寺遺跡や中溝・深町遺跡にも井戸が二つあることと関係があるのかもしれないと考えている。

もとなかまこと
本中 眞 は「飛鳥・奈良時代以前の庭園関連遺構」『ランドスケープ研究 61 (3) 特集・近年の考古学的成果を造園学の視点からレビューする』日本造園学会、平成 10 年 (1998) において、縄文・弥生・古墳時代の祭祀遺構に於ける造形を概観し、配石・立石、樹木植栽、島をとりあげ造園的意匠の原初があることを概説している。また古墳の構造の一部である葺石が庭園の州浜に流用された発掘調査事例を報告している¹⁸。

近年では 平成 29 年 (2017)、栗野隆は「原始の「にわ」と作庭技術の源流」造園連新聞 第 1278 号. 9. 1 付で秋田県大湯環状列石、巢山古墳出島状遺構、城之越遺跡を紹介し、一般にもわかりやすく解説している。

考古学分野では、先に取り上げた城之越遺跡の発掘を担当した穂積裕昌の平成 18 年 (2006)、「古墳時代祭儀空間の成立—古墳時代の庭状遺構の評価を巡って—」『研究紀要第 15-1 号—特集 古墳時代—』三重県埋蔵文化財センター (前出、以下穂積論文と略す) は庭園史の出発点をどこにおくかについて、庭園の定義に踏み込んだ問題提起を行った。穂積は「現在の庭園史研究は、曲水宴などの後世的な遊宴的要素を大きく評価し、それに引きずられた面が多々あると認識する。」と述べ、大陸の流杯溝にこだわり、奈良時代の庭園を基準とすることへの違和感を示す一方で、奈良文化財研究所が主催した古代庭園に関する研究会における尼崎博正の発言

縄文時代は非日常と日常とが分離されていないという、遺物からの話がありましたが、そういう時期なりステージがあったということですが、日常を非日常化していこうという意識がどこかであってそれが顕在化した時期がいつなのかを問題にした方がわたしはいいと思います。—奈良文化財研究所『古代庭園研究 I』2006 年、p. 59 (再録) (2002 p. 47)

という視点への共感を述べている。ここで語られた「日常を非日常化していこうという意識」とは、奈良県の布留遺跡などで日常の生活道具と祭祀具が住居址から同時に出土することから、日々の生活のなかに祭祀や葬送が入り込んでいた時代があったことがわかるのである。そうした暮らしから祭祀や葬送を切り分けて、特別な場所や日時、執行する人が特定されるようになり、ある場所や時間が非日常化していくことを指している。庭園の定義を既にできあがった非日常空間に置くか、非日常化が始まる場所（祭祀空間の発生）に置くかという議論である。

穂積の研究方法には考古学を基盤に古文献からアプローチする手法があり、儀礼空間と見える庭状の遺跡の構成を『古事記』『日本書紀』と照合し、州浜のモチーフとして『古事記』の倭^{やまと}建^{たけるのみこと}命がなくなっただりを引用し、その原型は「海浜」の可能性ありとしている。

最近では網伸也の「日本庭園の萌芽をみる一考古学からみた飛鳥・奈良時代庭園の変遷―」『民俗文化 No. 31』近畿大学民俗学研究所、令和元年（2019）があり、飛鳥時代以降の庭園の形成の基底に、聖水を祀る「水辺の祭祀」の造形があり、その構成要素の変遷から祭祀空間としては後の寺社仏閣に移行し、鑑賞の機能が庭園に発展したと述べている。

また、祭祀そのものの様相を明らかにした研究として、梅本綾「水辺の祭祀の諸相とその意義」『古事（天理大学考古学研究室紀要）3号』2009年（以下梅本論文と略す）がある。梅本は古墳時代の水辺の祭祀遺物を分類し、『記・紀』『風土記』等の記事と照合して祭祀の様子を復元した結果を根拠に後代の庭園発達の系譜を再検討し、庭園の起源に祭祀があると述べている。さらに湧水点祭祀・流水祭祀・共食^{あひたげ}の場が宮殿内に設けられるようになり、時代が下ると祭祀色が薄れて共食だけが客人をもてなす饗宴として残ったとの見解である。

昭和・平成の時代を通してこのような研究がなされ、現在では日本庭園の原初に祭祀空間の形成のために培われた意匠と技術があることは、概ね受け入れられるようになっている。本論文ではこれら城之越遺跡をはじめ上記で取り上げた後世の日本庭園に通じる造形をもつ祭祀遺構を「ニワ状遺構」と呼ぶことにする。表記を片仮名の「ニワ」とすることについて

ては本章第4節で詳述する。

昭和の後半から平成にかけては、飛鳥時代以降の明らかに「古代庭園」とされる庭園遺構や祭祀空間の可能性をふくむニワ状遺構の新たな検出が相次ぎ、よく知られているものだけでも下記のような実績がある。

昭和42年（1967）に奈良県平城宮東院で園池が確認され、その重要性から復元整備の方針となり、その復元整備中の平成5年（1993）に下層園池の下に最下層園池が検出された。その形状は上層園池とは大きく異なる方池に近いものであったことから飛鳥時代園池のデザインにつながるものと考えられている。また昭和50年（1975）、平城宮にほど近い左京三条で郵便局建設に伴って左京三条二坊宮跡庭園が検出され、やはり復元整備公開となった。一方、大正時代から調査研究が行われてきた奈良県明日香村では平成11年（1999）に飛鳥京跡苑池の検出があり、『日本書紀』に記載のある「白錦御苑」と目されるようになった。大規模な園池である南池は中島を持ち、さらに北側に検出された北池では令和1年（2019）に祭祀遺構（推定）が検出された。

このような地中から発掘された明らかに庭園と呼べる造形やニワ状遺構について奈良文化財研究所の小野健吉は平成10年（1998）の学報『発掘庭園資料』で、

我々は、発掘調査によって発見された庭園遺構を「発掘庭園」と呼んでいる。発掘庭園は庭園の重要な構成要素である植栽をとどめてはいないし、築山等地形的に高い部分も削平されている場合が多い。また廃絶して埋没する際の崩落や埋没後の掘削等によって部分的に損壊している場合もある。しかしながら、庭園の地割や池、さらに石組、配石といった庭園の骨格をその変遷過程まで含めてとどめていることも多く、植栽についても植物遺体から植栽樹種の推定が可能である。発掘庭園は、埋没時以降、自然的・人為的变化を受けることが少ない点において、往時の意匠・構造・技法などに関する基準資料となりうるものであり、実証的な庭園史研究に寄与するところはきわめて大きい。（後略）¹⁹

として発掘庭園の特性とその研究意義を謳っており、発掘庭園の最も古いもので城之越遺跡を扱っている。城之越遺跡は議論の末、名勝指定を受けたことから庭園と認定しているであろう。現存庭園に限らず、一度は埋没した庭園を対象とする研究には考古学分野の報告と知見が絶対的に必要であり、その上にしか成立しえないことは明白である。

京都芸術大学日本庭園・歴史遺産センターが令和3年3月に開講した「庭園学講座 XXV II 文化財庭園の整備と考古学」は副題を「庭園考古学へのいざない」とし、考古学分野の研究者、地元行政の担当者を招いた実務レベルの講座であった。発掘、調査、そして復元整備が行われた古代から中世の文化財庭園のみならず、古墳の意匠も取り上げられたことから、改めてわが国の造園意匠・技術の淵源を考察する機会ともなった。

また、ここで杉本宏は用語の整理を下記のように行っている。

「遺跡庭園」とは、遺跡化した庭園のことであり、埋蔵文化財と同義である。

「発掘庭園」とは、遺跡庭園が発掘調査され保存。整備等によって現存するもの。

「現存庭園」とは歴史的な庭園が現在も維持・管理されているもの。

「荒廃庭園」とは管理されなくなり荒廃した庭園であり、庭園であることは地表で十分認識できるもの。

「文化財庭園」とは、法・条例により名勝等に指定された庭園であり、管理状態にあるもの。

「庭園遺跡」とは、上記の別からはなれ、庭園の跡あるいは庭園の遺構などを示す一般概念。²⁰

杉本が挙げたこれらの用語は古代庭園を研究対象とする場合に避けて通れない管理状態のレベルを反映しており、極めて現実的な整理であると言えよう。

わが国には当時世界最大といわれる仁徳天皇陵をはじめとする古墳の築造技術がすでにあり、埴山古墳の造形には、造形そのものに当時の人々の風景観、世界観を窺うことができる。それは「島」とミニチュアにした現世の家屋や暮らしを写した土偶と、当時すでに普及

していた州浜の意匠と技法である。これらの「庭園の夜明け前」とも言える時代の意匠や技法が、外来の大陸・半島文化を取り入れながらも必ずしも中国庭園・韓国庭園とはならなかったわが国の庭園の出自を物語る日が来るのではないか。「庭園を対象とする考古学」を謳うこの分野には庭園史と連動しながら、広い視野を持ち、学術研究のみならず、文化財庭園を保持する自治体や各機関の要請にも応えていくプラットフォームとなることが期待されよう。

第2節 研究の目的

縄文時代から古墳時代に至るニワ状の祭祀遺構に、後の日本庭園の意匠や技術の初期的段階がみられ、また飛鳥時代頃から大陸・半島との交流が活発になり、そのことが庭園の造形に与えたとみられる事象については多くの先行研究がある。それらを踏まえた上で、祭祀空間の造形的構成要素である湧水、流れ、州浜、立石、および池、島を抽出し、大陸・半島から流入したとみられる造形とわが国で実際に造られたニワの造形との間にみられる差異に注目しながら、後の庭園にどのように受け継がれ、変化し、あるいは立ち消えていったのかを分析する。さらに、その空間における文化的営みを、古墳時代までは主に考古学の成果に基き、それ以降については古記録や民間伝承および当時の文学や絵画を検証することによって、縄文時代から通底して日本庭園の底流にあるものが日本的アニミズムとも言われるわが国に古くからあった土着の信仰であることを実証するのが本論の目的である。

第3節 研究の方法と構成

本論文では縄文時代から平安時代までのニワ状遺構や発掘庭園、現存庭園の造形と文化的営みに関する事例・事跡を調査し、それらを整理・分析するにあたり、造形に関しては、主に全国各地の研究機関による発掘調査報告書類を用い、ニワ状遺構、発掘庭園、現存庭園など39件を抽出した。抽出した39件およびそれぞれに使用した資料を(表1)にまとめた。代表的な使用資料は、奈良県立橿原考古学研究所編集・発行による『奈良県遺跡調査概報』

や奈良文化財研究所編集・発行による『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』、『発掘庭園資料』などであり、約 39 件を取り扱い調査対象とし、それぞれ初回の発掘調査から最新の発掘調査まで管見の範囲で確認した。各事例について遺構平面図をもとに湧水（泉や井戸）、流れ、州浜、池、島、立石などといった構成要素を抽出し、年代順に整理したのが（表 2）である。また、これらの遺構の具体的な解釈については、『シンポジウム 1 水辺の祭祀』（日本考古学協会三重県実行委員会、1996 年）、『発掘庭園資料』（奈良文化財研究所学報第 48 冊、1998 年）、『古代庭園研究 I ―古墳時代以前～奈良時代』（奈良文化財研究所学報第 74 冊、2006 年）、『平安時代庭園の研究―古代庭園研究 II』（奈良文化財研究所学報第 86 冊、2011 年）などを主に参考にした。加えて、飛鳥京跡苑池遺構などの明日香村の各遺構、城之越遺跡、纏向遺跡、平城宮東院庭園、左京三条二坊宮跡庭園、毛越寺庭園、無量光院庭園、平等院庭園、浄瑠璃寺庭園などの公開されている遺構や庭園で可能な限り現地調査を行った。使用した一次資料、二次資料を（表 1）にあげ、（表 2 各遺構・庭園の概要）には各遺構ごとの参考文献を併記した。

一方、ニワ状遺構や庭園で行われた文化的営みに関しては、主に『古事記』（倉野憲司校注、岩波書店、2016 年）や六国史（『日本書紀』坂本太郎・家永三郎ほか、岩波書店、1994～1995 年他）、『萬葉集』や『作庭記』および『栄花物語』（松村博司・山中裕校注、日本古典文学大系 75、岩波書店、1964 年）などの平安時代までの古記録を使用した。これらの文献から抽出した記事の原文を一覧に整理したのが（表 4）である。（表 4）は各記事を把握しやすいように番号を振り、和暦、西暦、天皇名に続き、該当する原文と本論で重要なキーワードを掲載した。さらに原文の典拠（底本）と備考を記した。

序章では、先行研究とあわせて、現時点で「庭」「庭園」という言葉の定義やイメージは各研究機関や研究者によって必ずしも様ではないことから、「庭」の概念や発音、表記、語義を整理し、本論文では原初の「庭」に「ニワ」というカタカナ表記を用いることを述べる。

ニワは原初には「祭祀の場」を意味し、その中核は広場として確保された空間であり、現

代では神社の神殿の前の空間が最もそれに近いと考えられる。その広場は湧水点の前や湧水点から引いた流れに臨む祭壇や広場として確保されたり、流れの合流点である三角州に設けられたもので、弥生時代以降は首長の居館の中にある遺構もあり、祭祀遺構の発掘調査結果によると広場や祭壇に接して湧水（泉や井戸）、流れ、州浜、池、島、そして立石などの造形をあわせ持つ空間構成となっているものがみられる。よって、第1章では、祭祀空間の具体的な造形を取り上げる。具体的な造形とは「湧水」「流れ」「州浜」「池」「島」「立石」などであり、それらは「水」に深く関わることから親水空間となる。縄文時代の「流れ」や「州浜」などの造形を有する水辺の祭祀の場の造形から、平安時代の現存庭園まで39例を対象として構成要素を抽出し分析する。同時にその空間で行われた文化的営みやありようを検証し、その空間構成の意義と造形のモチーフについて考察する。この章では湧水、流れ、州浜、池、が主な分析対象となる。

第2章では飛鳥時代以降に多くみられるようになった池の中の「島」と「州浜」を取り上げる。「島（シマ）」は当時「ニワ」を指したという用例もあり、ニワの造形としても重要な構成要素である。また飛鳥時代に活発になった大陸・半島との交流を通して外来の文化や思想の影響が見られるのであるが、それらを模倣的にそのまま取り入れたのではなく、そこにはわが国固有の事情もみられることから、外来の造形との比較を行い、造形における特性と、わが国でその造形に込められたものが何であったのかを『古事記』『萬葉集』『作庭記』を通して明らかにする。

第3章では「立石」を取り上げる。第1章でみてきたニワ状遺構や庭園に縄文時代から平安時代まで一貫してみられる構成要素として「立石」があり、時代が下るにつれ神仏の名を与えられたり、山岳を象るものとしてニワに存在する。しかし、わが国においてはそのすべてが一貫して自然石であり、加工することがないことから、何らかの特異な役目を持つ、あるいはモチーフがあったことが考えられる。この結論は推測による他ないのであるが、立石については平安時代後期に成立したとみられる『作庭記』に多くの記述があるので『作庭記』を中心に、『古事記』以来の立石に関わる記事も併せて、その原初に有していたと考えられ

る役目あるいはモチーフとその特性を考察する。

結章で原初の「ニワ」が祭政一致の時代の祭祀の場を意味し、最もシンプルな清浄に保たれた、平常は広場のような何もない空間であり、現代では神社の本殿や拝殿前の広場がそれに近く、その事例を現在の庭園に確認することはほとんど不可能であるが、唯一、天皇の居所でもある宮城のニワには引き継がれていると見られること、及び正史の編纂によりある程度の記録があることから、宮城のニワを取り上げ、そこで継承された文化的営みをとおして原初のニワの特性と意義を考察する。

以上のような広場としてのニワを含めて湧水、流れ、州浜、池、島、そして立石、これらの祭祀空間の造形が内包していたものが何であったのか、また祭祀空間が庭園化していく過程において、どのように受け継がれ、変容し、あるいは立ち消えていったのかを検証し、庭園の造形に沈み込み底流をなしているとみられるわが国の素朴な信仰であり自然観とも言えるアニミズムを明らかにする。

第4節 ニワの概念、発音と表記と語義

第1項 ニワの概念

序章で触れたように、従来、造園学の分野では、小野健吉をはじめとして、奈良時代以降の庭園の変遷を庭園史と捉え、その少し遡る飛鳥時代の園池を初発とし、その造形に大陸・半島文化の影響を多大に認め、庭園の定義を鑑賞・慰安・娯楽を主な目的とする考え方があった一方で、昭和の後半から相次いだニワ状遺構の検出は庭園をより多角的に考える契機となった。奈良文化財研究所は祭祀遺構と推定された遺構と庭園を形態の上から区別することは困難であることから、次の二つの立場を検討した。第一は庭園の定義を広く「デザインされた外部空間」として祭祀遺構を含める立場であり、第二は祭祀遺構と庭園を分けて考え、この場合には庭園の定義を「鑑賞、宴遊を主目的として造形された外部空間」とする。この双方を検討し平成13年度の研究会では第一の考え方を採用したのである。この研究会に参加していた穂積は前述のとおり、奈良時代以降の鑑賞・宴遊を主目的とする従来の庭園

観に違和感を持ち、尼崎博正の発言「日常を非日常化していこうとする意識」への共感を示しているが、尼崎は「何らかの目的のために修景された空間は「庭」である。その目的は鑑賞・饗応・宴遊だけとは限らない。」を持論としていることから、庭園の定義については潜在的には両論があったと見るべきであろう。中村一は『風景をつくる』のなかで、「ニハ」を「なわばり、テリトリー」と推定し、農耕が始まる以前のわが国の暮らし、それは縄文時代の狩猟採集の生活に他ならないのであるが、食糧と生活に必要なものを調達した生活環境そのものの範囲をニハと呼んでいたが社会の発達につれて縮小していき現代の庭につながっていると論じている。従って「庭を造る」という語句のなかに、現代の環境デザインという意味が、先取的に込められている。」とも述べている。そしてゆっくりと縮小したニハは共同体において祭祀空間ともなり、やがて遊樂的、芸術的機能が分化して近代的な庭に発展したと述べている²¹。「なわばり」を含むかなり広い定義と言えよう。

この「なわばり」を表す語には「シマ」があり、奈良時代成立の『萬葉集』にもその用例がある。それは「ニワ」と「シマ」がほぼ同義に使われる用例である。これについては第2章で詳述する。

上原敬二は『造園大辞典』「庭園」の項で「個人が自由に利用、鑑賞しうる園地をいう。本格の設計を行うにはその国の自然、国民性、居住政策、宗教学が関係してくる。庭と園とは本来別個の意味あり、これを合して庭園の2字熟語としたのは明治6年である。これが中国に逆輸入した。」²²とする一方、庭（てい）〔庭〕を別項にし「庭は植物に関係のない場所、堂前の空地をいう、庭除、院子の意、中国でもこの意味で庭訓、家庭などと用いる、植物に縁の深い園とは異なる。字源は大人が南面して立ち、屋根のないこと（土）雨滴（：）区画（L）を示し、後世広をつけた。」²³（下線筆者）として庭の古字を詳細に図示している。上原のこの『造園大辞典』が出版されたのは昭和53年（1978）であるが、平成にかけてのニワ状遺構の検出を予見していたのであろうか。

以上のように現在ニワの概念としては、宴遊、鑑賞の空間の他に、なわばり、祭祀空間が上がってきている。本来、1000年を超えて時代が違うものを一つの定義に合わせることに

無理があると考えるべきであろうが、わが国の庭園を他国の庭園と比較して考えるときに、避けてとおれないのがこの庭園の出自である。前述の高瀬要一の一文を借りて繰り返す。

「日本の飛鳥時代園池の様相も、奈良時代園池の在り方も唐や百済、新羅をまねて作ったものとは言い難い。それではどこから来たのか？」

本論文はこの外来の造形とは異なる部分の源流を探ろうとする試みでもある。

第2項 ニワの発音と表記と語義

国立国語研究所の小木曾智信によると、奈良時代以前のわが国には「ハ行」の発音「はひふへほ」がなかった。また文字も使われておらず、中国から伝わった漢字の音をあてて奈良時代に記録した古記録『古事記』や『日本書紀』を見ると、現在のハ行には波・比・不・部・保があてられており、当時の中国での発音から、その当時わが国では「ぱ（波）」「ぴ（比）」「ぷ（不）」「ぺ（部）」「ぽ（保）」と発音していたということである。

平安時代になると「ぱ」は「ふぁ」と発音されるようになり、鎌倉時代以降「ふぁ」は「は」「はし（箸）」「はっぱ（葉っぱ）」などの「は」と、「わ」「私わ」「かわ（川）」などの「わ」の2通りに変化し現在に至るという。その表記は平安時代に漢字のくずし字から作り出された「は（波からつくったひらがな）」が「ふぁ」のち「わ」と発音される時代が続き、表記は昭和にいたるまで「は」のままだったのであり、昭和21年の現代仮名遣いの制定により発音通りに「わ」と表記するようになるまで残っていた。ただし現代仮名遣いの制定時も主語の下につく「わ」は混乱をさけるため「は」のままとしたとのことである。発音が「ぱ」→「ふぁ」→「わ」と変化したのはそのほうが楽に発音できるからである²⁴。この説に従えば、『古事記』が「ニワ」にあてた漢字は「爾波」「庭」「廷」であることから、当時ニワのことは「ニパnipa」と発音したと考えられる。また現在の「ニワ」の発音は「にぱ」「にふぁ」「には」「にわ」と変化したことになる。

表記は「ニハ」「には」が旧仮名遣いであり「ニワ」「にわ」が昭和21年政府制定の現代仮名遣いである。現在、研究者によって「ニハ」「ニワ」およびそのひらがな「には」「にわ」、漢字の「庭」の両方が使われている。例をあげると、

奈良文化財研究所「場（ば／にわ）、庭（にわ）、廷（にわ）、齋庭（いつきのにわ）」²⁵

穂積裕昌「「ニワ」の淵源と城之越遺跡」²⁶

中村一「ニハから庭へ」²⁷

等である。ちなみに白川静は「ニハ」を正しい表記としている²⁸。

本論文では現代仮名遣いにしたい「ニワ」を用いる。日本語を母語としない読者にも簡便である。

わが国で文字によって残された文献は和銅5年(712)に完成した『古事記』が最も古く、大陸から伝わった漢字の音を大和言葉にあてる音読みと訓読みの混合する文体が用いられた。それまでは口頭伝承のみである。その『古事記』に記された庭に関わると思われる用例は次の4例である。以下に倉野憲司の校注『古事記』(岩波書店、2016年)の原文と読み下し文を引用する²⁹。まずは、「弓腹振立而、堅庭者、於向股蹈那豆美、三字以レ音。如二沫雪一蹶散而、(弓腹^{ゆはら}振り立てて、堅庭^{かたにわ}は向股^{むかもも}に蹈^ふみなづみ、沫雪^{あわゆきな}如^くす蹶^{ふる}散^{はら}かして)」³⁰であり、倉野は、須佐之男命を描写したときのこの「堅庭」は固い地面の意としている(表4-4)。

次に「故、天皇坐二筑紫之訶志比宮一、將レ撃二熊曾國一之時、天皇控二御琴一而、建内宿禰大臣居二於沙庭、請二神之命一。(故、天皇筑紫の訶志比宮^{かしひのみや}に坐しまして、熊曾國^{くまその}を撃たむとしたまひし時、天皇御琴^ひを控^ひかして建内宿禰^の大臣、沙庭^さに居て、神の命^{みこと}を請^こひき。)」³¹とあり、これは神功皇后の熊襲國討伐の際、皇后が神がかりして建内宿禰に託宣するくだりである(表4-12、13、14)。「沙庭」は神託を伺うニワと解釈されている。3例目が「佐怒都登理 岐藝斯波登與牟 爾波都登理 迦祁波那久 宇禮多久母 那久那留登理加(さ^の野^{とり}つ鳥^{きざし} 雉^{には}はとよむ庭^{とり}つ鳥^{かけ} 鶏^は鳴く^{うれた} 心痛くも 鳴くなる鳥か)」³²であり、これは大国主神が沼河比売^{ぬなかはひめ}に求婚するときの歌で、倉本は「爾波」を「庭」「家の庭」の意と解釈している(表4-7)。4例目が「若坐二出雲之石くま之曾宮一、葦原色許男大神以都玖之祝大廷乎問賜也。(もし出雲^{いは}の石^{その}くまの曾宮^{あしはらしこそを}に坐す葦原色許男大神をもち拜^{いつ}く祝^{はふり}の大廷^{おほには}か)」³³(表4-11)で、倉本は「祝の大廷」は大国主神を祀る祭場を指しているのではないかと解釈している。

以上から『古事記』には「堅庭」「沙庭」「爾波」「大廷」という庭に関する用例が確認でき、「庭」「爾波」「廷」という3つの文字表記がニワに当てられている。そして、「堅庭」「沙庭」「爾波」「大廷」はそれぞれ語義が異なることから、ニワの語義について、『古事記』には「堅庭」=地面、「沙庭」=神託の場、「爾波」=家庭の庭、「大廷」=神を祀る祭場という4通りの概念が表れていると考える。

白川静の『字訓』からやや長いが引用すると、

には〔庭・場〕 神を迎えて祀るひろい場所をいう。のち家屋の前後の空地をいい、また広い海面を海の庭のようにいう。庭園のことは古くは「しま（山斎）」といい、菜園のことを「その」といった。「には」は祭式儀礼をおこなうところであるから、また「斎庭（ゆには）」あるいは「沙庭（さには）」のようにいう。場（ば）は「には」という語から転じたもので、これも神を祀るところであった。（中略）庭の初文は廷。廷の金文の字形は、土主をおいた儀礼の場を示し、そこを囲い、土主に酒をふり注いで灌鬯（かんちょう）の儀礼を行うにあたって、神を迎えるところをいう。（中略）場も「には」とよみ、やはり祭式の場を意味する字である。（中略）庭・場はともに祭祀の場で、わが国の「には」の古儀によくかなう字である。³⁴

とあり、庭の第一の意味は「神を迎えて祀るひろい場所」であり、「には」は祭式儀礼をおこなうところ、庭・場はともに祭祀の場で、わが国の「には」の古儀によくかなう字としていることから、「ニワ」の語源は「祭祀の場」ということになる。

また、松村明『大辞林』にも「かつては公事・神事を行う場所」³⁵とあり、このように「ニワ」は古代においては神意を尋ねる場所、神事や祭式儀礼の場所を指したとみてよいのである。

先の『古事記』の4例中の「沙庭」=神託の場と「大廷」=大国主神を祀る祭場が、この「祭祀の場」にあたると考えられ、他の地面、家庭の庭を含めて『古事記』には現代の「ニワ」の概念とほぼ同じものが既に表れていると言えよう。

次に『日本書紀』を見てみたい。

「仍令レ構ニ須彌山形及吳橋於南庭一。時人號ニ其人一、曰ニ路子工一。」(仍りて須彌山の形及び吳橋を南庭に構けと令す。時の人、其の人を号けて、路子工と曰ふ。) ^{よ すみのやま} ^{かたち くれはし おほば つ おほ} ^{なづ みちこのたくみ い} ³⁶ (表 4-66)、
「丙午、天皇御ニ干東庭。」(丙午に、天皇、東庭に御す。) ^{ひのえうまのひ すめらみこと ひむがしのおほば おほしま} ³⁷ (表 4-90)、「九月甲辰朔壬子、天皇宴ニ干舊宮安殿之庭一。」(九月の甲辰の朔壬子に、天皇、旧宮の安殿の庭に、^{おほば とよのあかりきこしめ} 宴す。) ³⁸ (表 4-91) の3つの用例が確認でき、「南庭」「東庭」「安殿の庭」という庭があったことがわかる。

「南庭 (おほば)」「東庭 (ひむがしのおほば)」「庭 (おほば)」は「バ」と読み、宮城内の一画を指している。

『古事記』以来、わが国では「ニワ」に最初は「爾波」「廷」、そして「庭」の字をあて「庭」の字は現代まで使用してきたと言える。そして、白川静の『字訓』に「神を迎えて祀るひろい場所をいう。のち家屋の前後の空地をいい」とあるように、「庭」は時代が下るにつれ、住居の庭や作業を行う庭を指すようになり、奈良時代の宝亀 11 年 (780) に成立した『萬葉集』には『古事記』の「爾波」=家庭の庭と同様の鑑賞の庭、家庭の庭として以下の用例がある。

「秋風の吹き扱き敷ける花の庭 清き月夜に見れど飽かぬかも」(大伴家持 4453) ³⁹

「少女らが玉裳裾びく此の庭に 秋風吹きて花はちりつつ」(安宿王 4452) ⁴⁰

他に「園 (エン、ソノ)」「苑 (エン)」があり、「園」は植物を栽培するところであって囲いがあり、菜園、薬園、梅園などに使われている。『続日本紀』神護景雲 2 年 2 月の任官の記事に「園池正如故。」(表 4-217) とあり、「園池正」という役職があったことが知られている。木村三郎によると「園池正」は「園池司 (そのいけのつかさ)」という部署の長官であるが⁴¹、この部署は宮城で行われる祭祀のための供物となる蔬菜・果樹等を栽培、及び魚鳥の捕獲を職掌とする令制官司で⁴²やはり祭祀に関わる部署であり、菜園が宮城のバックヤードとしてあったことがわかっている⁴³。平城京二条大路からは「園池司」の記載のある木簡

も出土している。

「苑」は「園(ユウ)」に近く、禽獣を養うところに使う⁴⁴。このほかに「林泉」があり「泉や木立があるところ」とされ、これも古く『懷風藻』に用例がある⁴⁵。

現代ではよく使われる「庭」と「園」を重ねた「庭園」という言葉は、江戸時代の『雍州府志』(1684)に「夏六月土用中、与壺置庭園曝炎日」とあるのが初出で⁴⁶、上原敬二によると明治になって使われるようになった語である⁴⁷。それ以前には、庭、園、林泉などが使用されてきたが、現在まで使われているのは「庭」という言葉であり「にわ Niwa」と発音している。

以上がニワの語義と表記・発音についての概観である。これらのことを踏まえて、本論文ではニワ状遺構をふくめ、祭祀が行われていたとみられる空間に現代仮名遣いで「ニワ」を用い、祭祀の痕跡がみられず、鑑賞が主目的とみられる空間に「庭園」を用いることにする。前者は概ね飛鳥時代までとなり、飛鳥時代には両方がみられることから過渡期であり、奈良時代以降は後者が主となる。

第1章 聖なる親水空間

序章で祭政一致の時代の「沙庭」のような原初のニワが、祭祀空間を起源とする清浄に保たれた広場のような空間を本義とすることを検証してきた。次に、本章ではそのニワの造形に注目したい。

(表2、3年表)にあるように、本論で扱うニワ状遺構や庭園では広場や祭壇のほかに湧水(泉や井戸)、流れ、州浜、池、島、立石などの造形が確認されており。そのほとんどが「水」に関わるものであることから、造形をとまなうニワ空間の多くは親水空間として捉えることができる。

このような水に関わる造形意匠の研究としては、序章で触れた牛川喜幸の「古代庭園の研究―水をめぐる造形とその系譜―」(1993)がある。この論考は、城之越遺跡の発掘報告(1992)の翌年に発表されたもので、3部構成となっている。第1部では水をめぐる古代の庭園空間の「草創期」として古墳時代の山の神遺跡と城之越遺跡の2祭祀遺構をあげ、古墳時代に日本庭園の源流が見えるものとし、「展開期」として飛鳥時代の明日香村の庭園遺構、小墾田宮推定地(古宮遺跡)、島庄遺跡、石神遺跡、水落遺跡と飛鳥寺の西の規、その他、および藤原宮を取り上げ、飛鳥時代には神仙思想の影響をうけ、特に幾何学的な意匠を持つ小墾田宮推定地や島庄遺跡については高句麗、百済の影響が強いとし、石神遺跡なども「聖なる井戸を設けた仏事饗宴の庭」、「仏教的理念と神仙世界が融合した宗教的世界を具現する庭」と表現し、外来思想の影響を重く見ている。続く「成立期」として奈良時代の平城京の東院庭園ほか8つの遺構、そして中国・朝鮮の庭園遺構を7件あげてその造形を分析している。奈良時代には一転して国風化し、「自然的な要素を取り入れて日本庭園の伝統形式をなす形が完成した」と評価している。第2部で「水」の聖性について、「井戸」とその儀式に着目し、石神遺跡、飛鳥板蓋宮伝承地をはじめ平城宮の御井、東大寺の閼伽井のほか秋篠寺や醍醐寺、円城寺の井戸などを取り上げ、『作庭記』の「泉事」の記述も引用して「日本人がいかに清泉を神聖視し、その宗教的利用に関心を寄せていたか」を論じている。それらを踏まえて、

第3部では「流れ」を庭の重要な構成要素と位置づけ、前出（第1部）のわが国の遺構や庭園と大陸・半島の庭園をあわせて26例を18世紀まで取り上げて詳細に検討し、その系譜を「流杯溝型」、「流杯溝変型」「遣水型」「池・遣水併用型」「カスケード型」の5類に分けている。その検討結果として、「流れ」が「流杯溝型」から「遣水型」へ変容し、さらに池・遣水併用型へと移行することを確認した。」と結論づけている。

牛川はこの論文で、後代の日本庭園の源流が古墳時代に見られること、飛鳥時代には石を用いた幾何学的な意匠と石造品が伴うこと、これについては外来思想の影響とし、これが奈良時代に大きく国風に転換したこと、「流れ」は後代の日本庭園に受け継がれ、「遣水」「池と遣水」となっていったことを明らかにしている。

この牛川の成果を踏まえて本論文では、さらに時代を遡り、牛川論文発表後に発掘調査された遺構を加えて縄文時代から検証を行う。また飛鳥時代の外来思想の影響がどの程度であったのかをより具体的に検証する。牛川が結論とした「流れ」が「遣水」にそして「池と遣水」に受け継がれたとすることは首肯されるが、流杯溝をモデルとすることにはやや違和感がある。これは牛川が外来思想の影響を比較的重く見ていることによると考えられ、本論文では、わが国の古代祭祀や記紀にみられる目線で考察し、親水空間の聖性について論じた。

本章では、親水空間となっているニワ空間について、第1節では縄文時代からの祭祀遺構、その多くがニワ状遺構であるものをはじめ、古墳時代や飛鳥時代の遺構、平城京の遺構や平安京の遺構、現存庭園をはじめとする各地の現存庭園及び庭園遺構を時系列で整理し、構成要素を抽出した（表2、3）をもとに、時代ごとのニワ空間の特徴と文化的営み（利用形態）を明らかにするとともに、大陸、半島の古代庭園との比較も試みた。第2節では第1節で抽出した造形のうち特に重要と考えられた「流れ」と「州浜」について、そのモチーフや役割、そしてその造形が内包していたものを考察した。また第3節では親水空間として重要な「池」について、日本書紀の記事を引きながら、民俗学の知見を借りて考察をおこなうことにより、古代の池が持っていた祭祀空間としての側面を明らかにした。

第1節 水辺の祭祀—流れと州浜

第1項 縄文時代から古墳時代の湧水と流れをもつ祭祀遺構

(表2)は、水に関わる祭祀遺構、庭園遺構、現存庭園を取り上げた各遺構・庭園の概要である。構成要素としては湧水と流れをもつものが多いことが確認できる。

本項では、各遺構の発掘調査資料及び日本考古学協会編『シンポジウム1 水辺の祭祀』⁴⁸、を参考文献に用いて湧水、井戸を含むニワ状遺構から構成要素を抽出した。遺構の概要と参考文献（発掘調査資料を含む）を一覧にしたものが(表2)、稼働した時代と遺構の構成要素を年表にしたものが(表3年表)である。本文中の遺構名や庭園名に付記した数字は(表2、表3)の番号である。

縄文時代から古墳時代までの14例のニワ状遺構の構成要素を分析したところ、「湧水—流れ」または「湧水—溝」または「井戸—溝」の構成を持つ型と「井戸・湧水坑・土坑」のみの型があることがわかる。この前者をストリーム型、後者をスポット型と呼ぶことにする。ストリーム型と言えるのが11例あり、14例中最も古いのが**矢瀬遺跡1)**(図1)で縄文時代後期半ばから晩期末の遺跡である。水場を含む祭祀場は木柱列で囲まれた中に2か所の湧水点を一度堰き止めてからオーバーフローした水を流下させている。水場の護岸は石が貼られ、勾配があるため州浜状を呈する。水面に降りる足場が階段状につくられ、水面との隙間には石が並べてあった。流れに面して立石を持つ石敷きの祭壇が造られていた⁴⁹。

池上曾根遺跡2)(図2)は農耕が始まった弥生時代のものであり、祭祀具の検出が見られないため祭祀遺構としては確定していないが、報告者の乾は農耕器具類が大量に埋納された状態で土中から検出されたことから、この遺構が水稻耕作に関連した環濠集落における中心的な祭祀空間であり、その規模からして首長権に直結する広域祭祀の施設とみている。大型の建物跡—井戸—土器類埋設場が建物のほぼ中心線上に直列に並ぶ遺構で、溝がその線に沿って流されている。井戸は径2mのクスノキをくり抜いたものであり、井戸と溝の組み合わせの例である⁵⁰。

このほか弥生時代には「井戸」の例が多く、六大A遺跡4)、藤江別所遺跡5)、布留遺跡9) などがある。河川敷きに設けられた遺跡の**六大A遺跡4)**(図3)では津市の志登茂川畔に弥生時代後期の大溝と素掘り井泉が3か所、古墳時代後期の石組み井泉が3か所確認された。入り江になった箇所には州浜状に丁寧な貼石(17m×4m)がなされ、その傍に建物跡がある⁵¹。**藤江別所遺跡5)**(図4)は現在御崎神社(山王神社)として知られ、祭祀は弥生時代から行われていたとみられている。溝2条が逆Y字に分岐した内側に素掘り井泉を持つ⁵²。**布留遺跡9)**(図なし)は布留川右岸扇状地の広域にわたる大規模な遺跡で、旧石器時代から近現代に渡る複合遺跡である。ここで検出された「敷石様住居址」は生活用土器とともに祭祀具が検出される遺構で、生活の一部に祭祀があったことが推定されている。弥生時代から布留川のほとりで祭祀が行われたことが推定されている。祭祀用とみられる土壌も検出されており⁵³、これも自然河川と井戸の「ストリーム・スポット併存型」と言えよう。

古墳時代にも「湧水一流れ」を持つストリーム型が見られ、**城之越遺跡10)**(図5)は3か所の湧水点から3本の流れを引いて1本に合流させ、州浜が作られ、要所に立石・石組み、流れにはさまれた広場や祭壇と見られる平坦面がある。流れの主軸と一致する大規模な建物跡も検出されている。しかもこの一帯には廃棄物等が検出されず清浄に保たれていたことがわかる⁵⁴。**阪原阪戸遺跡11)**(図6)は全長80m、高低差5mの大規模なもので、湧水点から水を濾過して下流の石組み柵に導水し祭祀を行っている。祭祀跡の残る石組みが3箇所確認されている。水源、大溝、石組み柵、石組、配石という造形が把握できる湧水点を中心とした祭祀遺跡である。水を2段階濾過して祭祀に用いていることから、この遺跡においては水が重要な要素であることがわかる⁵⁵。**屋代遺跡群7)**(図7)は広範囲にわたる遺跡で崖面の湧水点から水を木樋で下段に落とし、そこで濾過沈殿を行っていた。「導水型」ともいえるこの種類の遺構は比較的長く存続したと見られている。また別の場所には「湧水坑型」とも言える湧水点自体を祭祀対象とする湧水坑が8か所確認されており「ストリーム・スポット併存型」でもある。全体に水場に臨んで平石を立て、または天端をとって据え、橋を架け、杭を打つという親水空間の造形がみられる。ある場所は200年の空白期間を経て同地

点・同一経路で復活しており、その地点に極めて重要な意味があったことがうかがえる⁵⁶。

南郷大東遺跡 13) (図 8) は流れを堰き止めて遺物を沈殿させ上澄みを木樋で引く一種の浄水施設となっており、祭殿を併設している。遺報告者の青柳泰介はこの遺構のプランが大型掘立柱建物と湧水点を持つ祭祀場の構成が城之越遺跡に似ていると指摘している⁵⁷。

また古墳時代の井戸型として中溝・深町遺跡 8) と三ツ寺 I 遺跡 15) がある、**中溝・深町遺跡 8)** (図 9) は建物跡の中心線上に 1 基、その隣に 1 基の集石土坑 (井戸状) があり、3 基目は別棟の南側中心線上にある。集石土坑の開口部とオーバーフローした水を流した溝の周囲を礫で固めている⁵⁸。**三ツ寺 I 遺跡 15)** (図 10) は濠から水道橋で水を引き込んだ溝とその溝を挟む石敷きが 2 ヶ所造られている。GL から 300 掘り下げて φ50~100 の川原石で舗装した平坦面で、流れに臨む祭祀の場と考えられている。これと別に敷地の角に覆い屋を持つ井戸があり、生活用ではなく、祭祀が行われていた。館廃絶後も祭祀が続けられた⁵⁹。

南紀寺遺跡 12) (図 11) の造形は 2 つの井泉 (1 つは推定) が石積みで造られ、その 2 条の流れは途中で方向を 90 度変えて合流し、石積み護岸の濠に流れ込んだあと能登川に向かっていた。合流地点には州浜があり、濠の中には石積み護岸の中島があり、濠の深さは 0.5 m である。井泉の大きさは古墳時代としては最大、石積み等は緻密さが後の飛鳥時代の遺構に類似するとされる⁶⁰。

以上の 12 例は「湧水点又は井戸」と「流れまたは溝」を合わせ持つストリーム型であり、このうち湧水坑 (スポット型) をあわせ持つ併存型が 4 例あった。また、流れ又は溝に臨んで祭祀時の場そのものになったと思われる州浜または石敷きを持つものが 12 例中 7 例 (布留遺跡含む) ある。

また土坑 (湧水坑) や井戸のみで祭祀を行っていたスポット型と言える遺跡が 2 例あり、下市瀬遺跡 3)、纏向遺跡 6) である。

下市瀬遺跡 3) (図 12) は湧水点を板材で囲った井堰状の遺構である。この堰き止めた湧水の前で銅鐸が出土した⁶¹。**纏向遺跡 6)** (図 13) は湧水点を湧水層まで掘り下げた土坑が建物跡と関連ある位置にあり、焼いた木製品 (水鳥型や舟型)、漆塗りの盤、大型の高杯な

どが検出された。祭祀終了時に祭祀具に火をつけて埋納したと見られている⁶²⁶³。下市瀬、纏向とも流れまたは溝はないが、湧水点で行われる水に関わる祭祀である。この2例のスポット型には立石がみられない。また自然河川沿いの六大A遺跡11)と布留遺跡5)にも立石が見られない(表3年表)。このことは祭祀の形態が違うことを意味しているのであろう。

尚、本章中に頻出する用語については、各報告者の用いたままを記しているが、資料の断面図や内容を見る限り、「井戸」と「井泉」はほぼ同義であり、木材や石で枠を付けたもの、「湧水」「湧泉」も同義と判断した。「石敷き」と「州浜」も頻出するが、「石敷き」は自然石玉石の天端をそろえた石貼り(舗装状)で比較的平坦につくられた場、「州浜」は自然石玉石で覆った緩い勾配(概ね23.4%以下⁶⁴)をもつ場と捉えてよい。

第2項 縄文時代から古墳時代にかけての祭祀の様相

湧水を堰き止め、越流させ、その流れに護岸を設け、水に降りる石段や州浜をつくり、傍らに祭壇を設ける。これらの場所では神への祈りが聖杯とともに捧げられ、死者への哀悼が鳥型や舟型の木片とともに流され、また或る時は人形^{ひとがた}とともに呪いがかけられた。その祭祀の際には禊^{みそぎ}が必須であり、定期的に祓^{はら}いが行われ、そのためには水中に歩いて入るために階段や緩勾配の州浜が適切であったと考えられる。榎村寛之によると、「禊」と「祓い」はよく混同されるが、「禊」は体を清めることによって本来持っている霊力を回復、強めるための儀式であり、「祓い」は文字どおり穢れを流し去る儀式であるということである⁶⁵。このような儀式がわが国では水辺で行われたのである。スポット型の祭祀跡にあってもその湧水坑・土坑は湧水点まで掘り下げられている。このことは「湧水」そのものが信仰の対象であることを示していると考えられる。

これらの出土品、出土状況、地形、造形意匠、建物との関連等から推測される祭祀の様相を梅本論文⁶⁶を参照してさらに具体的にみておく(梅本綾2009)。

前項でスポット型とした纏向遺跡6)で想定されるのが湧水層まで穴を掘り、木製品を用いた儀礼を行い、米を炊き共食し、まつりの後は火をつけて穴に埋納する祭祀である。

池上曾根遺跡2) 六大A遺跡4) 藤江別所遺跡5) 布留遺跡9) 三ツ寺I遺跡15) で想定

されるのが河川や井泉のある場所で誓約を行い刀型木製品や勾玉を投げ込む「うけひ」の儀礼で、記・紀にこの儀礼のモチーフともいえる記事がある（表 4-5、32）。つまり、水中に祭祀具を投げ込む行為は水そのものに霊的な力があると信じられていたと考えられる。六大 A 遺跡 4) 城之越遺跡 10) 南郷大東遺跡 13) のように瓢箪が出土した遺構では瓢箪を水中に投じ浮沈により真偽を確かめる祭祀が想定され、これも『日本書紀』仁徳天皇 11 年（4 世紀頃）そのほかにモチーフがある（表 4-55）。『古事記』には須佐之男命の心根を測るために天照大神が瓢箪を用いる話がある。尚、桃も霊力のある果物とされており、祭祀遺構からは桃核がよく出土する。纏向遺跡、中溝・深町遺跡、城之越遺跡、坂原坂戸遺跡等がその例である。『古事記』には伊弉諾尊が黄泉の国から逃げかえる際に追っ手に投げつけて難を逃れる話がある。このほかに川上（湧水点）で土器（てづくね土器）をもちいて天神地祇を祀る祭祀、『風土記』にモチーフがある河川に幡（布）を投じ、流れついた場所に神社を立てる祭祀、水辺で琴を弾き水神を呼び出す祭祀などが想定されている。これらは主に自然河川や河口、海浜の州浜で行われたものと言えよう。

出土遺物に現れる「桃」「櫛」は霊力を持つものとされ、これを水中に投じたと考えられる。「鳥」、「船」は死者の魂あるいは神の乗り物で、河川、流水に鳥形や舟形木製品を流して死者の魂を黄泉の国に送るものである。これも記・紀に多くのモチーフがある。^{やまとたけるのみこと}倭建命が白い鳥になって昇天したくんだりなどである。玉、鏡、布を用いて水神を呼び出すことも『古事記』の天安河・天の岩戸伝説などにみられ、祭祀遺構に特徴的な出土品である。玉には魂が宿ると考えられていたのである⁶⁷。馬、馬型木製品、馬型土器は水神に捧げるものでこれを水に投じることで雨ごいをおこなうものである。「共食（あひたげ）」は食事を共にすることで新たな関係を築く（梅本綾 2009）。筆者はこの「共食」が「宴（とよのあかり、うたげ）」の伝統になっていったものとする（結章参照）。

以上の 14 例の遺構は首長クラス以上が施主であったと見られており⁶⁸、六大 A 遺跡 4) などは政権中枢（後の大和朝廷）と交流していた可能性もあるとされる⁶⁹。このことは祭政一致の時代にあって、祭祀と政治が深く関わっていたことを示している。湧水や井戸は当時

の人々の生命と生活にとってかけがえのないものであると同時に、そこでの祀りは共同体を維持するための政治的なものであったと考えられる。「^{まつ}祀りごと」は当時の「^{まつりごと}政」だったからである。そしてその祭祀空間を人為的に設ける時に造園が始まったと言えよう。居住空間をつくる建築技術とも古墳築造の土木技術、水田をつくる農業土木とも違うこれらの遺構は庭園と言えるかどうかは別としても造園工事には違いないのであり、その造形の構成要素は概ね「湧水または井戸」と「流れまたは溝」そして「州浜または石敷き」の組み合わせである。またこの造形が広場や祭壇とともにあったことは言うまでもない。この造形が後の日本庭園に、その原初の目的が失われた後も、長く引き継がれていったと考えられる。

ここで別途3例の遺跡を見ておく。東北、北海道に多く見られる環状列石遺構のひとつである**忍路の環状列石**（図14）と、重森三玲が日本庭園史の淵源とする^{いわくら}磐座・^{いわさか}磐境遺構のひとつ、**保久良神社の磐座**（図15）、山頂の祭祀遺構、**天白磐座遺跡14**（図16）である。

環状列石については九州を含む全国、特に東北から北海道に多くが点在し、このような遺跡には縄文時代に行われた^{りつせき}立石がある。墓石として、或は縄張り（シマ）を示す境界標として、天体観測のために、または何らかの記念に、太古から人は石を立ててきた。それは日本だけでなく海外にも多くのストーンサークルが知られている。重森三玲は神社の御神体となっている磐座・磐境を日本庭園における石組みの淵源として数社の神社を挙げ、これとは別系統のものとして環状列石を論じている。いずれも我が国の自然天然の石を造園材料として扱うもので、磐座・磐境は石に神格（靈性）を認めるものである。天白磐座遺跡14）は古墳時代から祭祀が行われていた山頂の大岩の遺跡であり、この地方一帯の水に関わる歴史をもつ⁷⁰。これらの石を中心とする祭祀や信仰については記紀にも「伊波多多須 須久那美迦微能 加牟菩岐 本岐玖琉本斯 登余本岐 本岐母登本斯 麻都理許斯美岐叙（後略）」

（表4-15）「石^{いわ}立たす 少^{すくな}名^な御^み神^{かみ}の 神^{かむ}壽^ほき 壽^ほき狂^{くる}はし 豊^{とよ}壽^ほき 壽^ほき廻^{もとほ}し 獻^{まつ}り來^こし 御^み酒^きぞ（後略）」⁷¹といった記事が見えており、平安時代に書かれた『作庭記』にも「靈石」、「崇る石」といった興味深い表現がある。そしてこのような立石は前項の水辺の祭祀空間（ニワ状遺構）にも出現し、奈良時代以降の庭園にも存在することから何らかの重要な意味

があるものと考えられるので、別途第4章で取り上げる。

第3項 飛鳥時代の祭祀空間と庭園の造形

古墳時代に続いて飛鳥時代の遺構を見ていくと、奈良県明日香村に点在する遺構には古墳時代とはちがう石造りの幾何学的な造形がみられる。しかし、殆どが祭祀遺構であり、構成要素としては「湧水点または井戸」と「流れまたは溝」と「州浜または石敷き」の組み合わせであることには変わりがない。参考文献として各遺構の発掘調査資料や現地説明会資料（表2に記載）、『シンポジウム1 水辺の祭祀』（前掲書）、奈良文化財研究所『古代庭園研究Ⅰ』⁷²を用いた。

検出された遺物から祭祀遺構とされているものは、桜井市の上之宮遺跡16)、明日香村の古宮遺跡17)、島庄遺跡18)の小池、飛鳥京跡苑池遺構20)の北池である。**上之宮遺跡16)**

(図17)は石底にした方形井戸状の石組($h=1.6\text{m}$)凹部の周りを石で馬蹄型に造形し溝が引かれている。36m下って分岐し、分岐した流れを挟んで5m四方の石敷き平坦面が設けられている。この石敷きは廻廊状建物跡とも関連していた。給水施設がなく報告者は木樋などによったとみている⁷³。**古宮遺跡17)**(図18)は不整円形($\phi 2.4\sim 2.8\text{m}$)の石貼りにされたすり鉢状の池(深さ50cm)、石貼りの溝(小溝:延長25m以上、内幅25cm、深さ20cm、大溝:延長47m、幅1.5~2.0m、深さ45~55cm、底部は素、両岸2~3段石積み)、池から出る小溝は大きなS字状に蛇行した部分があり、下流は直線的であり、この小溝をはさんで石敷き平たん部(片側 $0.5\times 1.0\text{m}\times 2$ 面、本来はもっと広い)とそれに伴う建物跡があった。池の護岸は垂直部と緩い勾配部分の両方がある⁷⁴。**島庄遺跡18)**(図19)の一部に、湧水点の方形の池を小溝(幅20~30cm、池から出て途中方向を変える)が半円形に囲む小池($6.8\text{m}\times 5.4\text{m}$ 、深さ70cm)がある。この小池からは馬形(水神に捧げる)が出土したことから祭祀遺構と見られている。小池は長方形垂直石積み護岸である⁷⁵。さらに規模の大きい**酒船石遺跡19)**(図20)では大規模な山腹斜面の造成、切石の石積み、石組溝、建物群跡、山腹斜面を利用した導水施設、亀形石造物、小判型石造物などが検出されている。地形を利用した大規模な造成であり、その中心にきわめて造形的な水流がある。この亀形石造物、小

判型石造物、および酒船石の使用方法はまだ解明されていないが、大阪の四天王寺によく似た石造物、及び韓国の雁鴨池にも同様の構造を持つ水槽状の遺構が確認されており⁷⁶、祭祀に浄化した水を用いたことが想定されている。**飛鳥京跡苑池遺構 20**（図 21）は大規模な園池で南池（55m×65m）と北池（46～54m×33～36m）に分かれ、堤（幅 5m、長さ 32m）で隔てられている。平面形は隅丸台形、堤の外形は直線部分が多い。護岸は垂直に近い石積み（南池約 80 cm、北池約 1m）、同じく垂直石積み護岸のトンボ型の中島（高さ 1m）、池底の石張り、マツの植物遺体等が確認されている。令和元年（2019）に北池の東北部で検出された遺構は馬蹄型であり、湧水点を石で整え、溝を引き、溝の両側一帯を石敷きとしていた⁷⁷（図 22）。

以上のように規模は大小あるが、いずれもストリーム型と言える。

逆に、ストリーム型にもスポット型にもあたらない、即ち「湧水点または井戸」と「流れまたは溝」を持たない遺構があり、そのすべてが非祭祀遺構である。下記の石神遺跡は鑑賞や饗応を目的とする造園が始まった例とみられている⁷⁸。

石神遺跡 21（図 23）では「石人像」「須弥山石」（いずれも噴水施設）が出土し、祭祀遺構ではなく饗応、鑑賞のための施設と考えられている。池は正方形（一辺 6m、深さ 80cm）河原石の垂直石積み護岸で四隅に立石をもつ園池であり、給排水はなく、底面も石貼りされており、貯水ができるよう粘土の裏込めで施工されているが長期にわたる水位のあとはない。木樋で水落遺跡の漏刻台（表 4-81）と連動していた時期があった。他に饗応施設と推測される建物群（東区画）の南には石敷井戸、石敷広場、石組大溝などが検出されている⁷⁹。

広場と見られているのが**平田キタガワ遺跡 22**（図版なし）で、2ヶ所のトレンチと地中レーダー調査により石敷きの舗装面、池または大溝（流路）の護岸とみられる石垣（垂直石積み 高さ 1.6m、延長 150m）、その底面の石敷きが確認されている⁸⁰。現在欽明天皇陵に保管されている「猿石」が出土したところである。筆者は欽明天皇の^{やまとな}和名が「天国排開広庭天皇あめのくにおしひらくひろにわのすめらみこと」であることからこの広場と関係があるものと推測する。**島庄遺跡 18**（図 19）の大規模な方池の遺構は正方形の池で一辺が 42

m、堤の幅 10m（堤の外寸で一辺が 60m 超になる）、深さ 3m であり、池内の東隅に素掘りの井戸があり水源となっていた。報告者の河上邦彦はその水深から貯水池としているが、貯水池が園池を兼ねていると見る方が現実的であろう。この正方形池は石舞台古墳に続く暗渠溝や人工流路、建物、塀などを伴っている⁸¹。

尚、遺構は確認されていないが『日本書紀』推古朝 20 年（612 年）に百済の人路子工芝耆摩呂が築山をよくすると申し出て、推古天皇が宮城の南庭に須弥山と呉橋を造らせた⁸²との記事があり（表 4-66）、これも仏教由来とはいえ外交使節饗応のための造形とみられ、書紀には臨時にたびたびつくられたことが記録されている（表 4-76, 78, 82 他、盂蘭盆会の造作を含む）。路子工の須弥山・呉橋を含めてこの 4 例は、いわばこの時代の公的施設と言えるだろう。特に須弥山と呉橋の例をわが国の庭園の始めと位置付ける見解は多い（序章参照）。

また、この時代には貴族の邸宅に庭園がつくられるようになったとみられ、周知のように蘇我馬子が自邸に池を掘り、島を設けたので、人々が「島大臣」と呼んだという記事⁸³が『日本書紀』に記されている（表 4-67）。蘇我馬子邸は後に朝廷が接收し草壁皇子邸となり「嶋宮」と呼ばれ、『萬葉集』にはこの庭を詠んだ歌が数首ある⁸⁴。また、いずれも「湧水点または井戸」と「流れまたは溝」の組み合わせを持たないと考えられる。このことは逆に「湧水点または井戸」と「流れまたは溝」の組み合わせが祭祀空間の造形の必須要件であることを示すと考えられる。「禊」や「祓い」のためには流水が必要だったからである。ただし、第 1 項でみたスポット型には湧水点と合わせて火を用いるなどの方法がみられる。また池の祭祀性については笠井昌昭により上古に農耕神事があったことが指摘されており⁸⁵、第 3 節で述べる。

以上のように飛鳥時代の祭祀の様子は先行研究も少なく解明されていないことも多い。しかし造形を見る限り飛鳥時代に入ってから幾何学的なデザイン、石貼りや石積み、正方形や長方形の池などが際立っている。これらは大陸の技術者に命じた造園工事が始まったものと見られており、当時としてはモダンなデザインであったと考えられる。しかし、その骨

組みとなる構成は縄文・古墳時代の祭祀遺構であるニワ状遺構と殆ど変わらず、湧水点が石で造形され、流れは石造りの浅い溝に、それを挟む州浜が石敷きになったに過ぎない。またその石敷きも古墳時代以前から祭祀空間にあったものであり、湧水を囲む平面形にいたっては方形、半円形、馬蹄形と様々であり、なんらかの様式があるとは言えない。あくまでもわが国の祭祀の都合にあわせて半島出身の技術者が作ったものと言えるのではないか。ト部行弘は「古代庭園研究会」（奈良文化財研究所主催）で下記のように発言している。

飛鳥京苑池の平面形は基本的に直線で、飛鳥地域で一般に見られる方池の一種です。それがどこから来たのか、大陸系なのか、新羅系なのかということですが、直線ラインは、まず、飛鳥に入ってきて、飛鳥の中で練られたデザインだと思います。飛鳥のなかでも石溝や石敷、そのほかに見られるデザインです。それが園池にも応用されたものだと思います。その淵源をたどれば大陸かも知れませんが、飛鳥の中で生まれたデザインと考えるべきではないかと思います。」「飛鳥京苑池の平面形には新羅の雁鴨池のような複雑な出入りは、ないと思います。問題なのは中島で、それは曲線デザインを持つ。ですから、融合的といえれば融合的ですが、池の基本的な形としては、少し隔たりがあると思います。⁸⁶

このト部の発言は示唆に富む。このことについては「池と島」の造形について、大陸から伝わった造形として考えるか、わが国に素地となるものがあり独自の変遷を辿ったのかという考察にも関わっており結章でも取り上げる。

飛鳥時代の特徴はもう一点、池と島が造られるようになったことである。「中島を持たない池」が島庄遺跡の大規模方池と石神遺跡、「池内に島を持つ」のが飛鳥京苑池遺構の南池、古記録により推定される路子工が築いた宮城の須弥山・呉橋、蘇我馬子邸（嶋宮）（島庄遺跡が比定されているが異論がある）である。飛鳥では池の形状は正方形や長方形等の直線の多い形状（方池）の他、護岸は石積みの垂直護岸又はそれに近いことが島庄遺跡の大規模方池や石神遺跡などで確認されている。このことは当時、土木工事を半島から渡来した技術者

が行っていたためと見られている。この石積みの垂直護岸は少し時代下った奈良時代では見られなくなった。何らかの事情でわが国の庭園には石積み垂直護岸が定着しなかったと言えよう。

第4項 奈良・平安時代の祭祀の名残

平城宮東院庭園から平安時代の浄瑠璃寺庭園まで奈良文化財研究所編『古代庭園研究Ⅰ』⁸⁷『発掘庭園資料』⁸⁸その他各遺構の発掘調査資料（表2に記載）に拠って17庭園の構成要素を分析した結果、平城宮東院庭園を皮切りに、古墳時代まではよく見られ、飛鳥の遺構には見られなくなった自然形の州浜が復活し、ほぼすべての庭園にみられるようになり、飛鳥時代に様々な幾何学的平面形でつくられていた池が自然形に回帰して定着していったことがうかがえる（表3年表）。池には中島が設けられるようになった。また平城宮に接する阿弥陀浄土院の遺構に見られるように「浄土庭園」のような仏教を反映した庭園も造られるようになった。逆に祭祀の跡は見られなくなり、鑑賞、饗応が主目的となって、庭園として独自の展開がみられるようになったと言えよう。

東院庭園の発掘を担当した高瀬要一によると奈良時代初頭の**平城宮東院庭園23**（図24）は造営当初（最下層園池）は直線からなる隅丸逆L字型と見られ、池底は地山である。護岸は石積みが垂直部と勾配部があり、石積みのない部分も持っていた。この形状は飛鳥時代の造形を引き継いでいたものと考えられている。給水は池の東北部にあると推定されるが遺構は未確認であり、排水は素掘り溝である。その後の養老4年（720）から神護景雲1年（767）頃までの間に（下層園池）汀線に出入りがつけられ出島ができる。護岸石積みはなくなり州浜が造られた。給水として蛇行する石張りの溝と排水側にも蛇行する溝がつけられた（図25）。溝の断面は皿形である。さらに神護景雲1年（767）頃から再改修され（上層園池）建物が張り出し、橋・中島・築山と岬の石組みがなされ、池底は全面礫石敷き、池の全周が州浜となった。また給水に沈殿槽が設けられ、排水側は暗渠となった⁸⁹。

この園池が饗応・宴に供されたことは『続日本紀』天平勝宝6年（754）（表4-188）と、神護景雲1年（767）に2回（表4-210, 212）、同3年（769）に2回（表4-218, 219（218は

「東内」と記載))、宝亀1年(770)に1回(表4-222)現れている。また「楊梅宮(やまもものみや)」として宝亀4年(773)と、同8年(777)に2回現れている(表4-230, 232)。この「楊梅宮」は東院庭園とみなされており⁹⁰⁹¹、当初の逆L字型垂直護岸園池に較べるとその後の改修は目覚ましく、饗宴・饗応にふさわしい空間となっている。祭祀の痕跡は検出されていないがミニチュアの丸木舟が出土している⁹²。舟型木製品は祭祀遺物であることが多いので、この池で弥生時代や古墳時代と変わらない行事が行なわれていた可能性もある。

尚、下層園池時代に現れた園池南側の蛇行溝については、曲水の宴が行われたとする見方があるが、奈良文化財研究所の高瀬要一はこのような蛇行溝は国内にも諸外国にも例がないと報告しており⁹³曲水の宴が行われたとする見方には否定的な意見もある。筆者も杯を流すには水深が浅すぎることと、流れの断面が皿形であることは杯がカーブで州浜に乗り上げると考えられること、また庭園内での場所がやや辺鄙であることから疑問を持っており、この蛇行溝は旧来の祭祀空間における「流れ」の名残りであり、この時代以降「遣水」となっていくものの先駆けと考えている。

平城宮の北にさきいけ佐紀池26(図版なし)があり、池の東北部の護岸は州浜であり、こぶし大の礫を斜面部の水のあたる部分に敷いている。その外側に30石からなる石組みがある⁹⁴。奈良時代は東西220m、南北140mほどの広大なものであったと推定されている⁹⁵。ここでは『続日本紀』に神亀5年(728)「三月己亥。《丁酉朔三》天皇御鳥池塘。宴五位已上。賜祿有差。又召文人。令賦曲水之詩。」とあり、鳥池・曲水の記事があることからこの佐紀池での曲水の宴ではないかと考えられている(表4-123)。筆者はこの佐紀池と隣接の御前池を挟んで「佐紀神社(亀畑)」と「佐紀神社(西畑)」があり、同じ祭神(天兒屋根命、ふつぬしのみことぬしのみこと経津主命、むつのみあがたのみこと六御県命)を祀っており、創建も非常に古く天武天皇2年(673)であることから、当時、佐紀池ではなんらかの祭祀が行われていたと考えている。また船が使える規模であることから農耕神事が行われていた可能性について、第3節で述べる。

禁苑としては平安遷都時に神泉苑31が造営され、西田直二郎、太田静六らの研究によれば中国風の建築物と推定されている乾臨閣の南庭の中央に円形に近い池(南池)が掘られ、

中島があり、さらに池の南に築山を築き、湧水が引かれていたと考えられていた⁹⁶ (図 26)。
また発掘調査によって園池北縁部の石敷きによる州浜、園池の北東から池へ流し込む流路
(遣水)と流入口の西側(園池最北部ともみられる)に舟着きに厚板を設置していた痕跡が
確認されている⁹⁷ (図 27)。神泉苑で行われた祭式儀礼や行事については結章で述べる。同
じ頃造営された**旧嵯峨院・大沢池 32**) (図 28)では、名古屋滝から大沢池までの素掘りの遣
水が確認されている。最大幅 12m、深さ 1m という大規模な遣水は、蛇行し、景石で修景さ
れている。

平安時代後期の**鳥羽離宮 35**) (図 29)の庭園は各院に付属する形で存在している。池は大
きく 3 ブロックに分かれ、船で行き来する。景石、遣水、橋、州浜、出島を検出している⁹⁸。
このことは、庭園としての構成をすべて備えていることから、饗応、慰安のための鑑賞を主
とする庭園がほぼ成立したものと考えてよいであろう。

一方の貴族の住宅庭園を見ると、奈良時代の**平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園 27**) (図 30)
では、蛇行した流れ状の池を造り、池の上段は州浜状の石敷きとし、池の汀線にこぶし大の
石を一行だけ立てて並べ、下段の池底は石敷きとなっている。池に岩島、中島があった。給
水は暗渠木樋と浄化槽を経由する。公的性格の強い邸宅跡または平城宮の関連施設で饗宴
等に利用されたとみられており、祭祀遺物は検出されていない⁹⁹。この宮跡庭園の北側に隣
接する**長屋王邸(平城京左京三条二坊一、二、七、八坪)庭園跡 25**) (図 31)は西外郭の
西庭園と東外郭の東庭園が確認されており、西庭園では緩く蛇行する池の州浜が検出され
た¹⁰⁰。東庭園は素掘りの流路を中心に周辺は植栽地であったと推定されている¹⁰¹。『懷風藻』
に長屋王邸での饗宴の記事があり当地に比定されており、饗応、鑑賞のための庭園といえよ
う。

平城京左京一条三坊十五・十六坪庭園遺跡 24) (図 32)は古墳の外濠の葺石を州浜として
利用している。瀧石組のような三石による石組が 2 ヶ所あり、汀線は複雑に出入している
¹⁰²。**伝称徳天皇御山荘跡 30**) (図版なし)は池の中に中島を持ち、祠がある。池の水源は現
在も湧出する湧泉である。関連する建物が発掘されており、『続日本紀』に記載のある西大

寺「嶋院」との推定もある¹⁰³¹⁰⁴。当時、庭園の「島」では写経が行われることがあり¹⁰⁵、このことは庭園の「島」が神聖な場所であったことを示している。

平安時代に入ると貴族の住まいが後年、里内裏となることもあり、堀河院、高陽院 34) などの庭園の様子が当時の貴族の日記などから知られており、発掘調査も行われている。高陽院 34) (図 33) には泉、幅の広い遣水、そこに掛る高い渡廊、東西南北の池、滝、築山があったことが、『栄花物語』『扶桑略記』の記事から想定されており、舟遊び、舟楽、歌合せ、馬場での駒比べなどが行われたことが記されている。

この世には冷泉院・京極殿などをぞ、人おもしろき所と思たるに、(この) 高陽院殿ゝ有様、この世のことゝ見えず。海龍王の家などこそ、四季は四方に見ゆれ。この殿はそれに劣らぬ様なり。例の人の家造などにも違ひたり。寝殿の北・南・東などには皆池あり。中島に釣殿たてさせ給へり。東の對をやがて馬場のおとゞにせさせ給て、その前に北南ざまに、馬場せさせ給へり。目も遥におもしろくめでたき事、心も及ばず、まねび盡すべくもあらず。 一榮花物語卷第廿三こまくらべの行幸¹⁰⁶

京都市埋蔵文化財研究所の発掘調査によると、高陽院の池の護岸は州浜であった¹⁰⁷。

奈良時代と平安時代の貴族の住宅庭園にもやはり「流れまたは遣水」、「池と中島」が造られており、護岸は「州浜」である。このことは祭政一致の時代の祭祀空間の構成がほぼ残されているとみてよいと思う。

寺院庭園も多くなり、奈良時代、浄土庭園の先駆けと言われる**法華寺阿弥陀浄土院庭園遺構 28)** (図 34) は園池、護岸石、その一部には石組があり、蛇行する汀線、岬、入江をもつ楕円形の中島、立石があり、池底は石を平坦面を上にして敷き詰めていた。併せて園池に張り出した建物、橋、陸地側の建物跡などが検出された¹⁰⁸。小野健吉によると水源は湧水とみられるが別にある可能性もあるという¹⁰⁹。阿弥陀浄土院の附属施設と見られる**法華寺旧境内庭園遺構 29)** (図 35) では池護岸の州浜が検出された¹¹⁰。**平等院庭園 33)** (図 36) の創建時の様子は中核となる阿弥陀堂が中島上に建ち、その中島と前面の阿字池は緩やかな州浜

で囲まれたものであった¹¹¹。州浜の施工方法の詳細も調査で判明した¹¹²。清水擴によると当時は宇治川から船で到着し、接岸のための舟入があり、宇治川に面した釣殿から透廊によって本堂に渡ったと考えられている¹¹³。水源は敷地内の「阿弥陀水」「法華水」と呼ばれる湧水である¹¹⁴。**毛越寺庭園 36**（図 37）は州浜で囲まれた池、池中立石、護岸の要所の石組み、蓮池、昭和 59 年の発掘調査で検出された遣水がある¹¹⁵。京都の平等院を模したとされる**無量光院庭園 37**（図 38）は広い園池内に中島があり、その中島に阿弥陀堂を設けた。池の護岸、池底の工法については州浜等は検出されておらず不明、または草付きであったと推定されている¹¹⁶¹¹⁷。**浄瑠璃寺庭園 39**（図 39）の構成は、池、州浜、中島となっており¹¹⁸構成は毛越寺庭園に似る。水源は湧水である。

このように浄土庭園とも呼ばれる寺院庭園においては州浜護岸の池と平低な中島の組み合わせが見られる。また敷地内に湧水をもつものが少なくない。

以上、(表 3 年表)でもよくわかるように、祭祀空間から分離したとみられる庭園の時代に入ると平城宮東院庭園以降、井戸は見られなくなり、「流れ」は「遣水」となって受け継がれている。そして池が常態化し、その形はもれなく「自然形」である。そして伝称徳天皇御山荘跡 30) と無量光院庭園 37) を除いてすべてが州浜護岸を有する。中島は 17 例中 13 例で中島または出島・岩島の形で確認されている。

また同時に奈良時代から平安時代にかけて、空間の目的が祭祀を離れ、「湧水または井戸」と「流れまたは溝」の祭祀空間を造ることから変化し、「池・島」が主役の饗宴、鑑賞空間を迎賓館や半公邸、貴族の邸宅に造る時代が変わっていったことがわかる。すなわち祭祀の跡が確認できるニワ状遺構は今のところ飛鳥京跡苑池遺構 20) までであり、飛鳥時代でも石神遺跡 21)、平田キタガワ遺跡 22)、そして奈良時代になると平城宮東院庭園 23)、平城京左京区の邸宅跡群においては祭祀の痕跡―祭祀具の検出や祭壇―が確認されていない。佐紀池のみ祭祀が行われた可能性がある。

では、ニワでおこなわれていた祭祀はどこで行われたのか、または行われなくなったのかとの疑問が残る。

各地の祭祀遺構でも奈良時代までは祭祀が続けられており（例、下市瀬遺跡 3）、城之越遺跡 10）、阪原阪戸遺跡 11）、屋代遺跡 7）、古宮遺跡 17）など）、酒船石遺跡 19）では平安時代まで祭祀が行われていたことがわかっている。奈良・平安時代に明日香村の酒船石遺跡で祭祀がおこなわれていたということは祭祀の場と政治の場および饗応のための施設が分離しても差し支えない時代を迎えていたものと考えられる。また平安時代に入ると平安京の下鴨神社では官祭（国家祭祀）と私祭（氏神のまつり）の両方が行われていた。この賀茂社は縄文時代の祭祀跡も確認されている古くから祭祀の行われた場所であった。

下鴨神社の境内は鴨川と高野川が合流する三角州にあり、州の中をさらに数本の小河川が流れている。流路には変遷があるが現在みられるのは「奈良の小川」、「泉川」、「瀬見の小川」である。「奈良の小川」を挟む石敷き、泉川を挟む石敷き、立石、祭壇などの祭祀遺構が平安時代後期から江戸時代まで確認されている¹¹⁹。御所とは別の施設として神社祭祀が確立した時期と見られている¹²⁰。それにしてもこの下鴨神社の境内地は 3 本の河川が 2 箇所合流し Y の字が 2 つ重なっているように見え、まるで城之越遺跡の拡大版のようにみえる（図 40、40-2）。もっと言えば京都盆地全体が、城之越遺跡の拡大版と言えるのかもしれない。泉川という河川名も湧泉と流れそのものであるし、この御祖社の禰宜家は賀茂建角身命を祖とする賀茂県主^{か も あがたぬし}の家系の一家で泉亭と名乗る。ここでの祭祀が水と深い関わりをもっていたことの証左であろう¹²¹。この下鴨神社と糺の森のように二つの河川が合流する地点、三角州は、梅原猛によると世界的にみても聖地であり、世界有数の都市、インドのベナレス、ギリシャのオリンピア、パリ、ニューヨークなどは河合の地、あるいは中島上に栄えている。エネルギーの強い土地、聖性の強い土地と認識されている¹²²。

また、推古天皇の時代に仏教が導入され（6 世紀）、日本に根付いて寺院庭園がつくられるようになり、奈良時代の法華寺阿弥陀浄土院 28）や平安時代の平等院庭園 34）、毛越寺庭園 37）等が造営された一方で、祭祀の場は神社としての社殿を整えていくのが 7 世紀、これは 5 世紀に伝来した仏教¹²³の建築に触発されてのことであった¹²⁴。水辺の祭祀の造形は、城之越遺跡 10）で穂積が指摘したように、神社の敷地を構成する水垣や本殿・拝殿前の広

場、手水、あるいは自然河川、池、湖、海のほとりで水神を祀る神事などの形式に移行していったと考えられる。神社に庭園的遺構がみられることは少ないが、12世紀もしくは11世紀に遡ると見られる**兵主神社 38)**の庭園遺構の構成要素は遣水、池、中島、築山である。池は拝殿前一参道を軸とする左右対称に推定されている(図41)。その片方である現在の主庭の池は出島を持つかなり複雑な自然形である。流れの一部と池の護岸は州浜である。兵主神社では神主が琵琶湖の湖水に入水する神事が今も行われている¹²⁵。

第5項 大陸、半島の古代園池

これまで検証してきたわが国の造形と、日本にも伝わったと考えられる大陸の古代園池の造形を佐藤昌『中国造園史上巻』¹²⁶及び多田伊織「ニワと王権—古代中国の詩文と苑」¹²⁷を参考として比較を試みた。中国では古くは周の時代から造園が行われていた記録があるとされる。絵図として確認できるものとしては3世紀の北魏時代の洛陽に、もと前漢の武帝の庭園「天淵池」が残っていたという。漢代(6世紀)の**建章宮**の池は太液池(図42)と呼ばれ、出入りの多い形状で、「池辺に平沙、洲渚に岩軸」との記録があることから砂浜と岩礁があったと見られる。「太液池図」の池内には蓬萊三山も描かれている。少し下った**唐代**の**長安城**には、**蓬萊宮**(634~662 改修)の東に太液池、中島があったとの記録のほかに、**華清宮**に石積みの浴池(禁苑の温泉地)の記録があるが、護岸の詳細は不明である。7世紀後期の**唐代**の**洛陽**の**上陽宮(離宮)**の園池は中国社会科学院考古研究所により発掘調査が行われた結果、池は幅広の流れ状の自然形のもので護岸は石積みの部分と緩勾配の岸辺に卵大の石を敷き詰めた「卵石護岸」で大半をしめ(図43)景石も据えられている。小野健吉はこの卵石護岸が日本の州浜のモデルになったとしている¹²⁸。

大陸では池が主体であると考えてよいであろう。池を造ることは、わが国では3世紀には鑑賞のため及び灌漑用水池として池が造ることが『日本書紀』に見えているが(表4-42、43、44)、古墳時代までのニワ状遺構には見られず、飛鳥時代に庭園内の池の造営が始まり奈良時代以降定着したと考えられる。平面形が自然形であることは飛鳥時代を除くわが国の池とも同様である。護岸は砂浜、岩礁、卵石護岸があったことが確認できたが、わが国では平

安時代まで殆どが州浜である。洛陽の卵石護岸については今のところ同時代に確認されているのが洛陽の上陽宮だけであり、当時の首都長安とは距離がある。それがわが国へ伝播して普及したとは考えにくい。また部分的にエプロン状であること、階段状になっている箇所もあることからゴツゴツした固い印象を受ける。わが国の庭園内の州浜とは出自がちがうのではないか。高瀬要一は卵石護岸自体は中国では古くからある護岸の浸食防止の一手法であり舗装や斜面の保護にみられるが、「(前略) (卵石護岸は) 古墳でいったら葺石のような機能で、それがデザインとして使われているのだと思います。ですから州浜とは少し異質な技法であり、デザインではないかという気がしています。」と述べ、やはり州浜とは異質のものであるとの見解である¹²⁹。

そもそも大陸の園池はわが国とは比較にならぬほどスケールが大きく、漢代の上林苑の昆明池は周 40 里で軍事演習を行った¹³⁰と伝わるほどである。わが国の園池のような細やかな設計や複雑な地割は考えにくい。また大陸では必ず舟（龍頭鷁首船）を浮かべるが、わが国では奈良時代までは東院庭園のように水深が浅く舟が使えない池も多い。また、大陸では大型の石造物が飾られる。漢（B.C. 120～）の昆明池にあった牽牛・織女を象った石像や唐代の太液池北岸に長さ 2 丈、高さ 5 尺の石魚、西岸に 6 尺の巨鼈（すっぽん）の像があったと伝わっているが、このような石造物は明日香村以外に殆ど見られない。

尚、大陸の方池は同時代では 10 世紀前半のものが広州で確認されている。高瀬要一によると東西 34m、南北 18m 以上、深さ 1m、隅丸、護岸は傾斜のある人頭大の石積みで下端に杭を打ち、池底は地山となっている¹³¹。

次に朝鮮半島の園池遺構の構成との比較を高瀬要一の論文¹³²小口基實『韓国の庭苑』¹³³を参考文献として試みた（表 2-41～47）。本論文が対象とする年代の王朝は高句麗、新羅、百済の三国時代にあたっている。用水池 41) を除くと高句麗後期の**安鶴宮**（6 世紀中頃～末）42) にはひょうたん型の池が 2 箇所、長方形の池が 1 箇所あり、蓬萊山（築山）と亭、景石があったとのことなので庭園としての景観と貯水を兼ねていたと見られる。

百済の記録は『三国史記』に 391 年、500 年、634 年の記事に池掘り、築山、奇禽、植栽、

水中に嶋、といった記録あるが、池の形状は不明であるという。発掘調査で検出されているのは扶余王宮跡推定地（扶蘇山城の西南麓）43）、定林寺跡 44）の方形池である。新羅の**東宮苑池 45）**も方形池を有し、石積み垂直護岸で中島、築山、草花があった。統一新羅時代（676 年～936 年）になってつくられた**雁鴨池 47）**（図 44）は建築と池、滝石組、中島等を持ち複雑に見えるが、護岸は全周が石積み垂直護岸である。

このように朝鮮半島では池はほぼ方形につくられている。これは貯水池としてつくられることが多いためでもある。護岸はほぼすべて垂直石積みである。統一新羅時代の雁鴨池は出入りの多い汀線を有し上流に滝石組なども見られるが、平面形の建物側は直線で護岸は垂直石積みである。大まかに見ると逆 L 型に見える点、奈良の東院庭園の最下層園池にも似る。

これらの大陸や半島の庭園が日本の庭園に影響を与えたことは十分に考えられる。特に半島の垂直護岸の方形池はわが国の飛鳥時代の園池に直接現れているとも考えられるが、飛鳥時代のみで奈良時代には残っていない。大陸では紀元前からあった神仙島や神仙思想の蓬莱・方丈・瀛州三山は日本でも池と中島、もしくは後背の築山のモチーフになったとも言われているが¹³⁴、平安時代までを見る限り、中島は平低な 1 島であり山とは言い難い。

総じて、庭園の造形において、飛鳥時代の一部に半島と共通の意匠は見られるが、全体的な印象・作風はスケール感の違いもあって必ずしも模倣したものであるとは言えない。このことについては考古学分野でも高瀬要一が前述のとおり「日本の飛鳥時代苑池の様相も奈良時代苑池のあり方も、唐や百済、新羅をまねて作ったものとは言い難い」¹³⁵としている。前出の「飛鳥のデザインは日本で生まれたもの」とするト部の意見も同じ考えであろう。

第 2 節 造形のモチーフと変遷

第 1 項 流れと州浜、溝と石敷き

流れの造形について時代を追うと、太古は湧水点から流れをとった自然な造形、飛鳥時代には極めて幾何学的な馬蹄型や円形の湧水点から石敷で整えた溝を引く造形、その後は蛇

行する溝や流れ幅を広くとった流れに近い池の造形、更に時代が下ると遣水（毛越寺庭園及び寝殿造り建築の庭園）となっている。流れに臨んで祭祀が行われたのは飛鳥時代までが確認できるが、祭祀が行われなくなっても平安時代まで庭園に残ったことから何らかの重要な象徴であったと考えられる。地上の湧水点や河川は生活や農耕にとって重要な場所であり、共同体を維持するための「^{まつりごと}政」即ち祭祀は地上の湧水点や自然河川のほとりで行われた。厳密に言えば湧水を引いた流れや川に臨む州浜上で行われた。この祭祀の場を人為的につくったのが造園のはじめであり、それは「聖なる親水空間」の造形であったと言える。さらにはこの「聖なる親水空間」は政権維持に欠かせない為政者のステイタスシンボルであったことも十分に考えられる。奈良の平城宮東院庭園で造営開始時にはなかった蛇行溝（池の上流と下流の2条）が後付けされたのはこの点が理由だったのではないか。つまり奈良時代に入ると庭園で祭祀を行うことが減った、もしくは殆どなくなっていたためプランにはなかったが、後になって「^{まつりごと}政の記憶」として宮城に不可欠な造形が追加されたものであると推測する。考古学分野（奈良文化財研究所「古代庭園研究会」）でも「このような蛇行溝は中国にも朝鮮半島にも見られない」との見解であり¹³⁶、この蛇行溝で曲水の宴がおこなわれたとする見方には疑問を感じる。

庭園の内の流れ（遣水）については従来、中国から伝わった流杯溝、曲水の宴との関連で語られてきたが、考古学分野からは『続日本紀』に見える「曲水の宴」は三月三日の祓いの祭祀であり、宮廷内ではなく自然河川で毎年場所を変えて行われていたと考えられることから、必ずしもそのための施設が庭園内に設けられたとは考えにくい¹³⁷、との見解が出されている。また、筆者は平安貴族が流杯を楽しんだというイメージも、「流れ（遣水）」が平安時代にはすでに庭園の主役ではないこと、中国・朝鮮半島の流杯溝がU型側溝のような細い溝の周回するものであることに比べ、水深が浅く両岸が州浜で緩やかなカーブをもつわが国の遣水は、杯を流すとカーブで州浜に乗り上げるなど流杯には不便であり、かなり印象が違ふことから、わが国の流れ・遣水は曲水の宴が主たる目的ではなく、別の目的ないしモチーフがあったものとする。と考える。

ニワ状遺構の流れの方向に着目してみると、南から北へと流す遺構が多い(12件中6件)。いくつかの遺構では湧水点からの直線ではなく、一度方向を変えて「南から北」に流しているものがある(南紀寺遺跡9)、上之宮遺跡16)、島庄遺跡18)、古宮遺跡17)、酒船石遺跡21)、飛鳥京跡苑池遺構22)北池など)。湧水点からの流れは地勢(地形)によって流出方向が限定されるため、立地場所によっては一旦地勢で流し、途中で分流または屈曲させて何らかの意味のある所定の方位に引き直したことも考えられる。遺構自体の発掘数に限りがあるので、現段階で一概には言えないが、「南から北へ(北から南へ)」は現在の春分時の天の川(銀河)の地上投影にあたる。

この「流れ」のモチーフとは何であったのか、なぜ古代の人々は湧水点や流れのほとりで祭祀を、禊ぎや祓いを、行ってきたのであろうか。その淵源は『古事記』の「天の安の河」にあるのではないかな。

縄文時代より季節を読むための天測(天体観測)は行われてきた。太古の人々は生きるのに必要な食糧を貯えねばならず、そのために夏至点・冬至点、特に春分点・秋分点を観測しており、天測は日本各地に残る環状列石の重要な目的の一つであった。『古事記』には「天の安河」のほとりに天照大神の御座所があり、神々が集っていたとあり、この「天の安河」は「天の川(銀河)」と考えてよいのではないかな。そして日本の神話においては銀河は「川」と捉えられており、太古の人々は天の川が地上とつながっている場所が湧水点や河川であると考えてそこで祭祀を行っていたのではないかな。

『古事記』や『日本書紀』を見ると、日本神話における天孫降臨の際には船が使われており、地上の川辺に降り立ったと描かれる。^{すきの おのみこと}須佐之男命の場合「出雲國の肥の河上、名は鳥髪といふ地に降りたまひき。この時箸その河より流れ下りき」とある。^{にぎはやひのみこと}饒速日命の場合は^{あめ いわふね いわくすふね}「天の磐船(磐樟船)」にのり河内國河上^{たける みね}哮が峰に降り、地元^{ながすねひこ}の長髓彦の案内で大和国鳥見^{やまとのくに とみ}の^{しろにわやま}白庭山に遷座する。比定地として生駒山地の北方、^{かたのし いわふねやま}交野市の磐船山が有力である。饒速日命の降臨地伝説は他にもいくつかあり九州では筑後川沿い久留米の伊勢天照御祖神社、遠賀川支流の犬鳴川沿い天照神社などがある。交野の当地で刊行された『星田歴史風土記』(交

野市教育委員会編)によると、磐船山の哮が峰の東には天野川が^{あまのがわ}南から北へ4里流れて淀川に合流する。天野川は江戸～明治時代の記録には「天の川、銀河」と記録され、それ以前は「甘野川」であった。周辺の作物に由来する地名で甘野であるというが、「甘野」が当て字である可能性は「天野」とも変わらないであろう。また淀川はその河口で天皇の即位に関わる「八十島祭」が行われた所でもある(第3章詳述)。交野の地名は六国史にもみえ、8世紀に桓武天皇が大陸に倣って中国風に北斗七星を祀る「郊祀壇(星祭りの祭壇)」を置いた。またこの祀りの導師である弘法大師と星にまつわる伝説があり、「星田」という地名のほか「星の森遺跡」「星田神社」「磐船神社」「磐船峡谷」「磐船街道」などがある¹³⁸。このような形で天上の天の川と地上の政権にはいくつかの接点があり、日本各地に伝承が残っている。このような土着の信仰の上に、唐に倣うことに熱心であった桓武天皇が古代中国の北斗七星を象る宮都や祭祀を弘法大師から学んでいたことは想像に難くない。

生命維持に必須の水、生活のすべてと農耕にとっても命である水は神聖なものである。皇室の祖先神である天照大神の御座所は天空の親水空間たる「天の河原」にあり、「天の河原」では神々の合議が行われたと『古事記』『日本書紀』は記している。この河原のある「天の^{やすのかわ}安河」の「安河」はもと「八瀬」であり「瀬の多い川」の意とされていることから¹³⁹、天の瀬の多い川と考えると天の安河は天の川、地上の湧水点や河川は天の川とつながっており、祭祀場の「流れ」は現段階では推測であるが、天の川をモチーフにつくられたと考えている。

ちなみに古代から江戸時代頃までにおいては太陽が運行する南(日本列島が北半球にあるため)を上とみる。陰陽五行説でも南を上にする¹⁴⁰。神社の本殿、神棚や仏壇、古代宮城の玉座に北座南面が多いのはこのためである。

第2項 州浜でおこなわれた祭祀

第1節で検証したように「州浜」は日本庭園に多くみられる意匠であって、大陸では前出の高瀬が言うように浸食防止の技法としては卵石護岸や舗装があるが、わが国の州浜とは少し違う。また半島の庭園では報告がない。一方わが国では祭祀場においては縄文時代から造られており、技術的には古墳の築造により普及していたとみられる。

日本列島は温暖多雨な気候帯にある。梅雨時期に降り続く雨、秋、時折通過する台風、これらの雨は急峻な山腹を岩を削りながら駆け下る。大岩にぶつかり、方向を変え、いくつもの滝を落ち、平野におりて少し緩やかになると河原石の岸边が見えてくる。やがて海にそそぐ河口まで来ると山から持ってきた礫を海に繰り出して大海に出ていく。この河口に石がごろごろと広がっている地形が自然の造形である州浜となる。『広辞苑』の【洲浜】の項には「①海に突き出た、洲のある浜辺」¹⁴¹とあり、州浜は日本列島の急峻な地形が生む特徴的な自然景観でもある。砂州も同様であり、広義には河川中の中州の縁辺、河原を含む。いずれも水の流れが生む地形である。この州浜で行われていた祭祀の一つに鎌倉時代まで続いた天皇の即位儀礼「八十嶋祭」^{やそしまさい}がある。これは難波津の熊河尻（熊河の河口、現在の淀川河口に比定）で行われていたもので¹⁴²、その儀式の内容から、わが国で庭園の「島」にこめられたものは「国魂」であり、これを祀ることは為政者の重要な儀式であったと推定されることについて第2章で考察する。昭和61年の五反島遺跡（大阪府吹田市、神崎川沿い）の発掘調査では宮廷に係る祭祀遺物とみられる銅鏡などが出土し、八十嶋祭に関連するものと考えられている¹⁴³。

州浜ではその面積が徐々にひろがっていく。このことを榎村寛之は難波津の神事に関する考察の中で、「斎王の水の祭りには、水の流れが最も大きく土地を造っていく海岸が最も相応しい」「斎王の水の祭は、自然の生成力—国生みの力と言い換えられる可能性を持つ—を身に付けるために行われた」¹⁴⁴と述べている。州浜は強いパワーを持つ場、しかも神聖な場であるとの考えである。

流れのほとりで、禊^{みそぎ}や祓^{はら}いのため、聖水を汲むため、繰り返し水中に入る必要があったことは明らかである。親水空間の造形として、池や流れの護岸には、自然石を用いた場合には主に三通りの造形がある。石組み護岸は、陸部と水面の間に石が入る。石の大きさによっては手が水面に届かない。飛鳥時代に見られる垂直石積み護岸も同様であるが、浅ければφ300程度のゴロタ石でよいが、水深が深いと護岸の石も大きくなり、その厚み（控え）により水面が遠のく。縄文時代の矢瀬遺跡や5世紀の城之越遺跡の時代から、歩いて水に入れる

州浜が祭祀の都合で便利であったと考えられる。州浜は歩いて水中に入ることができ、これを造園の設計では「渡渉^{としよう}」という。流れを州浜でつくるか、もしくは浅い溝（段差 10～15cm 前後）にして石敷きの場が設けられたと考えられる。浅ければ段差でも差支えないからである。したがって「流れまたは溝」と「州浜または石敷き」はセットになっていた。この組み合わせは時代が下ると祭祀が行われなくなるとともにばらばらになったと見られるが、州浜はわが国の風景をよく映し、流れに代わって主役となった池の護岸に、太古の祭祀の記憶とともに国風の庭園要素として残ったと考えられる。

維持管理の点からも、州浜や石敷きにしておくことで、雑草の発生を抑え、除草の手間を軽減できる。奈良文化財研究所の発掘成果報告に基づく研究会において、「奈良時代庭園の池では一定の水位の跡が不明であり、当時は水位は変動するものとの認識だったのではないか」¹⁴⁵との指摘がある。その点、州浜は水位が変動しても景観を損ねないという利点もあったと思われる。東院庭園や左京三条二坊宮跡庭園の池底に石を敷いていない部分があるのは、池底からしみ出す水があったからではないかと推察する。左京三条二坊宮跡庭園や飛鳥京跡苑池遺構などは現在でも水がしみ出している。明日香村の「亀石」には「この石が西を向くとき、この村は水没する」という伝説がある。当地の昔の人々は旱魃とともに大水を恐れていたのであり、治水が政策上も重要であったことも想像に難くない。治水、日照りの時の祈雨、大雨の時の止雨のため水辺の祭祀が行われた。その記録は六国史にも数多く現れている。

第3項 州浜の復活と国風化という評価―東院庭園の改修についての推測―

奈良時代の庭園に州浜がつくられたことについては概ね「日本的景観」「国風化」と見られている。中村一は州浜の登場で国風が確立したと評価している¹⁴⁶。奈良文化財研究所『古代庭園研究Ⅰ』¹⁴⁷において高瀬要一は平城宮東院庭園の奈良時代における三度にわたる改修工事の報告論文において、最下層園池については飛鳥時代の園池築造技術が継承されていたものとし、幾何学的な造形から自然景観に近いものに変化していった点を、奈良時代の庭園が自然志向に向かい完成してゆく過程と見ている。小野健吉は飛鳥時代の名残に唐風の

影響が及び、唐から移入したデザインを基盤にしつつも最終的には日本風へのアレンジが完成の域に達したと評価している¹⁴⁸。本中眞は工法として古墳の周濠を園池に再利用する技術があったこと、その工法により州浜部分が作られたと考えられること、平面形については統一新羅の雁鴨池を模したものであるとし、7世紀から8世紀にかけてわが国の庭園が日本化していく端緒であるとの評価¹⁴⁹である。

筆者も高瀬・小野説と同じ最下層園池は半島風（飛鳥時代風）の園池としてつくられたと考える。その後の改修に際しては日本的なものに変更され半島風からのイメージチェンジが図られたものとする。二度の改修を繰り返した中で、大陸、半島の庭園には殆ど見られない蛇行溝すなわち「流れ」と、「州浜」が復活したのは、かつて日本各地の為政の場で行われた祭祀の記憶、その流れと州浜だったのではないだろうか。なぜなら、飛鳥時代まで為政者が行ってきた祭祀の場は政権のステイタスシンボルでもあったと考えられるからである。いずれにしても、奈良時代後期には国風が意識されはじめ、出入りのある汀線や中島が緩やかな州浜で水中に下る日本庭園らしい景観を作り出し、柳や桃をたおやかに植え渡した景色は実に優美で、本格的な日本庭園の時代の幕開けと目されており、庭園が国風化したとの見方が大勢である。

それにしても、東院庭園や飛鳥時代の石神遺跡などが、きめ細かい造形や須弥山石や石人像などの精緻に造られた石造の噴水を持ちながら、あっけなく廃絶されたのは、それがもはや政治的に「聖なる親水空間」ではなくなっていたからではないだろうか。反対に祭祀遺構と見られている酒船石遺跡は平安時代まで使われていたことが報告されている。三重県城之越遺跡も同様に奈良時代まで使われていた。このことは祭祀の場そのものは祭祀を執行しながらその後も存続し続けたと言えよう。

第3節 池に迎えるもの

第1項 農耕神事の池

記紀において池の記録があるのは最も早いのが垂仁天皇35年（A.D.3世紀頃）の灌漑用

水池の記事である（表 4-42、43、44）。その後も灌漑用水地の記録はいくつか見られる（表 4-51 他）が、当時の灌漑用水地は鑑賞や祭祀の場も兼ねていたと考えられる。鑑賞池としての記録は『日本書紀』景行天皇 4 年（3 世紀頃）の「泳宮之泳宮池（くくりのみやのくくりのみやいけ）」で、景行天皇が弟媛を后にするために気を引こうとして池に鯉魚を放ち、遊ばせるというものである。

（景行）四年春二月甲寅朔甲子、天皇幸美濃。左右奏言之「茲國有佳人曰弟媛、容姿端正、八坂入彥皇子之女也。」天皇、欲得爲妃、幸弟媛之家。弟媛、聞乘輿車駕、則隱竹林。於是天皇、權令弟媛至而居于泳宮之泳宮、此云區玖利能彌擲、鯉魚浮池、朝夕臨視而戲遊。時弟媛、欲見其鯉魚遊而密來臨池、天皇則留而通之。（表 4-46）

笠井昌昭によるとこの記事は池における婚姻の祭式儀礼があったことを伝えるものであり、また天皇と皇后が池に舟を浮かべて遊ぶのは奈良時代頃までつづいた農耕神事であることを指摘している¹⁵⁰。笠井の説はまず水神には両端いわば「二つの顔」があり、一方は山の神でもう一方は田の神である。（これは山岳から川が発して平野に下り水田に入ることを考えると川そのものが水神と考えられる（筆者））。山の神を田に迎え后にするのは天皇の役目であり、このとき山の神は池で禊ぎをして田の神になる。池で天皇が后と遊ぶのはこの水神である后を迎える農耕の神事に由来する、ということである¹⁵¹。この説に従えば履仲天皇 3 年（5 世紀頃）の記事もこれにあたると考えられ、天皇と皇后が分かれて舟に乗り、池で遊んでいる（表 4-58）。笠井によるとこの時は 11 月に花（原典にはめづらしい花とだけあり樹種不明）を愛でているが、この花は本来「稲」の花だったとのことである。

仲哀天皇 8 年（4 世紀頃）には船が出せずに不機嫌になった神功皇后が魚池・鳥池を作らせ魚鳥を放って心を和ませたとの記事もあり（表 4-48）、鑑賞池を作ることは 4 世紀頃には既に行われていたと考えられる。また応神天皇 11 年（4 世紀頃）に造られた灌漑用水地とみられる劔池（表 4-51）に舒明天皇 7 年（635）に蓮の花が咲いた（表 4-68、71）とあるので、灌漑用水池に蓮が植えられており、身近な景観であったこともわかる。前期難波宮頃の

発掘例はないが、飛鳥時代の明日香村には飛鳥京跡苑池遺構の南池北池 22) がある。池の水深は南池 80 cm 北池 1m で舟を浮かべるのは可能な深さと言える。飛鳥京跡苑池遺構の南池も、これまでは鑑賞・饗宴を主目的と考えられてきたが、この農耕神事の伝統を考えるとやはり祭祀のための池であったのかもしれない。また笠井は『日本書紀』に記事のある蘇我馬子邸（嶋宮）の池は、前述の後の池の伝統を踏まえ、一族から后妃を 3 人だしたことを自慢するものであったと見ている。奈良平城宮には北側に佐紀池があり、『続日本紀』には「鳥池塘にて宴、曲宴」の記事（表 4-123）があり、舟遊びの記録もある。この鳥池は佐紀池ではないかと考えられている。また奈良文化財研究所によると『続日本紀』天平 10 年（738）に天皇が「西池宮」に行幸の記事もあり（表 4-149）、この西池宮が佐紀池である可能性も高いとする¹⁵²。わが国の古代の「宴」は祭祀に近い性質のものであったのであり、このことは結章で詳しく述べる。

平安宮には隣接する神泉苑 33) の池があり、ここで舟遊びがおこなわれたことは六国史にみえており、このほか魚釣り、雨乞い神事が行われた。神泉苑の池は築造されたものであるが、この地は縄文時代からの低湿地で湧水が豊富であり、渇水の時に農民に水を分けた記録もある。池の築造は必然であったろう。形状は比較的丸い楕円状であったと推定されており（図 26）特に複雑な汀線や意匠はみられない。平安京には別途大沢池 41) がある。いずれも広々とした伸びやかな景観を持つ。鳥羽離宮庭園 35) はもともと水上交通の要衝であって、敷地内の移動には池上を舟を使って移動していた。当地の自然地形を利用して修景された池である。平安宮の火災により里内裏となった堀河院、高陽院 34) などにも記録と発掘調査によると池はあり、『栄花物語』等には季節に舟を浮かべて遊んだ記録は多い。里内裏は皇后の実家であることが多いので、「池」は農耕神事の祭祀が行われなくなっても笠井が指摘するように蘇我馬子邸と同様に后を出す家柄のステイタスシンボルとなって残されており、平安時代には藤原氏が踏襲していた可能性がある。蘇我馬子以来、天皇側近で后を出す家柄（藤原氏の館）に池が造られていることは、笠井の説である「後の池」を裏付けているともいえよう。

后を迎える池という意味において、これらの船を浮かべることができる「池」は古い農耕神事の名残りであると言えるだろう。少なくとも平城宮佐紀池までは宮中の農耕神事や何らかの祭祀のために必要だったのである。

第2項 鑑賞の池

池の築造は前述の仲哀紀の記事、また灌漑用水池や古墳時代に池に囲まれた大型古墳がいくつもつくられていることから技術的には十分に可能だったと考えられるが、饗応、鑑賞のための池が顕著に確認できるようになるのは飛鳥時代からである。庭園の池を掘ることは明日香村の遺構にいくつか確認されており、路子工が南庭に須弥山と呉橋を作った記事、蘇我馬子が自邸に小池を掘り、島を築いて「島の大君」と呼ばれた記事がよく知られている。蘇我馬子邸は『萬葉集』に「まがりの池」とあることから曲池中島があったと推定される。石神遺跡 21) は正方形で噴水を持つ鑑賞池である。飛鳥京跡苑池遺構の南池 20) は半円一部直線形で中島を持つことから鑑賞性が高い。また、飛鳥京跡苑池遺構を除いては非祭祀遺構である。

これらのことから鑑賞のために池を掘ることは 3 世紀には行われていたが、飛鳥時代になって本格化したと考えてよさそうである。この点、大陸では紀元前から池を掘っていることから、わが国では池による修景は遅かったと言える。それまでは「流れまたは溝」が主役だったのであり、その名残りと考えられるのが平城京左京三条二坊宮跡庭園 27) など、流れが幅広くなったような形状である。水深が 15～30 cm であり、舟を浮かべる池ではない。東院庭園 23) の池も浅いがこの東院庭園の園池は元来単純な逆 L 型垂直護岸の池としてつくられたのであり（最下層園池）、後に改修され浅くなったという経緯を持つ。この池からミニチュアの舟が出土している。平城宮では舟を浮かべる行事には隣接の佐紀池に行幸したと考えられるが、船形木製品は死者の魂を乗せるなどの祭祀の性格が強く、祭祀的な営みが若干残されていたのかもしれない。

そしてこの東院庭園に代表されるように、奈良時代からは宮城や貴族の邸宅の庭園に池がつくられるようになり、その平面形は自然形であり、護岸は州浜になったのである（表 3

年表)。平安時代後半の10世頃には寝殿造建築に対応した池が造られるようになり、貴族の邸宅の庭園、寺院庭園に「遣水」と「池と島」が設けられ、『作庭記』にはその地割や寸法が記されている。「流れ」は「遣水」となって継承され「池」と「島」が主役となっていくことがわかる。

池は島を持ち、多くは一池一島である（東院庭園23）、法華寺阿弥陀院庭園28）、伝称徳天皇御山荘跡30）、平等院庭園33）、毛越寺庭園36）、無量光院庭園37）、浄瑠璃寺庭園39）兵主神社38）、兵主神社の池はもとは左右に対象に2つあり、それぞれが1島をもつと推定されている）。この点、大陸の一池三山¹⁵³や半島の統一新羅時代の一池三島ないし二島¹⁵⁴とは異なっている。言うまでもなく島の景は海の景である。またわが国では州浜護岸が自然の景観であり、庭園の池も護岸は州浜で造られた。この点も半島の方池・垂直石積み護岸とはかけ離れている。

第3項 池の役割

祭祀空間の構成要素であった「流れ」が祭祀が行われなくなるとともに「遣水」となって継承され、主役が「池」に移っていったことは確かに言えるであろう。祭祀にあたって舟が使える池としては、飛鳥時代までは特定できないが、奈良時代は佐紀池（禁苑）、平安時代は神泉苑（禁苑）および貴族邸、寺院である。飛鳥時代の石神遺跡、奈良時代の庭園内の池は、前項のとおり水深が浅く、舟遊びには適さない。したがって舟遊びが庭園内に入り込んできたのは平安時代のことになる。

藤原道長の邸で里内裏となった土御門殿の庭園の様子が『栄花物語』¹⁵⁵にあり、築山の紅葉、中島の松と松にかかる蔦の紅葉、黄葉を様々な色、またその水面に映ること、その錦の中から船の楽を聞くと、ぞっとするほど趣きがある（長保2年（1000）（巻7とりべ野）と描写されている。また同書には、藤原道長の娘が一条天皇の皇子を出産し、天皇が土御門殿に行幸するくだりがある。これによると道長はこの日のためにつくらせた龍頭鵜首の船を、行幸を間近にした日に検分している。行幸当日の館の人々の華やかな様子が描かれ、夜になって萬歳楽・太平楽・賀殿などの楽や舞があり、笛の音、鼓の音の響きに松風が吹き澄まし、

池の波も声を唱えた、とあり、楽人が船上で演奏していたことが伺える（寛弘5年（1008）

（巻八はつはな）。9世紀末から造営され、10世紀以降、里内裏（円融天皇、白河天皇、堀河天皇）となった**堀河院庭園**の遺構では鈴木久男によると池の両端に水深1.5～2.0m（0.5m+1m～1.5m）の地点が確認されている¹⁵⁶。この池では『帥記』承暦4年（1080）4月28日の条によると、当時東宮であった堀河天皇を迎えるにあたり、藤原基経が龍頭船と鷁首船を池に待機させ、楽を奏したとある。これらのことから里内裏級の邸宅には一定規模の池があり、舟を浮かべることができたこと、また船は龍頭鷁首の船であったこと、池が行事に際して楽・舞の舞台として使われたことがわかる。

このような貴族の邸宅の庭の池は、やはり天皇の行幸や夫の来訪を想定した農耕神事の伝統を引くもの、笠井の指摘した蘇我馬子以来の「後の池」だったのではないかと考える。ただし、神事の記憶は失われ、ステイタスシンボル化していたものと考ええる。

一方、平等院庭園、毛越寺庭園、観自在王院庭園、無量光院庭園、浄瑠璃寺庭園と続く仏教寺院の池は比較的広い水面の西側または北に阿弥陀堂を持ち、海の彼方に西方浄土を見ろというイメージを持っている（図36、37、38、39）。ある程度の水深があり、舟を浮かべることができる。浄土庭園と呼ばれるこれらの庭園は、末法の世という時代背景とともに浄土を願う信仰に根差した庭園の一群であるが、明確な様式があったとは考えられていない。浄土庭園の早いもので藤原道長が土御門邸に隣接して創建した法成寺の金堂供養（治安2年（1022）落慶）の様子が『栄花物語』に見えている。敷地は大門—中門—池・中島—金堂が一直線に並んでいた構成である¹⁵⁷¹⁵⁸。後一条天皇が到着し、大門を入られると、左は龍頭、右は鷁首の船に乗った舞人達が、船楽を伴奏に舞出てきたとあり、池に船を浮かべて舞人を待機させていたことがわかる。その日の庭の様子は池に色とりどりの蓮花（造花）が飾られており、池周囲の植木の枝に宝珠を縫い付けた網がかけられていたこと、種々の宝物を飾った舟が池に浮べてあったこと、中島に孔雀、鸚鵡（作り物）が飾られていたことなどもわかる（巻十七おむがく）。この作り物については宮中にも「作物所（つくもどころ）」という部署で行事に必要な大道具・小道具を制作しており、当時はよく行われていたことがわかって

いる。前述の一条天皇の皇子誕生の際の行幸時とかわらぬ華やかさである。この7年後に道長はこの寺の阿弥陀堂で往生する。この時、敷地東の五大堂から池の東橋を渡って中島を通り、西橋を渡って西岸の阿弥陀堂に入り、九体阿弥陀如来のもとで臨終を迎え息を引き取ったと伝わる。

また、この法成寺をモデルにしたと伝わる平等院では、治暦3年(1067)藤原頼通が娘婿にあたる後冷泉天皇をその病の末期にお迎えし、池に浮かんだ船上から夕映えの阿弥陀堂をお見せしたという記事が『扶桑略記』¹⁵⁹にある。阿字池の水面越しに夕映えの阿弥陀堂をみたときには、極楽の莊嚴を見る思いであろう。楽、舞を伴う特別な演出がなくとも、阿弥陀仏のいる彼岸の手前にある水面は西方浄土にわたるときに越えていく海のイメージと重なる。しかし、平等院庭園はもと藤原頼通の別業であったものを改修して寺院にしたのであり、最初から西方浄土、極楽浄土をイメージして造営されたものではない。この点、杉本宏は改修前の宇治の別業、即ち寝殿造形式の建築に付随する庭園が、寺院庭園になるほど宗教的なまでに完成度が高かったものと見ている¹⁶⁰。さらにその平等院のモデルになったと伝わる先述の法成寺も、清水擴によれば奈良時代寺院の構成とは異なり、伽藍中央に池と中島を設けたことは、住宅建築様式である寝殿造に近いことを指摘している¹⁶¹。法成寺の推定復元図(図45)¹⁶²及び京都市平安京創生館作成の模型をみると中島が比較的大きく樹木が茂っており、入口から水面越しに対岸の金堂が見えたとは考えられず、彼岸に渡る時の海をイメージして水面を主としたとは言い難い。

また『作庭記』は、貴族の住宅建築様式である寝殿造、ひいては内裏および寺院を想定した池庭の設計要領を具体的に記しているだけでなく、舞人や楽人が配置される池の利用を想定した中島の位置、中島が狭小な場合の対策まで指南している。

又、島ををくことは所のありさまにしたかひ、池寛狭によるへし、但、しかるへき所ならは法として島のさきを寝殿のなかにはあてて、うしろに楽屋あらしめんこと、よういあるへし、楽屋は七八丈にをよふ事なれば島はかまへてひろくおかまほしけれと、池に

よるへきことなればひきさかりたる島などをきてかりいたしきをしきつつくへきなり。
かりいたしきをしくことは島のせはきゆへなり。いかにも楽屋のまへに島のおほくみ
ゆへき也、しかれはそのところをきてふそくのところに、かりいたしきをはしくへき
とそ、うけたまわりおきて侍る。¹⁶³

この『作庭記』の著者と推測されている橘俊綱は藤原頼通の実子であり、平等院の造営などを間近に見たであろうことが推測されている。『作庭記』の池の設計については陰陽五行説が援用されていることがよく知られているが、仏教的な言説、「浄土」や「彼岸」といった文言は一切見当たらないことから、平安時代末期までの当時において浄土庭園という様式がすでにあったわけではなく、杉本が言うように寝殿造建築から改修した結果、阿弥陀堂前に水面を持った姿になった平等院庭園が周囲の景観と相まって比類なく美しく浄土的であったため、その後多くの寺院庭園に写されたものと考えられる。堂前の水面が鏡のような効果を持ち、建物を映してより荘厳にみえたことは平等院庭園をはじめ毛越寺庭園や浄瑠璃寺庭園の景観から明らかである。

第4節 小結

本章で見てきたことから、日本庭園の造形の原初の姿は水辺で祭祀を行うための場、祭祀のための「聖なる親水空間」であったと言える。その主な構成は「湧水点の造形あるいは井戸」とそこから発する「流れの造形または石で整形した溝」、水辺に臨む「州浜や石敷き」、そこに立てられた「立石・石組み」であり、この組み合わせが主要なパターンである。酒船石遺跡 19) 飛鳥京跡苑池遺構 20) までは祭祀の場として造形されている。飛鳥時代頃から祭祀の場のほかに池と中島が造られるようになり、同時に祭祀を離れて鑑賞・饗応の場としての空間が見られるようになり、奈良時代にはいると鑑賞、饗応が主たる目的となったと言えるであろう。祭祀は従来通りの場所や自然河川あるいは造営された神社で行われ、新しく造られる庭園の構成の主役は池と島に移っていったこと、仏教寺院の造営が始まり後代の造園史の主役になっていったことが（表3年表）からもわかる。

この変遷、縄文時代の祭祀空間から鑑賞・饗応が主たる目的となった過程でほぼ一貫してみられるのが水辺の「州浜または石敷き」である。39 例中 29 例に流れ沿いまたは池の護岸として州浜・石敷きが現れた（表 3 年表）。特に州浜は古くは湧水からの流れに臨んで造られ、時代が下ると池の護岸として造られている。しかもこの州浜による修景は大陸や半島では前述の「卵石護岸」以外は殆ど見られず、わが国に特徴的な庭園構成要素であるとみてよい。

湧水と流れについては自然形と整形されたものの両方が見られたが、奈良時代頃から流れに近い平面形を持つ自然形の池になっていった。その後の平安時代には「池と島」が主役となり、「流れ」は「遣水」となって受け継がれ、発掘された各遺構及び『作庭記』や絵巻物にて確認できる。「遣水」は池の給水のためにも必要な構成要素であり、内裏内庭には平安時代の仁明天皇承和年間（834-847）以降も「水石庭」があった¹⁶⁴。

もう一点、立石・景石も縄文時代から一貫して見られるもので、これは古代より中世、近世を通して庭園の主役であるが、大陸、半島の奇岩をオブジェのように鑑賞する指向とは一線を画している。これらの点について、その背景と考えられることを第 3 章および結章で造形のモチーフを通して考察する。

第2章 古代庭園における島と州浜¹⁶⁵

第1節 本章の目的、方法

第1章で古代から古墳時代、さらに弥生・縄文時代のニワ状遺構まで遡ると、それは祭祀を主な目的としていたとみられる空間であったことから、わが国の庭園は、祭祀空間を起源に持ち、空間そのものが聖性と靈性を帯びた靈的なものを迎える場という性質を持っているのではないかと考えるに至った。天意を尋ね、祈り、祓い、時には呪いをかける祭祀が、湧水や自然河川のほとり、あるいは造園的に修景されたニワ状の親水空間で行われていた。その主な構成要素は「流れ」と「州浜」、そして「立石」であり、「流れ」と「州浜」は祭祀の執行に必要な場の造形であり、水際に「立石」を持つこともある。このような祭祀空間としての造形は飛鳥時代に転換期を迎えたとみられ、庭内に「池を掘り、島を築く」ことがこの飛鳥時代に始まったとみられている。飛鳥時代における「池と島」はその後、州浜と立石を伴いながら、庭園の重要な構成要素となることから、本章ではこの「島」を中心に引き上げ、わが国の「島」にアニミズム的な要素があるのか、あるとすればどのように認められるのか、それが庭園にどのように持ち込まれたのかを明らかにする。

「島」については、大陸から伝わった蓬莱三山などの神仙思想の影響がよく知られているが、もともと大陸で形成されたイメージとわが国に実際につくられたものとはやや趣きが異なって感じられ、そこにはわが国特有の事情や感性があったと考えられることから、わが国の庭園に実際に造形された「島」の形を、底辺に対する高さの比で検証してみると同時に、わが国で最も古い文書である『古事記』と『萬葉集』の一部、少し時代が下った高陽院庭園や平等院庭園が造営された頃に成立したと見られている『作庭記』に表れる「島」のイメージを抽出し、比較したところ、古くは「島」にはそれぞれ神が宿と考えられていたことと、「島」と「國」と「州浜」、そして「庭」が混在することが注目せられた。さらにわが国では「島」と「州浜」が密接な関係にあることも見えてきた。

島の神を奉じた祭祀の事例として古代の難波津で行われていた^{やそしまさい}八十島祭と、その島と州

浜が織り成す風景をとりあげ、あわせてその独特の風景が平城宮東院庭園の州浜のモチーフとなった可能性も提起する。

第2節 祭祀空間の造形とそのモチーフ¹⁶⁶

わが国では縄文時代以来、湧水点や井戸、自然河川のほとり、あるいは人為的にしつらえた親水空間において祭祀が行われてきた。水に直接手が届く場所で行われ、そのために流れを誘導し、水際に州浜をつくり、あるいは石敷の平坦部と水に降りる階段をつくり、祭壇や建物と組み合わせることも行われてきた。また、流れの合流部に石を立てる立石も同時に行われている。このことは縄文時代後期半ばの遺跡である矢瀬遺跡や弥生時代前期後半から後期にかけての池上曾根遺跡、古墳時代の城之越遺跡などで明らかにされており、そこで行われていた祭祀は「水辺の祭祀」と総称され¹⁶⁷、後の時代の作庭技術の初期段階がそれらの遺構にみられるとの見解は概ね受け入れられている。その造形の主な構成要素は第一章でみてきたとおり「流れ」「州浜」そして「立石」である。発掘されたニワ状遺構や庭園のこれらの構成要素を時代を追って一覧にしたのが（表3年表）である。

「流れ」は縄文・弥生時代から古墳時代、飛鳥時代初期にかけて、自然河川に造作を加えたものや、湧水点から流れを引いて造形したものがあり、奈良時代にも平城宮の東院庭園などにつくられており、平安時代以降は遣水として造形されていることから（図 46）、何らかの重要な象徴であり、そのモチーフは『古事記』に記された「天の安河」であり、太古の人々は湧水や流れによって天の安河にいる神々とつながることができると思われて祀りごとを行っていたのではないかと考えている。このことは立証には至っていないが、「湧水点」や「流れ」の傍で祭祀が行われていたことは事実であり、当時の祀りごとは「政^{まつりごと}」でもあったため、「流れ」が一種のステイタスシンボルとして庭園内に残されてきた可能性がある。「流れ」は弥生時代や飛鳥時代には「溝」に整形された例もある。「流れ」や「溝」は飛鳥時代まで造形の中心的な要素として存在し、奈良時代には池がつくられるようになってその給水路としての役目を担い、平安時代以降は遣水となって存続していく。

わが国の河川や河口付近によく見られる州浜はニワ状遺構や庭園において自然風景と同じように造形された。本論文では緩やかな勾配をもつ玉石（自由礫、固定礫を問わない）に覆われた護岸を「州浜」と呼ぶことにする。弥生時代や飛鳥時代の祭祀空間においては石貼りの平坦面に整形された例もあり（図 47）、本論文ではこれを「石敷」と呼ぶことにする。

「石敷」は一見すると「州浜」と違って幾何学的な造形であるが、その役目は「州浜」と同じく、この場で聖水を汲み、流し、祭祀具を投じていた。奈良時代以降は祭祀の役目が薄くなり修景的要素が強くなったと見られ、「石敷」よりも自然風景と同じ「州浜」が主流となった。「州浜」は以降も護岸の手法として多くの庭園に用いられ、平等院庭園や毛越寺庭園などの園池の中島を含むほぼ全周が州浜であったことも発掘調査¹⁶⁸により判明しており、このことは特筆に値する。そのモチーフはわが国の急峻な地形からほとぼしる河川が河口付近に礫を押し出していく地形であり、河川の両岸や中州の周囲も同じく「州浜」と呼ばれる。

「州浜」や「石敷」は、祭祀の場そのものであったのであり、湧水・流れとの組み合わせで「聖なる親水空間」を形成していたと言えるのではないだろうか。

この「流れ」と「州浜」で構成される「聖なる親水空間」には流れに臨む立石や石組みが存在する場合がある。流れ、池とは別の場に配置される石組みもある。立石の最も古い形としては縄文時代の遺構に環状列石としてみられるものや、墓標、境界、道標等があり、時代が下るにつれ、庭園内の造形的な構成要素になっていく。そのモチーフとしては第一に「山、山岳」が考えられる。平城宮東院の園池北岸の石組み（奈良時代）について、岩永省三が『古代庭園の思想』において、正倉院南倉宝物の「假山」（図 48）との相似を指摘している¹⁶⁹。森蘊は『日本の庭園』で山岳を石組で表した例として、西芳寺洪隠山の山腹の石組（南北朝時代）等を挙げている¹⁷⁰。大徳寺大仙院庭園の枯滝石組みと枯流れ（室町時代）は深山から滝が流れ出て大河にそそぐ景としてよく知られている¹⁷¹。また江戸末期から継承されてきた津軽地方の大石武学流庭園に配置される「遠山石」は「深山石」とも言い富士山や岩木山に似た石が良いとされる¹⁷²。これらのことから、山岳表現としての立石があることが理解できる。次に考えられるのが「島」であり、『作庭記』にある「礒島」は石を主体とする島の作

り方である¹⁷³。そして三つ目に「神仏」が考えられる。室町時代に書かれたと見られている『山水並に野形図』には「石之名」として「両界石、(中略) 此石ハ両界ノ大日如来ヲ表ス 五行五色ヲ具足スル石也、(後略)」¹⁷⁴とある。同書には他にも「明王石」の名が見える。『作庭記』にも「三尊仏の立石をまさしく寝殿にむかふへからず、(後略)」¹⁷⁵とあり、上原敬二『造園辞典』には三尊は仏教の釈迦、阿弥陀、不動を表し、神道では三神石、二神石となるとある¹⁷⁶。石を神仏に見立てて庭中に据えることは平安時代から行われていたと考えられる。

石は古来、この世とあの世の間にあるものと考えられており、石にまつわる事象には靈性に関わるものが多い。『作庭記』は立石について靈性に関わる言い伝えや禁忌に多くの記述を費やしている他に、「石の乞はんにしたかひて」¹⁷⁷という表現を用いており、この一文を多くの研究者や作庭家が「石の要求するところに従って・・・」と解釈していることから、現代人も石に意志があるという靈性(擬人化表現)を無意識に共有していると考えられる¹⁷⁸。また、わが国の庭園が、「神々とつながる場」「靈的なものを迎える空間」という性質をもとと持っていたことが「立石」のような靈的なものを残しやすくしたものと考えている。これらのことから、わが国の庭園の底流には今もそれと気付かぬほどに深いところで、アニミズムが流れていると言えるのではないだろうか。

第3節 祭祀空間の庭園化―「島」の出現

第1項 「島」の出現とその造形

『日本書紀』は養老4年(720)に完成した。その推古朝20年(612)の記録に、「是歳、
百済国よりくだらのくに 化おのづからまうく 来る者有り。(中略) 亦もの 臣あ、小またやつかれ なる才有り。能く山岳の形を構く。(中略) よりて須弥山すみのやまの形及び呉橋かたちを南庭に構けと令す。時の人、その人を号けて、路子工くれはしとおほ 白ふ。亦の名は芝耆摩呂。」¹⁷⁹とあり、ある百済からの渡来人が山岳の形を構くので、南庭に須弥の山と呉橋を築かせたとの記録である。「須弥山」乃至「須弥山」は仏教で世界の中心をなすとされる山である。路子工はこの「山」を築いたのであるが、同時に「呉橋」がで

きていることから、その築山は周囲を掘削した土でつくられたもので、その結果、池中に島が出現したと推定できる。「呉橋」については上原敬二『造園辞典』でも「古事記に路子工（みちこのたくみ）が作ったものと記され庭園的なものらしいが詳細は不明。文字だけ残る。」¹⁸⁰とあり、実態はわからない。森蘊は『日本の庭園』で「之を以て本邦庭園の主題として須彌山が採りあげられた最初であり、（後略）」¹⁸¹としている。この「山岳の形」や「須彌山」は元来が山岳のイメージであることに留意しておきたい。また推古朝 34 年（626）に蘇我馬子の薨伝があり、「大臣薨せぬ。（中略）以て三宝を忝み敬ひて、飛鳥河の傍に家せり、乃ち庭の中に小なる池を開れり。仍りて小なる嶋を池の中に興く。故、時の人、嶋大臣と曰ふ。」¹⁸²とあり、蘇我馬子が自邸の敷地に池を掘り、島を築いたことから「嶋大臣」と呼ばれた話も記録されている。この池と島について、上原敬二は『造園大辞典』「島」の項で「小規模な池庭と思われるが時の人には珍しかったものに違いない。」¹⁸³と書いている。『日本書記』推古朝の記事や現在確認されているニワ状遺構・庭園（表 3 年表）の状況から庭園の「島」は飛鳥時代に造られ始めたものと考えられる。以下に平安時代までの「島」を持つニワ状遺構や庭園をいくつか列記する。これらは「島」と同時に「州浜・石敷」もあわせ持っている。（ ）は（表 3 年表）の番号である。

飛鳥京跡苑池遺構 20) は 7 世紀飛鳥時代のもので、大規模な園池は比較的直線部分が多い形状で、池内にトンボ型の中島がある。護岸はいずれも垂直石積みである。『日本書記』に記載のある「白錦御苑」と目されている¹⁸⁴。

平城宮東院庭園 23) は 8 世紀（和同 3 年（710）～延暦 3 年（784）頃）奈良時代の庭園である。祭祀の跡は未確認で、鑑賞、饗応の役割が強くなった本格的日本庭園の始まりと見做されている。当初、飛鳥時代風の直線的な形の池と垂直石積み護岸であったものから、改修を経て優美な緩傾斜の州浜に囲まれた浅い池になり、中島がつくられた¹⁸⁵。この庭園については後の章でも述べる。

平城京左京三条二坊宮跡庭園 27) は 8 世紀（天平 20 年（748）～天平勝宝 8 年（756）まで）奈良時代に造営された貴族の半公邸とみられる住宅庭園である。完成された日本庭園で

あり、屈曲する池の護岸は径 20～30cm の玉石を立て並べた仕様で、その外周が玉石敷で緩勾配をもつ。さらにその外周が礫敷である。護岸（立てた玉石）の内側も石張りになっている。要所に石組みが置かれており、流れのなかに岩島と出島がある¹⁸⁶。一見すると州浜に囲まれた流れのように見える池である。

平等院庭園 33) は 11 世紀（永承 7 年（1052））平安時代に藤原氏が造営した。優美な州浜護岸の中島上に阿弥陀堂が立つ¹⁸⁷。現在は創建時に近い姿で復元されている。

毛越寺庭園 36) は平安時代末期の作庭である。池の護岸はほぼ州浜になっており、12 世紀の石貼りに覆われた中島を検出している¹⁸⁸。併存する岩礁状の池中立石がある。

鳥羽離宮庭園 35) は 11 世紀、応徳 3 年（1086）平安時代後期から白河法皇により造営が始まった。都遷りのごとしと評されたわが国最大の離宮である。鴨川の水と湧水を利用した大規模な園池、護岸はほぼ全周が州浜によってつくられた。中島に寺院（城南寺）がある¹⁸⁹。以上「島」と「州浜・石敷」をあわせ持つニワ状遺構・庭園の例である。他に南紀寺遺跡 12) がある。また伝称徳天皇御山荘跡 30) は「島」だけを持つ。

第 2 項 「島」のモチーフとイメージ

（1）外来文化の影響の程度について

わが国の庭園に「島」がつくられ始めた頃の外来文化の影響について触れておきたい。特に本論文が取り上げている「流れ」「州浜」「立石」「島」について、その起源やモデルが大陸や半島にあり、その影響を大なりとする論調には金子裕之、岩永省三、田中淡、小野健吉らの研究がある。一例を挙げると、平城宮東院庭園の下層園池に現れた蛇行溝について、金子、岩永両氏は『古代庭園の思想』で中国の行事であった曲水の宴のためにつくられた¹⁹⁰と見ており、田中も毛越寺の遣水について、「中国庭園の初期的風格と日本古代庭園」で普朝王羲之の蘭亭の「流觴語曲水」につながるもの¹⁹¹としている。州浜については小野が『日本庭園の歴史と文化』でそのモデルを中国洛陽上陽宮の卵石護岸である¹⁹²とし、岩永も『古代庭園の思想』で州浜のイメージの源泉として、奈良時代に入ってからのお像の州浜座や正倉院宝物の「假山」をあげ¹⁹³大陸から伝わったと見ている。立石についても岩永が同書で東院

庭園の園池北端の石組みが「假山」に似ている¹⁹⁴と指摘する。田中は毛越寺庭園の立石について、やはり同論文で中国立峯の初期的風格を伝えるもの¹⁹⁵としている。総体的な見方として、金子は「嶋と神仙思想」において平城宮東院庭園の呼称が「楊梅宮南池」であり中国南朝の伝統を取り入れていることから、この時期にわが国の園池が半島型から中国型に転換した¹⁹⁶と見ている。少し時代の下る『作庭記』については、田中がその内容に中国の風水・関係分野の専門方術書の影響がみられること等から、到底日本の範疇に限定しえない¹⁹⁷と同論文で述べている。

一方で、外来文化の影響を限定的とみる論調もあり、平城宮東院庭園の蛇行溝については奈良文化財研究所の高瀬要一は「これと同じような形をした蛇行溝は、韓国にもありませんし、中国にもないわけです。」¹⁹⁸と報告しており、同研究所が主催した「古代庭園に関する調査研究」で「曲水の宴に関する問題」として討議され、高瀬、今江、他の諸氏より曲水の宴については本来が祓いの祭祀であり、宮廷内ではなく自然河川で毎年場所を変えて行われていたと見られることから、必ずしもそのための施設が庭園内に設けられたとは考えにくい等¹⁹⁹の意見が出されている。このことは、わが国における曲水の宴の実態を再考する必要があることを示唆している。州浜については、中村一が『風景をつくる』において東院庭園の州浜への改修を「自然風景の象徴的表現」²⁰⁰として「庭における日本風の誕生」²⁰¹と評価し、これ以降（奈良時代以降）庭園が国風化したと見ている。州浜は急峻な地形と数多い河川をもつ日本列島で多くみられる地形であり、大陸、半島においては地形や気候も異なり、庭園内で実見されるものが上記の洛陽上陽宮の卵石護岸だけであることから、中村一と同意見である。森蘊は『日本の庭園』で須弥山、蓬莱三山、九山八海等の遺物を検証し、「要するに須弥山にせよ、蓬莱山にせよ、その思想の導来された上代に於いても日本庭園の形態の上に全く何等の影響も及ぼさず、（中略）一般の庭園に就てはほとんど影響がなかったといっても差支えなからう。」²⁰²との立場であり、先の中村一の『風景をつくる』の論調と一致する²⁰³。また、『作庭記』に援用された陰陽五行思想については、田中正大は『日本の庭園』で単に説得力を増すように引用されたものに過ぎないとして同書の重要性には預から

ないとしており²⁰⁴、田中淡とは異なるが、田中正大が言うように陰陽五行思想が『作庭記』の本質とは考えられず、修飾的なものではないだろうか。

このように、さまざまな指摘や論考は、そのわが国への影響度をどの程度に見るかという差であるが、庭園をみるまなざしとして、外来の文化文明の摂取を優先的にみるか、日本人の感覚で素直にみるかという違いはあるように思われる。庭園にあらわれた造形を、わが国に縄文時代以来行われてきた祭祀の記憶を受け継ぐものとし、そこに込められた古代の人々の自然観や風景観を探っていくと、その底流にあるアニミズムが見えてくる可能性はあると考えている。

（２）古代中国における「島」―神仙島

庭園の「島」のモチーフは『列子 湯問編』に記載されている蓬萊三山の伝説であるとする説がある²⁰⁵。多田伊織によるとその概略は以下のような伝説である。

昔、渤海の東（渤海とは東方の海、東海とも扶桑海ともいう（現在の日本海に比定される））に五山を擁する神仙島が浮かんでいた。海に浮かんで漂うため、捕まえることができない。巨鼈十五匹に命じて持ち上げさせ固定した。三匹で一山の負担である。ところがそこに巨人が来て巨鼈六匹を釣っていつってしまったので、二山はまた漂流し北極海に沈んだ。残ったのは九匹が持ち上げる三山である。この三山を蓬萊山、方丈山または方壺山、瀛洲山ほうこ えいしゅうと言う²⁰⁶。

この蓬萊三山あるいは神仙島は仙人が住む桃源郷とも不老不死の島とも言われ、仏教美術に描かれ、庭園のモチーフともなった。その実例としては、北魏の時代（A.D. 3世紀）洛陽に、もと漢の武帝の庭園「天淵池」があった。これを華林園とし、世宗が蓬萊山をつくり、山上に僊人館せんじんかんを建て、鴈首の竜舟にて地上を遊覧したとある²⁰⁷。もう一例は唐代の長安城大明宮太液池（太液池）内に漸台と呼ばれる中島があり、この中島に蓬萊・方丈・瀛洲の三山があった（図42）。この伝説はわが国にも伝えられた。その形象は正倉院南倉に納められた「仮山」（図48）等に見ることができる。蓬萊・方丈・瀛洲は本来は山岳、垂直に高い独立峰であり、石神遺跡から出土した須弥山石の正面に刻まれた図柄も山岳である。推古天皇が

命じて路子工が作ったのは「山岳^{やまをか かたち}の形」をした「須弥の山（仏教の世界の中心をなすとされる山）」であって、同時に呉橋ができたのは、周囲を掘削して池とし、その発生土を流用して山形の島を築いたのであろう。

（３）外来の「島」のイメージとわが国に実際に造形された「島」の違い

庭園に池を掘り島を築く造形は、『日本書紀』の推古朝の記事や現在確認されているニワ状遺構・庭園（表 2）の状況から飛鳥時代に始まったものと考えられる。土木工事としてはわが国でも古墳の築造が行われていたので珍しいものではなかったと思われるが、上原敬二は『造園大辞典』に「小規模な池庭と思われるが、時の人には珍しかったものに違いない」²⁰⁸と書いている。須弥山や正倉院宝物に見られる屹立する山岳様式は、あくまでも大陸由来のイメージであろう。「山岳」よりもむしろ「島」、厳密に言えば「池と中島」のほうが喜ばれたのではないか。わが国では、山岳よりも島のほうがクローズアップされたと考えられる。それはわが国が大小の島々を国土とする島国であり、交通手段が限られていた当時、生活圏は海に近く、島は最も身近に感じる風景であり、同時に山と同じく神が居るものとされていたからではないだろうか。この点、大陸では「蓬莱山」「方丈山」「瀛洲山」「崑崙山」等と山岳に名を付け、霊廟を建て神霊を祀るが、島そのものには固有名が見られない。

池の遺構と違い、築山は削平された場合は検出が不可能になるので、断定はできないが、いくつかの遺構の発掘成果から推定すると下記のことが言える。数字は島の水平幅と垂直高（池底から頂点まで）の比である。

飛鳥京跡苑池遺構 20) の南池内で検出された中島は細長い十字に近い形で「とんぼ型」と呼ばれ、築山は想定されていない。敷地の幅が狭く、あまり高い山は物理的に造成が不可能である（図 49）。

平城宮東院庭園 23) 上層園池時代の中島についてみると、その幅は東西 10m、南北 8m、最も狭い幅で 4.65m①、中島の高さは池底から 50cm②、水平：垂直比は①：②としても 1：0.11 である²⁰⁹（図 50）。また、北岸の石組みの水平：垂直比は 1：0.2 である²¹⁰（図 51）。

平等院庭園 33) の中島には壮麗な建物が建ったのであるが、北魏の華林園（洛陽）のよ

うな山上の僊人館とは違い、島は低平で水面に近い高さで建てられている（図 52）²¹¹。

毛越寺庭園 36) の大泉ヶ池のうち池中立石の立つ中島（出島）は、立石を正面に見る時の幅が 14.5m、立石を通る最小幅が 10m、平均幅 12.3m①、立石頂点が池底から 3.5m②、①：②の水平：垂直比は 1：0.28 である（図 53）。大きい方の中島は、12 世紀 1 期目の形状が西北西-東南東方向の長軸が 35m、南北最大 21m、平均 28m①、中島周囲の池底からの高さ最大 1.3m②であり①：②の水平：垂直比は 1：0.05 である（図 54）²¹²。

鳥羽離宮庭園 35) の北殿の庭園遺構には二つの島があり、一つは最大幅 18m、池底からの高さ 1mで、水平：垂直比は 1：0.06 である。二つ目は東西 42m以上、南北最大幅 15m①、池底からの高さ 1.1m②で水平：垂直比は①：②をとっても 1：0.07 である²¹³。

以上、7 例を見ても、水平：垂直比は 1：0.05～0.28 の間である。正倉院南倉の「仮山」は長径 87cm①、短径 45cm、径平均 66cm、高さ 31cm②で、水平：垂直比は①：②をとっても 1：0.46 であることから、「仮山」の約二分の一の高さということになり、低平なものが多いことがわかる。

これらのことから、わが国で「島」をつくるときに、屹立する山岳の景であった蓬莱三山や須弥山を意識したとは考えにくい。大陸の島は「山」を主体としていたが、わが国では山にはこだわらなかったのではないか。その違いはやはり国土の違いからくる風景観の違いだったと考えられる。

第 3 項 「島」の意味と「州浜」との不可分性

（1）国としての「島」—『古事記』

倉野憲司校注『古事記』²¹⁴をテキストとして古代の人々の「島」の概念やイメージを探ってみたところ、「シマ」は多くの個所で「クニ」と密接に関係して使われており、またそれぞれの「シマ」には島名とは別の名前がある。その「シマ」と「クニ」そして「名」の一覧が（表 6）である。一例を上げると、伊邪那岐命と伊邪那美命の二神が御合をして「生める子は、^{あわぢ}淡道の^ほ穂の^{さわけの}狭別島。次に伊^い豫^よの二名^{ふたな}の島を生みき。この島は、^み身一つにして^{おも}面四つあり。^{おもごと}面毎に名あり。故、伊^{かれ}豫^{いよ}國は^{えひめ}愛比賣と謂ひ、讃^{さぬきの}岐國は^{いひよりひこ}飯依比古と謂ひ、栗^{あはの}國は^{おおげ}大宜

都^つ比^ひ賣^めと謂ひ、土^と佐^さ國^のは建^{たけ}依^{より}別^{わけ}と謂ふ」²¹⁵（下線筆者）とあり、「島」は神々から生まれた子であり、それぞれ名を持っている。

全文中「シマ」は28箇所用いられ、漢字は「志麻」「斯麻」「嶋」「州」が当てられている。また「クニ」は「シマ」に付随または独立して用いられ、漢字は「久爾」「土」「國」「邦」が当てられている。

概観してみると「シマ」は海に囲まれた陸地、「クニ」はそこに存在する何らかの共同体のようなものと考えられる。したがって「シマ」は国土そのものである。国土のすべてが「シマ」の集まり、「シマ」で構成されていることも、日本列島をよく表している。そして「シマ」には「愛比賣」「飯依比古」などの名があり、「クニ」がなくても神々の子の名が与えられていることから、古代の人々は「シマ」そのもの、厳密に言えば土地そのものに神格があると考えていたと推測される。その島の神、土地の神は人や共同体以前にあつて、岡田精司は「即位儀礼としての八十島祭」の中で「古代の人々は「クニ」を治めるには、その土地の神を掌握する必要があると考えていた。その土地の神のことを「^{くにだま}国魂」と言い、土地の精霊のことである」²¹⁶と述べている。この説によれば「愛比賣」「飯依比古」などは島の精霊の名とすることができるであろう。

注目すべきは伊邪那岐命と伊邪那美命の島生み（国生み）が一段落したところの「既に國を生み^を竟へて」²¹⁷の一文である。太安万侶の序文には「土^{くに}を孕み島を産みし時を識り」²¹⁸とあり、本文の伊邪那美命の一連の島を産むくだりでは「この^{やしま}八島を^{きき}先に生めるによりて、大八島國と謂ふ。」²¹⁹といった表現になり、最後には「既に國を生み竟へて」²²⁰となっており（引用文下線筆者）、この変化はそのまま「島」と「國」の同一性、あるいは変転を示していると考えられ、このことから「島」と「國」の不可分な関係性がわかる。

一方、「ニワ」の用例を拾ってみると、第1章1節のとおり、「堅庭」が固い地面、「庭津日神、庭高津日神」が屋敷を照らす日の神、「沙庭」は忌み清めた祭場及び^{きにわ}審神者の意、「^{おおにわ}大廷」も同じく祭場、「^{やにわ}家庭」は人家の庭である。出現数は少ないが、ここには現代も見られる「ニワ」の要素・用法が既に全部現れている。即ち、平たい地面、神事や祭事のための広場、住

宅や建物に付随する庭、の三つである。しかし、次節で述べるように『萬葉集』には新たに「ニワ」を「シマ」と言う用例が現れる。

（２）庭としての「島」―『萬葉集』

『萬葉集』は宝亀 11 年（780）の完成、収集された和歌で最も古いのは仁徳天皇（313～399 年在位）の皇后磐姫^{いわひめ}の御製がある。雄略天皇（456～479 年在位）の御製が最も多く、4 世紀～8 世紀のわが国の風景、情景を反映していると見ることができる。庭園を詠んだ歌も多く、前述の蘇我馬子邸は後に朝廷が接收し、持統天皇邸、草壁皇子邸として使用され、「嶋宮」と呼ばれた。その草壁皇子の亡き後、嶋宮を詠んだ歌が 15 首ある。

島の宮　勾^{まがり}の池^{はな}の放ち鳥　人目に戀ひて池に潜^{なづ}かず（朱鳥 3 年（689）頃）

み立たしの　島の荒磯を今見れば　生ひざりし草生ひにけるかも（同上）²²¹

等である（引用文（ ）内は筆者加筆）。島、池、水鳥、庭の主をなくして生い茂る草の情景であり、この庭園の所在は未だ特定されていないが、自然風の庭園風景を想像させる内容である。特筆すべきは庭園全体を指して「シマ」を用いている例があり、

妹として　二人作りしわが山齋^{しま}は　木高く繁くなりけるかも（神亀 5 年（728））

鴛鴦の住む　君がこの山齋今日見れば　馬酔木の花も咲きにけるかも（天平宝字 2 年（758）頃）²²²

等の用例である（引用文（ ）内は筆者加筆）。「シマ」には「島」「嶋」の他「山齋」の漢字が当てられている。

この時代、庭園全体を「シマ」ということについてはいくつかの見解がある。『広辞苑』は【島・嶋】の項で「泉水、築山などのある庭園。林泉」と同時に「ある限られた地域。界限。」²²³を挙げており、中村一は『風景をつくる』で「シマ」を縄文時代の生活圏としてのイメージであり、それは環境そのものであり、庭園はこれを縮図にし、一定の柵や垣で囲んだ空間であることを庭園をさした理由として挙げている²²⁴。また共著の尼崎博正は同書で神

仙島などを表現した島が庭園の主景となることから、「島が庭園の存在理由であったのでは」²²⁵と考えている²²⁶。また岸俊男によると「山齋」の表記は厳密には園内の亭を指し、中島の亭では写経が行われることがあった²²⁷。『続日本紀』には「内嶋院」「嶋院」の記録があり（表4-214、231）、これにあたる。このことは中島が聖性を持っていたことを示すと考えられる。

（3）「島」と「州浜」の不可分性—『作庭記』

平安時代後期の11世紀になると、池を掘り、中島をつくり、「海の景」を表す²²⁸ことが作庭の主流となっており（表3年表）、この頃に成立したとされる『作庭記』のなかの「島」を拾い出し分析したところ、「島」は「州浜」と密接に関係して用いられていることがわかった。『作庭記』は作庭の専門書であり、そこに記述された「島」は庭園の構成要素としての「島」である。

萩原義雄『日本庭園学の源流『作庭記』における日本語研究』²²⁹によれば「しま」が1例、「嶋」が14例、「島」が2例の17例である。当時用いられていた漢字はほかに「之万」「壘」「洲」「嶼」等があるという。『作庭記』で注目したいのは「シマ」が「州浜」に変化あるいは「州浜」と混在する点である。「嶋姿の様々をいふ事 山嶋、野嶋、杜嶋、礪嶋、雲形、洲濱形、片流、干潟、松皮等也」²³⁰（引用文下線筆者）と「洲濱」の他に「すわま」「すはま」の表記があり²³¹、また形状として「片流れ様」「干潟様」「松皮様」があげられている。

「島」のひとつの形態として「州浜」が挙げられているのである。上原敬二は『造園大辞典』の【島】の項で山に鳥が飛来する象形の「壘」の字を挙げ「もともと海中の山を島と称した、水上に出るものとして山形をするものにかぎる、低平では時に満潮では冠水する、多くの場合かかるものを州または^{てい}低と呼んだ（引用文下線筆者）」²³²としており、山形なら島、低平なら州と区別しているが、萩原は杜嶋と礪嶋だけに「島」が当てられたことに注目し、「当代（『作庭記』が著された時代）における「島」の文字は、海中や水中に浮かぶ陸地を表現する語であり、俗字である「嶋」字の方が幅広い意味で用いられていたものといえよう」²³³と述べている（引用文（ ）内筆者加筆）。これらの研究から『作庭記』の著者は「嶋」の字を用いて山形をするものから州浜までを「嶋姿」いわば島のバリエーションとし、「島」の

一形態として「州浜」を取り上げたと考えられる。

第4節 庭園の国風化とそのモチーフ

第1項 東院庭園にみる国風化

和同3年（710）に平城京遷都が行われ奈良時代になると飛鳥時代の直線的な護岸の造形からは一線を画し、柔らかい曲線の汀や緩やかな勾配をもつ州浜の園池が造られるようになった。その遷移がみられる遺構が和同3年（710）頃から延暦3年（784）頃まで造営され、長岡京遷都とともに廃絶する平城宮の東院庭園である。奈良文化財研究所による発掘調査によって、下層園池の下から最下層園池が検出された。このため最下層園池時代を「前期」、下層園池時代を「中期」、上層園池時代を「後期」とも言う。（図24）からわかるように、前期の最下層園池の形は直線からなる隅丸逆L字型で、護岸は玉石積みの垂直部と玉石貼りの勾配部および石積みのない部分を有していた。これにより造営が始まった時点では明日香村で多く確認されている半島系の方形・垂直石積み護岸の園池だったことが判明したのである。その後の改修により、中期にあたる養老4年（720）頃から神護景雲元年（767）頃までの間に汀線に出入りがつけられ出島ができる。池は浅くなり護岸は州浜になった。給水として蛇行する石張りの溝が、また排水側にも同様の意匠の蛇行する溝がつけられた（下層園池）。さらに2度目の改修が後期となる神護景雲元年（767）頃から行われ、中島ができ、護岸から建物が張り出し橋が架けられ、築山と岬の石組みがなされ、池底は全面礫石敷、池の全周が州浜となった（上層園池）。延暦3年（784）頃長岡京遷都により廃絶した²³⁴。

この庭園では、飛鳥時代と違って緩やかな勾配を持つ「州浜」が用いられ、自然風景を彷彿とさせるものである。同様の州浜の意匠は左京三条二坊宮跡庭園などの奈良時代の多くの庭園で採用され、平安時代に受け継がれていく。それはわが国の自然風景の中でもとくに親しみのある「島」と「州浜」であったからこそ、当時の人々に素直に受け入れられたのではないだろうか。さらに「州浜」にはかつて祭祀が行われていた神聖な場という記憶が内在しており、また「島」はそれぞれ神格を持っており、両者があいまって「国土」としてのイ

メージをも形成していたと考えられるのである。その一例として古代の難波とそこで行われていた「八十島祭」^{やそしまさい}を以下に取り上げる。

第2項 国風庭園のモチーフとしての難波津

「大八洲」^{おおやしま}（日本列島）の古称として「八十島」^{やそしま}がある。八は「数が多い」の意で、島がたくさんある、との意味であるが、地名として使われていたものの一つに現在の大阪一帯にあたる「八十島」がある。かつてこの一帯では「八十島祭」が行われていた。「八十島祭」とは、平安時代から鎌倉時代にかけて行われていた天皇の即位儀礼のひとつである。天皇の代替わりがあったときに、大嘗祭の翌年に一代一度執行された。また古代難波宮があったところでもある。その詳細は先ごろ出版された栄原永遠男・高島幸次『古代なにわの輝き』²³⁵に詳しい。以下に同『古代なにわの輝き』、八十島祭を研究した岡田精司の「即位儀礼としての八十島祭」²³⁶田中卓「八十島祭の研究」²³⁷等を参考文献としてその概略を示す。

高島らによると、八十島祭は記録上は『江家次第』^{ごうけしだい}²³⁸及び『文徳天皇実録』の嘉祥3年（850）（平安時代）に初出するが（表4-908）、新たに始めたとの記載ではない。岡田によるとこれ以前から行われていたと考えられ、祭祀において女官の役割が大きく古いシャーマニズムを色濃く残していることから、5世紀に遡る可能性もあるとされる²³⁹。少なくとも400年に渡って実施され、最後の記録は元仁元年（1224）（鎌倉時代）で、以降は廃絶している。神亀2年（725）に聖武天皇が大嘗祭後に難波に行幸した記録などがこの八十島祭ではないかと考えられている。

式次第の概略は、まず大量の供物を用意し、新天皇、女官らの100人近い一行が難波津に向かう。到着すると浜に祭壇を設け、女官が琴を弾く。御衣^{おんぞ}が入った箱のふたを開け、揺り動かして衣に浜風を受ける。この衣は都に帰って後に天皇が身につけるものである。禊のあと多量の供物を海に投じて都に帰るというものである。この祭祀の目的については三つの説があり、一つは新天皇の禊・祓いであるとの説。二つ目は陰陽道に基づき天皇の災厄を人形に移して水に流す「難波の祓い」の一種としている。三つ目の岡田説は「大八洲の御霊」

を新天皇の衣に付着せしめ、全国土の支配者としての資格を得るものとしている。この説はよく知られており、支配者がその地域を完全に領有するためには、土地の精霊（国魂）をしつかりと掌握しなければならぬと信じられていたので、天皇が日本全土に君臨する為には、「大八洲の霊」を着けている必要があった²⁴⁰、というものである。実際、この祭祀の祭神は、現在でも皇室が宮中に祀っている宮中八座のうちの二座である生島神・足島神（一対）であり、『古語拾遺』に「生島。是大八洲ノ霊。」²⁴¹とある（下線筆者）。古代難波宮の所在地である上町台地北端にあった生國魂神社（大阪城築城の際に遷宮）の祭神がこの二神である²⁴²。後年、住吉大社によって実施場所が変更せられ、それに伴い祭神も住吉大社関連の祭神に変化した。

祭祀が行われた場所は田中卓によると「難波津の熊河尻」「河尻の島々（田蓑島、幣島^{なでじま}）」である。または現在の淀川の河口という言い方ができる。『住吉大神宮年中行事』に「八十嶋祭、難波河尻の嶋々に於いてこれを行わせらる。河尻とは淀川の下流なり。河中に嶋多く、田蓑島・御幣島の如き、皆これなり」とあるとのことである²⁴³。また高島によると『袖中抄』²⁴⁴には「八十島巡り」という表現があり、特定の島を指すのではなく一帯の島々を指した可能性もあるとのことである。本来の場所は上記の如くであるが、平安時代末期に住吉社により実施場所を住吉代家浜に変更された。

現在の大阪の都市の位置はこの難波津—古代大阪湾の海上にあたる。かつては生駒山脈付近まで水面があり、河内湾であった。最新の研究によると、北側から淀川の三角州が発達し、大和川との堆積作用で陸地化が進み、江戸時代までは池（淡水化した潟湖）も残っていたが、最後は干拓により完全に陸地化した。現在の上町台地の東側には江戸時代まで河内湾・河内潟が広がっていたのである。「浪華古図」（図 55 原典は東が上、北が左に描かれているものを北を上にして掲載した）は承徳 2 年（1098）に作成された大阪湾の地図を明治 41 年（1888）に模写したと伝わる図である。上町台地の東は潟湖がほぼ陸地化、西は大阪湾が砂堆化していく途上と見える。このような成り立ちの大阪には、中島、福島、池島などの「島」がつく地名が現在でも無数に残る。また「江」や「津」、「浜」も多く、河岸であっても「浜」

という。その実態は「海上に盛り上がる、あるいは突き出る陸地」ではなく、海中に見え隠れしながら次第に大きくなる州浜に近い砂州、砂堆である。まさに「島」と「州浜」が混在する風景である。そして飛鳥時代の7世紀、上町台地の北端に難波宮（難波長柄豊碕宮^{なにわながらとよさきのみや}）があった。

古代の難波には古くは5世紀から都がおかれた。応神、仁徳、履中、反正天皇、いわゆる河内政権が大阪平野南部に基盤をおいていたもので、墓群も大阪平野に築造された。百舌古市古墳群である。高島幸次²⁴⁵も、この頃から八十島祭の原型が始まったと見ている²⁴⁶。

大化元年（645）、大化の改新により政権は飛鳥から難波に遷都する。難波宮の造営はそれ以前から行われており、34年間使用し、天智朝6年（667）に近江大津に遷都した。これが前期難波宮である。その後白鳳元年（672）に壬申の乱が起こり飛鳥浄御原に遷都した。この時代、天武天皇は複都制を推奨していた。和同3年（710）、奈良平城宮に遷都し奈良時代が幕を開ける。神亀元年（724）に即位した聖武天皇は奈良時代を開いた天武天皇を追慕してよく難波に行幸し、天平4年（732）頃、難波宮を再興する。これが後期難波宮である。

天応元年（781）に桓武天皇が即位すると難波宮は延暦3年（784）～同5年（786）にかけて解体され、長岡京に移築され、延暦12年（793）には都は廃止された。都、貿易港としての難波津の最盛期は5世紀から7世紀の間であり、八十島祭が史料に初出する嘉祥3年（850）にはすでに廃れており、祭祀の形式だけが受け継がれていたとされている。

これらの研究で注目されるのは次の三点である。第一に聖武天皇は難波に思い入れがあったこと、第二に聖武天皇が難波への行幸を繰り返した頃に平城宮では東院庭園の改修を行っていること、第三に難波で行われた祭祀の祭神を、現在でも皇室が宮中に祀っていることである。

奈良に遷都後、平城宮東院庭園において比較的単純な逆L型であった最下層園池を改修したのは養老4年（720）頃から神護景雲元年（767）頃と見られ（中期下層園池）（図24右上）、この時期の神亀元年（724）に聖武天皇が即位している。聖武天皇は先述の如く天平4年（732）頃から難波宮の再興を始めている。この時期、東院の園池は汀線に出入りがつけ

られ、水深も浅くなり、州浜がつくられ始める。その用途が未確定となっている「蛇行溝」がつくられたのもこの時期である。退位は天平咸宝元年（749）である。その後の改修工事は神護景雲元年（767）頃から延暦3年（784）頃の間である（後期上層園池）（図24右下）。一方、難波宮は同年（784）から同5年（786）にかけて解体されて長岡京に移築され、長岡京遷都とともに平城宮東院庭園も廃絶となった（表7）。

以上のように、聖武天皇の即位と難波宮再興の時期は、東院庭園の改修が行われた下層園池の時期と重なること、及び前述のように聖武天皇は難波に思い入れがあり東院庭園の改修の際には難波津の原風景があったことから、具体的には東院庭園の州浜のモチーフとして、当時の難波津を想定するものである。

この一帯は難波津のほか難波江、難波浦などと呼ばれていた。船が行き交うその風景とは、州浜とも島ともつかぬ陸地と水面が複雑に入り組んだ模様である。積もりはじめた砂堆が島となり、海面の上下によって姿を現したり沈んだりする。その様子はあたかも国土が出来上がっていく過程のように感じられ、国土生成の象徴のような場所でもあったと考えられる。そこに祀られていた神（生島・足島神）は現在でも宮中にも祀られていることから、当時の政権や後年の皇室が重要視していたことは明らかであり、後の時代まで天皇の即位儀礼が行われるステイタスの高い親水空間であったと考えられる。

第5節 古代庭園の「島」と「州浜」にみるアニミズム

飛鳥時代以降、庭園が祭祀の目的を離れ、鑑賞や饗宴、慰安を主たる目的とする庭園化が進むと、かつての祭祀の記憶を持つ「流れ」は平安時代の寝殿造庭園や浄土式庭園に見られるような「遣水」となり、その造形は受け継がれながらも「海の景としての池と島」が主役になっていく。この池と島を縁取る形で奈良時代に顕在化した州浜は、平安時代になると平等院庭園をはじめとして庭園を特徴づける意匠として多くの庭園につくられた。これらの造形のモチーフの原点は何であったのか。それはやはりわが国の地形が生む独特の自然の風景であろう。日本列島の急峻な地形によって雨水は急流となり、平野部に降りて沿岸まで

くると州浜をつくる。それは国土が生成する過程の風景そのものであり、古代の人々にとっては「島」と「州浜」は、明確に区別してもちいるものではなく、日本国の古称が「大八洲・大八島」であることから、どちらも国土のイメージを持っていたのではないかと考えられる。「洲」の字は「水中に砂が高くもりあがってできた島」とあり²⁴⁷、「州」の字は「洲」の書き変え字で「川に囲まれた中州を象った字」であり、古代中国でもこの字は行政区や「くに」を表す²⁴⁸。古代から近世にかけての難波津のように、州浜は国土が形成されていくイメージを彷彿とさせる。そこでは祭祀が行われ、ある程度陸地化すると中島となり、中島となれば人も住み、国の一部となった。また州浜や中島は、海路に直結する交通の要衝ともなり、経済的に重要な場でもあったと言える。そして「島」には古来より神格があつて、その國魂を祀ることは「政^{まつりごと}」としても重要だった。現代まで皇室が宮中に八十島祭の祭神（生島、足島＝大八洲の御霊）を祀っていることからその一端が窺える。古墳時代から政権や後の宮中の庭に「島」や「州浜・石敷」がつくられてきたのは、それゆえではないだろうか。

『古事記』のはじめに、

故、二柱の神、天の浮橋^{あめ うきはし}に立たして、その沼矛^{ぬぼこ}を指し下ろして畫きたまへば、鹽^かこをろこをろに畫き鳴^{か な}して引き上げたまふ時、その矛の末より垂^{ほこ}り落^{したた}つる鹽^お、累^{しお}なり積^{かさ}もりて島と成りき。²⁴⁹

とある。この描写は海中に州浜や島ができる様子を実に素朴に神話の中に映している。「州浜」は「島台」（図 56）となって慶事に添えられ、州浜紋とよばれる文様にもなり（図 57 左）、天皇だけが着用できる「黄櫨染御袍^{こうろぜんのごほう}」にも織りこまれ（図 57 右）、即位式にはこの装束が用いられる²⁵⁰。これらのことから「州浜」は吉祥のモチーフであり、その理由は土地が（国土が）広がってゆく場であることと関連があるのかもしれない。

「なにわ」の語に込められていたものは何だったのか。『日本書紀』神武天皇の条には神日本磐余彦天皇（後の神武天皇）が東征し、九州から瀬戸内海を通過して現在の大阪に至ったときのことを記してこうある。

方に難波碕まさ なにわさきに到るときに、奔き潮有はや なみりて太だ急はなは はやきに会あひぬ。因りて、名けて浪速国なづ なみはやのくにとす。亦浪花またなみはな いと曰ふ。今、難波なにわ いと謂ふは訛よこなまれるなり。²⁵¹

もとは「なみはや（浪速）」「なみはな（浪花）」だったが、訛って「なにわ」になったとし、書紀自体が「なにわ」を採用している。高島らによると他に「なにわ」には「なみにわ（波庭）」「なにわ（魚庭）」等の諸説がある²⁵²。難波の字にとらわれずに音に注目すれば、「な」と「にわ」である。「にわ」はやはり太古に斎場であったところの「にわ」「さにわ」と同義と考えられる。「なにわ」は、当時の政権が神託を受けてまつりごとを行う朝廷としての「にわ」であり、その風景は「島」とも「州浜」とも呼ばれ、祭祀と為政の両面をあわせ持つ聖なる親水空間である。平城宮東院庭園の二度の改修には、この「島」と「州浜」の難波津の風景が原風景としてあり、池と州浜のモチーフとなった可能性がある。「島」と「州浜」が織り成すその風景には、太古より島の神を祀り、祭祀を行った古いアニミズムの記憶も織り込まれていると考える。

第3章 『作庭記』の底流にあるアニミズム

—立石を中心に²⁵³—

第1節 本章の目的、方法

はじめに、「アニミズム」という語は19世紀にE. B. タイラー (1832-1917) が『原始文化』(1871) において提唱したもので、タイラーはこれをもって宗教の起源であるとした。ラテン語のAnima (靈魂) を語源とし、「精霊信仰」²⁵⁴などと訳されており、「あらゆる自然界の事物に靈魂が宿るという原始的な世界観」²⁵⁵と説明されている。この「アニミズム」は宗教だけでなく現在では民俗学や文化人類学、心理学などの多分野で研究されている。

わが国はこのアニミズムの傾向の強い文化を有しているとも言われておりその特徴は、温暖湿潤な気候により自然界の恩恵が多く、自然を人間と対立するものではなく共生するものととらえ、あらゆるもの(土地、山、森、建物、道具など)に靈的なものを感じる感性が育ったことにあるとされ²⁵⁶、この「日本的アニミズム」と言われる研究には以下のようなものがある。

柳田國男、桜井徳太郎、宮田登、高取正男らはカミ観念、カミ信仰などを取り上げ民俗学的アプローチを行った²⁵⁷。梅原猛は文明史的観点から日本の仏教や神道のベースに自然と共生する視点に立つ日本的アニミズムがあるとする²⁵⁸。また『古事記』に描かれた日本の神話に見るように、わが国では自然界のいろいろなものに神が宿る、言い換えると靈が宿っており、このような世界観は後の神道につながっていると考えられている。岩田慶治はアニミズムとは古代の信仰ではなく、一人ひとりの直感を通しての神との出会いであって、そこに自然との共生が生れてくると述べ²⁵⁹、岩田の説はネオアニミズム論として知られる。

一方造園の分野では、重森三玲が磐座・神池を日本庭園の造形の源流とする見解を示しており、アニミズムとの関連を示唆するものとして注目される²⁶⁰。これが数少ないアニミズムと庭園の先行研究であったのであるが、昭和の後半から平成にかけて、日本各地で遺跡の発掘が行われ、古墳時代から縄文時代にまでさかのぼる祭祀場の遺構が相次いで検出された。

これらの祭祀のために造形された場合は、後の時代の庭園の造形によく似ていることから「ニワ状遺構」と呼ばれ、その意匠や技術は奈良時代へと続く造園意匠と技術の源流とみられるようになった。そこには飛鳥時代以前の人々の造形が観られるのである。

ここで第1章、第2章で検証してきたことを振り返ると、縄文時代後期半ばから飛鳥時代にかけて造形が行われた水辺の祭祀空間の主な構成要素は、「湧水点」から引く「流れ」、その水流の護岸としての「州浜」または「石敷」、そして要所の「立石や石組」である。

「流れ」は弥生時代や飛鳥時代には石で溝状に整形された遺構として検出された例もある。湧水点は井戸であることもある。

「州浜」は祭祀の場そのものであり、ここで聖水を汲み、禊ぎや祓い、ときには呪いをかけることが行われた。流れに手がとどくよう、または歩いて入水できるようにするために浅く緩い勾配でつくられている。水に降りる石段を設けた遺構もある。このような形で「流れ」と「州浜」は聖なる親水空間を形成していたと言える。

そしてニワ状遺構で水際に臨んで立てられているのが石である。縄文時代の矢瀬遺跡では立石や配石が検出された。弥生時代の池上曾根遺跡、下市瀬遺跡、六大A遺跡、藤江別所遺跡、纏向遺跡では検出されていない。古墳時代に入った屋代遺跡、城之越遺跡、阪原阪戸遺跡では再び検出されるようになり、飛鳥時代には幾何学的な意匠と加工された石造品が現れ、奈良時代の庭園遺構である平城宮東院庭園や平城京左京三条二坊宮跡庭園には再び自然石の立石や石組が検出されており、その意匠は平安時代以降の毛越寺庭園などにつながっていると考えられる。

これらの石による造形のうち、湧水点の背後に屏風状に立てられた石や水に降りる階段になっている石については機能的側面の利用と考えられる。しかし流れに臨んで屹立する石、あるいは岸边に一群となって据えられた石組などには機能性以外の何らかの意味があったと考えられるがその目的や具体的なことは不明である。前述の重森の説のように、「磐座」や「磐境」として石そのものを祀ることは、保久良神社をはじめとする上古の神社において行われており²⁶¹、天白磐座遺跡（古墳時代）のような山頂の大岩の下で祭祀が行われて

いた遺構もあることから、本章では同じ祭祀空間であるニワ状遺構の意匠を受け継いだ日本庭園の立石に着目し、平安時代後期（11 世紀後半）に成立した『作庭記』を読むことによってアニミズムとの関係を検証する。

第 2 節 『作庭記』と石に関わる表現―「靈石」、「三尊仏の石」

第 1 項 『作庭記』の作者と年代、その流布²⁶²

『作庭記』は平安時代に成立したとみられている日本最古、ひいては世界最古の作庭書である。成立年代や著者については、外山英策の室町時代の偽作説²⁶³や木村三郎の鎌倉初期成立説²⁶⁴があるものの、現在は平安時代後期に修理大夫という役職にあった橘俊綱(1028-1094)が編纂したものという説が有力となっている。

『作庭記』は成立以来、秘伝、秘書とされ、大量に流布した書物ではないが、江戸時代に塙保己一が編纂した『群書類従』によって存在が知られており、明治になって活字版が出た。

『作庭記』という書名は塙保己一が付けたもので、それ以前の写本では『前栽秘抄』『造庭之書』『庭作秘伝書』『後京極殿作庭記』等、または無題である²⁶⁵。

飛田範夫によると写本は谷村家のほか国会図書館、宮内庁書陵部、京都大学等 12 箇所に所蔵されており²⁶⁶、このうち谷村家本は幕末まで前田家にあったもので、明治以降行方がわからなくなっていたものが発見され、昭和 11 年(1936)に国宝の指定を受け、同 13 年(1938)に貴重図書出版会から複製本が出されたことから多くの研究者の目に触れるようになり研究が活発になった。

その内容は作庭の際の心得に始まり、当時の建築様式である寝殿造建築に対応した庭園の地割、池の作り方、遣水の通し方、中島、州浜、泉、滝石組、植栽、立石等の指南書であり、極めて実践的な記述の一方で陰陽五行説や言い伝え、迷信の類までが援用されている。とくに石を立てることに関する記述が滝石組を含めて半分近くに及ぶ(谷村家本の全 793 行中 332 行²⁶⁷)。また本書では庭をつくることを「石をたてんこと」と表記しており、作庭において石立が最重要であるとの当時の認識が窺える。

第2項 「靈石」と「三尊仏の石」および禁忌

『作庭記』中にあらわれるアニミズムに関わると思われる石に関する名称は「靈石」と「三尊仏の石」の二つである。「靈石」という名称は三箇所に見られる。

ひとつ
一もと立てたる石をふせ、もと伏せたる石をたつる也。かくのこときしつれはその石
かならず靈石となりてたたりをなすへし²⁶⁸

一高さ四五尺になりぬる石を丑寅方に立つへからず、或いは靈石となり、魔縁入来のた
よりとなるゆへに（後略）²⁶⁹

一靈石は自高峯丸はし下せとも落立る所に不違本座席也、（後略）²⁷⁰

このように「靈石」は通常は障りない石が、作庭において据え方を誤ったり、方角が不適切である場合に「祟る石」になるものと説かれている。同様に祟りをなす石を「石神」と記述した箇所が一箇所あり、諸国にその例があるとする²⁷¹。

山若河辺に本ある石も其姿をえつれは必石神となりて成崇事国々おほし、（後略）²⁷²

「三尊仏の石」という名称も三箇所に使われている。初出は

三尊仏の石はたち、品文字の石はふす常事也。²⁷³

というくだりで造形について述べている。

興味深いのは前述の「靈石」の祟りを封じるために「三尊仏の石」を据える方法が記されていることで、残る二箇所はこれにあたる。本書には多くの禁忌が記されており、

石をたつるにはおほくの禁忌あり、ひとつもこれを犯つれはあるし常に病ありて、つひに命をうしなひ、所の荒廢して必鬼神のすみかとなるへしといへり。²⁷⁴

とある。全二十八箇条の禁忌のうちの十八箇条が石に関わるものである。この中にはその方法（祟りを避ける方法）²⁷⁵が記されており、

高さ四、五尺になりぬる石を丑寅方に立へからず、或は靈石となり、或魔縁入來のたよりとなるゆへに、その所に人の住することひさしからず、但、未申方に三尊仏のいしをたてむかへつれはたたりをなさず、魔縁いりきたらさるへし。²⁷⁶

というものである。また、

ふるきところにをのつからたたりなす石なんとあれはその石を剋するいろの石をたてまわしへつれはたたりをなす事なしといへり、又、三尊仏の立石をとをくたてむかふへしといへり²⁷⁷

という方法もある。

このように『作庭記』に現れる「靈石」のイメージは「崇るもの」である。それを避けるために多くの禁忌や回避の方法を伴っていることは当時の人々が石に対して「畏れ」の感情を持っていたことの表れと考えられる。

第3節 「乞はんにしたかひて」の解釈

『作庭記』には、前節の石の名称の他に、アニミズムに関わると思われる「こはん（こはむ、乞）」という語が以下のように6回現れる。

- ① その石のこはんをかきりとすへし
- ② その石のこはんにしたかひて波うちの石を
- ③ その石のこはんにしたかひてたてくたすへし
- ④ その石のこはむほとを多も少もたつへき也
- ⑤ その石のこはんにしたかひて立へき也
- ⑥ 奥石をはその石の乞にしたかひてたつるなり

(①～⑥)²⁷⁸

この語の解釈の経緯を振り返ってみると現在は概ね「碁盤説」「乞はん説」「小半説」の三

つに分類できる。

最初に登場する「碁盤説」は碁盤の目にしたがって配石するというもので、龍居松之助²⁷⁹、江山正美²⁸⁰がこの説を取っている。これは江戸時代までの写本には濁点が記載されず、そのことは江戸時代の『群書類従』も同様であるが、明治になって活字になった際には濁点が振られて「ごばん」とされ²⁸¹、このことに影響をうけたものと考えられる。活字化されたときに「ごばん」となった理由は不明であるが、龍居松之助が「ごばん」としている理由について田中正大は『嵯峨流庭古法秘伝之書』（室町時代）に碁盤の目の中に描かれた庭の図があり、こういったものが助けとなって碁盤としたのではないかと推測している²⁸²。田中の推測を裏付けるように龍居はこの碁盤の目の図を自身が編集した『日本造庭法秘伝』²⁸³の中の「嵯峨流庭古法秘伝之書」に納めている（図 58）。

解釈に大きな転機が訪れるのは昭和 11 年（1936）に谷村家本が国宝の指定を受け、同 13 年（1938）に複製本が出たことによる。昭和 13 年に谷村家蔵本の複製本が出て以降は森蘊をはじめとする「乞はん説」が主流となっていく。この説は石が「乞う（請う）」と解釈するもので、大きく二つの論調に集約できる。一つは森蘊²⁸⁴ 田村剛²⁸⁵ 田中正大²⁸⁷ 武居二郎²⁸⁸らによる「石の心」「石の気持ち」という語を用いて石から汲み取る造形的なバランスのとり方を表現しているとするものである（以下この項の各著述者の引用文を（表 8）に掲載）²⁸⁹。また、近藤公夫は仏教学者の言葉を借りて「石心」という語で比較的人格に近い表現をしており²⁹⁰、英語訳でも石を主語とする動詞に訳している²⁹¹。

もう一つは作庭者側の態度や能力に帰すもので齊藤勝雄²⁹²、オギユスタン・ベルク²⁹³、山本学治²⁹⁴、水尾比呂氏²⁹⁵、久恒秀治²⁹⁶、木村三郎²⁹⁷、飛田範夫²⁹⁸、尼崎博正²⁹⁹がこの説をとる。このうち作庭の現場に立てばわかるとするのが先の田村剛、尼崎博正、飛田範夫である。さらに飛田は「この言葉にはさらに深い意味がある」として現場における作庭者の臨機応変な対応を「こはんにしたがふ」ことであるとしている。

また、国語学者の萩原義雄は「人的請うではなく自然の請う」³⁰⁰であるとする。いずれも石を擬人化した表現で技術論を説いていると見ている。

これらとは異なる視点からの解釈として「小半説」がある。「小半説」は石の大きさを考慮した石組みの技法とみるもので、3回目(③)の前行に「よき石の半はかりひきおとりたるをよせたてて」とあることから①～⑤を石の大きさの説明とする説である。

針ヶ谷鐘吉は『作庭記』中の「こはん」の意義についてにおいて①～⑤を「小半」、⑥を「色」とする³⁰¹。また上原敬二は『解説 山水並に野形図・作庭記』において①～③小半 ④拒む ⑤小半 ⑥乞／氣としている³⁰²。なかでも(擬人化)は釈然としないので小半説をとると言いながら、④については「拒む」としており、石が拒むのならこれも擬人化表現と言える。また「乞」は「氣」ではないかと考え、石から立ち上がる強い靈氣を想定していることは注目される。

以上、「石が乞う」ことについて「石の心」「石の気持ち」などの丁寧な解釈も含めて「擬人化」が根底にあると言えよう。

第4節 日本のアニミズム

『作庭記』には「石のこはんにしたかひて」の他にも「左右のわき石よせたてむに、おもひあう事なくは無益なり」³⁰³、「にくる石(逃げる石)をふ石(追う石)」³⁰⁴という表現、あるいは山を帝王、水を臣下、石を補佐の臣に例えるくだり³⁰⁵や「たとへは童部のとてうく(繰返し記号)ひひくめとといふたはふれをしたるかことし」³⁰⁶と子供たちの遊んでいる情景に例えるといった擬人化表現がある。

心理学の分野ではJ.ピアジェ(1896-1980)が子どもの心理の発達段階でみられる自然観を「擬人観」とした。ピアジェはこの「擬人観」をアニミズムと呼び³⁰⁷、この学説は現在でも心理学分野の研究で引用されている³⁰⁸。

『作庭記』には他に「野筋の石はむら犬のふせるかことし、豕むらのはしりちれるかことし、小牛の母にたはふれたるかことし。」³⁰⁹のように、石をムク犬や牛の親子にたとえる箇所があり、無機物である石にまるで命があるかのような躍動感が感ぜられる。動物の擬人化表現もまた当時すでにわが国に伝わっていた『大唐西域記』(7世紀成立)の仏教説話「兔

王本生譚」は狐と猿と兎が善行を積むうちに、兎が自分の身を火に投げうって痩せた老人（帝釈天の化身）に供する話であり、平安時代末期成立の『今昔物語』（12世紀前半頃）にも動物の擬人化表現が見られる。絵画では『鳥獣人物戯画』（1157-1179年頃）がよく知られている。

辻惟男は日本美術全般の特色として「かざり」「遊び」「日本的アニミズム」があり、縄文土器の蛇（水を司る神）、聖なる樹木に化現する立木仏、『御伽草子』のつくも神（器物の精霊）や「百鬼夜行図」を挙げるとともに近世のアニミストとして伊藤若冲、葛飾北斎、現代の棟方志功を挙げている³¹⁰。また『鳥獣人物戯画』については直接アニミズムとの関連を述べていないが、評論集『あそびとアニミズムの美術』³¹¹の一つに「鳥獣戯画とをこ絵」を納めている。このように辻も「擬人化」とアニミズムが深い関係にあるとみていることがわかる。

こうしたことから『作庭記』の「石のこはんにしたかひて」という擬人化表現には平安時代の作庭においてニワ状遺構の立石の意匠を継承するとともに、「霊石」「三尊仏の石」とあわせてその根底にアニミズ的な要素を内包していると言えよう。

本章の冒頭に触れたとおり、「アニミズム Animism」はタイラー (E. B. Tylor 1832-1917) が『原始文化』(1871)において提唱したラテン語の Anima（霊魂）を語源とする世界各地にある精霊^{せいれい}信仰のことである。彼は「古代の未開な哲学者が「人間は「生命」と「幻影」の二つを有し、この両者が身体を介して結合したものが「霊魂」「Spiritual beings—霊的存在であり、それは自然物にも宿る」と考えた」と推測し、これをもって宗教の起源であるとした³¹²。タイラー以後はマレット (R. R. Marett 1866-1943) の「アニマティズム」などの提唱があり、現在この語はかなり広義に用いられ、宗教学、民俗学、心理学、文化人類学や比較文化学、などの多方面で研究が行われている³¹³。樹木や岩、風、太陽、月、星、動物などに精霊が宿っており、不思議な力をもって人々に関わってくると信じられる信仰であり、このように自然物に人格や神格のようなものを与えることは古代の神話によく見られ、ギリシャ神話には太陽神アポロンや大地の女神ガイアや美の女神アフロディーテ、酒の神バッカ

スなどが人間さながらに登場する。アイルランドもまた自然神と精霊にまつわる伝承の多い国であり³¹⁴、ケルト神話には日本神話との共通性が指摘されている。このような神話や民間伝承に見られる世界観もアニミズムとされ「精霊信仰」「有霊観」「擬人観」「物活観」などとも訳されている。心理学の分野では J. ピアジェ（1896-1980）が子供の心理の発達段階でみられる自然観を「アニミズム」と呼び邦訳では「擬人観」となっている³¹⁵。幼い子供は動くものを「生きている」、動かないものを「死んでいる」ととらえ、太陽や月は生きている、電車やバスも生きているととらえる。やや年齢が上がると、自力で動くものと他動的に動くものを区別するようになり、電車やバスは人が動かしていることが分かるようになる。植物や動物の命あるもの、即ち生命体とそうでないものの区別がつくようになるのはまだ先である³¹⁶。この幼児・児童のアニミズムに関するピアジェの学説は現在でも心理学の分野で検証されながら引用されており³¹⁷、本章で述べた古代の人々の「擬人観」を考察するうえで注目される研究である。このような擬人観は太古の人々も同様に持ち合わせていたであろうことは想像に難くないからである。特に天から注がれる雨水が河川を下って大海にそそぐ水の流れはまさに生き物のようでもあり、生命・農耕と密接に関連することは、当時の人々の暮らしの中に最も重要な存在としてあったであろう。

第1節にあげたように、わが国では柳田國男・桜井徳太郎・宮田登・高取正男らによるカミ観念、カミ信仰などの民俗学的なアプローチによる研究の他、梅原猛のように「日本の仏教や神道のベースには自然と共生する視点に立つ日本のアニミズムがある」といった文明論的な捉え方、これは西洋的な「自然は人間によって克服されるもの、神が人間の利用に供するためにつくられたもの」という世界観が多くの自然破壊や地球環境の悪化を招いているという見方への反省から論じられている³¹⁸。また岩田慶治は「カミ」を探して東南アジアやアフリカの奥地を訪ねた後、自身の禅的な体験を通して「アニミズムは自然の中から突出してくるものである。人間はそれにぶつかり、ぶつかったときにカミを感じる。」「ほんとうは、アニミズムという外国語を使わずに、カミ信仰、ないし日本人のカミ信仰と言いたいのであるが、・・・」と言う。岩田は日本の神道の源流にあるものをアニミズムと考えている

ことがわかる。そしてそのような啓示を、岩田はほかならぬ自宅の庭で得たのである³¹⁹。庭とはそのように、思索する者に啓示をひらく空間なのであろうか。神霊をまつ空間の遺伝子が働くのであろうか、禪者が庭を造って瞑想や修行の場とした理由がここにもあるのかもしれない。

日本列島は温暖湿潤な気候により自然界の恩恵が多く、最新の研究では 1 万年続いた縄文時代は狩猟と移動の文明ではなく、狩猟・採集の定住文明であったことがわかってきている³²⁰。日本列島の太古の人々は稲作農耕以前から栗を植林し、海の幸を得ることで定住生活が可能だったとされている。おそらくはその自然の恵み多き暮らしの中から、自然を人間と対立するものではなく共生するものととらえ、あらゆるもの（土地、山、岩、森、建物、道具・・）に霊的なものを感じる感性が育った。その日本の飛鳥時代に渡来した「仏教」は釈迦が啓いたインド発祥の宗教である。インドではその後ヒンズー教がひろまり、仏教は弟子たちの継承と伝播の歴史のなかで小乗仏教に変化した。これは修行した者だけが極楽へ行くという考えである。中西進によれば、大陸では天台宗仏教学が道教思想を取り入れて「人は誰でも往生できる。動物も山川草木も皆成仏する」と唱えたが中国には定着しなかった。それがわが国では親鸞らによって広範な大乘仏教となって定着した³²¹。このことについては仏教が伝来する以前に土着の信仰としてあったわが国のアニミズムが受け入れ基盤になったと考えられており、そのアニミズムを色濃く残しているのが神道であると言われている³²²。仏教伝来後も現代にいたるまで、このアニミズムそのものとも評される神道が信仰されていることは、正月の初もうでに始まる暮らしの中に、日本各地の様々な行事と共同体のなかに、また皇室の存在として、日本的アニミズムの一面をなしていると言えよう。

本論文ではこのような仏教伝来以前のわが国に古くからあった国土や風景、水や樹木や岩石や山岳といった自然物のみならず竈や井戸、屋敷や道具にも霊性一言い換えると神をみてきた自然観、世界観、またそのような自然崇拝を基調とする素朴な信仰を「日本的アニミズム」として論考をすすめることにする。

結章 古代日本庭園の底流にあるもの—日本的アニミズム

第1節 「ニワ」の祭祀的性格

第1項 「ニワ」という広場

序章第4節で触れたように、「ニワ」は元来祭式儀礼の場であり、そうした場は一定の広さで広場として保たれていたのである。そこでは神託を伺う、あるいはその神託の臣下への伝達、儀式や饗宴が行われ、そのための施設は必要に応じて仮設的に設けられた。『古事記』の「天皇御琴をひ控かして建内宿禰の大臣、沙庭に居て、神の命を請ひき。」(表 4-12) は 4 世紀の神功皇后が熊襲征伐に向かう際、屯宮(仮宮)での様子であるが、神功皇后が神がかりする際に琴が出されていること、建内宿禰はニワ(沙庭)に居ることがわかる。この最も原初的なニワ空間の姿を最も永くとどめていると考えられるのが宮城のニワであると考えられる。(図 59～63) の赤線で示した場であり、朝堂院の中央の広場が「朝庭」「南庭」等と呼ばれ、祭式儀礼の際に官人列立し、饗宴の際には芸能が繰り広げられた。時代、古記録によって同一場所の異称があり、宮城の規模が大きくなるにつれ「東庭」「東苑」「南苑」のような記載だけでは場所が特定できない場合もあるが、下記に各時代の六国史にみられる記事から行事の内容とその実施場所が推定できる記事をいくつか挙げると次のようなものがある。

まず(図 60)にて、小墾田宮(603 年～)で宮門を入ると大殿の一段手前に朝堂があり、空間が設けられている。前期難波宮(難波長柄豊碕宮 645-686(焼亡))では『日本書紀』の天武天皇 2 年に、「九月癸丑朔庚辰、饗金承元等於難波、奏種々樂、賜物各有差。」「金承元等に難波に饗あえたまふ。種々の樂うたまひを奏す。物賜ふこと各差しな有り。」³²³ (表 4-86) とあり、宮城内の場所は明記されていないが難波宮で外国使節を饗応した記事であり、(図 60) の赤線枠(筆者加筆)で行われたものと推定できる。

次に藤原宮(694-709)を見てみよう。文武天皇の慶雲 3 年(706)『続日本紀』に「三年春正月丙子朔。天皇御大極殿受朝。新羅使金儒吉等在列。朝廷儀衛有異於常。」(表 4-105)

の記事あり、「春正月一日 天皇は大極殿に出御して朝賀を受けられた。新羅使・金儒吉らも列席した。そのため朝廷の儀仗兵は通常と異なるところがあった（人数も増し、丁重に行われる）。（中略） 正月七日 金儒吉たちを朝堂で饗応し、諸国（唐・百済・新羅・高麗など）の音楽を朝堂の庭で奏した。使者をはじめ列席者に位を授けたり、それぞれに応じた物を賜わった。」³²⁴ と宇治谷孟は現代語訳しており、「朝堂の庭」が存在し、そこで外国の使節も列席して朝賀が行われ、別の日を選んで饗応があり、朝堂の庭で音楽が奏でられた、即ち芸能を伴っていたことがわかる。（図 60）を見ると藤原宮の中枢部大極殿の南に朝堂院があることから（赤線枠内）、この朝堂院の庭であることがわかる。正月元日の朝賀と宴は毎年恒例である。

奈良時代に入った平城宮（710-794）では淳仁天皇の天平宝字 3 年（759）「乙酉。帝臨軒。（中略）饗五位已上。及蕃客。并主典已上於朝堂。作女樂於舞臺。奏内教坊踏歌於庭。客主典殿已上次之。事畢賜綿各有差。」（表 4-196）の記事があり、「正月十八日、帝は宮殿の端近くに出られ、（中略）五位以上の官人と高麗の使人、ならびに主典以上を朝堂で饗応し、舞臺で女人による楽を演じさせ、庭では内教坊の女性が踏歌を舞った。高麗の使人や主典以上の者もこれにつづいた。」³²⁵ との内容である。平城宮での饗応に朝堂院が使われたこと、また舞臺が設けられ楽と舞の芸能が披露されたことがわかる（図 60、61）。「踏歌」は古くからあった呪術的な芸能で、人々が大地を踏みつけながら歌を歌う行事である（後述）。「内教坊」は朝廷内に設けられていた舞踏家を育成する部署であり現在の宮内庁楽部のようなものと言えよう。芸能は単なる余興ではなく、行事の遂行に必要な重要な要素であったこともわかる。平城宮の朝庭部では 5 時期にわたる大嘗宮遺構も検出されており元正・聖武・淳仁・光仁・桓武天皇の大嘗祭跡に比定されている³²⁶。このように宮城のニワは芸能のニワでもあったことがわかる。

一方、長岡宮（784-794）では桓武天皇が延暦 7 年（788）に祈雨（雨乞い）を行った記事がある。「四月癸巳。自去冬不雨。既經五箇月。灌溉已竭。公私望斷。是日早朝。天皇沐浴。出庭親祈焉。有頃。天闇雲合。雨降滂沱。群臣莫不舞踏稱万歳。因賜五位以上御衾及衣。咸

以爲。聖徳至誠。祈請所感焉。」(表 4-255)とあり、「四月十六日 去年の冬から雨が降らず、すでに五ヵ月がたった。灌漑の水はすでにつきはてて、公私ともに人々はみな望みを断たれていた。この日の早朝に天皇は沐浴し、庭に出て自ら降雨を祈念された。すると、しばらくして空が暗くなり雲が集まってきて、雨が滂沱と降った。群臣らは舞い踊り喜んで、万歳を叫ばないものはいなかった。(後略)」³²⁷ との内容である。この時代にはすでに神社が祭祀の執行を担っており、祈雨(雨乞い)はほとんどが神社で行われているが、これは天皇自身が宮城のニワで行った記事である。この時のニワが朝堂院なのか内裏内庭なのかは不明であるが(図 60)、いずれにしてもこのことは平安時代の始めまで宮城のニワが神に祈る場、祭祀の場としての性格を残していたことを示している。

平安遷都後の平安宮(794-1868)の時代には、陽成天皇の元慶6年(882)に記事があり、「正月己未(十六日)、踏歌^{とうか}の節。天皇。紫宸殿に御して宴を侍臣に賜ひ、雅楽、音楽を奏し、宮人の踏歌常のごとく、禄を賜ふ差ありき(図 60、図 62、表 4-1427) との内容であり、前述の平城宮では朝堂で観覧した踏歌を、この時代には紫宸殿で観覧していることがわかる。紫宸殿前の空地でこの頃には年中行事となっていた踏歌の楽と舞が披露されたのである。

このような広場のような空間、ある意味で最も原初的なニワ空間は第1章の造形を伴う水辺の祭祀場にあっても確保されているし、地方豪族の首長クラスの館や祭祀場にもあったと推定されている。そしてかなり時代が下った平安時代後期にも、寝殿造り建築に対応した庭園の一部として寝殿前に確保され、謁見や饗宴の際に利用されたことは『作庭記』に明らかである。『作庭記』は地割りの際の具体的な数字をあげている。

南庭ををく事は階隱の外のはしらより、池の汀にいたるまで六七丈、若内裏儀式ならは八九丈にもをよふへし、拝礼事用意あるへきゆへ也、但一町の家南面にいけをほらん、庭を八九丈をかは池の心いくはくならさらん歟、よくく用意あるへし、堂社などには四五丈も難あるへからず。」³²⁸

とあり、内裏だけでなく、寺社や住宅の南庭の広さも敷地に合わせて指示されており、原初のニワは庭園の重要な一部として残されていたのである。このことから祭祀のニワが祭式儀礼の場として平安時代後期にも残っていたことがわかる。

また宮城内の朝堂や紫宸殿前などの他に、踏歌の翌日には「庚申（十七日）、建禮門前に射禮じやらいを行ひき。勅して公卿を遣りて事を行はしめ給ひき。」³²⁹（図 63、表 4-1428）との記事が毎年あり、「射」じや（弓を射る行事）は建禮門前などが使用されことがわかる。「射」や「観馬」は時代により使用場所が変わっており、朝堂院、朱雀門付近だけでなく、馬の牽き回しなどには左右馬寮が使用せられ、大蔵省なども利用されている。このことは「射」や「観馬」は祭祀的な行事というよりは軍事教練的な性格のものであったことを示すと考えられる。

平安時代に入ると、平安宮には豊楽殿ぶらくでんができ、弘仁儀式の改定以降は饗宴を伴う行事がおこなわれた。また元来は天皇の私的空間であった内裏内にも行事の記録がみられるようになる。上記の例を見ても平城宮時代の淳仁天皇が朝堂で行った踏歌節会を平安宮時代の陽成天皇は紫宸殿で観覧している。このように、次第に内裏内で行事がおこなわれることが増えているのは、天皇親政だった奈良時代から、やがて藤原氏を筆頭とする貴族の政務分担が増え、天皇が奥まっていたことと関係していると考えられる。この変遷については山下信一郎が天皇の日常政務の場が大極殿から内裏内に移行したとする議論、奈良時代末期に皇后や后が内裏内に居住するようになり、後宮が成立したとみられる内裏空間の変遷論等をあげ、平安宮内裏において宮廷文化が華やかに発展したことを論じている³³⁰。このように、殿前には空地が確保されており、様々な行事が行われたことがわかる。

第2項 宮城のニワの文化的営み—行事と節会

第1項でもっとも原初のニワに近いと考えられる宮城のニワが空地として確保されており、そこでどのような行事が行われたのかという利用形態を『古事記』および『日本書紀』から後に続く六国史の全文を通読してニワ、庭園に関するとみられる記事を拾い出し（表 4）に一覧にした。そこに現れている祭式儀礼や年中行事について、倉林正次『饗宴の研究』、折口信夫『折口信夫全集』、山中裕『平安朝の年中行事』、大日方克己『古代国家と年中行事』

を参照した結果、唐風に装われた祭式儀礼の底流にわが国の土着的な要素が垣間見えることと、空間の特性とも言えるものがわかってきた。また時代が下るにつれ、貴族文化の隆盛を反映し、ニワが様々な季節の行事の舞台となったことは明らかである。ニワ状遺構や庭園での営みである利用形態については、古墳時代、飛鳥時代頃までの遺構については出土品や出土の状況などから、場の目的や祭祀の執行方法等が復元されている³³¹。ただし、飛鳥時代の祭祀については解明されていない部分も多い。文字に残された記録が少ないこともある。奈良時代以降は『日本書紀』『令儀解』などをはじめとする古記録が増えることから、ある程度推定されている³³²。ひらがなの使用が始まった平安時代以降は、貴族が残した日記や文学作品に祭式儀礼の様子や季節に応じた詩歌管弦を伴う遊びの空間としても当時の庭園のありようを窺うことができ先行研究も多い³³³。また絵巻物に表された場合には具体的なイメージを知ることができる³³⁴。しかし、これらの利用形態の「祭祀」という視点から考察した研究は民俗学分野の研究³³⁵に負うところが大きいようである。また文献調査の常として、文献上の初見が初回とは限らない、また記載がない場合に行われなかったとは限らない、とくに六国史のような正史には私的におこなわれた場合に記載されないことがあることを念頭に置いておく必要がある。

『古事記』にみえる神代の時代には祭祀そのものが共同体を治める政治であり、そのような祭政一致の時代は長く続いたのであるが、飛鳥時代（7世紀）に飛鳥浄御原令（681年）が制定され、「神祇官」が天神地祇を祀る祭祀を統括することとなり、祭祀の多くは神社で行われるようになったと考えられる。わが国に古くからあった天神地祇を祀ることは、5～7世紀にかけての仏教流入後も途絶えることなく続けられていたのである（仏教伝来は538年とされる）。制定された律令においても「かむながらのみち」として仏教より上位におかれていた。『日本書紀』には垂仁天皇の頃（3世紀頃）からそれまで天皇の居所とともに移動していた天照大神が伊勢に鎮座する記事が見え始め（表4-41）、この頃に仏教建築に触発されて神社の建築様式が整ったと考えられている。六国史には「祈雨」すなわち「雨乞い」及び「止雨」の記事が頻繁に現れるが、初見の記事（日本書紀 持統天皇 朱鳥7年（693））

(表 4-95) でもすでに諸社に使いをだして、神社に依頼している。桓武天皇が長岡宮で行ったのが最後ではないだろうか。また宮城内にはいくつかの社がありその神事は行われていた。しかし純然たる神事は宮城内神社の園そのからかみ 韓神社などの祭祀以外は殆ど記録されなくなったと言ってよいかと思う。網伸也も、森蘊、牛川喜幸の説を引きながら、祭祀そのものは神社・寺院に移行したとみている³³⁶。

天皇が行っていた祭祀の多くが神社に移ったあと、宮城に残された機能は第一に政務である。また、六国史には外交使節の謁見および饗応と、儀式化した年中行事が記録されている。この饗応と宴の機能がニワに残されたため、ニワは鑑賞性、言い換えると修景性を高めながら庭園に発展していったと考えられる(図 66)。ニワに残された行事の多くは平安時代桓武天皇ごろからは「節会(せちえ)」として記録されている。またこの頃から『弘仁式』『内裏式』などの儀式書が編まれるようになった。臨時の行事としては天皇の代替わりの際の即位式、および大嘗祭があることは言うまでもない。六国史及び『栄花物語』によって平安時代後期までをたどると、宮城ではおもに以下のような行事が行われていた。

<正月と盆>

宮城の年中行事として代表的なもののうち、唐の行事がわが国に伝わったことを契機に行事化されたものがいくつかあり、まずは新年元旦の「朝賀」であるが、朝賀は『続日本紀』聖武天皇神亀4年(727)に「廢朝。雨也。」(表 4-115)とあるのが初見で、これ以降毎年の年頭に記載されている(表 4 では大部分省略)。庭上で官人が列立して行われるため雨天、雪などの場合は中止される。この朝賀は堂上での2回の宴と一体であるが、朝賀は中止されても宴は開かれる(表 4-170、175、784、791 他多数)。元旦に宴、二日に朝賀という年もあり、両方が中止されるのは諒闇などの特別な場合である。この実態から倉林は、もともとわが国に七日の宴が古代習俗としてあり、庭で神祭りをを行い、場を替えて行う直会なおらい(宴)の方が重要であったのが実情と見ている。朝賀の場は大極殿、平安中期には清涼殿東庭での四方拝、宴の場は奈良時代聖武朝では中宮、朝庭、平安中期には後宮、東宮で行われ、庭ではうたまひのつかさ雅楽寮による楽・舞を奏した。尚、「宴」は現代で言う単なる宴会ではなく、神を迎えて

行うもので祭祀同然であり、わが国の楽や舞は神事に付随するものである（後述）。同じく正月行事の**白馬（あおうま）節会**は正月七日の行事である。『続日本紀』仁明天皇承和元年（834）に「青馬」として初出する。天皇は豊樂殿ぶらくでん、南殿に御し、馬を紫宸殿南庭を通して清涼殿東庭に進み庭中で馬を引き回す。平安時代村上朝で記載は白馬となるが読みはアヲウマである。青馬は大陸由来の習俗であるが、後に白馬になったのはやはりわが国の神馬行事が元にあったものと倉林はみている。山中は白馬はわが国では神馬であり、白馬を観ることに主眼があったものと述べている。したがって正月の馬の行事は神事に近いものであったと言えよう。これに加えて筆者は神馬を牽き回すことで庭を祓う（清める）のも主旨のひとつと考える³³⁷。

仏教由来の行事である「**盂蘭盆会（うらぼんえ）**」は『日本書紀』斉明天皇白雉5年（645）に飛鳥寺の西に須弥山を造っているのが初見とみられる（表 4-76）。これに先立ち推古天皇14年（606）に「設齋」（表 4-65）のことが見えている。奈良時代以降は7月に行われた。後世の盂蘭盆会は仏教儀礼がわが国の祖霊迎いの信仰と季節の収穫祭とが一体化したものと考えられている。「朝賀」「白馬節会」「盂蘭盆会」などは外来の風習を取り込み行事となったものであるが、そこには「宴」「神馬」「祖霊信仰」といった行事を取り込む以前にわが国にあった土着的な行事の姿が垣間見える。いずれも神（霊）と関わる。このことは古くからやはり宮城内外の祀りのニワでなんらかの形で既に行われていたものと考えられる。

<呪術的な行事>

呪術的とも言える行事が正月行事となった「踏歌」、7月の「相撲」、大晦日の「追儺」である。**踏歌**は正月十六日の節会となっており、大陸の唐では正月十五～十七日に行われていた。『日本書紀』持統天皇朱鳥7年（694）に「漢人、踏歌あやひと あられはしりつかへまつ奏る」（表 4-96）とあるのが初見である。大地を踏みつけながら歌を歌う行事である。渡来人である「漢人」が歌舞したことから、大陸の習俗であったことがわかる。淳仁朝には外国使節を迎えて開催し、後に女踏歌、男踏歌となり、女踏歌は江戸時代まで残った。記事を見ると大陸由来と考えられるが、倉林によると実態はわが国にもすでにあった「歌垣」で、このことは『日本書紀』天武朝に

闇夜の踏歌の記事もあり、『続日本紀』聖武天皇天平6年の記事にも「歌垣」として見えている（表 4-134）。桓武天皇はこの歌垣を禁止し踏歌節会を儀式化した。歌垣は宇多朝で復活し、平安時代を通じて行われている（表 4）。宮中では朱雀門付近、前殿、紫宸殿南庭で行われているが、市中全体で賑わった祭りのようであることは『源氏物語初音巻』にも描かれている。折口は大地を踏みつけながら歌うのは凶悪な大地の霊を服属・退散させる呪術的な行為であるとみている³³⁸。歌「うた」は「うつ」＝土地の精霊を鎮める意である³³⁹。踏歌は江戸時代まで続き、宮中御神楽にもつながったとみられており、踏歌が現代まで伝わっていると考えられるのが宮中の神楽、熱田、住吉、鹿島の踏歌祭である（折口）。踏歌は民俗色の濃い、土俗的な行事であったと言えよう。また踏歌のために芸能を司る専任の部署があったことは前述のとおりである。

7月の相撲節（すまいのせち）の起源は古く、わが国では古墳時代の5～6世紀に力士埴輪がつくられている。『日本書紀』皇極天皇1年（642）「（秋七月の）乙亥に、百済の使人大佐平知積等に朝に饗たまふ。（中略）乃ち健児に命せて、翹岐が前に相撲らしむ。」³⁴⁰（表 4-69）が初見であるが、『古事記』にも相撲人と同じ特徴（赤顔、^{とくびこん}犢鼻褌）の人物（海幸彦）が見える。聖武朝で国家儀礼となった。もとは正月行事であったが七月七日の節会となった。一か月前に^{すまいのつかさ}相撲司が任命され、親王が別当を務める（表 4-1516、1517）。諸国から^{すまいひと}相撲人が集められ、上洛の道中は特権が付与されたので、のちに相撲人を出す家柄は固定化した。飛鳥時代、奈良時代にかけては官外（西槻木の下等（表 4-89））で行い、天平10年（738）は大蔵省で行われている（表 4-149）。平安時代は紫宸殿前、建礼門前、仁寿殿東庭で行われ、のち神泉苑で行うようになった。天皇が出御して乱声（らんじょう）、取組み20番、取組み終わって南苑で舞、酒宴・雑芸の宴となる。なお、童相撲というものがあり、小さい人（身長4尺以下）は呪術的な力を持つものとされ、陰陽師とつながっており、相撲節に関与した。

大日方によると、この力士の起源は北東アジア、半島一帯に共通のものと見られ、高句麗古墳壁画に描かれていること、列島では古墳に力士埴輪が納められていること、682年に槻

木の下で大隅隼人と阿多隼人の取組をした力士が天武天皇崩御の際に殯に奉仕していることから、本来は鎮魂、葬送儀礼に奉仕する人々ではないかと考えられている。また、力比べ、外来勢力の服属というイメージが加わり、国家行事になったと推測している³⁴¹。12 世紀の後白河院政期に宮中では廃絶し現代ではスポーツとなっているが、天覧相撲が本来の姿であった。もう一つが**追儼（儼）**である。追儼（儼、大儼）は『続日本紀』文武天皇慶雲 3 年（706）に「是年。天下諸國疫疾。百姓多死。始作土牛大儼。」「この年、全国で疫病がはやり、人民が多く死んだので、初めて土牛を作って追儼（十二月晦日の悪鬼払い）の行事をおこなった。」³⁴²（表 4-108）とあり、以後、年中行事化し、毎年大晦日に行われた。この時天皇は南殿に出御し、方相、倭子、親王以下の諸臣がみんなで鬼を追う。鬼は疫病のもとである。その次第は、参加者に桃弓、葦矢を頒給し、面をつける。陰陽師が齋郎を率いて**奠祭**（てんさい）を行う。祭文を読み上げ疫鬼に対して 5 色の宝物と海山の味物を給うので日本から出ていくように申す。方相が儼声をあげて盾を 3 回撃ち群臣が唱和して四門から追い出す。門を出たところで京職に引継ぎ、鼓を打って城郭外に追い出す、というものである。大日方によると中国から伝わった行事であるが、祭文が読み上げられることは中国・半島になく、わが国では穢れを祓う清浄化であることがわかる³⁴³。この夜、近衛・兵衛は京中を巡検して悪鬼が出ていく際の怪異現象を確認して元旦に報告することになっていた。高さ 2 尺の土牛童子像を作ることもそのまま引き継がれたとされる。

踏歌（歌垣）、相撲はわが国に古くからあった行事である。歌垣が大地を踏みつけるのは悪霊を鎮めるものと考えられており、大日方によれば相撲もまた本来は鎮魂の行事である。儼が鬼（悪霊）を追う払うものであるように、いずれも呪術的な風習が年中行事化したものである。

<季節の行事>

呪術的なものとは違い、季節ごとの行事である「端午の節」「重陽の節」「花の宴」などがあり、五月五日の**端午の節**では菖蒲を身に着ける。身につけないと宮中に入れなかった。高温多湿に向かう時節柄、薬草である菖蒲で祓いを行うものと考えられている。飛鳥時代推古

朝に菓獵（菓草採集）のことがあり、聖武朝で獵騎となり儀式化した。菓草採集に馬で行ったことから騎射、走馬、などの行事も同時に行われている。秋の九月九日**重陽の節**は『日本書紀』天武天皇 白鳳 14 年（686）「九月甲辰朔壬子、天皇宴于舊宮安殿之庭。」（表 4-91）とあり旧宮安殿の庭で宴をおこなった記事が初見として見えている。これを平城天皇は大和 2 年（807）に神泉苑で（表 4-391）、淳和天皇は天長 8 年（831）に紫宸殿で行っている（表 4-625）。また、平安時代には「菊花の宴」となり、文人に詩を読ませて華やかにひらかれた。

特に**花の宴**については『日本後紀』弘仁 3 年（812）に「二月辛丑。幸神泉苑。覽花樹。命文人賦詩。賜綿有差。花宴之節始於此矣。」とあり、嵯峨天皇が神泉苑で花樹を觀覽して文人に詩を作らせており、これが「花宴の節の始り」（表 4-440）と記されている。また『続日本後紀』仁明天皇承和 12 年（845）に「二月戊寅朔。天皇御紫宸殿。賜侍臣酒。於是。攀殿前之梅花。挿皇太子及侍臣等頭。以爲宴樂。」（表 4-796）とあり「二月戊寅朔 天皇が紫宸殿に出御して、侍臣に酒を賜わった。ここにおいて殿前の梅花を折りとり、皇太子および侍臣らの頭に挿し、酒宴の楽しみとした。」との内容で、内裏における花の宴（梅）の初見である。内裏での花宴としてはこの梅宴や重陽節会の菊花の宴のほかに藤の花の宴（御溝水付近）、菖蒲の節句（藤壺）、菖蒲の根合わせ（州浜の泥中）などがあげられる³⁴⁴。いずれも詩歌管弦、律呂舞などの芸能を伴っている。また平安宮には神泉苑が隣接しており、同様の多くの行事が神泉苑で行われた（表 4）。これらはわが国の気候風土にあわせた風習が唐風に行事化されたものと言えよう。またこれらの記事からは、当時の宮城に植栽されていた樹種を知ることができる。奈良時代の平城宮の東院には植栽を伴う庭園（東院庭園）があり、アカマツ、ヒノキ、ウメ、モモ、センダン、アラカシの植物遺体が検出され、このほかヤナギ類、サクラ、ツバキ、ツツジなどの花木が考えられている³⁴⁵。また平城宮には松林苑、佐紀池などの禁苑が隣接していた。平安宮内では紫宸殿の前庭に右近の橘、左近の桜があり、この桜は元は梅だったのであり、承和 12 年の記事はその梅を手折って鑑賞したものと考えられている。河原武敏によると平安宮の清涼殿東庭には「御溝水」、「呉竹台」、「河竹台」が

あった。このことは、清涼殿前に一定のひろさの空地がニワとして必要であったため、植栽や遣水・池などはやや簡素化されていたことをうかがわせる。

尚、森蘊によれば承和年間（834～847）以降の内裏内庭には「水石庭」があり、鎌倉時代には御溝水の型式となったが、寛永年間（1624～1643）に復活している³⁴⁶（寛永年間京都御所の小御所）。

上記の他に一月の^{ねのひ}子日の宴、御薪献上（みかまぎけんじょう）、四月^{みづのひ}灌仏会（仏教行事）、二月、八月の孔子を祀る^{せきてん}釈奠（儒教行事）などがあり、七月の^{きつこうてん}乞巧奠は詩を読む行事であったが後に七夕祭と同化した。八月十五夜の月宴（観月祭）も時代が下るとともに「前栽合わせ」といったあそびとともに盛大に行われた（『栄花物語』村上天皇康保3年（966）於清涼殿東庭）。平安時代にはこれらの行事が庭園の様子とともに日記や文学作品に現われており、いずれも屋内ではなく屋外であるニワで行われたものである。

<農耕神事—新嘗祭・大嘗祭>

^{にいなめさい}新嘗祭は米の収穫を終えて行われる現代まで続く宮中行事である。天皇がその年の新穀を召しあがり五穀豊穰を祈念する。全国各地から献上品があり、「^{くすそう}国栖奏」などの各地の舞が披露される。各地の舞が舞われるのは地方豪族の服属を示すものと考えられる（後述）。天皇の代替わりのあった年に^{だいじょうさい}行われる大嘗祭（おほにえのみつり）に於いては庭中に悠紀殿・主基殿などの施設が設けられ4日間にわたってこれらの舞・楽などの芸能が繰り広げられる。農耕神事の頂点にあるものと言えよう。同時にそのための空間がニワであった。現代も同様であり、宮城のニワで行われる行事の最たるものであろう。

<軍事教練>

射礼（じゃらい）は踏歌の翌日十七日の行事である。『日本書紀』天武天皇 白鳳 13 年（685）「天皇、東庭に御す。群卿侍り。時に、能く射ふ人及び侏儒・左右舍人等を召して射はしむ。」³⁴⁷（原文表 4-90）とあり天武朝以降毎年おこなわれた。浄御原宮では西門、南門、藤原宮では大極殿南門、平城宮では大極殿閤門、平安宮では建礼門前の大庭、武徳殿にて行われた。天武以前の清寧から天智朝までは天皇と諸藩・官人間の礼的秩序という性格がある

が、基本的には前述のように軍事教練の一部と考えられる。

射（じゃ）については正月のほか五月五日にもあり、そのほかにも行事が多い。天皇が最初に射るのは弓場始めだけで、以外は武人が射る。また射に賭け事をする「賭弓（のりゆみ）」は非公式に遊興または年占としておこなわれたようである。

＜曲水の宴＞

曲水の宴（ごくすいのえん）は『日本書紀』顕宗天皇 顕宗1年を初出とする三月三日の行事である（表 4-62）宮中または禁苑で行われたと考えられるが、実際に流水施設をとまなうのかどうかは不明である。平安時代にはいと貴族の邸宅³⁴⁸でも行われたが実態については議論がある（第2章参照）。

奈良時代平城宮には北側に松林苑と佐紀池があった。いずれも宮城の禁苑とみなされている。『続日本紀』聖武天皇神亀5年（728）「三月三日 天皇は鳥池（宮城近くにいくつかの池があった）の堤に出御し、五位以上の官人を宴に招き、身分に応じて禄を賜わった。また文人を召して、曲水の宴を催し詩を作らせた。」³⁴⁹（表 4-123）とある「鳥池」が「佐紀池」ではないかとみられている。また「曲水の宴」の記載が8か所にある。松林苑については「松林宮」または「松林」の記載で天平2年（730）、天平10年（738）、天平17年（745）に幸（行幸）、宴の記事が見えることから水辺の祭祀がおこなわれたことも考えられる。ただしこの「曲水の宴」については元来が三月三日の祓いの行事であり、本来は自然河川のほとりで毎年場所を変えて行われるものであった³⁵⁰ことから、先に述べたようにその実像をめぐってはいくつかの異論がある。

平安宮は貞観1年（976）に焼亡し、その後、再建と焼亡を繰り返す。天皇は里内裏に住まうことが多くなり、その多くは皇后の実家である貴族の邸宅であり、里内裏が準内裏として拡充された。京都市埋蔵文化財研究所の発掘調査によると10世紀以降は寝殿造り建築に対応した庭園が様式化したとみられ³⁵¹、藤原兼通邸（堀河殿）、高陽院、東三条殿などで節会の伝統を持つ行事、貴族社会の風雅な催しの舞台として活用されている。その後は大炊御門殿、土御門殿と続き、後鳥羽天皇の建久3年（1192）に鎌倉幕府が成立。後堀河天皇安貞1

年（1227）の火災後はしばらく再建されず、光明天皇延元 3 年（1336）に土御門東洞院殿を内裏とし、現在の京都御所となっている。飛鳥時代まで天皇の代替わりとあわせて遷都を行っていたことを考えると、内裏が転々とするのは特別なことではなく、むしろ、京都盆地内に幕末までとどまっていたことは京都がいかに皇都にふさわしい土地であったかを示しているのであろう。

このようにニワでおこなれた行事を六国史から抽出してみると、記録に多く残されたのは儀式化した年中行事である。これらの行事の多くは、倉林、山中、大日方とも、もともとわが国にあった「宴」が唐風化されて「節会」として儀式化されたものと見ている。山中は「はじめに宴があり、それが複雑になるにつれて、あるものは節会となってゆく。（中略）では、その宴と節会の実際上の区別は何にあるか。それはやはり明確にこれという区別はない。」³⁵²（下線筆者）と述べていることから、実態としてはわが国古来の慣習が形を整えて受け継がれていたとみてよいのであろう。わが国に古来からあった宴は天平 7 年（735）に吉備真備が唐礼 130 卷を持ち帰ってから唐風化儀式化がすすんだものであるが、嵯峨朝をピークにその後は国情に合わせて宇多天皇のころから国風化が始まり、朝賀のような儀式も有名無実化したのである。また、神社に移行したと思われる祭祀に較べると、より土俗的で神事とまではいかないような行事がニワに残されたこともうかがえる。

<宴と饗>

六国史には「宴」と「饗」の記事が頻繁に現れる。行事の後には必ずといってよいほど宴がある。行事がなくても「宴」はある。あまりに多いので（表 4）では多くを割愛したが、六国史をみると「三月丁亥。天皇御松林宮。宴五位以上。引文章生等令賦曲水。」（天平 2 年（730））（表 4-131）とあるように、「宴（とよのあかり、うたげ）」は宮中の侍臣や親族（皇族）、いわば身内と行うものである。このわが国の「宴」は単なる宴会ではなく、ほとんど神事に近いものであることを折口、倉林、大日方が指摘している。やはりその場に神を迎えて行うのである。

一方の「饗」は「あえ」と読み、外交使節やよしみを通じようとする遠来の部族を「饗す

る（あえする）」ものであり、現代で言う「おもてなし」である³⁵³。また服属や同盟を示す政治的な意味合いも持つ。六国史の記載例としては「癸卯。天皇御南苑宴侍臣。饗百官及渤海客於朝堂。五位已上賜摺衣。」（天平 12 年（740））（表 4-151、下線筆者）などがある。この記事では宴の関係者と饗の関係者が分けて記載されており、他にも「七年春正月戊午朔。天皇御中宮宴侍臣。又饗五位已上於朝堂。」（天平 7 年（735））（表 4-141、下線筆者）とあるように「宴」と「饗」は区別されていたのである。序章にあげた梅本論文は古代祭祀の一形態に「共食（あいたげ）」をあげているが、「宴・饗」いずれもこの延長線上にあるものと考えられる。

この「饗」のための装置としてニワがあったことは(表 4)より明らかである。『日本書紀』斉明天皇の斉明 5 年（659）の記事に「三月（中略）甲午、甘櫛丘東之川上、造須彌山而饗陸奥與越蝦夷。」（表 4-79）「三月（中略）甲午に、甘櫛丘の東の川上に、須弥山を造りて、陸奥と越との蝦夷に饗たまふ。」³⁵⁴とあり、斉明天皇は陸奥と越から来た蝦夷をもてなすために甘櫛の丘に須弥山を造らせている。このことは「饗」のための庭園があり、そこには「鑑賞性」が求められたのであり、祭祀が行われなくなっても「饗」はニワの重要な役目として残った。そしてニワの鑑賞性言い換えると修景性が高められる結果になったことが言えるだろう。

また踏歌、相撲、追儼のような呪術性の高い行事が平安時代まで残されていたこともうかがえる。

平安時代には平安宮造営からほどなくして神泉苑が造営され、広大な苑池であった。禁苑であった神泉苑には桓武天皇以降多くの行幸があり（表 4-328 以降）、詩宴、相撲節会、重陽節会、池に船を浮かべる納涼のほか、釣り、狩り、動物の飼育が行われた。特に花宴では嵯峨天皇が弘仁 3 年（812）に行ったのがわが国初の花見（観桜会）とされる（表 4-440）。当地は湧水及び流入水の多い土地で貞観 4 年（862）以降、渇水時に市民が水を汲むことを許可している。空海らが祈雨を行った貴布禰社は敷地の北東部の一画にある（現龍王社）。貞観 5 年（863）には「御霊会」が執り行われた。この頃疫病の流行が相次いだので怨霊を

慰め崇りを封じるためである。早良親王、伊予親王、藤原吉子、藤原仲成または広嗣、橘逸勢、文室宮田麻呂が六所御霊である。この日は神泉苑を一般に開放して歌舞、相撲、競馬、演劇等が行われた（表 4-1171）。御霊会に歌舞や相撲が行われるのはどちらも原初には鎮魂のためのものであったことを裏付けている。

<狩り>

六国史には天皇が宮城外に出て「狩り」を行う記事も非常に多く、嵯峨天皇在位期間中の記録は 13 年間に 53 回で年平均 4 回を数える（表 4-437～546）。松林苑、神泉苑でも行われている（表 4-721、724 他）³⁵⁵。古代、わが国では「死」「血」を「穢れ」として忌み、仏教の浸透もあって狩猟は必要な時にしか行われない。折口によると、古代には狩りもまた神事だったのであって、神の命を分けていただくものであった³⁵⁶。したがって獲物は供物である。そのような神事にルーツをもつ行事が宮城のニワおよび禁苑に残されていたと言えよう。また、陰陽師を自称する人物の真贋を定めるために神泉苑に数日間留め置いたこともあった（齋衡 1 年（854）（表 4-938））。

第 3 項 ニワの特質—清浄性と仮設性

原初のニワが神託を伺うために清浄性が求められたことは想像に難くない。その性格は宮城でも相当に求められたとみられ、そのことは六国史の「祓い」の記事にて理解できる。宮城ではときに「怪異」が起きる。そのあとには必ずと言っていいほど「祓い」が行われている。例をあげると『続日本紀』聖武天皇天平 13 年（741）「三月十九日 難波宮で怪異を鎮齊させた。庭の中に狐の頭がちぎられて落ち、体部のないものがあつたのである。ただ毛と糞などが頭のそばに散り落ちていた。」（表 4-157）などの記事である。時代が下るとより厳しくなり、「物の怪（もののけ）」があらわれたことにより宮廷行事が中止になることがしばしばあった。『続日本後紀』仁明天皇承和 4 年（837）正月「壬午 本日もまた天皇が豊楽殿に出御しようとしたが、殿上に設けた天皇の座の近くに突然物怪が出現したので降臨するのを取り止め、大臣を遣わして、六衛府が昨日の射の残りを射るのを観閲させた。」（表 4-736、761 他）のような記事である。同年秋にも「秋七月壬戌甲子 十五人の僧を常寧殿

に喚んで、昼は読経を行い、夜は適宜悔過を行った。内裏に物怪が出現したことに由る。」

（表 4-739）とあり、読経をおこなっている。承和 7 年（840）から数年は物の怪や祟りの記事が頻出し（表 4-768～）、さらに時代下ると、犬の産などでも行事が中止になっている。

『日本三代実録』陽成天皇元慶 4 年（880）2 月「十七日辛丑、内裏の犬の産の穢、延きて所司に及ぶ。仍りて園韓神の祭を停じき。」³⁵⁷（表 4-1402）とあり、宮城内で犬の産があり、宮城内神社である園韓神の祭を中止したとあり、このような犬の産や動物の死骸、また職員の親族の死亡などの穢には大変神経質であった記事が時代が下るほど増える（表 4-1404、1410、1412、1413、1435、1459、1487、1488、1512、1544 他）。これらのことから、宮城内の清浄性は厳密に保たれていたと考えられる。

そしてもう一つの特徴は施設の仮設性である。通常は何もない清浄な空間として保たれていたニワでは、必要な施設はその都度建てられ、終わると解体された。これは、祭祀によっては陰陽道に従い都度方位が選定されたことと関連がある。そもそも奈良時代まで、天皇が代替わりをするたびに遷都を行っていたのである。これは一定期間、人が居住すると穢がたまると考えられていたため、場所を移し、同時に解体された資材は次の宮城の建築に再利用された。祭祀のときの祭壇も、その都度新しくしつらえる。大嘗祭の折の大嘗宮でさえ仮設である。矢ヶ崎善太郎はこれを日本建築の特色として「仮設性」と「解体・再利用を前提とする建築」をあげている³⁵⁸。この仮説性により、ニワは通常は広場として確保されているのである。これが原初のニワの姿である。

第 4 項 わが国の饗宴と芸能の祭祀的性格

六国史に記録された儀式や行事がもとはわが国古来の「饗・宴」がもとになっていること、「饗・宴」は神を迎えて行う神事にちかいものであることを前項で述べた。ここでは芸能について考察する。

饗宴が行われるときはニワが芸能の空間となった。饗宴の招待客が舞うこともある。平安時代には宮城に芸能専門の部署があり、日本古来の歌舞を所管する雅楽寮（うたまひのつかさ）、大歌所（おおうたどころ）のほか内教坊では女楽や女踏歌を奏する「舞妓」を養成し

た。折口、倉林によると、わが国の芸能は神事であり、主に鎮魂である。『義解（^ぎ ^げ ^{りょうの} ^ぎ ^げ）』に「遊部（あそぶべ）」という人々のことがあり、この一族は鎮魂を本業とする芸能集団である。天皇崩御の際に殯（もがり）に仕えた。あそぶは神遊（かみあそび）・東遊（あじまあそび）（表 4-632）などで知られるように舞踊であり、部曲を伴っていたのである³⁵⁹。現代の我々は宮廷の音楽といえば雅楽を思うが、現在の雅楽になっている外来の楽器を奏する渡来人の集団・音楽の伝来とは違う、もっと古くわが国に土着していた芸能のすがたである。折口によるとそのころ（雄略天皇の頃）の人々は死を靈魂が遊離した状態（いわば仮死）で、時間がたっても魂がもどらなかった場合に死と認めた。そのため殯の宮に安置して魂を呼び戻すことが行われたのである。わが国の舞と楽はそこから始まり、故に呪術性が強く、鎮魂の意義が含まれていると述べている³⁶⁰。したがって大嘗祭で 4 日にわたって繰り広げられる舞楽は、先帝の鎮魂である。また政治的な要素もあるので少し長いが折口信夫を引用する。

（前略）これ（田舞）は多治比氏の^{うどねり}内舎人ら舞人十人が舞ふ事になつてゐた。大嘗祭の巳の日の行事の一つである。多治比氏がこれに與る理由は傳〇〇〇〇兩方共に悠紀ノ國・^す ^き主基ノ國が風俗歌を奏した後に舞ふのだから、大體その目的は訣る。風俗歌はその國々の歌を歌ふことによって、その國々の國魂を呼び起こすのである。それに續いて、舞踊によってその靈魂を聖なる肉軀（天皇の身体）に鎮齋するのが目的である。倭舞（やまとまい）は悠紀ノ國の國魂、田舞は同様に、主基ノ國の田の精靈即穀物の靈を、風俗歌の力で招き寄せ、聖なる身にしづめ申すのである。古くは必しも大嘗祭ばかりでなく、他の日にも行ってをり、其が舞楽化して宮廷正式の儀禮となつたものらしい。³⁶¹

わが国では「饗宴」自体が神事に近いものであり、芸能もまた神事に起源をもち祭祀と同様のものであったと言えよう。また、各地の「國魂」を呼び起こし、聖体（天皇の御身体）に納めることは、部族の服属と天皇統治を示す、きわめて政治的な祭祀であると言えるだろう。尚、神楽に代表される庭の芸能は夜おこなわれる。これは神は明るくすることを嫌うと

いう信仰から、夜、ほのかな庭篝火の下で行い、明け方に庭を去るとのことである。日中は人の時間、日没から夜明けまでを神の時間とするのがわが国の信仰である。

第2節 沈潜する祭祀の記憶

第1項 ニワの造形とモチーフ

本論文はまず「ニワ」の語が持つ概念を整理するところから始めた。わが国の「ニワ」の語源は「神を迎えて祀るひろい場所」である。このことは、「ニワ」が必ずしも土地を改変して造形された空間を指すものではなかったことを示す。その本質は清浄に保たれた広場のような空間であり（清浄性）、行事に必要な施設はその都度用意されるという特性（仮設性）を持つ。いわば「祀りのニワ」が先にあったのである。このような空間は現代では神社の本殿や拝殿まえの広場のイメージと重なるものである。日常においては何もない、しかし常に清浄に保たれている空間であり、行事の際には必要な施設が設けられ、神を迎えて宴を開く。このようなニワの例として『古事記』に見られる「沙庭」があり、「沙庭」は神功皇后が神がかりして神託を得たニワであり、清められた空間に琴が出されていたことだけわかる。『古事記』の時代は政治と祭祀が一体の時代であり、祀りごとは^{まつりごと}「政」であった。祭政一致の時代のニワの姿を端的に伝えるものである。同様のシャーマニズムの色濃い政治的な祭祀は日本各地のニワで行われていたであろう。また『古事記』には家庭（ヤニワ）即ち家庭の「ニワ」もあらわれており、このヤニワでも各家庭の祀りごとが行われており、同時に生活空間や農作業の空間でもあったと考えられる。このことは布留遺跡⁹）で発掘された「石敷様住居址」において、生活用土器と祭祀具が同時に出土することから生活の一部に祭祀的行為があったとみられる例が示されている（表2-9）。一方に「シマ」という語があり、奈良時代には「ニワ」と同義に用いられていたことが知られている。「シマ」は縄張り、すなわち領海、領土を表す語であり、「ニワ」と「シマ」が同義に用いられることについてはいくつかの見解があるが、本論文が着目したのは「シマ」が領土を指していて政治的なニュアンスが強いと考えられることである。このことについては第2章で詳述したとおりで

ある。

ニワでは祭祀と政と同時に外交使節の謁見や饗宴も行われていた。やがてニワは饗応、鑑賞が主たる目的に変化し、「鑑賞性」言い換えると「修景性」が高められた「ニワ」が飛鳥時代頃から造られるようになった。この変化の背景には7世紀の律令制度の制定により祭祀と政治が分離され、祭祀の多くは神社で行われるようになり、ニワでは饗宴の役目が重くなったと考えられることが挙げられる。奈良平城宮の東院庭園や左京三条二坊宮跡庭園はそのことを示しており、修景性は格段に上がっている。過渡期といえる飛鳥時代にはこの両側面がみられる。平安時代に入ると様々な行事の舞台となり、浄土庭園のような仏教のもつ西方浄土のイメージも投影された。奈良・平安時代以降はこの鑑賞、慰安、そして娯楽がニワの目的と概念になっている（図66）。

先の『古事記』にみた「沙庭」のような最も原初的なニワの空間を宮城のニワに求めたところ、宮城の中央の空地がこれにあたる。宮城の遺構が考古学的に確認されている7世紀の前期難波宮（難波長柄豊崎宮）では朝堂院の中央に確保された空間がそれであり、そこでは政治的な外交使節の謁見と合わせて年中行事が行われていた。続く藤原宮、後期難波宮の大極殿まえの空間、奈良時代以降、平城宮、長岡宮、平安宮とも大極殿前の空間が確保されており、平安時代ごろから紫宸殿や清涼殿（天皇の日常の居所）前の空間も活用されるようになった。この背景には天皇親政の時代が少しずつ終わり、天皇が奥まっていっただことが影響していると考えられる。平安時代の一時期、白河天皇の時代には鳥羽殿が造営され、「都遷りのごとし」と評されたのはこのことの裏返しと言えよう。宮城の構成が大規模、複雑になるとともに、宮城内でも馬場や紫宸殿などの空地も利用された。

平安宮が火災を繰り返し、再建する間や再建が見送られた間は后妃の実家が里内裏となった。発掘調査によると10世紀以降の貴族の邸宅に寝殿造建築とこれに対応した庭園が確認されるようになり、その庭園が諸行事の舞台となったことは『栄花物語』そのほかに見えている。『作庭記』もその地割について「南庭ををく事は階隠の外のはしらより、池の汀にいたるまで六七丈、若内裏儀式ならば八九丈にもをよふへし、拝礼事用意あるへきゆへ也、

（中略）堂社などには四五丈も難あるへからす。」³⁶²と記す。この祭式儀礼のための空間は平安時代にも「南庭」と呼ばれ内裏、貴族の住宅庭園、堂社においても確保されていたのである。

7世紀には律令制度により祭祀と政治が分けられ、祭祀の場は神社へと移っていったと考えられるが、宮城にはその後も古い起源をもつ行事である踏歌、相撲などが残されており、やはり祭祀の色濃い行事が残されていたと言えよう。特に遠方から訪れる外交使節が舞や音楽を奏するのは国魂を治める祭祀に近いものであり、祭政一致の時代の名残りであったと言える。遠来の外交使節を饗するだけでなく、家臣らとの宴会は頻々に行われ、これも「共食（あひたげ）」の伝統をもつ祭祀の一環と考えられる。また新穀を献上する新嘗祭や天皇代替わりの際の大嘗祭は宮廷儀式の最たるものとして現代につづいている。ここでも芸能は重視されており、その場で披露される楽・舞などの芸能もわが国にあっては祭祀同然の「神遊び」であったことが折口、倉林、山中ら民俗学分野の知見によって明確にできた。

また時代によっては宮城に隣接する禁苑にて行われていた行事もある。総じて宮城のニワには祭祀的といえる行事が残されていたことが言えるであろう。

また行事のための施設は、空地にその都度つくられることが特徴の一つとしてあげられる。そして何よりも清浄性が求められた空間であったことは宮城内に動物の死体が見られたり役人の身内に死人がでると、いちいち祓いが行われ、「物の怪」が出現すると行事が中止になっていたことなどから伺い知れる。

一方で、縄文時代から日本各地の水辺で行われた祭祀の痕跡が、次々と発掘調査によって確認された。第1章ではこれらのニワ状遺構や庭園遺構、また現存する庭園の発掘調査を参照に検証を行った。祭祀遺物の出土する状況から祭祀遺構とみられるこれらの遺構は、縄文時代から人為的に造られており、祭祀の場としての稼働は遺構によって異なるが、下るものでは平安時代まで確認される。また神社となって今日まで祭祀が行われている遺構もある。その造形の構成要素は「湧水または井戸」と「流れまたは溝」の組み合わせであり、これを「ストリーム型」として縄文時代から飛鳥時代までの15例を分析した結果、13例の遺構で

意匠はかわってもこの構成のパターンは変わらなかった。また水辺の護岸が「州浜または石敷」となっているのも特徴である。このことから「湧水または井戸」「流れまたは溝」その護岸の「州浜または石敷」の組み合わせは祭祀の空間においていわば聖なる親水空間を形成していたと言える。また、このストリーム型とは別に「流れ」や「溝」を持たない「スポット型」がみられたが、この構成は後代の庭園の造形にはつながらなかったと考えられる。大陸・半島との交流が盛んになった飛鳥時代の造形は極めて幾何学的なデザインとなっているが、構成要素は古墳時代のストリーム型と変わらず、ストリーム型を継承していると言える。その平面形は各遺構により異なっていることから、方池のような何らかの外来の様式があったとはいえ、各遺構によって独自にデザインされたとみるのが妥当であろう。この点、先のト部と同意見である。ただし、猿石や須弥山石、石人像などの精緻な石造物は、わが国に他に同様の石造物が見られないことから、半島から渡来 of 技術者に造らせたものと考えられる。そしてこのような祭祀遺構が確認できるのは本論文が調査対象とした遺構を限り、飛鳥京跡苑池遺構が最後となる。この後「湧水または井戸」と「流れまたは溝」は「遣水」となって庭園内に受け継がれていった。

また飛鳥時代から池に「島」がつくられるようになり池と島の造形が主役になる(図 66)。

外交使節の饗応のため、また盂蘭盆会のような仏教の行事にあわせて、飛鳥京では度々「須弥山」が造られたことが『日本書紀』の記録にあり、饗応のための造形が始まったと考えられる。また路子工が宮城南庭に築いたとされる「須弥山と呉橋」がわが国では「池と島」の造形として定着したと考えられる。しかし、その造形は大陸や半島が有していたイメージとはかなり違うものとなったと言わざるを得ない。わが国の池の平面形が自然形であることは大陸と同じであるが半島の方池とは異なる。また島の形状は大陸から半島を経由して伝わったや神仙思想の蓬莱三山や仏教が世界の中心であるとする須弥山とは違い、わが国ではかなり平低である。また平安時代までに「一池三山」は確認できず、「一池一島」が殆どである³⁶³。また池の護岸はすべて州浜形式をとっていることが注目に値する。この点は半島の方池の伝統や垂直石積み護岸と印象が大きく異なる点である。こういったイメージの

差異の背景には、わが国が島国であるが故の風景観が反映していると考ええる。また、「島」が象徴するものが何であったのかを考察した本論第2章において、『古事記』や『作庭記』に現れている古代の人々の「島」のイメージから「シマ」が領地・領土を象徴するものとして、政権内有力者や豪族、貴族のステイタスシンボルであったと結論づけた。島を浮かべる池についても、3世紀頃には既に鑑賞のための池が存在しており、かつては農耕神事が行われていたものであり、「后を迎える池」は「国魂を宿した島」とともに『作庭記』の時代には庭園化されていたとみられる。またわが国では「州浜」は聖なる親水空間において祭祀を執行した場そのものであり、八十島祭に代表される国魂を祀る祭祀の記憶とともに「島」とかわらぬ象徴的な意味をもつものと結論づける。その淵源には『古事記』に記された神々の国生み神話があり、わが国特有の海に囲まれた島国の風景があり、かつて祭祀が行われた場所はその海浜や河川の州浜であったこと、特に、河川が海にそそぐ河口の州浜は難波宮時代の風景でもあり、祭祀が行われなくなってもステイタスシンボルとして庭園に残り、島台（州浜台）や州浜紋として宮中や貴族社会に残されていたと考えられた。

「湧水または井戸」「流れまたは溝」その護岸である「州浜または石敷」が構成する聖なる親水空間に、縄文時代から一貫してたたずんでいるのが立石（たていし、りっせき）である。立石は流れの造形が池と島に移ってからでも変わることなく立てられ、『作庭記』の記述やその後の古代の庭園をみると、むしろ重要度は増していくように考えられる。立石のことは平安時代末期に成立したとみられる『作庭記』に非常に多くの記述があるのでこれを分析したところ、崇る石である「霊石」、その崇りを抑えることができる「三尊仏の石」といったきわめてアニミスティックな表現を抽出することができた。そこには18条に及ぶ禁忌が付記されている。とくに「石の乞はんにしたかひて」という一文の解釈について、17名の研究者の解釈を分類したところ、「石が乞う」という表現の根底、ひいては時代背景に「擬人化の文化」ともいえるものがあることが明確になった。

本論文における以上の結果からさらに「州浜」と「立石」に注目して考察を重ね以下に述べる。

第2項 州浜の重要性

第1章、第2章における「州浜」の考察から、その重要性を指摘できる。その要点は第一に、祭祀空間以来の造形において、水辺の護岸形式として繰り返し現れ、しかもその州浜景観が日本庭園らしい意匠（日本庭園らしさ）を決定的にしたこと、第二に浄土庭園において大陸からの伝来時は方形であった宝池がわが国では州浜護岸の自然形になったこと、第三に庭園の州浜以外に「島台」または「州浜台」として知られる置物（縁起物）として室内に持ち込まれたことや「州浜」が吉祥紋となり天皇の装束にも用いられていることである。

第1章でみたように水辺の祭祀の「流れ」は庭園の遣水となって受け継がれていく。一方で「州浜」は祭祀の場そのものであった時代から、弥生時代の遺構や飛鳥の直線的なデザインで整形された石敷きになったあと、奈良時代以降はまた自然形の州浜となって現れている。その造形は平安時代を通じて多用され、そのことはわが国の日本庭園らしい景観の一つの重要な構成要素となって定着したと言える。池の平面形が曲線的である半島の雁鴨池（図44）に比較しても、護岸が石積み垂直護岸である雁鴨池と奈良平城宮東院庭園（図24）の州浜護岸の池はその印象において一線を画している。

第二の浄土庭園における州浜については、平安時代の平等院庭園（33）に代表される浄土庭園が州浜を採用し、毛越寺庭園（36）無量光院庭園（37）浄瑠璃寺庭園（39）と続く。『扶桑略記』にその景観は「水石幽奇、風流勝絶。前に一葦の長河を渡す有り。あたかも群類を彼岸に導くが如し。」³⁶⁴とある。平等院はもと貴族の別業であったものを改修したのであるが、その設計は、周辺の宇治川、仏徳山、離宮社（宇治上神社）をも取り込み、精緻に計算されたものであったことが杉本宏らの研究³⁶⁵で解明されている。また杉本によるとこの庭園は後につくられる庭園に影響を与え、平等院をモデルにしたと伝わる庭園はいくつかあり、鳥羽上皇の命による鳥羽離宮の勝光明院、岩手県平泉市の無量光院などである³⁶⁶。平等院庭園においては、平成3年（1991）の調査により池全周が州浜であったことが判明したのであるが、ここにも疑問があり、杉本も指摘しているが、なぜ池の設計において不整形の平面と「州浜」がとられたのか（選ばれたのか）である。杉本は「本来、阿弥陀浄土の宝池は、汀が直

線的な方池として表現されるものであり、中国敦煌の壁画などをはじめ、わが国でも本例までの浄土曼荼羅などに描かれた宝池も方池として表現されている。」³⁶⁷と述べ、本阿弥陀浄土曼荼羅（奈良国立博物館蔵）などのいくつかの浄土図が州浜様の宝池として描かれたのは時代が平安後期から末期であり、この平等院のイメージが図相に影響した（反映された）と考えている。ではなぜ平等院は方池ではなく州浜様を選んだのだろうか。

その理由について、杉本は平等院庭園の前身であった既設の別業庭園の自然形の池が寢殿造建築に対応して成熟した構成美をすでに有しており、寺院庭園に変更されても十分に宗教的なまでに成熟していた³⁶⁸と推測している。筆者はこれに賛同のうえ、わが国の海浜の景観を反映したものとする。その理由として『扶桑略記』には治暦3年（1067）藤原頼通が娘婿にあたる後冷泉天皇をその病の末期にお迎えし、池上の船から夕映える阿弥陀堂をお見せしたという記事³⁶⁹がある。天皇が病の末期をさと、彼岸を思うこの時に、この池が方池であった場合には逆に彼岸のイメージとして違和感があったと考えられる。なぜならわが国で西方浄土へ渡ることは大川（三途の川）か海を超えて行くイメージであり、わが国の河川敷や海浜は州浜もしくは砂浜だからである。杉本は平等院以後のわが国の浄土曼荼羅—奈良国立博物館本阿弥陀浄土曼荼羅・高野山西禅院本阿弥陀浄土曼荼羅、大分県富貴寺大堂仏後壁阿弥陀浄土図等の絵画は秋山光和の言をひきながら平等院庭園の州浜形宝池が反映された可能性が高いと述べており³⁷⁰、実際にその後作庭された浄土庭園は浄瑠璃寺 39) も毛越寺 36) も州浜護岸である。またそのほかにつくられた浄土庭園も方池に戻ることなく自然形でつくられた³⁷¹。このことは浄土庭園の州浜がまずわが国の国土景観（風景）を映したものであったことと、かつて祭祀がおこなれていた清浄な州浜は浄土のイメージの導入にふさわしいものであったということが言えるであろう。

第三に庭園の一部であった州浜は後に模型によって室内に持ち込まれるようになった。

「島台」「州浜台」と呼ばれ、現代ではお祝いの席の縁起物となっている。

平安時代の宮中には「作物所（つくもどころ）」という部署があり、宮中の行事に必要な飾り物、縁起物、大道具、小道具等を作成していたことが『内裏式』『儀式』『西宮記』など

の儀式書によって知られている³⁷²。山中裕によると、ここで州浜（州浜台）を作成し、正月に卯杖を載せて献上するなどのほか、宇多天皇の時代に始まったとみられる歌合に持ち出されるようになった³⁷³。この州浜台（島台）に関する先行研究は少いが、白幡洋三郎³⁷⁴と錦^{にしき}仁^{ひとし}の論文がある。錦によると歌合の記録の最も古いものは仁和元年（885）頃の「民部卿行平歌合」で宇多天皇在位下である。そこで「州浜」が左右に分かれて出され、次々と詠まれた歌を短冊にしてその州浜に立てるのである³⁷⁵。州浜台には州浜そのもののほか、季節の草花、松や里山の小屋、水鳥などが作り物で添えられており、現代の箱庭のようなものである。貴族社会が都にあって、室内に居ながら郊外の自然美あふれる風景や各地の名所を彷彿とさせる風景を、ミニチュアにして持ち込んだものと言えよう。州浜台は島台とも呼ばれ、中世、近世を通じて祝の席に添えられ、現代も同様である（図 56）。その台がほかならぬ州浜をモチーフにしていたのは、当時の人々が船を主な交通手段として海上や河川を移動することが多く、海辺や河川の風景は現代よりも身近なものであったと考えられること、そこには州浜が広がっていたであろうこと、また六国史を通読すると（表 4）にはすべてを収拾していないが禊ぎや祓いの祭祀が当時も河川の州浜で行われていたことが天皇や内親王の各地の川への行幸記事（表 4-314, 315, 316, 388, 393, 422, 436, 476 等）で明らかであることから、天皇もよく出向いた場所であったことが考えられる。当時の貴族たちは州浜の模型をみながら郊外の風景を思い浮べ、歌を詠み、その情趣を競ったのである。後にその州浜台（島台）は近世の武家や祝いの席に大きく飾られる。

州浜は洲浜紋と呼ばれる伝統的な文様にもなっている。天皇だけが着用できる「黄^{こう}櫨^{ろう}染^{ぜん}御袍^{ごぼう}」にも織り込まれており、明治時代以降の天皇の即位式にはこの装束が用いられる³⁷⁶。井筒雅風によると、黄櫨とは中国伝来の冲天に輝く太陽の色であり、黄櫨染の御袍には中国の故事にちなんだ「桐竹鳳凰紋」が織り込まれていた。「桐竹鳳凰紋」の故事とは、「中国の太古に皇帝が南園に斎（いつき）をしていた時、庭上の桐樹に鳳凰が竹の実を喰えてとまったという故事」であり、これに室町時代になって麒麟と州浜を加えたのである³⁷⁷。

「州浜台」や「州浜紋」がいずれも慶事に用いられることから「州浜」は吉祥のモチーフ

であり、政治的なステイタスでもあったと考えられ、その理由は土地が（国土が）広がってゆく場であることと、かつて即位のあと一代一度行われていた八十島祭と関係があるものと考えられる。

以上のことから州浜は庭園の構成において、大陸・半島と殆ど共通性が無く、わが国独自の由来と歴史を持ち、日本庭園らしさを決定づけている。また景観としてだけでなく国魂を祀った祭祀の記憶を内包している。

この州浜と「島」が非常に近い関係にあることは第2章で明らかにしたとおりである。その庭園における「島」の造形の始めには大陸伝来の「山」があったため、従来、神仙島、桃源郷として解釈されてきたが、その造形の実態を観測する限り、須弥山・蓬莱三山とはやや異なっており、わが国の庭園の「島」は古代においては国土、狭義には領土を象徴していたことが推測される。またその造形が内包していたものは国魂であったといえよう。

第3項 立石のアニミズム

石を立てることは墓標、結界、記念、天測などの目的で縄文時代から行われてきた。小島弘嗣によると用語としては「立石（たていし、りっせき）」の方が古く平安時代から使われており、「石組」は近世以降の語である³⁷⁸。その目的が墓標などであれば当然であるが、目的が不明な立石がある。それこそが庭園の立石である。洋風庭園にロックガーデンと言われるスタイルがあるが、これは石が主役というものではなく、植物の合間に石が見えるという景観のベースとしての石の配置である。日本庭園では明らかに石が主役である。石立には、日本庭園において最も重点が置かれてきたことが否めない。作庭をする僧は鎌倉時代頃まで石立僧いしだてそうと呼ばれたのである。立石を主に景をつくった枯山水はその精髓と言えるだろう。現代でも石組みは庭園の肝であるし、江戸時代の大名庭園などは鑑賞、娯楽性が強くなるが、立石・石組のない庭園はあまり例がない。

時代の古いものから追っていくと、縄文時代の矢瀬遺跡 1) には立石列や配石（石組状）が検出された（図 1、図 1-2）。弥生時代の池上曾根遺跡 2)、下市瀬遺跡 3)、六太 A 遺跡 4)、藤江別所遺跡 5)、纏向遺跡 6) では検出されていない。後者は「井戸」を中心とする祭祀遺

構であり、井戸型の場合には立石や石組を伴わないのではないかとの推測ができる。古墳時代に入った屋代遺跡 7)、城之越遺跡 10)、阪原阪戸遺跡 11) では立石が再び検出されるようになり、飛鳥時代には幾何学的な意匠と精緻に加工された石造品が現れ (16)、17)、18)、19)、20)、21)、奈良時代の平城宮東院庭園 23) や平城京左京三条二坊宮跡庭園 27) には再び自然石の立石・石組が検出されている。

これらの (表 2、3) に上がったニワ状遺構や庭園遺構・現存庭園における石の据え方を見ていると、概ね二通りがある。ひとつには何らかの施設を構成するためのもので (①とする)、矢瀬遺跡 1) で水場の護岸に使われている列石 (図 1) や、屋代遺跡 7) では平石を平たく据え、その後ろ正面にもう一石の平石を立て、石組となっている。また阪原阪戸遺跡 11) の湧水点を石で囲う造形や遺跡の多くに見られる井戸囲いの石組等である。ただしこの場合は必ずしも立石、石組とは言わない。

もう一通り見られるものとして矢瀬遺跡 1) の石敷き祭壇の辺部に配石されていたもの (図 1-2) の他、阪原阪戸遺跡 11) には滝流れ石組のような石組が残っており、水源部の造作や上述①に該当する石組井戸、大溝などとあわせて有機的に構成されていた。他にも石神遺跡 21) の正方形苑池の四隅、飛鳥京跡苑池遺構 20) の石組、平城宮東院庭園 23) の北岸石組等、その後の庭園の殆どに現れる石組 (②とする) などである。

上記二通りから①群は便利のための石材の利用である。これに対し②群は、使用目的がなく、修景以外に考えられず、現代風に言えばオブジェのようでもある。城之越遺跡 10) の州浜の突端に立つ石や毛越寺庭園 36) の池中立石^{ちちゅうりつせき}のように、一石が屹立する姿は極めて印象的である (図 64)。

また「磐座」^{いわくら}や「磐境」^{いわさか}として石そのものを祀ることは、保久良神社 (図 15) をはじめとする上古の神社において行われており³⁷⁹、天白磐座遺跡 14) (図 16) (古墳時代) のような山頂の大岩の下で祭祀がおこなわれていた遺構があり、これらは石自体が信仰の対象となっている。

わが国が豊富に産する景石はどこにでもあった。とくに流れ沿いや海浜には当たり前

あったのであり、これを利用して庭園内の一角にボリュームを出し重心をつくる。それは山岳や荒磯の景観を巧みに取り込み、庭内に起伏や遠近感をつくる手法であるが、それだけではなかったと思われる。

『作庭記』の冒頭に「石を立てん事。まづ大旨をこゝろふべき也。」とあり、この「石を立てん事」は石組みを含む作庭全般を指すと解釈されている³⁸⁰。『作庭記』はとりわけ石の扱いに多くの分量を割いており、高低差、傾き、向きあわせ、根入れの深さ、据付の手順等を極めて的確かつ具体的に指示している。この中に、「すべて石は立ることはすくなく臥ることは多し。然れども石ぶせとはいはざるか」とあるのが興味深い。石は伏せて据えることが多いのに「石臥せ」とは言わないという³⁸¹。「立てる」は他の分野、生け花においても「立花」という語があるし、演劇における「役を立てる」、建築も「立てる／建てる」、墓を「立てる」とも言う。このことは「石を立てる」「立てる」ことに造形の本来的な意味があったと考えられる。中でも石立ては古代より長きにわたり特別な仕事であり中世にいたるまで専門の技能集団によって行われていたと考えられている。その技能集団こそ「山水河原者」と呼ばれた人々であり、善阿弥などの作庭の名手もこの河原者の出である³⁸²。正木晃によると石はこの世とあの世の間にあるもので、一般の人は崇りを恐れて触らなかった³⁸³。この石の崇ることは『作庭記』中に「宋の人曰く・・・」とあるので、中国にもあったものと見える。

一方『古事記』の素戔嗚尊すさのおのみことの乱暴狼藉に怒った天照大神が天の岩戸の奥に入って岩戸を閉じてしまい、そのため下界は真っ暗になってしまった話³⁸⁴（表 4-6）では岩戸が天界と下界の間にあるということになり、この天の岩戸伝説は石がこの世とあの世の間にありとされる一つの例と言える。「磐境」いわさかいはこのような中間にあつて境をなすもの、また結界を示すものと考えられる。また『古事記』には「石立たす 少名御神の 神壽いづさき（この国では石像としてお立ちになっておいでのスクナビコナノ神が）」³⁸⁵（表 4-15）との記述があり、この少名御神は後代の『文徳天皇実録』にも常陸国の大洗磯海岸に2尺ほどの石が二つ寄り付き、我はこれ大奈母知少比古奈命おおなもちすくなひこなのみことであるとの神託があったという記事がある³⁸⁶（表 4-992）。

この場合は石が神の依り代となっている。

また第1章で取り上げた下鴨神社においては「古代下鴨神社を祭祀していた鴨氏は石に特別な靈力を感じ、その靈力によってお祓いをしていた。」³⁸⁷という。この下鴨神社は古代より行われてきた無社殿神（社殿を持たない自然神）を祀る水辺の祭祀が今日も行われており、その祭場が糺ノ森の中に点在している³⁸⁸ことから、神社祭祀成立以前の古式—ほぼアニミズムと言える段階を維持していると考えられている。境内には平安時代以前の遺物も多く、縄文時代の石器や古墳時代の埴、甕などが出土している³⁸⁹。境内付近、または上流に弥生時代からの遺構があると見られている神社である。

以上に見てきたように、わが国では石は古来、この世とあの世の間にあるものとして特別視されてきたこと、石そのものに靈力があると信じられていたこと、石そのものが神の化身である場合があること、祭祀遺構や庭園の要所に立てられることなどから、立石は原初的には神を招く「依代」であったと考えられる。ニワは祭祀空間であり神の降臨を行っていた空間であった。その際の依代として、あるいはその空間の守り神として、立てられていたと考えられる。そして時代が下っても、ニワがもと祭祀空間であったがゆえに、立石のように靈性の強いものと親和性が高く、縄文時代の祭祀空間からその姿のまま継承され、時代により神仏の名を与えられてわが国の庭園に残り続けていると言えるだろう。景観としてもわが国の風土によく調和した。

日本庭園とアニミズムに直接言及した数少ない作庭家である重森三玲は磐座・磐境について以下のように述べている。

そしてまた、磐座や磐境は大自然としての巨石群を神格化し、またはこれに人工を加えることによって、石というもののの中に神の存在を認め、かつまたその美的構成を純粹な立場で理解し、石に対する日本民族の感覚の上で把握していることが、後世日本庭園の石組みの上に強く影響し、しかもそれはただ単なる自然としての美や、物としての美にとどまらず、神秘化された造形美としてのものが、民族の血の中に強く染められて来た

ことによって、日本庭園の石組みは日本的な特色のある造形として発展したのであった。³⁹⁰

ここで重森が見ていたのは、石というもののの中に神の存在を認めるわが国の仏教伝来以前の自然観である。それがわが国の庭園の特色でもある石組になったとする重森の考えは神道そのものと言って過言ではあるまい。

以上のようにニワの造形の構成要素が内包していたものを見てきたときに、通底しているのが国土や風景に「神」をみてきた非常に素朴な自然観であり、仏教伝来以前のわが国に古くからあった信仰である。

第3節 結語

『日本書紀』には次のような記事がある。

及至奉降皇孫火瓊瓊杵尊於葦原中國也、高皇產靈尊、勅八十諸神曰「葦原中國者、磐根・木株・草葉、猶能言語。夜者若燐火而喧響之、晝者如五月蠅而沸騰之」云々。

『日本書紀卷第二 神代』（表 4-37）

すめみまほのくにぎのみこと あしはらのなかつくに あまくだ たてまつ いた
皇孫火瓊瓊杵尊を、葦原中國に 降 し 奉 るに至るに及びて、高皇產靈神、八十諸神
に 勅 して曰はく、「葦原中國は、磐根・木株・草葉も、猶能く言語ふ。夜は燐火
の若に喧響ひ、昼は五月蠅如す沸き騰がる」と、云云。³⁹¹

これよりずっと下った時代の『続日本後紀』にもよく似た記事があり、承和 14 年（847）に仁明天皇が重陽の節に催した宴で出された詩賦の題は「草木が言う」であった（表 4-810）³⁹²。「日本では磐も木株も草の葉もよくものを言う」というのである。前章で『作庭記』において「石が言う」とする表現と同じ擬人観が見られる³⁹³。これが「擬人化表現」が文字に残された最も古い例に入るのではないか。時代が下って平安時代後期にも『栄花物語』「はつはな」には藤原道長が土御門殿に一条天皇を迎えた際の記事があり、夜になって庭園内に配置された楽人が楽を奏すると、「むげに夜に入りぬれば、萬歳樂、太平樂・賀殿など舞み、

さまぐに樂の聲おかしきに、笛の音も鼓の音もおもしろきに、松風吹き澄まして、池の波も聲を唱えたり。」³⁹⁴とあり、池が声を唱えるという擬人化表現がみられる。山下信一郎はこの「はつはな」の記事の他に『御産部類記』所引「不知記」をあげて、当時の知識層の漢籍の素養を指摘しているが³⁹⁵、漢籍の素養があったにしても、その素地としてわが国特有の擬人化表現があったのではないか。この『栄花物語』と『作庭記』や「鳥獸戯画」はほぼ同時代である。日本美術に見られる「擬人化」についてはわが国の文学や美術に古来、擬人化表現があること、その根底にわが国特有の自然観や世界観があることを美術史家の辻も指摘しており、このことは辻一人に限らず、美術界の一つの論調として見られるものと言ってよい。中西進の論考をあげると

日本人のものの考え方、感じ方、あらわし方のなかに、アニミスティックな特徴が、さまざまなかたちで根強く続いていること、それが日本美術の表現をいきいきと活気づかせる上で無視できない役割を果たしていることを、私の専攻する日本美術史の視点から検証しようとするものである。³⁹⁶

と述べている。「擬人化」は『作庭記』や『栄花物語』の時代には絵画にも文学にもみられた表現方法であり、その底流には日本的アニミズムがあるのではないだろうか。『作庭記』においてはその直接的な表現として「靈石」や「崇る石」があり、その石に宿る霊が仏教をまとして「三尊仏の石」となり崇りを封じる役割を持ったと考えられる。

ほかにも六国史に記録された記事には下記のようなものがある。

辛卯。《二十》從楯波池。飄風忽來。吹折南苑樹二株。即化成雉。（『続日本紀』神龜 4 年（727）（表 4-120）「南苑の樹木二本が折れ、そのまま化して雉となった。」³⁹⁷

といった記事や

是時、斷除朝倉社木而作此宮之故、神忿壤殿、亦見宮中鬼火。由是、大舍人及諸近侍病

死者衆。(『日本書紀』 斉明 7 年 (661) (表 4-84)。

「五月の乙未の朔癸卯に、天皇、朝倉橘広庭宮に遷りて居ます。是の時に、朝倉社の木を断り除ひて、此の宮を作る故に、神忿りて殿を壊つ。亦、宮の中に鬼火見れぬ。是に由りて、大舍人及び諸の近侍、病みて死ねる者衆し。」³⁹⁸

また宝亀 11 年 (780) には伊勢神宮が祟りにより遷宮を行う記事もある (『続日本紀』 宝亀 11 年 (780)) (表 4-238)。『古事記』や『風土記』にも神木で舟をつくと非常な速さで航行したという記事³⁹⁹があり、古代の人々の自然の中に霊的な存在を捉え、あるときは畏れながら共生していたことがよくわかる。

このような自然の中に霊的な存在を見、畏れ、祀る世界観が庭園にも映り込んでいることは第 3 章で明らかにしたものである。同時にこのことは、後に神道のみならず大陸の神仙思想や仏教がもたらした浄土思想や禅を受け入れる素地となったと考えられる。

わが国の長い庭園の歴史の中で神仙思想や浄土思想、仏教や禅が表現され、しかも日本ならではの様式として定着し得たのは、やはり外来の思想を受け入れ、消化することのできる素地があったからではないだろうか。その素地とは、我々を取り巻く風景や空間、樹木、岩、水などの諸物に霊性を見る日本人の自然観・宇宙観にあり、それは本論文で浮かび上がってきたアニミズムであると言えるのではないか。アニミズムとは、先述のように人間以外の動物や植物といった生物のみならず、山、石、道具などにも魂があるとみる精霊信仰で、世界中にあり、宗教の起源と考えられている。とくに日本はこの傾向が強い文化を有しているとされるが、日本庭園とアニミズムの関係についての著述がある重森三玲は昭和初期より磐座・磐境いわくら いわさかを日本庭園の淵源と位置付け、上古を日本庭園史の始めと主張してきた。ただ当時はこの分野において、殆ど考古学界においても研究する人がなく、先行研究・参考文献のないことを嘆かれている。しかしながら昭和の後半から相次いだニワ状遺構の発掘は上古をさかのぼるものであり、それが祭祀跡であったことから神社祭祀と庭園との分岐点もいずれ研究者が現れて明確になっていくであろうし、その時が来れば重森三玲の研究は再び大きな意義を有して参照されるものと拝察する。また、日本庭園を日本庭園たらしめている

ものは何なのかという問い、また同じ風景式と言われる中国庭園、イギリス庭園との比較において、日本庭園の本質を探っていく途上で、その造形に込められたものが何であったのかを考察し、時代とともに目的や様式が変わっても伝統の底流に^{おり}澱のように沈殿し、現代ではもう無意識に作庭者が行っていることの原初の記憶をたどることは決して無駄ではなく、芸術の領域において、とくに実学の傾向の強い造園において、後世へ受け継いでいくときの一つの手掛かりとして、また近年の海外における日本庭園への関心の高まりに対して、我々が語るすべを持つためにも、このように思想的な側面を考察していくことは有意義であると考え。

幸いにも昭和の後半から平成にかけて発掘され研究が進んだニワ状遺構の検出のおかげで、わが国の庭園の淵源に祭祀空間としての造形があり、それが自然崇拝を基調とする土着の信仰に根差すものであったろうということ、そのことを庭園史においても視野に入れるべきであるとの指摘は穂積論文、本中論文、網論文をはじめとしてすでに出されており、現在では発掘史資料や研究論文も増えていることから、より多面的な考察ができる時代に入っている。

外国人にして日本の文化的深層を研究した人にラフカディオ・ハーン（小泉八雲 1850-1904）があり、平川祐弘によれば、ハーンは「日本人の霊の世界に興味をもち日本固有の宗教である神道の価値を初めて発見した人といわれている」⁴⁰⁰アイルランドとギリシャの血を引く日本研究者である。先に触れたように、アイルランドとギリシャは日本神話に似た神話を持つ国であり、父親の厳格なキリスト教教育を受けながらも母が語るギリシャ神話を愛した人であり、そのことが彼の日本理解を深めたのであろう。明治20年代に松江に来たハーンは神道を研究し、やはりその根底にアニミズムを捉えたのである⁴⁰¹。同時にハーンは日本文化の「重層性」ともいうべき性質を下記のように表現した。

なにしろ日本文化は、単純素朴な固有の土台の上に、いろいろの外来の文化があとからつぎつぎに積み重ねられて、複雑至極の形を呈しているのだから、それで西欧には類の

見られないほど特殊の文明なのである。(中略)ところで特殊で驚くべき事柄は、このような外来的付加物にもかかわらず、民族とその社会の本来の性質が、なおも鮮やかに残っていることである。⁴⁰² (下線筆者)

ハーンはここで外来文化を着物の^{じゅうにひとえ}十二単に例え、袖口から色々な色かのぞいているにもかかわらず、着ている日本人は変化していないことに驚いている。あるいはそのような日本文化の変幻自在性に驚いているのである。

わが国のニワでも同じことが起きていたと言える。非常に素朴な自然観と信仰に根差した造形と営みは、後に外来の宗教である仏教や大陸・半島風の造形や行事を取り入れたとしても、それは重ね着のようなもので本質は変わらぬままだったのである。

わが国のニワは神霊を迎える祭祀空間として始まった。本論文において、その造形が「流れ」「州浜」「立石」として古代庭園に継承され、飛鳥時代以降、祭祀から鑑賞を主とする空間になった後も「池と島」とともに残り続けたこと、「島」と「州浜」は密接な関係にあり、「国魂」を宿していると考えられること、特に祭祀の場そのものであった州浜がわが国特有の造形と言えること、また立石の淵源が祭祀空間の依代であると考えられることなどを明らかにしてきた。また、その造形のモチーフとして、「流れ」のモチーフに「天の川」(図 65)、平城宮東院庭園の改修に影響したモチーフとして「難波の州浜の風景」の可能性を提示できた。

祭祀空間での文化的な営みは、原初には祭祀であり、それは飛鳥時代に神社や政庁に移っていったとみられるが、祭祀の一部であった饗と宴はニワに残された。古代の宮城のニワの季節の行事や芸能には原初の呪術的な様相をみることができた。また行事の際の施設が仮設であることや、厳重に保たれていた清浄性も、祭祀時代に由来すると考えられ、わが国のニワの特徴と言えるであろう。

これらの造形と営みの源泉にはわが国に古くからあった水や樹木や岩石に霊性一言い換えると「神」を見てきた自然観と、またそのような自然崇拝を基調とする素朴な信仰すなわち日本的アニミズムがあったのであり、それらは祭祀の記憶とともに古代の庭園に沈潜し、

底流をなしている。そして古代日本庭園はいくつかの外来思想を重ね着しながらも、列島の風景を映してきたのである。

124,838 字

- ¹ 上原敬二編『築山庭造伝前編解説』加島書店、1989年、p. 24。
- ² 上原敬二編『造園大辞典』加島書店、1978年、p. 110 三尊石の項。
- ³ 上原敬二編『解説山水並に野形図・作庭記』加島書店、1982年、p. 55。
- ⁴ 進士五十八「日本庭園の特質から国土の景観多様性を考える」（公財）都市緑化機構・国土交通省主催「グローバル時代の日本庭園を考えるシンポジウム」基調講演より、2022年3月12日
- ⁵ 金子裕之編『古代庭園の思想』角川書店、2002年、他。岩永省三「奈良時代庭園の造形意匠」同書所収、pp. 103-106。
- ⁶ 田中淡「中国庭園の初期的風格と日本古代庭園」『東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会報告書』奈良文化財研究所遺跡整備室、2009年、p. 65。
- ⁷ 小野健吉『日本庭園の歴所と文化』吉川弘文館、2015年。
- ⁸ 金子裕之「嶋と神仙思想—7～9世紀の庭園の系譜」『道教と東アジア文化』13巻、国際日本文化研究センター、2000年、p. 168、p. 173。
- ⁹ 奈良文化財研究所編集・発行『奈良文化財研究学報第74冊 古代庭園研究Ⅰ』、2006年、p. 259、p. 347。
- ¹⁰ 高瀬要一「奈良時代庭園の特色」奈良文化財研究所編集・発行『東アジアにおける古代庭園遺跡調査研究』、2004年、p. 52。
- ¹¹ 中村一・尼崎博正『風景をつくる』昭和堂、2001年、p. 24。
- ¹² 中村・尼崎前掲書（11）。
- ¹³ 森蘊『日本の庭園』河原書店、1950年、pp. 95-96。
- ¹⁴ 田中正大『SD選書23 日本の庭園』鹿島出版会、1967年、p. 80。
- ¹⁵ 穂積裕昌「古墳時代祭儀空間の成立—古墳時代の庭状遺構の評価をめぐって—」三重県埋蔵文化財センター編集・発行『研究紀要第15-1号—特集古墳時代—』、2006年。
- ¹⁶ 奈良文化財研究所編（9）、p. 5。
- ¹⁷ 牛川喜幸「古代庭園の研究—水をめぐる造形とその系譜—」京都造形芸術大学大学院博士論文、1993年。
- ¹⁸ 本中眞「平城宮東院庭園に見る意匠・工法の系譜について」日本造園学会編集・発行『造園雑誌』55（5）、1992年
- ¹⁹ 奈良文化財研究所編集・発行『発掘庭園資料 奈良国立文化財研究所史料 第48冊』、1998年、p. 4より引用。
- ²⁰ 杉本宏「庭園と考古学」京都芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター編集・発行『庭園学講座XXVⅡ 文化財庭園の整備と考古学—庭園考古学へのいざない—』、2021年、p. 7。
- ²¹ 中村・尼崎前掲書（11）、pp. 9-11。
- ²² 上原前掲書（2）、p. 565〔庭園〕の項。下線筆者。
- ²³ 上原前掲書（2）、p. 565〔庭〕の項。
- ²⁴ 小木曾智信（国立国語研究所）による解説、NHK、2022年4月29日放送。
- ²⁵ 奈良文化財研究所前掲書（9）、p. 6。
- ²⁶ 穂積裕昌「「ニワ」の淵源と城之越遺跡」奈良文化財研究所前掲書（9）、p. 89。
- ²⁷ 中村・尼崎前掲書（11）、p. 10。
- ²⁸ 白川静『字訓』平凡社、1995年、【にわ】の項。
- ²⁹ 倉野憲司校注『古事記』岩波書店、2016年、第24刷。
- ³⁰ 倉野前掲書（29）堅庭、p. 35 p. 246
- ³¹ 倉野前掲書（29）沙庭、p. 149 p. 303
- ³² 倉野前掲書（29）庭つ鳥 p. 54 p. 256

-
- ³³ 倉野前掲書 (29) 大廷 p. 127 p. 292
- ³⁴ 白川前掲書 (28) p. 581
- ³⁵ 松村明編『大辞林』三省堂、2019 年
- ³⁶ 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀 (四)』岩波書店、1995 年、p. 466、p. 124。
- ³⁷ 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀 (五)』岩波書店、1995 年 p. 427、p. 194
- ³⁸ 坂本ほか前掲書 (37)。p. 432、p. 210
- ³⁹ 佐竹秀雄『庭と萬葉集』(株)トライ、1998 年。
- ⁴⁰ 佐竹前掲書 (39)。
- ⁴¹ 木村三郎「「園池司」という事」日本造園学会編集・発行『造園雑誌』47 (5)、1983 年。
- ⁴² 新村出編『広辞苑第二版補訂版』岩波書店、1976 年。【園池】【園池司】の項。
- ⁴³ 國下多美樹「長岡京の庭園—離宮と園池司—」奈良文化財研究所編集・発行『奈良文化財研究所学報第 86 冊研究論集 17 平安時代庭園の研究—古代庭園研究Ⅱ—』、2011 年。
- ⁴⁴ 小学館国語辞典編集部編集・発行『日本国語大辞典』第二版第九巻、2001 年。園、囿、苑の項
- ⁴⁵ 小学館国語辞典編集部編前掲書 (44)。
- ⁴⁶ 小学館国語辞典編集部編前掲書 (44)、【庭園】の項。
- ⁴⁷ 上原前掲書 (2)『造園大辞典』【庭園】の項によると明治 6 年初出とあるが、初出は『雍州府史』(1684) で、一般に使われるようになったのが明治に入ってからと考えられる。
- ⁴⁸ 日本考古学協会三重県実行委員会編集・発行『シンポジウム 1 水辺の祭祀』、1996 年。
- ⁴⁹ 月夜野町教育委員会編集・発行『上組北部遺跡群Ⅱ《矢瀬遺跡》埋蔵文化財発掘調査報告書』、2005 年。日本考古学協会前掲書 (48)、pp. 1-6。
- ⁵⁰ 和泉市教育委員会編集・発行『史跡池上曾根遺跡保存整備事業報告書 史跡池上曾根遺跡発掘調査報告書 2011~2013—史跡整備に伴う第 3 期発掘調査—』、2017 年。日本考古学協会前掲書(48)、pp. 7-14。
- ⁵¹ 三重県埋蔵文化財センター編集・発行『三重県埋蔵文化財調査報告 115-16 一般国道 23 号中勢道路 (8 工区) 建設事業に伴う六大 A 遺跡発掘調査報告』、2002 年。日本考古学協会前掲書 (48)、p. 77-84。
- ⁵² 明石市立文化博物館編『明石市文化財調査報告 2：明石市藤江別所遺跡—藤江ポンプ場建設工事に伴う発掘調査報告書—』明石市教育委員会発行、1996 年。日本考古学協会前掲書 (48)、p. 35-39。
- ⁵³ 日本考古学協会前掲書 (48)、p. 29-34。
- ⁵⁴ 三重県埋蔵文化財センター編集・発行『三重県埋蔵文化財報告書 99-3 城之越遺跡—三重県上野市比土—』、1992 年 (2004 デジタル版)。日本考古学協会前掲書 (48)、p. 42-49。
- ⁵⁵ 奈良県橿原考古学研究所編集・発行『奈良県遺跡調査概報 1992 年度』、1993 年。日本考古学協会前掲書 (48)、p. 63-76。
- ⁵⁶ 長野県埋蔵文化財センター・日本道路公団・長野県教育委員会編集・発行『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 54 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 28 更埴条里遺跡・屋代遺跡群—総論編』、2000 年。日本考古学協会前掲書 (48)、p. 102-111。
- ⁵⁷ 橿原考古学研究所編集・発行『南郷遺跡群Ⅲ奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 74 冊』、2003 年。日本考古学協会前掲書 (48)、p. 50-57。

-
- ⁵⁸ 新田町教育委員会編集・発行『新田町文化財調査報告書 新田東部遺跡群Ⅱ/新田東部工業団地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書』第1、3分冊、2000年。日本考古学協会前掲書(48)、p. 93-96。
- ⁵⁹ (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 編集・発行『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第8集三ツ寺Ⅰ遺跡—古墳時代居館の調査(本編)』、1988年。日本考古学協会前掲書(48)、p. 97-101。
- ⁶⁰ 奈良市教育委員会編集・発行『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成6年度』、1995年。奈良市教育委員会埋蔵文化財調査センター「速報展示資料No. 64」、2020年。日本考古学協会前掲書(48)、p. 58-62。
- ⁶¹ 岡山県教育委員会編集・発行『岡山県埋蔵文化財報告書(3)中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1』、1973年、pp. 107-203。日本考古学協会前掲書(48)、p. 20。
- ⁶² 桜井市纏向学研究センター編集・発行『桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書第40集 纏向遺跡発掘調査書3—トリノ南地区における発掘調査—』、2013年。同『桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書第44集 奈良県桜井市纏向遺跡発掘調査書3—第35次63次72次調査—』、2015年。日本考古学協会前掲書(48)、p. 26。および桜井市教育委員会パンフレット。
- ⁶³ 梅本綾「水辺の祭祀の諸相とその意義」天理大学考古学研究室編集・発行『古事 天理大学考古学研究室紀要3』、2009年、pp. 10-28。
- ⁶⁴ この数字は『古代庭園研究Ⅰ』(9)に挙げられた奈良時代園池10例における最大値(東院庭園の州浜勾配)を準用した。奈良文化財研究所(9)、p. 11。
- ⁶⁵ 榎村寛之「斎宮と水の祭祀」日本考古学協会前掲書(48)所収、p. 203。
- ⁶⁶ 梅本綾前掲論文(63)、pp. 10-28。
- ⁶⁷ 折口信夫「日本芸能史序説」『折口信夫全集第17巻』中央公論社、1956年、
- ⁶⁸ 日本考古学協会前掲書(48)、各遺構の論考より。
- ⁶⁹ 穂積前掲書(51)、日本考古学協会前掲書(48)、p. 84。
- ⁷⁰ 辰巳和弘編『引佐町の古墳文化Ⅴ：天白磐座遺跡』引佐町教育委員会、1992年。日本考古学協会前掲書(48)、pp. 85-92。
- ⁷¹ 倉野前掲書(29)、p. 155。
- ⁷² 奈良文化財研究所前掲書(9)。
- ⁷³ 日本考古学協会前掲書(48)、p. 112-119。桜井市文化財協会編集・発行『上之宮遺跡第5次調査概報 - 桜井市内埋蔵文化財1989年度発掘報告書2』、1990年。
- ⁷⁴ 奈良文化財研究所編集・発行「小墾田宮跡推定地および豊浦寺跡の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報Ⅰ』、pp. 1-4、10、1971年。奈良文化財研究所前掲書(9)、pp. 219-226。
- ⁷⁵ 橿原考古学研究所編集・発行『奈良県遺跡調査概報1988年度』、1989年。奈良文化財研究所前掲書(9)、pp. 211-215。
- ⁷⁶ ①大阪四天王寺の亀形石について
SCIENCE&CULTUREbyNHK=https://www3.nhk.or.jp/news/special/sci_cul/2019/04/news/news_190426-4/(2022年10月23日閲覧)、及び網伸也(2019)。
②雁鴨池の石造物について
洪光杓「楽園を象徴する韓国の古庭園、雁鴨池庭園」奈良文化財研究所・文化庁編集・発行『「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」報告書』、2009年に写真の掲載あり。
- ⁷⁷ 橿原考古学研究所編集・発行「史跡・名勝飛鳥京跡苑池第8次調査(飛鳥京跡第174次調査)」『奈良県遺跡調査概報2013年度(第二分冊)』、2015年。同「史跡・名勝飛鳥京跡苑池第13次調査(飛鳥京跡第182次調査)」『奈良県遺跡調査概報2019年度(第一分冊)』、2020年。奈良文化財研究所前掲書(9)、pp. 245-248。

-
- ⁷⁸ 奈良文化財研究所前掲書 (9)、p. 229 西口氏の論考。
- ⁷⁹ 奈良国立文化財研究所編集・発行「石神遺跡第 6 次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 17』、1987 年。奈良文化財研究所前掲書(9))、pp. 227-234。
- ⁸⁰ 奈良文化財研究所前掲書(9))、pp. 216-218。
- ⁸¹ 橿原考古学研究所『奈良県遺跡調査概報 1988 年度』、1989 年。奈良文化財研究所前掲書 (9)、pp. 211-215。
- ⁸² 坂本ほか前掲書 (36)、p. 124。
- ⁸³ 坂本ほか前掲書 (36)、p. 148。推古朝 34 年の記事。
- ⁸⁴ 佐竹前掲書 (39)。
- ⁸⁵ 笠井昌昭「上古の池—日本庭園文化史序説—」同志社大学日本文化史研究会編集・発行『文化史研究』16、1964 年。
- ⁸⁶ 奈良文化財研究所前掲書 (9)、p. 478。
- ⁸⁷ 奈良文化財研究所前掲書 (9)。
- ⁸⁸ 奈良文化財研究所前掲書 (19)。
- ⁸⁹ 奈良文化財研究所編集・発行、「東院園池と周辺の調査 (第 99 次)」『昭和 51 年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』、1977 年、pp. 12-21。
奈良文化財研究所編集・発行『奈良文化財研究所学報第 69 冊平城宮発掘調査報告 XV—東院庭園地区の調査—本文編』、2003 年。
- ⁹⁰ 岩本次郎「楊梅宮考」『甲子園短期大学紀要』第 10 号、1991 年。岩本は楊梅宮の位置は東院を踏襲したものとしている。
- ⁹¹ 金子前掲論文 (8)。
- ⁹² 奈良文化財研究所前掲書 (9)、p. 340。
奈良文化財研究所前掲書 (19) p. 43 (写真入り)。
- ⁹³ 奈良文化財研究所前掲書 (9)、p. 259。
- ⁹⁴ 奈良文化財研究所編集・発行「佐紀池の調査 (第 101 次)」『昭和 51 年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』、1977 年、pp. 22-29。
- ⁹⁵ 奈良文化財研究所前掲書 (9)、p. 355-356。
- ⁹⁶ 太田静六による推定復元平面図がある。(図 26) は京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館編集・発行「リーフレット京都」No. 73、1995 年より転載。
- ⁹⁷ 京都市埋蔵文化財研究所編集・発行『平成 3 年度京都市埋蔵文化財調査概要』、1995 年。
京都市埋蔵文化財研究所編集・発行『高速鉄道東西線工事に伴う史跡旧二条離宮内の第 2 次発掘調査 2~4 期調査終了報告書』、1991 年。
- ⁹⁸ 古代学協会・古代学研究所編集・京都市埋蔵文化財研究所編集協力『平安京提要』角川書店、1994 年。鈴木久男執筆部「鳥羽殿」。
- ⁹⁹ 奈良文化財研究所編集・発行『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告書』、1986 年。
- ¹⁰⁰ 山下信一郎「平城京左京三条二坊二坪 (長屋王邸) の調査—第 303-8 次」奈良文化財研究所編集・発行『年報 2000-III』、2001 年。
- ¹⁰¹ 奈良文化財研究所前掲書(19)、pp. 362-364。
- ¹⁰² 藤原武二、宮本長二郎「平城京の遺跡 左京一条三坊十五・十六坪 (6AFB-F~J 地区)」奈良文化財研究所編集・発行『奈良文化財研究所学報第 23 冊』、1975 年、p. 19。奈良文化財研究所前掲書(9)、p. 388。
- ¹⁰³ 奈良文化財研究所『平城京一条北辺四坊六坪 (伝称徳天皇御山荘跡) の発掘調査 平城第 151-26 次調査』現地説明会資料、1984 年
- ¹⁰⁴ 橋本義則『平安宮成立史の研究』塙書房、1995 年、pp. 397-429。
- ¹⁰⁵ 岸俊男「島雑考」『日本古代文物の研究』塙書房、1988 年。

- ¹⁰⁶ 松村博司・山中裕校注『榮花物語 下—日本古典文学大系 76』岩波書店、1970 年。
- ¹⁰⁷ 奈良文化財研究所前掲書 (19)、pp. 60-67。
- ¹⁰⁸ 清野孝之「法華寺阿弥陀浄土院の調査—第 312 次」奈良文化財研究所『年報 2000-III』、2001 年。奈良文化財研究所前掲書 (9)、pp. 378-387。
- ¹⁰⁹ 小野健吉「法華寺阿弥陀浄土院/浄土庭園の諸相」金子前掲書 (5) 所収。
- ¹¹⁰ 奈良文化財研究所前掲書 (9)、p. 369。
- ¹¹¹ (宗) 平等院編集・発行『平等院 阿弥陀堂中島発掘調査報告書』1991 年。
- ¹¹² 仲隆裕「史跡名勝平等院庭園における洲浜整備」日本造園学会編集・発行『造園技術報告集 (2003)』2004 年。
- ¹¹³ 清水擴「平等院の伽藍とその性格」『東京工芸大学紀要』Vol. 8, No. 1、1985 年。
- ¹¹⁴ 仲隆裕前掲論文 (112)。
- ¹¹⁵ 平泉町教育委員会編集・発行『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書—第 7 次調査』、1986 年。『同一—9 次調査』、1987 年。『同一—11 次調査』、1988 年。『同一—12 次調査』、1989 年。『同一—13 次調査』、1991 年。
- ¹¹⁶ 平泉町編集・発行『特別史跡 無量光院跡発掘調査報告書 3-第 17 次調査』、2006 年。
- ¹¹⁷ 小野前掲書 (7)。菅野成寛「平泉無量光院考」『岩手史学研究』、1991 年。p. 74。
- ¹¹⁸ (宗) 浄瑠璃寺編集・発行『特別名勝及び史跡 浄瑠璃寺庭園保存修理事業報告書 I (発掘調査編)』、2019 年。
- ¹¹⁹ (宗) 賀茂御祖神社編集・発行『糺の森整備報告書』、2010 年。
(財) 京都市埋蔵文化財研究所編集・発行『京都市埋蔵文化財研究所調査報告 史跡賀茂御祖神社境内』、2005 年。
- ¹²⁰ (宗) 賀茂御祖神社前掲書 (119)、p. 65。
- ¹²¹ (財) 糺森顕彰会『「鴨社古絵図展」解説』(有) 糺書房、1985 年。
- ¹²² 梅原猛「森の宗教と神道」賀茂御祖神社編『世界文化遺産 下鴨神社と糺の森』(株) 淡交社、2003 年。
- ¹²³ 欽明朝に百済の聖明王が仏像と経論を献じたことで仏教伝来とされ、6 世紀の推古朝に仏教興隆の詔が発せられた。
- ¹²⁴ 京都市埋蔵文化財研究所の南孝雄氏のご教示による。また下中邦彦編『世界大百科事典』12、平凡社、1971 年よると、古くは祭祀の都度假設的に設けられ、終了時に取り壊すのを原則としていたが、時代が下ると建物が固定化された。それも一定期間ごとに建て替えることが通例であった。文献資料で確認できるのは奈良時代 (8 世紀) 以降である。伊勢神宮の鎮座は垂仁天皇の時 (3 世紀) と伝えられる。
その他の参考文献として岡田精司『新編神社の古代史』学生社、2011 年。
- ¹²⁵ (宗) 兵主神社発行・編集『名勝兵主神社庭園保存整備報告書』、2002 年。
- ¹²⁶ 佐藤昌『中国造園史 上巻』日本公園緑地協会、1991 年。
- ¹²⁷ 多田伊織「ニワと王権—古代中国の詩文と苑」金子前掲書 (5) 所収。
- ¹²⁸ 小野前掲書 (7)、p. 13。
- ¹²⁹ 奈良文化財研究所前掲書 (9)、p. 306。
- ¹³⁰ 多田前掲論文 (127)、p. 208。『漢書』武帝本紀の記述による。
- ¹³¹ 高瀬要一「古代東アジア (中国・韓国・日本) の方池」奈良文化財研究所編集・発行『第 5 回中日韓風景園林学術検討会論文集』、2004 年。
- ¹³² 高瀬前掲論文 (131)。
- ¹³³ 小口基實『韓国の庭苑』小口庭園グリーンエクステリア (有)、1999 年。
- ¹³⁴ 小野前掲書 (7)、他。
- ¹³⁵ 高瀬前掲論文 (10)、p. 52。

- 136 奈良文化財研究所前掲書 (9)、p. 259、347。
- 137 奈良文化財研究所前掲書 (9)、p. 25、440。
- 138 和久田薫、礼埜耕三著、交野市教育委員会、交野市文化財事業団編・発行『星田歴史風土記』、1995 年。
- 139 倉野前掲書 (29)『古事記』p. 39。坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀 (一)』岩波書店、1994 年、p. 341。
- 140 江戸時代まで使われた和暦の方位盤は南 (午) を上に、北 (子) を下に置く。
- 141 新村出編前掲書 (42)。
- 142 大嘗祭の翌年に行われた祭祀。天皇が難波津の熊河尻 (現在の淀川河口に比定) に船で下り、琴の演奏とともに同行の女官が浜で衣を振り、供物を投じて帰京する。記録は文徳天皇実録の嘉祥三年 (西暦 850 年平安時代) から四条天皇 (1232 年即位) までの約 400 年間続いた即位儀礼の一環である。『江家次第』 (関白藤原師通の命により大江匡房が記録した朝廷行事の詳細。1111 年成立) その他に詳細な式次第の記録がある。祭祀の目的が国土生成祈願、天皇自身の禊、祓いなどの説がある。1037 年以降は住吉神社の上申により住吉代家浜 (現在の住吉大社の西方の海浜に比定) に変更せられた。
- 田中卓『神社と祭祀 田中卓著作集Ⅱ—1』 (株) 国書刊行会、1994 年、岡田精司「即位儀礼としての八十嶋祭」山折哲夫、宮本袈裟雄編『日本歴史民俗論集 9 祭儀と呪術』、吉川弘文館、1994 年。
- 現在の大阪はもと難波津と呼ばれた湾であった。難波津の中に潟洲 (砂州) が伸びて川内湖ができ、それが陸地化した上に形成された都市である。このため当時は海とも湖ともつかぬ中に小さな小島が点在しており、この風景は和歌にも多く詠まれている。
- 『住吉大神宮年中行事』に、「八十嶋祭、難波河尻の嶋々に於いてこれを行わせらる。河尻とは淀河の下流なり。河中に嶋多く、田蓑嶋・幣嶋等の如き皆是なり。往古河尻の嶋々、皆住吉これを領す。」 (田中卓「再び八十嶋祭について」 (前掲書) より引用一とあり、祭祀の場が河口に多くある嶋 (= 中州) の浜辺であったことがわかる。八十嶋 (単に多くの嶋の意) については『出雲国風土記』にも言霊を得ようとして唾の皇子を連れていく話がある。
- 143 吹田市立博物館編集・発行「五反島遺跡—南吹田下水道処理場増設に伴う発掘調査の成果から—」『開館 10 周年記念特別展 川の古代祭祀—五反島遺跡を考える』、2002 年。
- 144 榎村寛之「斎宮と水の祭祀」日本考古学協会前掲書 (48)、p. 219。
- 145 奈良文化財研究所前掲書 (9)。
- 146 中村・尼崎前掲書 (11)。
- 147 奈良文化財研究所前掲書 (9)。
- 148 小野前掲書 (7)、p. 20。
- 149 本中前掲論文 (18)。
- 150 笠井前掲論文 (85)、pp. 1-15。
- 151 笠井前掲論文 (85)。
- 152 奈良文化財研究所編集・発行「佐紀池の調査 (第 101 次)」『昭和 51 年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』、1977 年、pp. 29。
- 153 宋佳音「庭園における「蓬莱」の展開と変遷に関する日中比較—中国皇家園林と日本の古代庭園を中心に—」京都芸術大学大学院学位論文、2019 年。
- 154 洪光杓、李赫宰「古代韓国庭苑の園地に関する研究」栗野隆編『日本庭園学会全国大会シンポジウム・研究発表資料集』平成 26 年度、日本庭園学会、2014 年
- 155 松村博司・山中裕校注『日本古典文学大系 75・76 榮花物語 上・下』岩波書店、1965 年をテキストに使用。

-
- 156 鈴木久男「発掘遺構から見た平安時代庭園」奈良文化財研究所前掲書 (43)。
- 157 杉山信三「法成寺建築配置図 (試案)」『院家建築の研究』吉川弘文館、1981 年、P. 396。京都市平安京創生館展示パネル参照。
- 158 清水擴「平等院伽藍の構成と性格 (法成寺の伽藍とその特色)」東京工芸大学紀要 Vol. 8、No. 1、1985 年。
- 159 『扶桑略記』第廿九後冷泉 治暦三年十月五日庚戌の条。
- 160 杉本宏「鳳凰堂阿弥陀浄土図と平等院庭園」日本庭園学会編集・発行『日本庭園学会誌』3、2-9、1995 年。
- 161 清水前掲論文 (158)。
- 162 杉山信三前掲書 (157)。
- 163 上原前掲書 (3)、pp. 51-52 より引用。
- 164 森蘊著『寝殿造系庭園の立地と考察』編集・発行奈良国立文化財研究所、1962 年。
- 165 高宮さやか「古代庭園における島と州浜」京都芸術大学大学院紀要第 1 号、2021 年の編入にあたり、冒頭にあった本論文の序章と重複する内容を削除し、一部章・節の編成を簡素化した。また読みにくい文章に若干の添削を行った。図版の差し替えが 1 枚ある (図 52)。
- 166 高宮前掲論文 (165) の第 1 章の第 1 節、第 2 節、第 3 節を統合。
- 167 日本考古学協会前掲書 (48)、p. 214。
- 168 平泉町教育委員会編集・発行『毛越寺庭園発掘調査報告書』、1985～1989 年。仲隆裕前掲論文 (112)。
杉本宏「平等院庭園の整備」日本庭園学会編集・発行『日本庭園学会誌』16、2007 年。
- 169 岩永省三「奈良時代庭園の造形意匠」金子編前掲書 (5) 所収、pp. 122-123。
- 170 森前掲書 (13)、p. 80。
- 171 相賀徹夫『探訪日本の庭 6 京都 (二) 洛中・洛北』小学館、1979 年、カラー p. 22。
- 172 青森県弘前市教育委員会編集・発行『大石武学流庭園群名称調査報告書』、2019 年、p. 24。
(株)環境事業計画研究所『平成 29 年 8 月「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」文化財庭園保存技術 研修報告書—成田家庭園・対馬家庭園・丹藤家庭園・須藤家庭園—』文化財庭園保存技術者協議会、2017 年、p. 5。
- 173 上原前掲書 (3)、p. 55。
- 174 上原前掲書 (3)、p. 27 より引用。
- 175 上原前掲書 (3)、p. 64 より引用。
- 176 上原前掲書 (2)、p. 110【三尊石】の項。
- 177 上原前掲書 (3) p. 55 より引用。
- 178 高宮さやか「日本庭園の底流にあるアニミズム」京都造形芸術大学大学院修士論文、2020 年。
- 179 坂本ほか前掲書 (36)、p. 124 より引用。
- 180 上原前掲書 (2) p. 78【呉橋】の項より引用。
- 181 森前掲書 (13)、p. 86 より引用。
- 182 坂本ほか前掲書 (36)、p. 148 より引用。
- 183 上原前掲書 (2)、p. 385 より引用。
- 184 奈良文化財研究所前掲書 (9)、p. 245。
- 185 奈良文化財研究所前掲書 (9)、pp. 257-262、pp. 343-354。
- 186 奈良国立文化財研究所前掲報告書 (99)。
- 187 奈良国立文化財研究所前掲書 (19)、p. 70。

-
- 188 平泉町教育委員会編集・発行『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書―第13次調査―岩手県平泉町文化財調査報告書第26集』、1991年。
- 189 古代学協会・古代学研究所前掲書(98)、長宗繁一・鈴木久男執筆部。
- 190 岩永前掲書(169)、pp. 103-106。金子前掲論文(8)、p. 168。
- 191 田中淡前掲論文(6)、p. 65。
- 192 小野前掲書(7)。
- 193 岩永前掲論文(169)、p. 114。
- 194 岩永前掲論文(169)、p. 122。
- 195 田中淡前掲論文(6)、p. 65。
- 196 金子前掲論文(8)、p. 168、p. 173。
- 197 田中淡前掲論文(6)。
- 198 奈良文化財研究所前掲書(9)、p. 259、p. 347より引用。
- 199 奈良文化財研究所前掲書(9)、p. 25、pp. 19-29、p. 440。
- 200 中村・尼崎前掲書(11)、p. 24。
- 201 注(200)に同じ。
- 202 森前掲書(13)、pp. 95-96。
- 203 中村・尼崎前掲書(11)、p. 20。
- 204 田中正大前掲書(14)、p. 80。
- 205 多田前掲論文(127)、p. 209。
- 206 小林信明『新釈漢文大系第22巻列子』明治書院、1967年、p. 215より。
- 207 入矢義高・森鹿三訳『中国古典文学大系第21巻 洛陽伽藍記・水経注(抄)』平凡社、1974年、p. 21。
- 208 上原前掲書(2)、p. 385より引用。
- 209 奈良文化財研究所前掲書(9)、p. 345。
- 210 奈良文化財研究所前掲書(9)、p. 346。
- 211 紀要に用いた図をより分かりやすい断面図に変更した。
- 212 平泉町前掲書(115)第13次調査、p. 17、p. 36。
- 213 古代学協会・古代学研究所前掲書(98)、p. 558。
- 214 倉野前掲書(29)、1991年。
- 215 倉野前掲書(29)、pp. 22-23より引用。下線筆者加筆。
- 216 岡田精司「即位儀礼としての八十島祭」山折哲雄・宮本袈裟雄編『日本歴史民俗論集9』吉川弘文館、1994年。
- 217 倉野前掲書(29)、p. 24より引用。
- 218 倉野前掲書(29)、p. 13より引用。
- 219 倉野前掲書(29)、p. 23より引用。
- 220 倉野前掲書(29)、p. 24より引用。
- 221 佐竹前掲書(39)。()は筆者加筆。
- 222 佐竹前掲書(39)。()は筆者加筆。
- 223 新村出前掲書(42)。
- 224 中村・尼崎前掲書(11)。
- 225 中村・尼崎前掲書(11)、p. 133。
- 226 尼崎博正談。2020年9月、於京都芸術大学研究会。
- 227 岸前掲書(105)。
- 228 『作庭記』『築山庭造伝』などに「池は海をまねぶ」といった記述がある。
- 229 萩原義雄『日本庭園学の源流『作庭記』における日本語研究』勉誠出版、2011年。谷村家所蔵本を底本とする。
- 230 萩原前掲書(229)、p. 12。下線は筆者加筆。

-
- ²³¹ 萩原前掲書 (229)、p. 150。
- ²³² 上原前掲書 (2)、p. 384 より引用。下線は筆者加筆。
- ²³³ 萩原前掲書 (229)、p. 151 より引用。
- ²³⁴ 奈良文化財研究所前掲書(9)、pp. 257-262、pp. 343-354。
- ²³⁵ 栄原永遠男・高島幸次『古代なにわの輝き 天皇と大阪～象徴としての八十島祭』産経新聞大阪本社、2020 年。
- ²³⁶ 岡田前掲論文 (216)。
- ²³⁷ 田中卓「八十島祭の研究」『神社と祭祀 田中卓著作集 11-1』国書刊行会、1994 年。
- ²³⁸ 関白藤原師通の命により大江匡房が記録した朝廷行事の詳細、いわば平安時代の有職故実書。1111 年成立。
- ²³⁹ 岡田前掲論文 (216)。
- ²⁴⁰ 岡田前掲論文 (216)。
- ²⁴¹ 「古語拾遺 神代」塙保己一『群書類従・第二十五輯雑部』続群書類従完成会、1933 年、p. 7。
- ²⁴² 高島前掲書 (235)。
- ²⁴³ 田中卓前掲論文 (237) pp. 226-231。
- ²⁴⁴ 平安時代末期、文治年間の歌学書。
- ²⁴⁵ 昭和 24 年、大阪生まれ。専門は日本近世史・天神信仰史。大阪大学招聘教授、大阪天満宮文化研究所員兼務。平成 24 年大阪市市民表彰 (文化功労)。高島前掲書 (235) より。
- ²⁴⁶ 高島前掲書 (235)、p. 54。
- ²⁴⁷ 諸橋轍次・渡辺末吾・鎌田正・米山寅太郎著『新漢和辞典 (四訂版)』大修館書店、1975 年、p. 490。
- ²⁴⁸ 諸橋他前掲書 (247)、p. 275。
- ²⁴⁹ 倉野前掲書 (29)、p. 20 より引用。
- ²⁵⁰ 高宮前掲論文 (178)。御袍に州浜紋が追加されたのは室町時代、即位式での着用は明治からである。
- ²⁵¹ 坂本ほか前掲書 (139)、p. 204 より引用。
- ²⁵² 栄原・高島前掲書 (235)、p. 6。
- ²⁵³ 高宮さやか『『作庭記』の底流にあるアニミズム』京都芸術大学大学院紀要第 2 号、2021 年の本論文編入にあたり、旧第 1 章の重複部分を削除し、要約をおこなった。
- ²⁵⁴ 旺文社『英和中辞典』、1975 年、Animism の項。
- ²⁵⁵ 旺文社前掲書 (254) 同項。
- ²⁵⁶ 長谷部八朗「アニミズムとアニマティズムのあいだ」駒沢女子大学日本文化研究所編集・発行『日本文化研究』第八号特集「日本的アニミズムの現代」、2009 年。
- ²⁵⁷ 佐々木俊道「『日本的アニミズムの現代』について」、駒沢女子大学日本文化研究所前掲書 (256)、他。
- ²⁵⁸ 梅原猛「アニミズム再考」国際日本文化センター紀要『日本研究』(1)、1989 年。
- ²⁵⁹ 岩田慶治『草木虫魚の人類学』講談社、1991 年。
- ²⁶⁰ 重森三玲・重森完途『日本庭園史大系第 31 巻上古・日本庭園源流 (二)』、社会思想社、1975 年、序文。
- ²⁶¹ 重森三玲前掲書 (260)。
- ²⁶² 高宮前掲論文 (253) の第 2 章に相当。本論文では次節の冒頭に編入。
- ²⁶³ 外山英策『室町時代庭園史』思文閣、1934 年、p. 6。
- ²⁶⁴ 木村三郎『『作庭記』研究の構図』日本造園学会編集・発行『造園雑誌』56 (5)、1993 年、pp. 1-6。

-
- 265 飛田範夫「造園古書の系譜」日本造園学会編集・発行『造園雑誌』47 (5)、1983 年、pp. 49-54。
- 266 飛田範夫前掲論文(265)。
- 267 萩原前掲書 (229)、pp. 2-52 谷村家本の翻刻を筆者が計測。
- 268 上原前掲書 (3)、p. 63。
- 269 上原前掲書 (3)、p. 63。
- 270 上原前掲書 (3)、p. 65。
- 271 上原前掲書 (3)、p. 65。
- 272 上原前掲書 (3)、p. 65。
- 273 上原前掲書 (3)、p. 63。
- 274 上原前掲書 (3)、p. 63。
- 275 () 内、今回加筆。
- 276 上原前掲書 (3)、p. 63。下線筆者。
- 277 上原前掲書 (3)、p. 66。下線筆者。
- 278 萩原前掲書 (227)。
- 279 龍居松之助『造園叢書第廿三卷 日本造庭法秘傳』雄山閣、1931 年。本書は昭和 13 年 (1938) の谷川家蔵本の写真複製版が出る前に出版されたもので、龍居はこの中に『作庭記』を掲載して「ごぼん」としている。
- 280 江山正美「作庭記の形學的研究」日本造園学会編集・発行『造園研究』、1940 年、p. 83。「従って作庭記の説く石組みの根本手法は、先角のある主石を立てて次の石をその石と格子目や碁盤目になるやうに組み合わせよと云ふのである。」
- 281 『群書類従・第十九輯』、続群書類従完成会、1932 年。
- 282 田中正大前掲書 (14)、pp. 55-56。
- 283 龍居前掲書 (279)、p. 51。
- 284 森蘊『平安時代庭園の研究』桑名文星堂、1940 年、註記、p. 159。
- 285 森蘊『NHK ブックス「作庭記」の世界』日本放送出版協会、1986 年、p. 122。
- 286 田村剛『作庭記』相模書房、1964 年、p. 205-206。
- 287 田中正大前掲書 (14)、pp. 55-63。
- 288 武居二郎『作庭記 現代語訳と解説』、京都芸術短期大学ランドスケープデザイン研究室武居二郎教授定年講義実行委員会、1995 年
- 289 本論文の前回発表時に注釈に記載していた各著述者の引用文を、今回は (表 8) を作成して掲載した。注釈は引用文献の記載にとどめる。→ (表 8)
- 290 近藤公夫「作庭記の「こはんにしたかひて」に関する一考察」日本造園学会編集・発行『造園雑誌』34 (3)、1971 年、pp. 41-44。
- 291 近藤公夫「“SAKU-TEI-KI” in English」日本造園学会、『造園雑誌』39 (3)、1976 年
- 292 斉藤勝雄『斉藤勝雄作庭技法集成 第一巻 日本庭園伝統の基盤』河出書房新社、1976 年、p. 56。
- 293 オギュスタン・ベルク『風土の日本—自然と文化の通態』筑摩書房、1975 年、pp. 222-223。
- 294 山本学治『森のめぐみ—木と日本人』筑摩書房、1975 年、pp. 222-223。
- 295 水尾比呂氏「石組と石庭」相賀徹夫編『探訪日本の庭 7 京都 (三) 洛西』小学館、1978 年、p. 30。
- 296 久恒秀治『作庭記秘抄』誠文堂新光社、1979 年、p. 31。
- 297 木村三郎『「作庭記」新考』日本造園学会編集・発行『造園雑誌』47 (4)、1984 年、p. 242。
- 298 飛田範夫『SD 選書 193「作庭記」からみた造園』鹿島出版会、1985 年、p. 162。
- 299 中村・尼崎前掲書 (11)、p. 219。

-
- 300 萩原前掲書 (229)。
- 301 針ヶ谷鐘吉『『作庭記』中の「こはん」の意義について』日本造園学会編集・発行『造園雑誌』、1966年、p. 7。
- 302 上原前掲書 (3)。
- 303 上原前掲書 (3)、p. 56。
- 304 上原前掲書 (3)、p. 63。
- 305 上原前掲書 (3)、p. 60。
- 306 上原前掲書 (3)、p. 63。
- 307 『世界大百科事典』平凡社、1965年。「擬人観」の項。
J. ピアジェ著、中垣啓訳『ピアジェに学ぶ認知発達の科学』、北大路書房、2007年、pp. 123-125。
- 308 蘭香代子「童話に表現されるアニミズムの心理」、門前豊志子「子どもとアニミズム」駒沢女子大学日本文化研究所前掲書 (256) 所収。
- 309 上原前掲書 (3)、p. 62。
- 310 辻惟男「日本美術に流れるアニミズム」『辻惟男集2「あそび」とアニミズムの美術』、岩波書店、2013年。
- 311 辻前掲書 (310)。
- 312 長谷部前掲論文 (256)。
- 313 長谷部前掲論文 (256)。
- 314 渡辺洋子『妖精の棲む島アイルランド』三弥井書店、2020年。
- 315 『世界大百科事典』平凡社、1965年、「擬人観」の項。
J. ピアジェ前掲書 (306)、pp. 123-125。
- 316 J. Piaget 著・大伴茂訳『ピアジェの臨床心理学 II 児童の世界観』東京同文書院、1972年
- 317 蘭香代子「童話に表現されるアニミズムの心理」、門前豊志子「子どもとアニミズム」駒沢女子大学日本文化研究所前掲書 (256)。
- 318 梅原前掲書 (258)。
- 319 岩田前掲書 (259)。
- 320 松本直子『縄文のムラと社会』岩波書店、2005年。小杉康編『縄文時代の考古学8 生活空間』同成社、2009年。
- 321 中西進「日本美術に流れるアニミズム」中西進編者代表『梅原猛古稀記念論文集 人類の創造へー梅原猛との交点から』中央公論社、1995年、p. 302。
- 322 中西前掲書 (321)、p. 302。
- 323 坂本ほか前掲書 (37)、p. 116。
- 324 宇治谷孟『続日本紀 (上) 全現代語訳』講談社、1995年、pp. 75-76。
- 325 宇治谷孟『続日本紀 (中) 全現代語訳』講談社、1995年、pp. 219-220。
- 326 奈良文化財研究所編『図説 平城京事典』(株) 柊風社、2010年、p. 82。
- 327 宇治谷孟『続日本紀 (下) 全現代語訳』講談社、1995年、p. 396。
- 328 上原前掲書 (3)、p. 51。
- 329 武田祐吉・佐藤謙三『読み下し日本三代実録 (下巻)』戎光祥出版、2009年、p. 236。
- 330 山下信一郎「儀式の場としての庭園一内裏花宴及び行幸儀礼からみた一」奈良文化財研究所編前掲書 (43)、pp. 242-249。
- 331 梅本綾、穂積裕昌等の論考がある。
- 332 奈良文化財研究所を筆頭に、各地の埋蔵文化財研究所の論考がある。
- 333 河本武敏をはじめ山下信一郎らの論考がある。
- 334 仲隆裕をはじめとする論考がある。

-
- 335 折口信夫、倉林正次、山中裕、大日方克己らの論考がある。
- 336 網伸也「日本庭園の萌芽をみる—考古学からみた飛鳥・奈良時代庭園の変遷—」近畿大学民俗学研究所編集・発行『民俗文化 No. 31』、2019 年。
- 337 太宰府天満宮では正月 7 日に火をつけた大きな松明で箒で掃くように境内を掃く行事があり、これは境内を火で清める意味がある。同様の行事は各地にあり、水、火、馬、牛などが用いられる。
- 338 折口信夫前掲書 (67)、p. 18。
- 339 倉林正次『饗宴の研究—儀礼編』桜楓社、1969 年、pp. 290-293。
- 340 坂本ほか前掲書 (36)、p. 192。
- 341 大日方克己『古代国家と年中行事』講談社、2008 年、pp. 130-168。
- 342 宇治谷前掲書 (324)、p. 88。
- 343 大日方克己前掲書 (341)。
- 344 河原武敏「古典文学の庭園描写に関する研究—「栄花物語 (1) (2)」」日本造園学会編集・発行『造園雑誌』46 (5)、1983 年。
- 345 奈良文化財研究所編前掲書 (326)、p. 527。
- 346 森蘊「中世以降に於ける寝殿造系庭園」『寝殿造系庭園の立地的考察』奈良国立文化財研究所、1962 年。
- 347 坂本ほか前掲書 (37)、p. 194。
- 348 『栄花物語』寛弘 4 年の藤原道長邸など
- 349 宇治谷前掲書 (324)、P. 287
- 350 榎村寛之「史料からみた曲水の宴」奈良文化財研究所前掲書 (9)、p. 440。
- 351 南孝雄「寝殿造成立前夜の貴族住宅—右京の邸宅遺跡から—」京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館編集・発行『リーフレット京都 No. 298 考古アラカルト 59』、2013 年。
- 352 山中裕『平安朝の年中行事』塙選書、1972 年、pp. 23-33。
- 353 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典』岩波書店、1974 年。「あへ」の項【饗へ】食物を造ってもてなす。【名】【饗】もてなし。饗応。
- 354 坂本太郎ほか前掲書 (36)、p. 348。
- 355 承和 2 年 (835) に仁明天皇が神泉苑で行った記事などがある。
- 356 折口前掲書 (67)。
- 357 武田・佐藤前掲書 (329)、p. 158 より引用。
- 358 京都芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター「庭園学講座 XXVI 天皇と近現代の庭園—記念物保護制度 100 年」における講義。
- 359 折口信夫「和歌の発生と諸藝術との関係」『折口信夫全集第 17 巻』中央公論社、1956 年、p. 78-89。
- 360 折口信夫「神楽記」『折口信夫全集第 17 巻』中央公論社、1956 年、p. 266。
- 361 折口前掲書 (67)、p. 37。
- 362 上原前掲書 (3)、p. 51。
- 363 東院庭園、伝称徳天皇御山荘跡、平等院庭園、神泉苑、毛越寺庭園などがその例である。
- 364 黑板勝美編『新訂増補國史大系第十二巻 扶桑略記・帝王編年記』吉川弘文館、1932 年。
- 365 杉本宏「平等院庭園を考える」日本庭園学会創立 30 周年記念公開オンラインセミナー「庭と園に学ぶ」令和 4 年 2 月 21 日講義にて。
- 366 杉本前掲講義 (365)。

-
- 367 杉本前掲論文 (160)。
- 368 杉本前掲論文 (160)、p. 8。
- 369 『扶桑略記』第廿九後冷泉 治暦三年十月五日庚戌の条。
- 370 杉本前掲論文 (160)、p. 5。
- 371 観自在王院跡、無量光院跡、浄瑠璃寺庭園等。
- 372 山中前掲書 (352)。
- 373 山中前掲書 (352)、p. 146、他。
- 374 白幡洋三郎「島台考一序説」『表現における越境と混淆』36、国際日本文化研究センター、2005 年。
- 375 錦仁「和歌における州浜と庭園」新潟大学『文学』7 (3)、2006 年。
錦仁「和歌に詠まれた庭園—庭園と和歌の関係をめぐって—」奈良文化財研究所編前掲書 (43) 所収。
- 376 天皇即位の御装束は奈良時代聖武天皇から幕末の孝明天皇まで唐風の装束であったが、明治になって本朝風に改め、このとき平安時代に定められていた御袍が採用された。明治以降、最高の御装束となっている。
- 377 井筒雅風「天皇の御装束」日本繊維学会編集・発行『日本の文化と繊維』Vol. 51, No. 2、1995 年。
- 378 小島弘嗣「石組造形論」京都芸術大学大学院、2022 年。
- 379 重森三玲・重森完途前掲書 (260)、序文。
- 380 上原前掲書 (3)、p. 73。
- 381 上原前掲書 (3)、p. 39 53、75、76。
- 382 『鹿苑日録』『蔭涼軒日録』のほか進士五十八『日本庭園の特質—様式・空間・景觀』東京農業大学出版会、1987 年。
- 383 正木晃「現代アニメーションにみるアニミズムの諸相」駒沢女子大学日本文化研究所前掲書 (256)、p. 81。
- 384 倉野前掲書 (29)、p. 39。
- 385 倉野前掲書 (29)、p. 155。
- 386 『文徳天皇実録』齊衡 3 年 (856) 12 月の条。
- 387 京都市埋蔵文化財研究所前掲書 (119)、p. 11。新木直人「下鴨神社と糺の森」『下鴨神社 糺の森』、ナカニシヤ出版、1993 年。
- 388 京都市埋蔵文化財研究所前掲書 (119)、p. 12。
- 389 (宗) 賀茂御祖神社前掲書 (119)、p. 43。
- 390 重森三玲・重森完途前掲書 (260)。
- 391 坂本太郎ほか前掲書 (139)、p. 154、下線筆者。
- 392 森田悌校注『続日本後紀 下 全現代語訳』講談社、2010 年、p. 254。
- 393 このような心情を脳科学の分野からアプローチした研究に角田正信の『日本人の脳』がある。角田正信『日本人の脳』大修館書店、1978 年。氏の研究成果は世界の多くの民族が虫の音を雑音として聴いており、この時右脳が働くのに対し、日本人は虫の音を言語として聴いており言語野がある左脳が働いていることを明らかにしたものである。
- 394 松村・山中前掲書 (155)『榮花物語 上』、P. 296 より引用。
- 395 山下前掲論文 (330)。
- 396 中西前掲論文 (321) より引用。
- 397 宇治谷前掲書 (324)、pp. 281-282。

³⁹⁸ 坂本太郎ほか前掲書（36）、p. 368。

³⁹⁹ 『古事記』仁徳紀の「枯野」の話や『播磨国風土記』の楠でつくった舟「速鳥」の話。

⁴⁰⁰ 平川祐弘『神道とは何か―小泉八雲のみた神の国日本』錦正社、2018年、p. 11。

⁴⁰¹ ラフカディオ・ハーン著柏倉俊三訳注『神国日本―解明への一試論/東洋文庫 292』平凡社、1976年、「七 神道の発展」。

⁴⁰² ハーン前掲書（401）「二 珍しさと魅力」p. 17。

参考文献（発行年・五十音順）

*（独）奈良文化財研究所と（公財）京都市埋蔵文化財研究所は法人格を省略して記載

*奈良県立橿原考古学研究所は奈良県立を省略し橿原考古学研究所と記載

龍居松之助『造園叢書第廿三巻 日本造庭法秘傳』雄山閣、1931 年

黒板勝美編『新訂増補國史大系 第十二巻 扶桑略記 帝王編年記』吉川弘文館、1932 年

塙保己一編「作庭記」『群書類従・第十九輯』、続群書類従完成会、1932 年

塙保己一編「古語拾遺 神代」『群書類従・第二十五輯雑部』 続群書類従完成会、1933 年

外山英策『室町時代庭園史』思文閣、1934 年

江山正美「作庭記の形學的研究」日本造園学会編集・発行『造園研究』、1940 年

森蘊『平安時代庭園の研究』桑名文星堂、1940 年

森蘊『日本の庭園』河原書店、1950 年

折口信夫「日本芸能史序説」『折口信夫全集第 17 巻』中央公論社、1956 年

折口信夫「和歌の発生と諸藝術との関係」『折口信夫全集第 17 巻』中央公論社、1956 年

折口信夫「神楽記」『折口信夫全集第 17 巻』中央公論社、1956 年

森蘊『寝殿造系庭園の立地的考察』奈良国立文化財研究所、1962 年

笠井昌昭「上古の池—日本庭園文化史序説—」同志社大学日本文化史研究会編集・発行『文化
史研究』16、1964 年

田村剛『作庭記』相模書房、1964 年

平凡社編『世界大百科事典』平凡社、1965 年

針ヶ谷鐘吉「『作庭記』中の「こはん」の意義について」日本造園学会編集・発行『造園雑
誌』、1966 年

小林信明『新釈漢文大系第 22 巻列子』明治書院、1967 年

田中正大『SD 選書 23 日本の庭園』鹿島出版会、1967 年

倉林正次『饗宴の研究—儀礼編』桜楓社、1969 年

近藤公夫「作庭記の「こはんにしたかひて」に関する一考察」日本造園学会編集・発行『造園

雑誌』34 (3)、1971 年

奈良文化財研究所編集・発行「小墾田宮跡推定地および豊浦寺跡の調査」『飛鳥・藤原宮発掘

調査概報 I 』、1971 年

J. Piaget 著・大伴茂訳『ピアジェの臨床心理学 II 児童の世界観』東京同文書院、1972 年

山中裕『平安朝の年中行事』塙選書、1972 年

岡山県教育委員会編集・発行『岡山県埋蔵文化財報告書 (3) 中国縦貫自動車道建設に伴う発

掘調査 1』、1973 年

入矢義高・森鹿三訳『中国古典文学大系第 21 巻洛陽伽藍記・水経注 (抄)』平凡社、1974 年

大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典』岩波書店、1974 年

オギュスタン・ベルク『風土の日本—自然と文化の通態』筑摩書房、1975 年

重森三玲・重森完途『日本庭園史大系第 31 巻上古・日本庭園源流 (二)』社会思想社、

1975 年

藤原武二・宮本長二郎「平城京の遺跡 左京一条三坊十五・十六坪 (6AFB-F~J 地区)」奈良

文化財研究所編集・発行『奈良文化財研究所学報第 23 冊』、1975 年

諸橋轍次・渡辺末吾・鎌田正・米山寅太郎著『新漢和辞典 (四訂版)』大修館書店、1975 年

旺文社編『英和中辞典』旺文社、1975 年

山本学治『森のめぐみ—木と日本人』筑摩書房、1975 年

檀原考古学研究所編『纏向』桜井市教育委員会、1976 年

近藤公夫「“SAKU-TEI-KI” in English」日本造園学会編集・発行『造園雑誌』39 (3)、

1976 年

斉藤勝雄『斉藤勝雄作庭技法集成 第一巻 日本庭園伝統の基盤』河出書房新社、1976 年

新村出編『広辞苑第二版補訂版』岩波書店、1976 年

ラフカディオ・ハーン著、柏倉俊三訳注『神国日本—解明への一試論/東洋文庫 292』平凡

社、1976 年

奈良文化財研究所編集・発行「佐紀池の調査（第101次）」『昭和51年度平城宮跡発掘調査部
発掘調査概報』、1977年

奈良文化財研究所編集・発行「東院園池と周辺の調査（第99次）」『昭和51年度平城宮跡発掘
調査部発掘調査概報』、1977年

上原敬二編『造園大辞典』加島書店、1978年

水尾比呂氏「石組と石庭」相賀徹夫編『探訪日本の庭7 京都（三）洛西』小学館、1978年

相賀徹夫『探訪日本の庭6 京都（二）洛中・洛北』小学館、1979年

久恒秀治『作庭記秘抄』誠文堂新光社、1979年

杉山信三「法成寺建築配置図（試案）」『院家建築の研究』吉川弘文館、1981年

上原敬二編『解説山水並に野形図・作庭記』加島書店、1982年

河原武敏「古典文学の庭園描写に関する研究―「栄花物語（1）（2）」」日本造園学会編集・発
行『造園雑誌』46（5）、1983年

木村三郎「「園池司」という事」日本造園学会編集・発行『造園雑誌』47巻5号、1983年

飛田範夫「造園古書の系譜」日本造園学会編集・発行『造園雑誌』47（5）、1983年

木村三郎「『作庭記』新考」日本造園学会編集・発行『造園雑誌』47（4）、1984年

鈴木大拙「日本的靈性」『1944 中公バックス日本の名著43 清沢満之・鈴木大拙』中央公論
社、1984年

奈良文化財研究所「平城京一条北辺四坊六坪（伝称徳天皇御山荘跡）の発掘調査平城第151-
26次調査』現地説明会資料、1984年

岩手県平泉町教育委員会編集・発行『毛越寺庭園発掘調査報告書』、1985～1989年

清水擴「平等院伽藍の構成と性格（法成寺の伽藍とその特色）」東京工芸大学紀要Vol. 8、
No. 1、1985年

（財）糺森顕彰会『「鴨社古絵図展」解説』（有）糺書房、1985年

飛田範夫『SD選書193「作庭記」からみた造園』鹿島出版会、1985年

奈良文化財研究所編集・発行『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告書』、1986年

平泉町教育委員会編集・発行『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書―第7次調査』、

1986年

森蘊『NHK ブックス「作庭記」の世界』日本放送出版協会、1986年

進士五十八『日本庭園の特質―様式・空間・景観』東京農業大学出版会、1987年

奈良国立文化財研究所編集・発行「石神遺跡第6次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報17』、

1987年

平泉町教育委員会編集・発行『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書―9次調査』、

1987年

岸俊男「島雑考」『日本古代文物の研究』塙書房、1988年

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 編集・発行『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書

第8集三ツ寺Ⅰ遺跡―古墳時代居館の調査(本編)』1988年

平泉町教育委員会編集・発行『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書―11次調査』、

1988年

上原敬二編『築山庭造伝前編解説』加島書店、1989年

梅原猛「アニミズム再考」国際日本文化センター紀要『日本研究』(1)、1989年

樫原考古学研究所編集・発行『奈良県遺跡調査概報1988年度』、1989年

平泉町教育委員会編集・発行『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書―12次調査』、

1989年

桜井市文化財協会編集・発行『上之宮遺跡第5次調査概報 - 桜井市内埋蔵文化財1989年度発

掘報告書2』、1990年

ラフカディオ・ハーン仙北谷晃一訳「日本の庭で」平川祐弘編『神々の国の首都』講談社、

1990年

岩田慶治『草木虫魚の人類学』講談社、1991年

岩本次郎「楊梅宮考」『甲子園短期大学紀要』第10号、1991年

菅野成寛「平泉無量光院考」岩手史学会編『岩手史学研究』新岩手社、1991年

京都市埋蔵文化財研究所編集・発行『高速鉄道東西線工事に伴う史跡旧二条離宮内の第2次発

掘調査2～4期調査終了報告書』、1991年

佐藤昌『中国造園史 上巻』日本公園緑地協会、1991年

(宗)平等院編集・発行『平等院 阿弥陀堂中島発掘調査報告書』、1991年

平泉町教育委員会編集・発行『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書—第13次調査—

岩手県平泉町文化財調査報告書第26集』、1991年

辰巳和弘編『引佐町の古墳文化Ⅴ：天白磐座遺跡』引佐町教育委員会、1992年

本中眞「平城宮東院庭園に見る意匠・工法の系譜について」日本造園学会編集・発行『造園雑

誌』55(5)、1992年

三重県埋蔵文化財センター編集・発行『三重県埋蔵文化財報告書99-3 城之越遺跡—三重県上

野市比土—』、1992年(2004デジタル版)

牛川喜幸「古代庭園の研究—水をめぐる造形とその系譜—」京都造形芸術大学博士論文、

1993年

橿原考古学研究所編集・発行『奈良県遺跡調査概報1992年度』、1993年

木村三郎「『作庭記』研究の構図」日本造園学会編集・発行『造園雑誌』56(5)、1993年

岡田精司「即位儀礼としての八十嶋祭」山折哲夫、宮本袈裟雄編『日本歴史民俗論集9 祭儀と

呪術』、吉川弘文館、1994年

古代学協会・古代学研究所編集『平安京提要』角川書店、1994年

白川静『字訓』平凡社、1995年

田中卓『神社と祭祀 田中卓著作集Ⅱ—1』(株)国書刊行会、1994年

井筒雅風「天皇の御装束」日本繊維学会編集・発行『日本の文化と繊維』Vol. 51, No. 2、

1995年

京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館編集・発行「リーフレット京都」No. 73、1995年

京都市埋蔵文化財研究所編集・発行『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』、1995年

杉本宏「鳳凰堂阿弥陀浄土図と平等院庭園」日本庭園学会編集・発行『日本庭園学会誌』3,

2-9、1995 年

武居二郎『作庭記 現代語訳と解説』京都芸術短期大学ランドスケープデザイン研究室武居二

郎教授定年講義実行委員会、1995 年

中西進「日本美術に流れるアニミズム」中西進編者代表『梅原猛古稀記念論文集 人類の創造

へー梅原猛との交点から』、中央公論社、1995 年

奈良市教育委員会編集・発行『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成 6 年度』、1995 年

橋本義則『平安宮成立史の研究』塙書房、1995 年

和久田薫、礼埜耕三著、交野市教育委員会、交野市文化財事業団編・発行『星田歴史風土

記』、1995 年

明石市立文化博物館『明石市文化財調査報告 2：明石市藤江別所遺跡―藤江ポンプ場建設工事

に伴う発掘調査報告書―』明石市教育委員会、1996 年

日本考古学協会三重県実行委員会『シンポジウム 1 水辺の祭祀』、1996 年

榎村寛之「斎宮と水の祭祀」日本考古学協会三重県実行委員会編集・発行『シンポジウム 1 水

辺の祭祀』、1996 年

佐竹秀雄『庭と萬葉集』（株）トライ、1998 年

奈良文化財研究所編集・発行『発掘庭園資料 奈良国立文化財研究所史料 第 48 冊』、

1998 年

小口基實『韓国の庭苑』小口庭園グリーンエクステリア（有）、1999 年

金子裕之「嶋と神仙思想―7～9 世紀の庭園の系譜」国際日本文化研究センター『道教と東ア

ジア文化』13 巻、国際日本文化研究センター、2000 年

長野県埋蔵文化財センター・日本道路公団・長野県教育委員会編集・発行『長野県埋蔵文化財

センター発掘調査報告書 54 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 28

更埴条里遺跡・屋代遺跡群―総論編』、2000 年

新田町教育委員会編集・発行『新田町文化財調査報告書 新田東部遺跡群Ⅱ/新田東部工業団

地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書』第1、3分冊、2000年

小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』第二版第九巻、小学館、2001年

清野孝之「法華寺阿弥陀浄土院の調査―第312次」奈良文化財研究所『年報2000-Ⅲ』、

2001年

中村一・尼崎博正『風景をつくる』昭和堂、2001年

山下信一郎「平城京左京三条二坊二坪（長屋王邸）の調査―第303-8次」奈良文化財研究所編

集・発行『年報2000-Ⅲ』、2001年

岩永省三「奈良時代庭園の造形意匠」金子裕之編『古代庭園の思想』、角川書店、2002年

金子裕之編『古代庭園の思想』角川書店、2002年

吹田市立博物館編集・発行「五反島遺跡―南吹田下水道処理場増設に伴う発掘調査の成果から

―」『開館10周年記念特別展 川の古代祭祀―五反島遺跡を考える』、

2002年

多田伊織「ニワと王権―古代中国の詩文と苑」金子裕之編『古代庭園の思想』、角川書店、

2002年

(宗)兵主神社編集・発行『名勝兵主神社庭園保存整備報告書』、2002年

穂積裕昌『三重県埋蔵文化財調査報告115-16 一般国道23号中勢道路（8工区）建設事業に

伴う六大A遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2002年

三重県埋蔵文化財センター編集・発行『三重県埋蔵文化財調査報告115-16 一般国道23号中

勢道路（8工区）建設事業に伴う六大A遺跡発掘調査報告』、2002年

梅原猛「森の宗教と神道」賀茂御祖神社編『世界文化遺産 下鴨神社と糺の森』（株）淡交

社、2003年

橿原考古学研究所編集・発行『南郷遺跡群Ⅲ奈良県立橿原考古学研究所調査報告第74冊』、

2003年

仲隆裕「史跡名勝平等院庭園における洲浜整備」日本造園学会編集・発行『造園技術報告集』、2003 年

奈良文化財研究所編集・発行『奈良文化財研究所学報第 69 冊平城宮発掘調査報告 XV—東院庭園地区の調査—本文編』、2003 年

高瀬要一「奈良時代庭園の特色」奈良文化財研究所編集・発行『東アジアにおける古代庭園遺跡調査研究』、2004 年

高瀬要一「古代東アジア（中国・韓国・日本）の方池」奈良文化財研究所編集・発行『第 5 回中日韓風景園林学術検討会論文集』、2004 年

小野健吉「法華寺阿弥陀浄土院/浄土庭園の諸相」奈良文化財研究所編集・発行『奈良文化財研究所学報第 74 冊 古代庭園研究 I』奈良文化財研究所、2006 年

京都市埋蔵文化財研究所編集・発行『京都市埋蔵文化財研究所調査報告 史跡賀茂御祖神社境内』、2005 年

白幡洋三郎「島台考—序説」『表現における越境と混淆』36、国際日本文化研究センター、2005 年

月夜野町教育委員会編集・発行『上組北部遺跡群Ⅱ《矢瀬遺跡》埋蔵文化財発掘調査報告書』、2005 年

榎村寛之「史料からみた曲水の宴」奈良文化財研究所編集・発行『奈良文化財研究所学報第 74 冊 古代庭園研究 I』奈良文化財研究所、2006 年

錦仁「和歌における州浜と庭園」新潟大学『文学』7 (3)、2006 年

平泉町編集・発行『特別史跡 無量光院跡発掘調査報告書 3—第 17 次調査』、2006 年

穂積裕昌「古墳時代祭儀空間の成立—古墳時代の庭状遺構の評価をめぐって—」三重県埋蔵文化財センター編集・発行『研究紀要第 15-1 号—特集古墳時代』、2006 年

穂積裕昌「「ニワ」の淵源と城之越遺跡」奈良文化財研究所編集・発行『奈良文化財研究所学報第 74 冊 古代庭園研究 I』奈良文化財研究所、2006 年

J. ピアジェ著、中垣啓訳『ピアジェに学ぶ認知発達の科学』北大路書房、2007 年

杉本宏「平等院庭園の整備」日本庭園学会編集・発行『日本庭園学会誌』16、2007 年

大日方克己『古代国家と年中行事』講談社、2008 年

梅本綾「水辺の祭祀の諸相とその意義」天理大学考古学研究室編集・発行『古事 天理大学考古学研究室紀要 3』、2009 年

田中淡「中国庭園の初期的風格と日本古代庭園」奈良文化財研究所遺跡整備室『東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会報告書』奈良文化財研究所、2009 年

佐々木俊道「『日本のアニミズムの現代』について」

長谷部八朗「アニミズムとアニマティズムのあいだ」

正木晃「現代アニメーションにみるアニミズムの諸相」

門前豊志子「子どもとアニミズム」

蘭香代子「童話に表現されるアニミズムの心理」

(上記 5 本) 駒沢女子大学日本文化研究所編集・発行『日本文化研究』

第八号特集「日本のアニミズムの現代」、2009 年

(宗) 賀茂御祖神社編集・発行『紉の森整備報告書』、2010 年

奈良文化財研究所編『図説 平城京事典』(株) 柊風社、2010 年

岡田精司『新編神社の古代史』学生社、2011 年。

國下多美樹「長岡京の庭園―離宮と園池司―」

鈴木久男「発掘遺構から見た平安時代庭園」

錦仁「和歌に詠まれた庭園―庭園と和歌の関係をめぐって―」

山下信一郎「儀式の場としての庭園―内裏花宴及び行幸儀礼からみた―」

(上記 4 本) 奈良文化財研究所編集・発行『奈良文化財研究所学報第 86 冊研究論集 17 平安時代庭園の研究―古代庭園研究Ⅱ―』、2011 年

- 萩原義雄『日本庭園学の源流『作庭記』における日本語研究』勉誠出版、2011 年
- 桜井市纏向学研究センター編集・発行『桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書第 40 集纏向遺跡発掘調査書 3—トリノ南地区における発掘調査—』、2013 年
- 辻惟男「日本美術に流れるアニミズム」『辻惟男集 2「あそび」とアニミズムの美術』、岩波書店、2013 年
- 南孝雄「寝殿造成立前夜の貴族住宅—右京の邸宅遺跡から—」京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館編集・発行『リーフレット京都 No. 298 考古アラカルト 59』、2013 年
- 洪光杓、李赫宰「古代韓国庭苑の園地に関する研究」栗野隆編『日本庭園学会全国大会シンポジウム・研究発表資料集』平成 26 年度、日本庭園学会、2014 年
- 小野健吉『日本庭園の歴所と文化』吉川弘文館、2015 年
- 橿原考古学研究所編集・発行「史跡・名勝飛鳥京跡苑池第 8 次調査（飛鳥京跡第 174 次調査）」『奈良県遺跡調査概報 2013 年度(第二分冊)』、2015 年
- 桜井市纏向学研究センター編集・発行『桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書第 44 集 奈良県桜井市纏向遺跡発掘調査書 3—第 35 次 63 次 72 次調査—』、2015 年
- 和泉市教育委員会編集・発行『史跡池上曾根遺跡保存整備事業報告書 史跡池上曾根遺跡発掘調査報告書 2011～2013—史跡整備に伴う第 3 期発掘調査—』、2017 年
- (株)環境事業計画研究所『平成 29 年 8 月「次代の文化を創造する新進芸術家育成事業」文化財庭園保存技術研修報告書—成田家庭園・対馬家庭園・丹藤家庭園・須藤家庭園—』文化財庭園保存技術者協議会、2017 年
- 池田清隆『磐座百選 日本人の「岩石崇拝」再発見の旅』(株)出窓社、2018 年
- 平川祐弘『神道とは何か—小泉八雲のみた神の国日本』錦正社、2018 年
- 2019 青森県弘前市教育委員会編集・発行『大石武学流庭園群名称調査報告書』、2019 年
- 網伸也「日本庭園の萌芽をみる—考古学からみた飛鳥・奈良時代庭園の変遷—」近畿大学民俗学研究所編集・発行『民俗文化 No. 31』、2019 年

(宗)浄瑠璃寺編集・発行『特別名勝及び史跡 浄瑠璃寺庭園保存修理事業報告書Ⅰ（発掘調査編）』、2019年

宋佳音「庭園における「蓬莱」の展開と変遷に関する日中比較—中国皇家園林と日本の古代庭園を中心に—」京都芸術大学大学院学位論文、2019年

松村明編『大辞林』三省堂、2019年

檀原考古学研究所編集・発行「史跡・名勝飛鳥京跡苑池第13次調査（飛鳥京跡第182次調査）」『奈良県遺跡調査概報2019年度（第一分冊）』、2020年

栄原永遠男・高島幸次『古代なにわの輝き 天皇と大阪～象徴としての八十島祭』産経新聞大阪本社、2020年

桜井市教育委員会パンフレット

高宮さやか「日本庭園の底流にあるアニミズム」京都造形芸術大学大学院修士論文、2020年

奈良市教育委員会埋蔵文化財調査センター編「速報展示資料No.64」、2020年

渡辺洋子『妖精の棲む島アイランド』三弥井書店、2020年

杉本宏「庭園と考古学」京都芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター編集・発行『庭園学講座XXVⅡ文化財庭園の整備と考古学—庭園考古学へのいざない—』、2021年

他

『古事記』、六国史、『栄花物語』（成立年代順）

倉野憲司校注『古事記』岩波書店、2016年

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀（一）』岩波書店、1994年

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀（二）』岩波書店、1994年

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀（三）』岩波書店、1994年

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀（四）』岩波書店、1995年

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本書紀（五）』岩波書店、1995年

宇治谷孟『続日本紀（上）全現代語訳』講談社、1992 年

宇治谷孟『続日本紀（中）全現代語訳』講談社、1992 年

宇治谷孟『続日本紀（下）全現代語訳』講談社、1995 年

森田悌『日本後紀（上）全現代語訳』講談社、2006 年

森田悌『日本後紀（中）全現代語訳』講談社、2006 年

森田悌『日本後紀（下）全現代語訳』講談社、2007 年

森田悌『続日本後紀（上）全現代語訳』講談社、2010 年

森田悌『続日本後紀（下）全現代語訳』講談社、2010 年

黒板勝美『新訂増補国史大系 日本文徳天皇実録』1981 年

武田祐吉・佐藤謙三訳『読み下し日本三代実録（上巻）』戎光祥出版、2009 年復刻

武田祐吉・佐藤謙三訳『読み下し日本三代実録（下巻）』戎光祥出版、2009 年復刻

松村博司・山中裕校注『日本古典文学大系 75 榮花物語 上』岩波書店、1964 年

松村博司・山中裕校注『日本古典文学大系 76 榮花物語 下』岩波書店、1965 年

他

資料一覧

- (表 1) 第1章に使用した主な一次資料名・二次資料名
・参考文献(概ね五十音順)
- (表 2) ニワ状遺構、庭園遺構、庭園 概要
- (表 3) ニワ状遺構、庭園遺構、庭園 構成要素一覧(年表)
- (表 4) 『古事記』および「六国史」関連記事原文一覧
- (表 5) 庭園の中島の形状比較 (単位m)
- (表 6) 『古事記』にみる島と國と名
- (表 7) 聖武天皇と東院庭園関連年表
- (表 8) 「こはんにしたかひて」の解釈

(表1) 第1章に使用した主な一次資料名・二次資料名・参考文献(概ね五十音順)

著者・編集・発行	書名等
<一次資料>	
明石市立文化博物館編	『明石市文化財調査報告2：明石市藤江別所遺跡―藤江ポンプ場建設工事に伴う発掘調査報告書―』明石市教育委員会、1996 年
明日香村教育委員会文化財課編集・発行。	『酒船石遺跡発掘調査報告書』2006年
和泉市教育委員会編集・発行	和泉市教育委員会編集・発行『史跡池上曽根遺跡保存整備事業報告書 史跡池上曽根遺跡発掘調査報告書2011～2013―史跡整備に伴う第3期発掘調査―』2017年。
辰巳和弘編/引佐町教育委員会発行	『引佐町の古墳文化Ⅴ：天白磐座遺跡』1992年
宇治市教育委員会編集/（宗）平等院発行	『平等院 阿弥陀堂中島発掘調査報告書』1991年
岡山県教育委員会発行	岡山県教育委員会発行『岡山県埋蔵文化財報告書（3）中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1』1973年、pp. 107-203。
橿原考古学研究所編集・発行	『奈良県遺跡調査概報1992年度』1993年
	「布留遺跡」『奈良県遺跡調査概報1996年度』1997年
	「明日香村飛鳥京跡一島庄遺跡第20～22次および飛鳥京跡第114次発掘調査概報一」『奈良県遺跡調査概報1988年度』1989年
	「史跡・名勝飛鳥京跡苑池第8次調査（飛鳥京跡第174次調査）」『奈良県遺跡調査概報2013年度(第二分冊)』2015年。
	「史跡・名勝飛鳥京跡苑池第13次調査（飛鳥京跡第182次調査）」『奈良県遺跡調査概報2019年度(第一分冊)』2020年。
	『奈良県遺跡調査概報1995年度(第一、二分冊)』1995年
橿原考古学研究所編/奈良県桜井市教育委員会発行	『纏向』1976年
橿原考古学研究所編/奈良県教育委員会発行	『南郷遺跡群Ⅲ奈良県立橿原考古学研究所調査報告第74冊』2003年
京都市埋蔵文化財研究所/奈良文化財研究所編集・発行	『発掘庭園資料―奈良文化財研究所史料第48冊』1998年
京都市埋蔵文化財研究所編集・発行	『高速鉄道東西線工事に伴う史跡旧二条離宮内の第2次発掘調査2～4期調査終了報告書』1991年
	『地下鉄東西線建設に伴う史跡旧二条離宮内の第2次発掘調査1期調査終了報告』1991年
京都市埋蔵文化財研究所編集/京都市文化観光局発行	『鳥羽離宮発掘調査概報 昭和62年度』1988年
	『鳥羽離宮発掘調査概報 昭和63年度』1989年
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 編集・発行	『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第8集三ツ寺Ⅰ遺跡―古墳時代居館の調査(本編)』1988年
	『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第93集上越新幹線関係第13集三ツ寺Ⅱ遺跡本文編』1991年

著者・編集・発行	書名等
桜井市文化財協会編集・発行	『上之宮遺跡第5次調査概報 - 桜井市内埋蔵文化財1989年度発掘報告書2』1990年
桜井市纏向学研究センター編/桜井市教育委員会発行	『桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書第40集 纏向遺跡発掘調査書3—トリノ南地区における発掘調査—』2013年 『桜井市前掲報告書第44集 奈良県桜井市纏向遺跡発掘調査書3—第35次63次72次調査—』2015年
(宗)浄瑠璃寺編集・発行	『特別名勝及び史跡 浄瑠璃寺庭園保存修理事業報告書Ⅰ（発掘調査編）』2019年
(宗)神泉苑	『史跡神泉苑 史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業報告書』2015年
月夜野町教育委員会編集・発行	『上組北部遺跡群Ⅱ《矢瀬遺跡》埋蔵文化財発掘調査報告書』2005年
中主町教育委員会・(宗)兵主神社編集・発行	『名勝兵主神社庭園保存整備報告書』2002年
長野県埋蔵文化財センター・日本道路公団・長野県教育委員会/長野県埋蔵文化財センター発行	『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書54 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28 更埴条里遺跡・屋代遺跡群—総論編』2000年
奈良文化財研究所編集・発行	「石神遺跡第6次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報17』1987年
	「平城京一条北辺四坊六坪（伝称徳天皇御山荘跡）の発掘調査 平城第151-26次調査現地説明会資料」1984年
	「小墾田宮跡推定地および豊浦寺跡の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報Ⅰ』1971年
	「東院園池と周辺の調査（第99次）」『昭和51年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1977年
	『奈良文化財研究所学報第69冊平城宮発掘調査報告XV—東院庭園地区の調査—本文編』2003年
	『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告書』1986年
	「佐紀池の調査（第101次）」『昭和51年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1977年、
清野孝之/奈良文化財研究所編集・発行	「法華寺阿弥陀浄土院の調査—第312次」『年報2000-Ⅲ』2001年
藤原武二、宮本長二郎/奈良文化財研究所編集・発行	「平城京の遺跡 左京一条三坊十五・十六坪（6AFB-F～J地区）」『奈良文化財研究所学報第23冊』1975年
山下信一郎/奈良文化財研究所編集・発行	「平城京左京三条二坊二坪（長屋王邸）の調査—第303-8次」『年報2000-Ⅲ』
奈良国立文化財研究所・京都府教育庁文化財保護課・京都市文化観光局調査/舊嵯峨御所大覚寺発行	『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告—大沢池北岸域復原整備事業に伴う調査』1997年

著者・編集・発行	書名等
奈良市教育委員会文化財埋蔵文化財調査センター	「速報展示資料No. 64」2020年 「速報展示資料No. 28」1993年
新田町教育委員会編集・発行	『新田町文化財調査報告書 新田東部遺跡群Ⅱ/新田東部工業団地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書』第1、2、3分冊、2000年
平泉文化遺産センター	「無量光院跡第46字現地説明会資料」2019年
平泉町教育委員会編集・発行	『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書—第7次調査』1986年 『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書—第9次調査』1987年 『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書—第11次調査』1988年 『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書—第12次調査』1989年 『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書—第13次調査』1991年
	『特別史跡 無量光院跡発掘調査報告書Ⅲ-第17次調査-』2006年
埋蔵文化財天理教調査団編集・発行	『布留遺跡 布留 1983.4～1983.12調査（堂垣内）』1987年
三重県埋蔵文化財センター編集・発行	『三重県埋蔵文化財報告書99-3城之越遺跡—三重県上野市比土—』1992年（2004デジタル版） 『三重県埋蔵文化財調査報告115-16 一般国道23号中勢道路（8工区）建設事業に伴う六大A遺跡発掘調査報告』2002年
<二次資料> 日本考古学協会三重県実行委員会編集・発行 奈良文化財研究所編集・発行	『シンポジウム1水辺の祭祀』1996年 学報第74冊『古代庭園研究Ⅰ—古墳時代以前～奈良時代』2006年 学報第86冊『平安時代庭園の研究—古代庭園研究Ⅱ』2011年
古代学協会・古代学研究所編 京都市埋蔵文化財研究所編集協力/角川書店発行	『平安京提要』1994年
<参考文献>	
森蘊/奈良国立文化財研究所編集・発行	「大覚寺大沢池地形実測図」『寝殿造系庭園の立地的考察』1962年
浅野二郎他/日本造園学会	「韓国慶州の雁鴨池について」『造園雑誌』54（5）1991年
梅本綾/天理大学 菅野成寛/岩手大学	「水辺の祭祀の諸相とその意義」天理大学考古学研究室紀要『古事』2009年 「平泉無量光院考」『岩手史学研究』1991年
荒木伸介/佛教藝術学会編/毎日新聞出版	「岩手平泉の庭園跡地」『佛教藝術』（192）1990年
小野健吉/金子裕之編/角川書店発行	「平安時代の浄土庭園/浄土庭園の諸相」『古代庭園の思想』2002年
金眞成/日本庭園学会	「飛鳥京跡苑池遺構について」日本庭園学会誌9、9、2000年。
高瀬要一/奈良文化財研究所編	「古代東アジア（中国・韓国・日本）の方池」『第5回中日韓風景園林学術検討会論文集』2004年。
仲隆裕/日本造園学会	「史跡名勝平等院庭園における洲浜整備」『造園技術報告集』2003年
橋本義則/塙書房	『平安宮成立史の研究』1995年
小口基實/小口庭園グリーンエクステリア(有)	『韓国の庭苑』1999年。

(表2) ニワ状遺構、庭園遺構、庭園 概要

番号	遺構名 (図版No.)	時期及び概要	調査主体 参考文献
1)	矢瀬遺跡 図1 図1-2	縄文時代後期半ばから晩期末(約3500~2300年前) 居住区や作業区を持つ一つのまとまった村の姿がよく保存されている。祭壇とみられる約4.5×2.5mの楕円形の石敷きがあり、木柱に囲まれ、3石の立石(高さ70~90cm、幅50cm弱)があった。この祭壇に隣接の水場は2か所の湧水点をもち、湧水点を人為的に掘り下げたから流れをとり、一度堰き止めた上、オーバーフローさせて下流させていた。水面に降りる足場が階段状につくられ、石列が屏風状に幅1m、長さ4m伸びている。飲用、生活、作業の痕跡の他に祭祀用具と装飾品が膨大に出土した。この集落の背後には配石墓群もある[1]。 ・ストリーム型	群馬県月夜野町教育委員会 [1]月夜野町教育委員会編集・発行『上組北部遺跡群Ⅱ《矢瀬遺跡》埋蔵文化財発掘調査報告書』2005年 [2]日本考古学協会1996年度三重大会三重県実行委員会編集・発行『シンポジウム1 水辺の祭祀』1996年、pp. 1-6。
2)	池上曾根遺跡 図2	弥生時代前期後半から後期 この周辺では最も古い大規模な弥生遺跡である。 祭祀の場と推定されている区画は大型建物跡―井戸―土器類埋設場が中心線上に直列配置された遺構で、溝がその線に沿って流されている。井戸は径2mのクスノキをくり抜いたものである[1]。周辺では様々な器物を埋設した遺構が検出され、この一画が大型建物と井戸を中心とした祭祀空間であったと考えられるようになった[2]。 ・ストリーム型	大阪府和泉市教育委員会 [1]和泉市教育委員会編集・発行『史跡池上曾根遺跡保存整備事業報告書 史跡池上曾根遺跡発掘調査報告書2011~2013―史跡整備に伴う第3期発掘調査―』2017年。 [2]日本考古学協会前掲書(1))、pp. 7-14。
3)	下市瀬遺跡 図12	弥生時代後期と奈良・平安時代の2時期 湧水点を板材で囲った井堰状の遺構の前で祭壇とみられる場所から銅鐸が出土し、他に土器、斎串、船形木製品、釘を打った人形等の祭祀遺物が出土した。井戸は板材で補強され、数次にわたり構築されている[1]。 ・スポット型	岡山県教育委員会 [1]岡山県教育委員会発行『岡山県埋蔵文化財報告書(3) 中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1』1973年、pp. 107-203。 [2]日本考古学協会前掲書(1))、pp. 15-21。
4)	六大A遺跡 図3	弥生時代後期から飛鳥時代 津市の志登茂川畔に弥生時代後期の大溝と素掘り井泉が3か所、古墳時代後期の石組み井泉が3か所確認された。入り江になった箇所には洲浜状に丁寧な貼石(17m×4m)がなされ、その傍に建物跡があった。井泉のひとつから木製刀剣、滑石製勾玉が出土した[1]。 報告者の穂積氏は『古事記』にみえる天照大神と須佐之男命のウケヒ儀礼(天の安の河の誓約―剣・玉・天の真名井の組み合わせ)と一致することから施主は首長層以上であり、伊勢神宮成立前夜を物語る遺跡であるとみている[2]。 ・ストリーム型	三重県埋蔵文化財センター [1]三重県埋蔵文化財センター編集・発行『三重県埋蔵文化財調査報告115-16 一般国道23号中勢道路(8工区)建設事業に伴う六大A遺跡発掘調査報告』2002年 [2]日本考古学協会前掲書(1))、pp. 77-84。

番号	遺構名 (図版No.)	時期及び概要	調査主体 参考文献
5)	藤江別所遺跡 図4	縄文時代後期から 縄文時代後期から現代の御崎神社（山王神社）に続く祭祀場である。溝2条が逆Y字に分岐した内側に弥生時代の素掘り井泉があり、井泉内から弥生時代後期の車輪石、銅鏡、勾玉などの通常は古墳の副葬品となるものが出土した。 ・ストリーム型	明石市立文化博物館 明石市立文化博物館編『明石市文化財調査報告2：明石市藤江別所遺跡―藤江ポンプ場建設工事に伴う発掘調査報告書―』明石市教育委員会、1996年 日本考古学協会前掲書(1))、pp. 35-39。
6)	マキムツ 纏向遺跡 図13	古墳時代（3世紀） 当遺跡の箸墓古墳は卑弥呼の墓との推測もあり、邪馬台国の有力候補地となっている。祭祀跡としては湧水点を湧水層まで掘り下げた土坑が建物跡と関連ある位置にあり、焼いた木製品（水鳥型や船型）、漆塗りの盤、高杯などが検出された[1]。この遺跡では素掘り土坑から出土する祭祀遺物が焼かれていることから、祭祀終了時に火をつけて埋納したと見られている[2]。後続調査で枠付方形井戸、石貼りの溝などを検出した[3]。また、クリ材枠の井戸、「宮内」と墨書のある土器を検出している。建物解体時に行われたとみられる祭祀においては土坑からの出土品に焼いた形跡はなかった[4]。 ・スポット型	桜井市教育委員会 [1] 日本考古学協会前掲書(1))、pp. 22-26 [2] 梅本論文 [3] 桜井市纏向学研究センター編『桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書第40集 纏向遺跡発掘調査書3―トリノ南地区における発掘調査―』桜井市教育委員会、2013年 [4] 同『桜井市前掲報告書第44集 奈良県桜井市纏向遺跡発掘調査書3―第35次63次72次調査―』2015年
7)	屋代遺跡群 図7	古墳時代から奈良時代 導水型祭祀と湧水坑型祭祀の両方がみられる遺構である。導水型祭祀施設は崖面の湧水点から木樋で下段に落とし、そこで濾過沈殿を行っていた。時期により、溝、木樋、水門が設けられた。湧水坑型祭祀施設は8か所確認されており、湧水点まで掘下げた湧水坑からト占骨や土器が出土し、埋め戻されている。また湧水溝がのぞむ自然流路に沿って人形や斎串等の木製祭祀具や獣骨が大量に出土している[1]。宮島義和、寺内隆夫によると全体に平石を立て、または天端をとって据え、橋を架け、杭を打つという親水空間の構成がみられ、ある場所は200年の空白期間を経て同地点・同一経路で復活しており、その地点に極めて重要な意味があったことがうかがえるとしている[2]。 ・ストリーム×スポット型	長野県埋蔵文化センター [1]長野県埋蔵文化財センター・日本道路公団・長野県教育委員会『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書54 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書28 更埴条里遺跡・屋代遺跡群―総論編』長野県埋蔵文化財センター、2000年 [2]日本考古学協会前掲書(1))、pp. 102-111。
8)	中溝・深町遺跡 図9	古墳時代前期末から中期 本遺跡では同時代には類例がない遺構が検出された。特殊な遺構を含むグループを形成しており、溝（濠）・柵列などで空間を区画し、祭祀関連遺構が存在していることから、首長層居住域とされている。このうち南半部の1号掘立柱建物跡は大型で方形、二重に柱を巡らす。この建物の中心線上に1号集石土坑、その隣に2号集石土坑があり、3基目は別棟の南側中心線上にある。この集石土坑は井戸とするには浅く、方形に近い開口部とオーバーフローを流した溝周囲を礫で固めている。出土品は胴部穿孔の短頸壺、木製鋤、弓矢などで、集石土坑と鏡の出土から祭祀関連遺構と推測されている。隣接の中溝Ⅱ遺跡南端建物群からは銅鐸が出土しており、一帯に祭祀のために差別化された空間があったと考えられている。[1] ・ストリーム型	群馬県の新田東部工業団地埋蔵文化財発掘調査団 [1]新田町教育委員会編集・発行『新田町文化財調査報告書 新田東部遺跡群Ⅱ/新田東部工業団地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書』第1、3分冊2000年 日本考古学協会前掲書(1))、pp. 93-96。

番号	遺構名 (図版No.)	時期及び概要	調査主体 参考文献
9)	布留遺跡 図版なし	<p>縄文時代から現在にいたる複合遺跡。 本遺跡では天理教会本部を中心に1938年から30次を超える発掘調査が行われた。調査範囲は径約1.5kmに及ぶ集落・祭祀遺構である。後背に石上神宮が鎮座する[1]。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・布留（堂垣戸）地区：1938年調査で敷石様遺構、弥生土器、櫛、勾玉等を検出。生活用土器と祭祀具が同時に出土することから祭祀的行為が生活の一部であったと推定されている。1955年調査で「敷石様住居址」と埴輪を検出、1983年調査で縄文時代の遺構・遺物、古墳時代の流路を検出した。流路の一つである布留溝は幅3.5m、深さ0.5m、川岸で高坏、壺、勾玉、碧玉製管玉、水晶製丸玉等を検出し、水辺の祭祀跡と推定された。 ・布留（西小路）地区：1976-77年調査で碧玉製管玉、多数の製塩土器、滑石製模造品等を検出し、祭祀が執行された場所もしくは祭祀具の一括投棄場所と推定された。 ・三島（里中）地区：1978-81年調査で同区の東西地区をつなぐ古墳時代中～後期の流路（布留溝）を発掘。幅約4m、深さ1mあり、大量の土器、銅鏡、滑石製勾玉、管玉、木製品、特に刀剣装具、模造刀、模造剣などを検出し、水に関わる祭祀の執行が推定された。 ・豊井（宇久保）地区：1984年調査で井戸、土壌を検出。土壌からは高坏、丸底壺、滑石製勾玉、同管玉、鉄鎌等がまとまって出土し、土壌の南西には布留川の氾濫原が広がっていることから祭祀後の一括投棄と見られている。 ・杣之内（樋ノ下）地区：1987年調査で前出の布留溝、井戸、土壌（145cm×165cmの不整形円形、深さ109cm）を検出。土壌は井戸に類似するが、埋土、湧水、遺物（滑石製玉製品、馬歯、馬骨）の検討から祭祀に関係する遺構と推定された。[2] ・ストリーム×スポット型 	<p>埋蔵文化財天理教調査団</p> <p>[1] 奈良県橿原考古学研究所編集・発行「布留遺跡」『奈良県遺跡調査概報1996年度』1997年</p> <p>[2] 日本考古学協会前掲書(1)、pp. 29-34竹谷俊夫の報告より。</p>
10)	城之越遺跡 図5	<p>古墳時代（4世紀～5世紀） 3か所の湧水点から流れを取り、洲浜が作られ、要所に立石・石組み、流れにはさまれた広場や祭壇と見られる平坦面がある。流れの主軸と一致する大規模な建物跡もあり、一帯は清浄に保たれていたこと、出土品が小型丸底壺、高杯、装飾された武器型木製品、碧玉製管玉、翡翠勾玉などで祭祀遺物のみであることなどから周辺の小盆地への司水に関わる祭祀遺構とみられ、流れから水を汲み祭祀を行っていたと考えられている。祭祀は5世紀まで執行された。この地、上野市比土は木津川沿いの古代の交通の要所である。近くに元伊勢（伊勢神宮鎮座前の座）の神戸神社があり、美旗古墳群や石山古墳を控えている。[1]</p> <p>調査を担当した穂積裕昌は、「後に成立する神社の初期的なあり方として捉えてもいいようにも思われる」と結んでいる[2]。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ストリーム型 	<p>三重県埋蔵文化財センター</p> <p>[1] 三重県埋蔵文化財センター編集・発行『三重県埋蔵文化財報告書99-3城之越遺跡―三重県上野市比土一』1992年（2004年デジタル版）</p> <p>[2] 日本考古学協会前掲書(1)、pp. 42-49。</p>
11)	サカハラサカト 阪原阪戸 遺跡 図6	<p>古墳時代中期～奈良時代 全長80m、高低差5mの大規模なもので、湧水点から木樋によって15m下流の石組み榦（内寸0.65×0.95m、深さ0.5m）に導き、さらに下方に導水する。榦内で濾過を行っている。水源、大溝、石組み榦、石組3箇所、配石、祭祀跡が有機的に把握できる水源を中心とした祭祀遺跡である。特に2回にわたって濾過した浄水を祭祀に用いている。溝内の全域から斎串や土器、桃核などの祭祀遺物が検出された。[1]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ストリーム型 	<p>奈良県橿原考古学研究所</p> <p>[1] 奈良県橿原考古学研究所編集・発行『奈良県遺跡調査概報1992年度』1993年</p> <p>日本考古学協会前掲書(1)、pp. 63-76。</p>

番号	遺構名 (図版No.)	時期及び概要	調査主体 参考文献
12)	南紀寺遺跡 図16	<p>古墳時代前期</p> <p>2つの井泉（1つは推定）が石積みで造られ、その2条の流れは途中で方向を90度変えて合流し、石積み護岸の濠（池）に流れ込んだあと能登川に向かっていった。合流地点には洲浜があり、濠（池）の中には石積み護岸の中島があり、濠（池）の深さは0.5mである。井泉の大きさは古墳時代としては最大、石積み等は緻密さが後の飛鳥時代の遺構に類似する[1]。</p> <p>後続調査で祭祀の場、古墳時代前期の石積みと土師器を検出した[2]。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ストリーム型 	<p>奈良市教育委員会</p> <p>[1]奈良市教育委員会編集・発行『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成6年度』1995年</p> <p>[2] 奈良市教育委員会文化財埋蔵文化財調査センター「速報展示資料No. 64」2020年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・同「速報展示資料No. 28」1993年 <p>[3] 日本考古学協会前掲書(1))、pp. 58-62。</p>
13)	南郷大東遺跡 図18	<p>古墳時代（5世紀）</p> <p>流れを堰き止めて貯水池をつくり、遺物を沈殿させ上澄みを木樋で引く一種の浄水施設となっている。</p> <p>貯水池（ダム状施設）は逆L字型に貼石あり、上場で長さ約12m、幅約5m、下場で長さ約10.5m、幅約2m、深さ約90cmである。全体の東西方向（左岸部）は長さ約12m、幅1～2m、高さ60～80cm、南北方向（正面）は長さ約5m、幅2～3m、高さ40～80cm、法面の傾斜は25～30度である。南北方向の貼石は中央部が低くなっており、そこに木樋を設置していた。</p> <p>祭殿を併設し、遺物としては馬歯、桃核、ひょうたんなどの祭祀遺物が大量に出土したことから浄水を得て祭祀が行われていたとみられている。5世紀後半に衰退した[1]。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ストリーム型 	<p>奈良県立橿原考古学研究所</p> <p>[1]奈良県立橿原考古学研究所編『南郷遺跡群Ⅲ奈良県立橿原考古学研究所調査報告第74冊』奈良県教育委員会、2003年</p> <p>[2] 日本考古学協会前掲書(1))、pp. 50-57。</p>
14)	天白磐座遺跡 図16	<p>古墳時代から奈良、鎌倉時代 現渭伊神社</p> <p>薬師山山頂の渭伊神社本殿背後の三つの巨岩の直下で手づくね土器、埴、滑石製勾玉、8世紀の須恵器などのほかに経筒が7個体出土し、巨岩直下でおこなわれた祭祀遺跡と断定された。岩Aは根本部分で10.3m×6.8m、高さ7.39mでほぼ垂直に切り立った壁面を持つ。ここで遺物が大量に出土した。岩Bは7m×4.1mで高さ5.2m、岩Cが4.3m×3.5m高さ2.72mである。[1]。</p> <p>薬師山は三方を神宮寺川に囲まれた水分けの地で山下の水田をうるおしており、井水伝承がある。「渭伊」という当地の古地名が本来「井」の重ねであって井戸、泉、水を意味しており、水を神聖視した土地柄である[2]。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・強いて言えば山下に神宮寺川を持つストリーム型であろう。 	<p>引佐町教育委員会</p> <p>[1]辰巳和弘編『引佐町の古墳文化Ⅴ：天白磐座遺跡』引佐町教育委員会、1992年</p> <p>[2] 日本考古学協会前掲書(1))、pp. 85-92。</p>

番号	遺構名 (図版No.)	時期及び概要	調査主体 参考文献
15)	三ツ寺Ⅰ遺跡 図10	<p>古墳時代（5世紀後半）</p> <p>首長クラスの大居館跡と見られている。水濠や柵列で囲まれた城塞的な概観を持ち、内部は整然と区画され大規模な正殿を軸に水に関わる祭祀を行い、館全体が祭式儀礼の場の様相を呈する。敷地全体から高坏、滑石製模造品、刀剣、獣骨、桃核といった祭祀遺物が出土する。濠から水道橋で水を引き込んだ溝とその溝を挟む石敷きが2ヶ所造られている。GLから300掘り下げてφ50～100の川原石で舗装した平坦面で、流れに臨む祭祀の場と考えられている。これと別に敷地の角に覆い屋を持つ井戸があり、生活用ではなく、祭祀が行われていた。館廃絶後も祭祀が続けられた[1]。</p> <p>尚、隣接する三ツ寺Ⅱ遺跡にも2つの井戸から溝を引き、溝の両側を石敷きにした遺構が検出されており、斎串などが出土している[2]。</p> <p>・ストリーム型</p>	<p>群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 東日本旅客鉄道㈱</p> <p>[1](財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 編集・発行『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第8集三ツ寺Ⅰ遺跡—古墳時代居館の調査(本編)』1988年</p> <p>[2]『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第93集上越新幹線関係第13集三ツ寺Ⅱ遺跡本文編』1991年</p> <p>[3]日本考古学協会前掲書(1))、pp. 97-101。</p>
16)	上之宮遺跡 図17	<p>飛鳥時代初期（6世紀～7世紀）</p> <p>石底にした方形井戸状の石組（h=1.6m）凹部の周りを石で馬蹄型に造形し周回して下る溝が引かれていた。36m下って分岐し、分岐した流れを挟んで5m四方の石敷き平坦面が設けられている。この石敷きは廻廊状建物跡とも関連していた。給水施設がなく報告者は木樋などによったとみている。石組み内や石敷き付近から祭祀遺物の大半が出土した。検出されたのは最古の木簡や装飾刀10本の目録など当時の最高級品であり、他にゴヨウマツ、ナツメ、モモ、クリ、ブドウなどの種子である[1]。</p> <p>・ストリーム型</p>	<p>奈良県桜井市教育委員会</p> <p>[1]日本考古学協会前掲書(1))、pp. 112-119。</p>
17)	古宮遺跡 図18	<p>飛鳥時代（6世紀～8世紀）</p> <p>祭祀遺構は7世紀に稼働していたと見られ、不整円形（φ2.4～2.8m）の石貼りにされたすり鉢状の池（深さ50cm）、石貼りの溝（小溝：延長25m以上、内幅25cm、深さ20cm、大溝：延長47m、幅1.5～2.0m、深さ45～55cm、底部は素、兩岸2～3段石積み）、池から出る小溝は大きなS字状に蛇行した部分があり、下流は直線的であり、この小溝をはさんで石敷き平たん部（片側0.5×1.0m×2面、本来はもっと広い）とそれにリンクする建物跡があった。池の護岸は垂直部と緩い勾配部分の両方がある[1]。</p> <p>・ストリーム型</p>	<p>奈良国立文化財研究所</p> <p>[1]奈良国立文化財研究所編・発行「小墾田宮跡推定地および豊浦寺跡の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報Ⅰ』1971年、pp. 1-4, 10</p> <p>[2]奈良文化財研究所編集・発行『古代庭園研究Ⅰ』2006年、pp. 219-226</p>
18)	島庄遺跡 図19	<p>飛鳥時代（7世紀）</p> <p>大規模な正方形池（一辺が42m、幅10mの堤の外寸では60m超になる、深さ3m）のほかこの正方形池から石舞台古墳に続く暗渠溝や人工流路、建物、塀などが確認されている。傍らに半円形の池（6.8m×5.4m、深さ70cm）と小溝（幅20～30cm、池から出て途中方向を変える）がある。この小池には中島がある。ここから土馬が2体出土し、水源での祭祀跡と見られる[1]。本遺跡は蘇我馬子邸であった「嶋の勾の池」との推測もあるが確定はしていない[2]。</p>	<p>橿原考古学研究所</p> <p>[1]橿原考古学研究所編・発行「明日香村飛鳥京跡一島庄遺跡第20～22次および飛鳥京跡第114次発掘調査概報一」『奈良県遺跡調査概報1988年度』1989年</p> <p>[2]奈良文化財研究所前掲書(17[2])、pp. 211-215</p>

番号	遺構名 (図版No.)	時期及び概要	調査主体 参考文献
19)	酒船石遺跡 図20	飛鳥時代(7世紀)～奈良時代(10世紀) 古くから丘陵山頂に「酒船石」と呼ばれる石造物があった。この山腹斜面で大規模な切石の石積み、石組溝、建物群跡、高低差を利用した導水施設、亀形石造物、小判型石造物等が検出された。7世紀の斉明朝もしくはその少し前から10世紀にかけて営まれた祭祀空間と見られている[1]。『日本書紀』にこの遺構を指すとみられる記述(表1-69他)があり、両規宮(ふたつきのみや)、岡本宮との関連が研究されている[2]。	明日香村教育委員会 [1]明日香村教育委員会文化財課編集・発行『酒船石遺跡発掘調査報告書』2006年 [2]奈良文化財研究所前掲書(17))、pp. 235-244。
20)	飛鳥京跡 苑池遺構 図21 図22	飛鳥時代(7世紀) 遺構の内容は大規模な園池で南池(55m×65m、面積2200㎡)と北池(46～54m×33～36m、面積1450㎡)に分かれ、堤(幅5m、長さ32m)で隔てられており、水路、建築物を伴っている。南北池は2本の樋管で通水する。平面形は隅丸台形、堤は直線など直線部分が多い。護岸は垂直に近い石積み(南池約80cm、北池約1m)、同じく垂直石積み護岸のトンボ型の中島(高さ1m)、池底の石張り、マツの植栽が確認されており、北池では令和1年に天皇の祭祀跡と見られる遺構(図22)を検出している。北池の東北部から検出された祭祀遺構は湧水点を石で整え、溝を引き、溝の両側一帯を石敷きに舗装していた。水深は南北で別れており、南池は40cm前後、北池は播鉢状で周辺部は浅い。このことから本遺構の用途に祭祀があることがわかり、性格の異なる南北両池によって構成されていることがわかった[1][2]。 南池の南端にも導水施設があり大正5年に出土した「出水の酒船石」と接続することがわかっていた。しかし現在も南、北池とも地名のとおり出水しており給水しなくても所定の水深に達する。このため導水施設は祭祀用とも考えられている。『日本書紀』に記載のある飛鳥川東岸の「白錦後苑」と目されている遺構である[2]。	橿原考古学研究所 [1] 橿原考古学研究所編集・発行「史跡・名勝飛鳥京跡苑池第8次調査(飛鳥京跡第174次調査)」『奈良県遺跡調査概報2013年度(第二分冊)』2015年。 [2] 同「史跡・名勝飛鳥京跡苑池第13次調査(飛鳥京跡第182次調査)」同『奈良県遺跡調査概報2019年度(第一分冊)』2020年。 [2] 金真成「飛鳥京跡苑池遺構について」日本庭園学会誌9, 9, 2000年。 奈良文化財研究所前掲書(17))、pp. 245-248。
21)	石神遺跡 図23	飛鳥時代(7世紀) 方形石組池が検出された。正方形(□6m、深さ80cm)河原石の垂直石積み護岸で四隅に立石をもつ園池であり、給排水はない。底面も石貼りされており、貯水ができるよう粘土の裏込めで施工されているが長期にわたる水位のあとはない。木樋で水落遺跡の漏刻台(表1-73)と連動していた時期があった[1]。 この一帯は他に饗応施設と推測される建物群(東区画)の南に石敷井戸、石敷広場、石組大溝があった。明治時代より精巧な作りの噴水装置であった「石人像」「須弥山石」等が出土しており、古代飛鳥の迎賓館と目されている。石人像、須弥山石、漏刻台いずれも斉明朝の遺物である。祭祀遺構ではなく饗応、鑑賞のための施設と考えられている[2]。	奈良文化財研究所 [1] 奈良国立文化財研究所編集・発行「石神遺跡第6次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報17』1987年 [2] 奈良文化財研究所前掲書(17))、pp. 227-234。
22)	平田キタガワ遺跡 図なし	推定7世紀飛鳥時代 2ヶ所のトレンチと地中レーダー調査により石敷きの広場とみられる舗装面、池または大溝(流路)の護岸とみられる石垣(垂直石積み 延長150m、高さ1.6m)、その底面の石敷きが確認されている。築造時期は推定7世紀とされる。この地(字キタガワ)の北側(欽明天皇陵の南側)では江戸時代に4体の猿石と呼ばれる石造物が掘り出され、現在は吉備姫王墓内に置かれている。渡来人を象ったものと言われている。遺構の上面は石敷き舗装面、段差は垂直石積み、下面も石敷きであり、大溝と一体の大規模な広場の可能性もあるとされている。	橿原考古学研究所 奈良文化財研究所前掲書(17))、pp. 216-218。

番号	遺構名 (図版No.)	時期及び概要	調査主体 参考文献
23)	平城宮東 院庭園 図24 図25	<p>奈良時代 和銅3年(710)から延暦3年(784)頃 庭園の池は遣水、中島を持ち、護岸は州浜である。造営当初は直線からなる隅丸逆L字型と見られ、池底は地山で砂、砂質土、粘土が見られ、中央部は砂層である。護岸は垂直部(φ300玉石積みの2~3段積み)と20度(36.4%)前後の勾配部(φ300玉石貼り)と石積みのない部分を持つ。給水は不明で排水は素掘り溝である。その後の養老4年(720)から神護景雲1年(767)頃までの間に(下層園地)汀線に出入りがつけられ出島ができる。護岸はなくなり洲浜(12%)が造られた。給水として蛇行する石張りの溝(幅50cm、玉石2列)と排水側にも蛇行する溝がつけられた。</p> <p>断面は皿形で側石は抜かれていた。さらに神護景雲1年(767)頃から再改修され(上層園地)橋が架けられ、建物が張り出し、中島(10m×8m)ができる。築山と岬に石組み(2~3石組)がなされ、池底は全面礫石敷き、池の全周が洲浜(勾配13%以下)となった。池底の石敷きと洲浜の間に地山の部分がある。また給水が付け替えられ沈殿槽(3m×6m)が設けられた。排水側は盲暗渠となり、全量排水・池干しも可能となった。[1][2][3]</p> <p>植栽もマツ、モモ、ヤナギなどが確認されている。延暦3年(784)頃、長岡京遷都により廃絶した。[2]</p>	<p>奈良文化財研究所</p> <p>[1]奈良文化財研究所「東院園池と周辺の調査(第99次)」『昭和51年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1977年、pp. 12-21。</p> <p>[2]奈良文化財研究所『奈良文化財研究所学報第69冊平城宮発掘調査報告XV—東院庭園地区の調査—本文編』2003年</p> <p>[3]奈良文化財研究所前掲書(17))</p>
24)	平城京左 京一条三 坊十五・ 十六坪庭 園遺跡 図32	<p>奈良時代初期と空白を挟む末期(7世紀)~平安時代初期(8世紀) 東西20m南北10m、水深23cm内外の池は古墳の外堀の葺石を洲浜として利用している。洲浜の自然石はφ15cm、勾配は3度(5.24%)と緩い。洲浜を背に三石組の石組が2ヶ所あり、瀧石組のように大小の組み方をしていた。汀線は複雑に出入している。給水溝は幅約1.2mの素掘り溝であった[1]。 当地は729年に自刃した長屋王邸の半公邸であった佐保宮の可能性がある[2]。</p>	<p>奈良文化財研究所</p> <p>[1]藤原武二、宮本長二郎「平城京の遺跡 左京一条三坊十五・十六坪(6AFB-F~J地区)」奈良文化財研究所編集・発行『奈良文化財研究所学報第23冊』1975年、p. 19。</p> <p>[2]奈良文化財研究所前掲書(17))、p. 388。</p>
25)	長屋王邸 庭園跡 (平城京 左京三条 二坊一、 二、七、 八坪) 図31	<p>和銅3年(710)から天平1年(729)の間、及びその後 長屋王邸跡では西外郭と東外郭で庭園が検出されている。西外郭の庭園では緩く蛇行する池が検出された。陸側と池底の間は洲浜となっており、幅1.5~0.6mの帯状、勾配18%前後、ゆるやかに屈曲するものであった。池底は粘性土の地山であり、水深20cm前後、給排水路は不明であった。『懐風藻』に長屋王邸での饗宴の記事があり、当地が該当するとみられている[1]。 小野健吉の報告によると、東庭園は幅3~7m、深さ0.9m、素掘りの蛇行する流路を中心に周辺は植栽地であったと推定される。東二坊坊間路から導水していた[2]。</p>	<p>奈良文化財研究所</p> <p>[1]山下信一郎「平城京左京三条二坊二坪(長屋王邸)の調査—第303-8次」奈良文化財研究所編集・発行『年報2000-Ⅲ』</p> <p>[2]奈良文化財研究所前掲書(17))、pp. 362-364。</p>

番号	遺構名 (図版No.)	時期及び概要	調査主体 参考文献
26)	佐紀池 図なし	<p>奈良時代 神亀1年(724)～(平安遷都まで) 神亀1年(724)から同5年(728)にかけて造営された。池の東北部の護岸の洲浜は幅2m、勾配10度(17.6%)の緩やかなもので、こぶし大の小礫を敷きつめている。その外側に30石からなる石組みがある[1]。 奈良時代は東西220m、南北140mほどの広大なものであったと推定されている。『続日本紀』に見える「西池宮」との説がある。また「鳥池塘」(表1-123)に同じとの説もあり、そうであれば天皇が相撲を観覧したり曲水の宴を催した園池ということになる。池に臨んで左右対称建物があったことがわかっており、左右対称配置は儀礼、儀式、祝宴用であることが知られているので、そのような用途の園池であった可能性が高い[2]。</p> <p>尚、奈良時代以前の遺(堰、土壇、構、出土品)も確認されている[1]。</p>	<p>奈良文化財研究所</p> <p>[1]奈良文化財研究所編集・発行「佐紀池の調査(第101次)」『昭和51年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1977年、pp. 22-29。</p> <p>[2]奈良文化財研究所前掲書(17))、pp. 355-356。</p>
27)	平城京左京三条二坊六坪宮跡庭園 図30	<p>天平20年(748)から平安遷都まで 天平20年(748)から天平勝宝8年(756)まで造営された庭園である。その造形は庭園としてほぼ完成している。小野健吉の報告によると、菰川の旧支流を利用して流れのように蛇行した池(幅2～7m、延長55m)を造り、護岸は洲浜、池底は石敷きとなっている。また平城宮東院庭園と同じく池底の石敷きと洲浜の間に地山の部分がある。植栽(クロマツ、モモ、ウメ、センダン)、水性植物を植えた植え樹、石組9か所、岩島、中島があった。給水は暗渠木樋と浄化槽を経由する。庭園としての完成度が高く、日本庭園の確立とも評価されている。出土した瓦は平城宮と同じものであることから公的性格の強い邸宅跡または平城宮の関連施設で饗宴等に利用したとみている。祭祀遺物は検出されていない。</p>	<p>奈良文化財研究所</p> <p>奈良文化財研究所編集・発行『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告書』1986年。</p>
28)	法華寺阿弥陀浄土院庭園遺構 図34	<p>奈良時代 天平宝字5年(761)～ 法華寺の西南隅にあり、天平宝字5年(761)に光明皇太后の一周忌齋会を行うために造営されたと伝えられる阿弥陀浄土院の庭園に比定されている(図32)(表1-199)。清野孝之の報告によると、園池の規模は最大径45m以上、水深は30cm～100cmが可能で実態は30cmと推定され、護岸石(最大φ60～85cm前後)、その一部は景石組、蛇行する汀線、岬、入江をもつ楕円形の中島、立石があり、池底はφ30～50cmの石を天端をそろえて(＝平坦面を上にして)敷き詰めていた。併せて園池内の建物、橋、陸地側の建物などが検出された。給水は湧水だけでも賄えたとみられるが別にある可能性もある。排水は素掘り溝が確認された。堰を設けてオーバーフローさせるものである。遺物は荘厳な建築装飾金具、仏具などが出土した。植物ははクロマツ、アカマツ、カエデ、ツバキ、ツツジ、ユリ、アヤメなどが検出された[1]。 地下水位の高い土地で江戸時代の絵図には蓮池が描かれている[2]。</p>	<p>奈良文化財研究所</p> <p>[1]清野孝之「法華寺阿弥陀浄土院の調査―第312次」奈良文化財研究所編集・発行『年報2000-Ⅲ』2001年</p> <p>[2]奈良文化財研究所前掲書(17))、pp. 378-387。</p>
29)	法華寺旧境内庭園遺構 図35	<p>奈良時代後半(7世紀後半) 法華寺阿弥陀浄土院に関わる施設である。池の護岸の洲浜が検出された。高瀬要一の報告によると、池の南北は10m、東西幅は不明である。池の肩に玉石(φ20～30cm)を一行に立て並べ、両側を礫敷きとする洲浜(勾配15%)、その下はまた池底に向かってまばらな貼り石があり、池底は粘性土の地山であった。</p>	<p>奈良文化財研究所</p> <p>奈良文化財研究所前掲書(17))、p. 369。</p>

番号	遺構名 (図版No.)	時期及び概要	調査主体 参考文献
30)	伝称徳天皇御山荘跡 図なし	<p>現在の平城京右京一条北辺四坊六坪に比定されている。小池の中に中島を持ち、祠がある。小池は現在も湧出する湧泉である。</p> <p>[1]の調査で奈良時代後半の建物群が検出され、計画的な配置であることが確認された。</p> <p>※『続日本紀』に曲水の宴の記事がある。 橋本は写経が行われた西大寺嶋院をここ（右京一条四坊一坪）に比定する。</p>	<p>奈良文化財研究所</p> <p>[1]奈良文化財研究所「平城京一条北辺四坊六坪（伝称徳天皇御山荘跡）の発掘調査 平城第151-26次調査 現地説明会資料」1984年</p> <p>※橋本義則『平安宮成立史の研究』塙書房、1995年、pp. 397-429。</p>
31)	神泉苑 図26 図27	<p>延暦19年（800）～現存</p> <p>寝殿造りの建物である乾臨閣の南庭の中央に円形に近い池（南池）が掘られ、中島があり、さらに南に築山を築き、湧水が引かれていたと考えられていて、太田静六が作成した復元想像図がよく知られている[1]。</p> <p>京都市埋蔵文化財研究所による地下鉄東西線工事の際に確認された州浜がある。報告書によると「州浜は傾斜面から底部にかけて、拳大からそれより少し大きい礫が敷かれていた。（中略）No.31トレンチで検出した平安時代の園池北縁部の水際には石敷きによる州浜がみられ、園池の北東から池へ流し込む流路（遣水）と河口部の西側（園池最北部ともみられる）に厚板を設置、舟着きの足場板として利用していたと考えられる。」とあり、太田の復原図や『都林泉名所図会』に描かれた庭園の姿と一致することが確認されている[2]。</p> <p>大内裏に隣接する離宮として平安時代を通して天皇が度々行幸した記録が『日本後紀』（表1-328以降）他に残されている。朱雀天皇（930-946在位）以降は園遊の場としても利用されなくなり、一時は荒廃した。その後慶長年間に二条城築城および三条坊門小路（現御池通り）の開通で敷地が削減され往時の16分の1に縮小したが、同じ頃、僧快我が再興を発願し東寺の寺領として現在も維持されている。</p>	<p>京都市埋蔵文化財研究所</p> <p>[1]京都市埋蔵文化財研究所編集・発行『高速鉄道東西線工事に伴う史跡旧二条離宮内の第2次発掘調査2～4期調査終了報告書』1991年</p> <p>[2]同『地下鉄東西線建設に伴う史跡旧二条離宮内の第2次発掘調査1期調査終了報告』1991年</p> <p>(宗)神泉苑『史跡神泉苑 史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業報告書』2015年</p> <p>及び前掲書[1]</p>
32)	旧嵯峨院・大沢池 図28	<p>平安時代初期 延暦21年（802）～現存</p> <p>嵯峨天皇が離宮とした地で譲位後に拡張整備が行われた。発掘調査により平安時代の遣水を検出し、最大幅12m、深さ1m、ほぼ素掘りであることが確認された。蛇行し、石組や石貼りの部分を持つ。湧水量はその後低下したと見られ、10世紀末には流路は埋没する。庭園も荒れるが、13世紀末に大覚寺の再興により滝も復活した[1]。大規模な遣水は大沢池に注ぎ、広い池に中島（天神島）をもつ。1962年の森蘊実測図を用いると、高低差約2mを直線距離91m前後（単純平均勾配2.2%）で下るものとなる（筆者計測）[2]。</p>	<p>奈良国立文化財研究所・京都府教育庁文化財保護課・京都市文化観光局</p> <p>[1]舊嵯峨御所大覚寺発行『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告―大沢池北岸域復原整備事業に伴う調査』1997年</p> <p>[2]森蘊「大覚寺大沢池地形実測図」奈良国立文化財研究所編集・発行『寝殿造系庭園の立地的考察』1962年</p>

番号	遺構名 (図版No.)	時期及び概要	調査主体 参考文献
33)	平等院庭園 図36	<p>永承7年(1052)～現存</p> <p>藤原氏が当時別業だったものを寺院にして造営し、今に残る浄土庭園である。平成2年(1990)からの宇治市教育委員会の調査により、創建時やその後の改修経過が判明した。中核となる阿弥陀堂が中島上に建ち、その中島と前面の阿字池と呼ばれる池は全周が緩やかな洲浜で囲まれていたことが判明した。当初は宇治川の河原に接しており、河畔の立地を利用して舟入を設けていた可能性もある。水源は敷地内の「阿弥陀水」ないし「法華水」と呼ばれる湧水である[1]。</p> <p>州浜の施工方法の詳細もこの調査で判明した[2]。</p>	<p>(宗) 平等院 宇治市教育委員会</p> <p>[1] 宇治市教育委員会編集『平等院 阿弥陀堂中島発掘調査報告書』(宗) 平等院、1991年</p> <p>[2] 仲隆裕「史跡名勝平等院庭園における洲浜整備」日本造園学会『造園技術報告集』2003年</p>
34)	高陽院庭園 図33	<p>寛仁3年(1019)～貞応2年(1223)焼亡</p> <p>もと桓武天皇の皇子賀陽親王の邸宅があったものを、藤原頼通が入手して寛仁3年(1019)から整備拡張を始めたものである。その壮麗さは『小右記』などにみられる。頼通自ら作庭の指示にあたったとされ、『作庭記』の著者とみられている橘俊綱(頼通の妻子)が当時の庭園の三筆頭にあげたのが、白河院、鳥羽院とこの高陽院の庭園であった。数度の罹災を経ながらも造営は続き、天皇の里内裏としても利用され、貞応2年(1223)の焼亡まで存続した。泉、幅の広い遣水、そこに掛る高い渡廊、東西南北の池、滝、築山があったことが、『栄花物語』『扶桑略記』の記事から想定されている。舟遊び、舟楽、歌合せ、馬場での駒比べなどが行われた。京都市埋蔵文化財研究所の発掘調査によると、池の護岸は州浜であった[1]。</p>	<p>京都市埋蔵文化財研究所</p> <p>[1] 奈良文化財研究所『発掘庭園資料—奈良文化財研究所史料第48冊』1998年、pp. 60-67。</p>
35)	鳥羽離宮庭園 図29	<p>応徳3年(1086)～約200年間</p> <p>鴨川と桂川が合流する三角州に位置し、古くから河川交通の要所であった場所に、貴族の別邸があつまり、平安時代後期に白河上皇、鳥羽上皇が造営した離宮である。京都府と京都市埋蔵文化財研究所が昭和56年から平成5年まで数次にわたり行った発掘調査によると、庭園は各院に付属する形で作庭されている。池は大きく3ブロックに分かれ、舟で行き来する。景石、遣水、橋、州浜、出島を検出している[1]。</p> <p>第83次調査で園地北岸の一画と景石、95次調査で園地汀の州浜や景石、115次や118次調査で島状遺構や基壇、州浜を検出している。また128次調査で95次調査の島の地業が判明[2]。また、第124次調査では土壌から呪術資料(柿経・呪符・塔婆)がまとまって出土し、古代末期の呪術・信仰に関する資料となった[3]。</p>	<p>京都市埋蔵文化財研究所</p> <p>[1] 古代学協会・古代学研究所編京都市埋蔵文化財研究所編集協力『平安京提要』角川歴彦、1994年</p> <p>[2] 京都市埋蔵文化財研究所編『鳥羽離宮跡発掘調査概報昭和63年度』京都市文化観光局、1988年</p> <p>[3] 同『鳥羽離宮跡発掘調査概報昭和62年度』1989年</p>
36)	毛越寺庭園 図37	<p>平安時代末期 12世紀～現存</p> <p>庭園は平安時代末期12世紀の作庭である。広い池は緩やかな洲浜で囲まれ、池中立石、護岸の要所の石組み、蓮池、昭和59年(1984)の発掘調査で発見された遣水がある。平成2年度(1990)までの発掘調査で中島の平安期の形状や、全面玉石敷きであること、池の全周が州浜であることなどが判明した。</p>	<p>平泉町教育委員会</p> <p>平泉町教育委員会編集・発行『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書—第7次調査』1986年 『同一9次調査』1987年 『同一11次調査』1988年 『同一12次調査』1989年 『同一13次調査』1991年</p>

番号	遺構名 (図版No.)	時期及び概要	調査主体 参考文献
37)	無量光院 庭園 図38	<p>平安時代 12世紀</p> <p>昭和27年の調査で本堂が建っていた西島、その向いに東中島とその建物跡などを検出、その後平成14年から行われていた調査で東中島周辺の池跡、庭園部分を検出している。北小島は西島から北へ橋をかけた中島状で13.0m×8.5m、西島側から北小島にかかる8基の橋跡が検出された。池跡は調査時の水田の段差から推定できた[1]。護岸は草付き（土手）であったと考えられている[2]。</p> <p>菅野成寛によると背後（西）に金鶏山を擁する借景およびランドスケープ上の中軸線があり、当院の阿弥陀如来堂を屋外から拝む時には背後の金鶏山を同時に拝むことができ、孟蘭盆会（陰暦7月15日）、及び翌7月16日の藤原清衡の命日には金鶏山の山頂に日輪が落ちるとの指摘がある[2]。</p>	<p>平泉町教育委員会</p> <p>[1]平泉町教育委員会編集・発行『特別史跡 無量光院跡発掘調査報告書Ⅲ-第17次調査-』2006年</p> <p>[2]小野健吉「平安時代の浄土庭園/浄土庭園の諸相」金子裕之編『古代庭園の思想』角川書店、2002年</p> <p>[2] 菅野成寛「平泉無量光院考」『岩手史学研究』1991年、p. 74。</p> <p>荒木伸介「岩手平泉の庭園跡地」佛教藝術学会『佛教藝術』（192）毎日新聞出版、1990年</p>
38)	兵主神社 図41	<p>平安時代 11～12世紀</p> <p>平成8年の発掘調査により遣水、池、中島、出島が確認されている。拝殿を軸に左右対称の二つの池とそれぞれに中島をもつ構成が推定されている。現存する主庭園は川から取水して池に注ぎ、拝殿の方へ流す。流れの護岸は一部州浜石敷き、主庭の池の汀が州浜石敷きである。</p>	<p>中主町教育委員会</p> <p>中主町教育委員会・(宗)兵主神社編集・発行『名勝兵主神社庭園保存整備報告書』2002年</p>
39)	浄瑠璃寺 庭園 図39	<p>平安時代 12世紀～現存</p> <p>藤原北家の庇護のもとに造営され、国宝の九体阿弥陀堂を伝える。、池を掘り、石を立てたことは寺の資料『浄瑠璃寺流記』に記録されている。昭和50-51年に森蘊により一度発掘調査、復元整備され、平成23～26年度の発掘調査により12世紀中頃には護岸を州浜とした園池が阿弥陀堂の前に完成していたこと、中島は全体が盛土で全周州浜であったことが判明している。</p>	<p>木津川市教育委員会・浄瑠璃寺</p> <p>(宗)浄瑠璃寺編集・発行『特別名勝及び史跡 浄瑠璃寺庭園保存修理事業報告書Ⅰ（発掘調査編）』2019年</p>
41)	天城山城	<p>5世紀 高句麗朝</p> <p>8か所の池があり、すべて長方形の用水池である。</p>	<p>小口基實『韓国の庭苑』小口庭園グリーンエクステリア(有)、1999年。</p>
42)	安鶴宮	<p>6世紀中頃～末 高句麗時代</p> <p>平壤に位置する後期高句麗の都城である。ひょうたん型の池が2ヶ所、長方形の池が1か所ある園池があり、蓬莱山（築山）と亭、景石があった。</p>	<p>小口前掲書(41))</p>
43)	扶余王宮 跡推定地 (扶蘇山城の西南麓)	<p>5～7世紀 百濟時代</p> <p>扶蘇山城の西南麓で検出された方形園池である。東西5.3～6.3m、南北6.25m、深さは中央部で1.15m。護岸は雑石の垂直4～5段積み、角は直角。池底は素掘りで内部の堆積土から蓮を検出。</p>	<p>忠南大学校博物館・忠清南道庁</p> <p>高瀬要一「古代東アジア（中国・韓国・日本）の方池」奈良文化財研究所『第5回中日韓風景園林学術検討会論文集』、2004年。</p>

番号	遺構名 (図版No.)	時期及び概要	調査主体 参考文献
44)	定林寺跡	6世紀 百濟 忠清南道扶余郡扶余村は百濟の最後の都であり、その中央にある定林寺跡には6世紀中頃の方形園池がある。中央の参道を挟んで東西に2基あるもので、大きさは15.3m×11mと11.2m×11m、深さはともに0.5m、護岸は垂直石積みである。池の堆積土から蓮を検出した。	忠南大学校博物館・忠清南道庁 高瀬前掲論文(43))
45)	東宮苑池	7世紀674年 新羅 方形園池、護岸は垂直石積みで中島、築山、草花があった。	小口前掲書(41))
46)	感恩寺跡	7世紀末 新羅 慶州の南東、月城郡陽北面にあり、もとは入り組んだ海に面していたと考えられる。池全体の大きさは不明、東西長70mと推測される方形園池である。北岸護岸は垂直石積みであり、池底は地山である。	国立慶州文化財研究所 高瀬前掲論文(43))
47)	雁鴨池 図44	統一新羅時代(676年～936年) 建築と池、滝石組、中島等を持つ。池の平面形は逆Lを基本とする一部直線(建築側)一部出入りのある汀線であり、護岸は全周が垂直石積みである	小口前掲書(41)) 浅野二郎他「韓国慶州の雁鴨池について」日本造園学会『造園雑誌』54(5)、1991年

横帯は遺構が稼働していたと見られる期間の概略(祭祀に限らない)

横帯は遺構が稼働していたと見られる期間の概略(祭祀に限らない)

時代	縄文時代			弥生時代			古墳時代			飛鳥時代			奈良時代			平安時代			鎌倉時代																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------------|-----------------------|--|--|------|--|--|------|--|--|------|--|--|------|--|--|------|--|--|------|--|--|---|--|--|---|--|--|---|--|--|---|--|--|---|--|--|---|--|--|----------------|--|--|----|--|--|----|--|--|----|--|--|----|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|-----------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|-----------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|-----------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|-----------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|-----------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|---------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|---------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|-------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|---------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|------------------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|---------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|------------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|-----------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|-------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|-------------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--------------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|-----------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|---------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|----------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	----	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		
(世紀)	後期			晩期			前3			前2			前1			1			2			3			4			5			6			7			8			9			10			11			12			13																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																
	239卑弥呼特使を派遣 崇神天皇即位																																							710平城京遷都																																							794平安京遷都																																							『作庭記』成立																																							1192鎌倉幕府																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																							
大陸	-108前漢																																							25後漢																																							581隋 518唐																																							960宋																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																														
半島	330高麗・百済・新羅の三国																																							676統一新羅																																							936統一高麗																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					
遺 構 ・ 庭 園	0)大湯環状列石・忍路環状列石																																							保久良神社磐座																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
	藤江別所遺跡																																							5)藤江別所遺跡(祭祀遺構)																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
	1)矢瀬遺跡																																							2)池上曽根遺跡																																							3)下市瀬遺跡-1																																							3)下市瀬遺跡-2																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																														
	4)六大A遺跡																																							6)纏向遺跡																																							7)屋代遺跡																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					
	8)中溝・深町遺跡																																							9)布留遺跡																																							10)城之越遺跡																																							11)阪原阪戸遺跡																																							12)南紀寺遺跡																																							13)南郷大東遺跡																																							14)天白磐座遺跡																																							15)三ツ寺Ⅰ遺跡																																							16)上之宮遺跡																																							17)古宮遺跡																																							18)島庄遺跡																																							19)酒船石遺跡																																							20)飛鳥京跡苑池遺構																																							21)石神遺跡																																							22)平田キタウ遺跡																																							23)平城宮東院庭園																																							24)平城京左京一条三坊十五・十六坪庭園遺跡																																							25)長屋王邸																																							26)佐紀池																																							27)平城京左京三条二坊宮跡庭園																																							28)法華寺阿弥陀浄土院																																							29)法華寺旧境内																																							30)伝称徳天皇御山荘跡																																							31)神泉苑																																							32)旧嵯峨院・大沢池																																							33)平等院庭園998-																																							34)高陽院庭園1019-1223																																							35)鳥羽離宮庭園1086-1286																																							36)毛越寺庭園																																							37)無量光院庭園																																							38)兵主神社																																							39)浄瑠璃寺庭																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
	*下賀茂神社																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																			
																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										</																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										

(表4) 『古事記』および「六国史」関連記事原文一覧

本論文関連事項の原文（抜粋）を掲載している。

書名・表中番号	出典と底本
古事記 1～22	古事記（原文）の全文検索 サイトより 古事記の電子テキスト 底本は岩波古典文学大系1990年 サイト制作者 藤田隆一 http://www.seisaku.bz/kojiki_index.html 2022年3月検索
日本書紀 31～97	日本書紀（原文）の全文検索サイトより 日本書紀の電子テキスト 底本は岩波古典文学大系1990年。 サイト制作者 藤田隆一 http://www.seisaku.bz/shoki_index.html 2022年3月検索
続日本紀 101～259	日本古代史料本文データ 底本 岩波古典文学大系 http://infoseek_rip.g.ribbon.to/kodaishi-db.hp.infoseek.co.jp/ 2022年3月検索
日本後紀 301～632	日本古代史料本文データ 底本 岩波古典文学大系 ※逸文に『日本紀略』『類聚国史』を含む http://infoseek_rip.g.ribbon.to/kodaishi-db.hp.infoseek.co.jp/ 2022年3月検索
続日本後紀 701～839	検索用『続日本後紀』国史大系版◆要校正 星野聰氏入力 水野柳太郎改造 2022年3月検索
文徳天皇実録 900～1023	検索用『文徳実録』国史大系版◆要校正 星野聰氏入力 水野柳太郎改造 2022年3月検索
日本三代実録 1100～1555	三代実録 検索用 ◆要校正 卷卅一以前 国史大系・第二水準漢字使用 卷三二以降 底本混雑（ ）で記載 ・第一水準漢字使用 星野聰氏入力 水野柳太郎改造 2022年3月検索

※同一項目（キーワード）の全件を抽出したものではない。

※期間を限定して抽出した項目がある（例 地震など）

※テキストデータの出典はインターネット上で提供されている上記のフリーソフトを利用している。

※日付を簡素化して掲載した。

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
				古事記		
1	神代			寔知、懸鏡吐珠而百王相續、喫劔切蛇、以萬神蕃息與。議 安河而平天下 、論小濱而清國土。	天の安河	
2				後妹伊邪那美命言「阿那邇夜志愛袁登古袁。」如此言竟而御合生子、 淡道之穗之狹別嶋 。訓別、云和氣。下效此。次生 伊豫之二名嶋 、此嶋者、 身一而有面四、每面有名 、故、伊豫國謂愛上比賣此三字以音、下效此也、讀岐國謂飯依比古、粟國謂大宜都比賣此四字以音、土左國謂建依別。 次生 隱伎之三子嶋 、亦名天之忍許呂別。許呂二字以音。次生 筑紫嶋、此嶋亦、身一而有面四、每面有名 、故、筑紫國謂白日別、豐國謂豐日別、肥國謂建日向日豐久土比泥別自久至泥、以音、熊曾國謂建日別。曾字以音。次生 伊伎嶋 、亦名謂天比登都柱。自比至都以音、訓天如天。次生 津嶋 、亦名謂天之狹手依比賣。次生 佐度嶋 。次生 大倭豐秋津嶋 、亦名謂天御虛空豐秋津根別。故、因此八嶋先所生、謂 大八嶋國 。	国・島	
3				既生 國竟、更生神 。	国・島・神	
4				自曾至邇以音、比良邇者、附五百入之韃、亦所取佩伊都此二字以音之竹鞞而、弓腹振立而、 堅庭 者、於向股蹈那豆美三字以音、如沫雪敷散而、伊都二字以音之男建訓建云多祁夫蹈建而待問「何故上來。」	堅庭	
5				故爾各中置天安河而、 宇氣布 時、天照大御神、先乞度建速須佐之男命所佩十拳劔、打折三段而、奴那登母由良邇此八字以音、下效此振滌天之眞名井而、佐賀美邇迦美而自佐下六字以音、下效此、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、多紀理毘賣命此神名以音、亦御名、謂奧津嶋比賣命。次市寸嶋上比賣命、亦御名、謂狹依毘賣命。次多岐都比賣命。	ツケ 誓ひ	
				故於是、天照大御神見畏、開 天石屋戸 而、刺許母理此三字以音坐也。爾高天原皆暗、葦原中國悉闇、因此而常夜往。	天の岩戸	
6				是以八百萬神、於天安之河原、神集集而訓集云都度比 、高御產巢日神之子・思金神令思訓金云加尼而、集常世長鳴鳥、令鳴而、 取天安河之河上之天堅石 、取天金山之鐵而、求鍛人天津麻羅而麻羅二字以音、科伊斯許理度賣命自伊下六字以音、令作鏡、科玉祖命、令作八尺勾璫之五百津之御須麻流之珠而、召天兒屋命・布刀玉命布刀二字以音、下效此而、 內拔天香山之眞男鹿之肩拔而、取天香山之天之波波迦 此三字以音、木名而、令占合麻迦那波而自麻下四字以音、天香山之五百津眞賢木矣、根許士爾許士而自許下五字以音、於上枝、取著八尺勾璫之五百津之御須麻流之玉、於中枝、取繫八尺鏡訓八尺云八阿多、於下枝、取垂白丹寸手・青丹寸手而訓垂云志殿、此種種物者、布刀玉命・布刀御幣登取持而、天兒屋命、布刀詔戸言禱白而、天手力男神、隱立戸掖而、天宇受賣命、手次繫天香山之天之日影而、爲縹天之眞拆而、手草結天香山之小竹葉而訓小竹云佐佐、於天之石屋戸伏汗氣此二字以音蹈登杼呂許志此五字以音、爲神懸而、掛出胸乳、裳緒忍垂於番登也。爾高天原動而、八百萬神共咲。	天の安河原 天の岩戸	
7				佐怒都登理 岐藝斯波登與牟 爾波都登理 迦祁波那久 宇禮多久母	庭	
8				又娶天知迦流美豆比賣訓天如天、亦自知下六字以音生子、奧津日子神、次奧津比賣命、亦名、大戸比賣神、此者諸人以拜竈神者也、次大山上咋神、亦名、山末之大主神、此神者、坐近淡海國之日枝山、亦坐葛野之松尾、用鳴鏑神者也、 次庭津日神 、次阿須波神此神名以音、次波比岐神此神名以音、次香山戸臣神、次羽山戸神、 次庭高津日神 、次大土神、亦名、土之御祖神。九神。	庭	
9				「恐之。仕奉。然於此道者、僕子、建御雷神可遣。」乃貢進。 爾天鳥船 神、副建御雷神而遣。	天の鳥舟	雷は舟で往来する
10				故爾詔天津日子番能邇邇藝命而、離天之 石位 、押分天之八重多那此二字以音雲而、伊都能知和岐知和岐弓自伊以下十字以音、於天浮橋、宇岐土摩理、蘇理多多斯弓自宇以下十一字亦以音、天降坐于竺紫日向之高千穗之久土布流多氣。	石磐	
11	3世紀～4世紀前半(推定)	3世紀～4世紀前半(推定)	垂仁	其御子詔言「是於河下、如青葉山者、見山非山。若坐出雲之石碕之曾宮、葦原色許男大神以伊都玖之祝 大延 乎。」問賜也。	祝大延(庭)	
12	4世紀中頃(推定)	4世紀中頃(推定)	仲哀	其大后息長帶日賣命者、當時歸神。故、天皇坐筑紫之訶志比宮、將擊熊曾國之時、天皇控御琴而、建 內宿禰 大臣居於 沙庭 、請神之命。	庭	神功皇后

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
13				爾其神大忿詔「凡茲天下者、汝非應知國。汝者向一道。」於是、建内宿禰大臣白「恐我天皇、猶阿蘇婆勢其大御琴。自阿至勢以音。」爾稍取依其御琴而、那摩那摩邇此五字以音控坐。故、未幾久而不聞御琴之音、即舉火見者、既崩訖。	琴	神功皇后
14				亦建内宿禰居於沙庭、請神之命。	庭	神功皇后
15				許能美岐波 和賀美岐那良受 久志能加美 登許余邇伊麻須 伊波多多須 須久那美迦微能 加牟菩岐 本岐玖琉本斯 登余本岐 本岐母登本斯 麻都理許斯美岐叙 阿佐受袁勢 佐佐	石立たす 少名御神	神功皇后 少名彦名神
16	4世紀後半頃 (推定)	4世紀後半頃 (推定)	応神	知婆能 加豆怒袁美禮婆 毛毛知陀流 夜邇波母美由 久爾能富母美由	庭	
17	4世紀末～5世紀前半 (推定)	4世紀末～5世紀前半 (推定)	仁徳	淤志弓流夜 那爾波能佐岐用 伊傳多知弓 和賀久邇美禮婆 阿波志摩 淤能基呂志摩 阿遲摩佐能 志麻母美由 佐氣都志摩美由	庭・難波	
18				爾匍匐進赴、跪于庭中時、水潦至腰。	庭	
19	5世紀中ごろ	5世紀中ごろ	安康	詔其大長谷王子之御伴人「未寤坐。早可白也、夜既曙訖、可幸獵庭。」乃進馬出行。	庭 (かりにわ)	
20	五世紀後半	五世紀後半	雄略	夜麻登能久爾袁 阿岐豆志麻登布	国・島	あきつしま
21				毛毛志記能 淤富美夜比登波 宇豆良登理 比禮登理加氣弓 麻那婆志良袁由岐阿閑 爾波須受米 宇受須麻理韋弓 祁布母加母 佐加美豆久良斯多加比加流 比能美夜比登 許登能 加多理基登母 許袁婆	庭雀	
22	6世紀中頃	6世紀中頃	欽明	弟、天國押波流岐廣庭天皇、坐師木嶋大宮、治天下也。	国・島・庭	欽明天皇 奈良県磯城郡
30番台～		日本書紀				
31	神代			次生蛭兒。雖已三歳、脚猶不立、故載之於天磐櫛樟船而順風放棄。	船	
32				已而、天照大神、則以八坂瓊之曲玉、浮寄於天真名井、嚙斷瓊端、而吹出氣噴之中化生神、號市杵嶋姬命、是居于遠瀛者也。又嚙斷瓊中、而吹出氣噴之中化生神、號田心姬命、是居于中瀛者也。又嚙斷瓊尾、而吹出氣噴之中化生神、號湍津姬命、是居于海濱者也。凡三女神。於是、素戔鳴尊、以所持劔、浮寄於天真名井、嚙斷劔末、而吹出氣噴之中化生神、號天穗日命。次正哉吾勝勝速日天忍骨尊、次天津彥根命、次活津彥根命、次熊野櫛樟日命、凡五男神、云爾。	天真名井 誓ひ	
33				一書曰、日神與素戔鳴尊、隔天安河、而相對乃立誓約曰「汝若不有奸賊之心者、汝所生子必男矣。如生男者、予以爲子而令治天原也。」	天安河 誓ひ	
34				于時、八十萬神、會於天安河邊、計其可禱之方。	天安河	
35				其雄飛降、止於天稚彥門前所植植、此云多底婁湯津杜木之杪。	湯津杜木	
36				以鷄爲持傾頭者、以川鴈爲持帚者、又以雀爲春女。一云「乃以川鴈爲持傾頭者、亦爲持帚者、以鳩爲尸者、以雀爲春者、以鷓鴣爲哭者、以鴛鴦爲造綿者、以鳥爲穴人者。凡以衆鳥任事。」	鳥	
37				及至奉降皇孫火瓊瓊杵尊於葦原中國也、高皇產靈尊、勅八十諸神曰「葦原中國者、磐根・木株・草葉、猶能言語。夜者若燦火而喧響之、晝者如五月蠅而沸騰之」云々。	アニミズム	
38				門前有一井、井上有一湯津杜樹、枝葉扶疏。	湯津杜樹	竜宮城入口 (他4か所に同項有)
39		B. C. 6 c	神武	戊午年春二月丁酉朔丁未、皇師遂東、舳艫相接。方到難波之碕、會有奔潮太急。因以名爲浪速國、亦曰浪花、今謂難波訛也。訛、此云與許奈磨盧。	難波	
40	垂仁25	A. D. 3 c	垂仁	天皇、以倭姬命爲御杖、貢奉於天照大神。	御杖	

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
41				三月丁亥丁亥朔丙申。離天照大神於豐耜入姫命。託于倭姫命。爰倭姫命求鎮坐大神之處。而詣菟田筱幡。〈筱此云佐佐。〉更還之入近江國。東廻美濃到伊勢國。時天照大神誨倭姫命曰。是神風伊勢國。則常世之浪重浪歸國也。傍國可憐國也。欲居是國。 故隨大神教。其祠立於伊勢國。因興齋宮千五十鈴川上。是謂磯宮。 則天照大神始自天降之處也。〈一云。天皇以倭姫命爲御杖。貢奉於天照太神。是以倭姫命以天照太神。鎮坐於 磯城嚴櫃之本 而祠之。然後隨神誨。取丁巳年（垂仁二六年丁巳前四）冬十月甲子。遷于伊勢國渡遇宮。是時倭太神。著穗積臣遠祖大水口宿禰。而誨之曰。太初之時期曰。天照大神。悉治天原。皇御孫尊。專治葦原中國之八十魂神。我親治 大地官 者。言已訖焉。	伊勢 磯城嚴櫃之本 （依代） 大地官（国魂）	
42	垂仁35	A. D. 3 c		秋九月。遣五十瓊敷命于河内國。作高石池。茅渟池。	池	
43				冬十月。作倭狹城池。及迹見池。	池	
44				是歲。令諸國多開池溝數八百之。以農爲事。因是百姓富寬。天下大平也。	池	
45				十月。五十瓊敷命 居於茅渟菟砥川上宮。作劔一千口。因名其劔謂川上部。亦名曰裸伴。〈裸伴。此云阿箇潘娜我等母。〉藏于石上神宮也。是後命五十瓊敷命。俾主 石上神宮之神寶 。〈一云。五十瓊敷皇子。居于茅渟菟砥河上。而喚蝦名河上。作大刀一千口。是時楯部。倭文部。神弓削部。神矢作部。大穴磯部。泊櫃部。玉作部。神刑部。日置部。大刀佩部。并十箇品部賜五十瓊敷皇子。其一千口大刀者。藏于忍坂邑。然後從忍坂移之。藏于石上神宮。是時神乞之言。春日臣族。名市河令治。因以命市河令治。是 今物部首之始祖 也。〉	石上神宮	布留遺跡
46	景行4		景行	二月甲寅朔甲子、天皇幸美濃。左右奏言之「茲國有佳人曰弟媛、容姿端正、八坂入彦皇子之女也。」天皇、欲得爲妃、幸弟媛之家。弟媛、聞乘輿車駕、則隱竹林。於是天皇、權令弟媛至而居于 泳宮之泳宮 、此云區玖利能彌挪、鯉魚浮池、朝夕臨視而戲遊。時弟媛、欲見其鯉魚遊而密來臨池、天皇則留而通之。爰弟媛以爲、夫婦之道古今達則也、然於吾而不便、則請天皇曰「妾、性不欲交接之道、今不勝皇命之威、暫納帷幕之中、然意所不快、亦形姿穢陋、久之不堪陪於掖庭。唯有妾姊、名曰八坂入媛、容姿麗美、志亦貞潔。宜納後宮。	泳宮之泳宮 池	
47	景行51			五十一年春正月壬午朔戊子、招群卿而宴數日矣。時皇子稚足彥尊・武内宿禰、不參赴于 宴庭 。天皇召之問其故、因以奏之曰「其宴樂之日、群卿百寮、 必情在戲遊 、不存國家。若有狂生而伺牆閣之隙乎。故侍門下備非常。」時天皇謂之曰「灼然。灼然、此云以椰知舉。」則異寵焉。	宴の庭 戲遊	
48	仲哀8		仲哀	九月朔己卯。（中略）自洞奉迎皇后。則見御船不進。惶懼之。忽 作魚沼 。鳥池悉聚魚鳥。皇后看是魚鳥之遊而忿心稍解。	池	
49	仲哀9		神功 摂政	三月壬申朔、皇后遷吉日、入齋宮、親爲神主。則命武内宿禰令撫琴、喚中臣鳥賊津使主爲 審神者 。因以千綯高綯置琴頭尾、而請曰「先日教天皇者誰神也、願欲知其名。」	審神者 琴	第14代仲哀 天皇の皇后
50				審神者 曰「今不答而更後有言乎。」	審神者	
51	應神11		応神	十月。作劔池。輕池。鹿垣池。厩坂池。	池	
52	應神13			九月。髮長媛至自日向。便安置於桑津邑。爰皇子大鸕鷀尊。及見髮長媛。感其形之美麗。常有戀情。於是天皇知大鸕鷀尊感髮長媛而欲配。（中略）報歌曰。 瀨豆多摩蘆。豫佐瀨能伊戒珥。奴那波區利。破陪鷄區辭羅珥。委愚比菟區。 （後略）	池・婚姻	
53	應神31	330頃		詔群卿曰「官船名 枯野 者、伊豆國所貢之船也、是朽之不堪用。 ～ 初 枯野 船爲鹽薪燒之日、有餘燼、則奇其不燒而獻之。天皇異以令作琴、其音、鏗鏘而遠聆、是時天皇歌之曰、 訶羅怒鳥 之褒珥椰枳 之餓阿摩離 虛等珥菟句離 訶枳譬句椰 由羅能斗能 斗那訶能異句離珥 數例多菟 那豆能紀能 佐椰佐椰	船・なづのき・ アニミズム	
54	仁徳1	370頃	仁徳	都 難波 、是謂高津宮、即宮垣室屋弗望色也、桺梁柱楹弗藻飾也、茅茨之蓋弗割齊也、此不以私曲之故留耕績之時者也。	難波（高津宮）	
55	仁徳11			唯衫子、取全 匏 兩箇、臨于難塞水、乃取兩箇匏、 投於水中 、請之曰「河神、崇之以吾爲幣。是以、今吾來也。必欲得我者、沈是 匏 而不令泛。則吾知眞神、親入水中。若不得沈匏者、自知偽神。何徒亡吾身。」	瓢箪	
56	仁徳12			秋七月辛未朔癸酉、高麗國貢鐵盾・鐵的。八月庚子朔己酉、饗高麗客於朝。是日、集群臣及百寮、令射高麗所獻之鐵盾的、諸人不得射通的、唯的臣祖盾人宿禰射鐵的而通焉、時高麗客等見之、畏其射之勝工、共起以拜朝。	外国使節 射	
57	仁徳67			是歲、於吉備中國川嶋河派、有大 虬 、令苦人。時路人、觸其處而行、必被其毒、以多死亡。於是、笠臣祖縣守、爲人勇捍而強力、臨派淵、以三全 瓠 投水曰「汝屢吐毒令苦路人、余殺汝 虬 。汝沈是瓠則余避之、不能沈者仍斬汝身。」時、水 虬 化鹿、以引入 瓠 、 瓠 不沈、即舉劔入水斬 虬 。	瓢箪 虬	

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
58	履中3		履中	十一月丙寅朔辛未。天皇泛兩枝船干磐余市磯池。與皇妃各分乘而遊宴。膳臣余磯獻酒。時櫻花落干御盞。天皇異之。則召物部長眞膽連詔之曰。是花也。非時而來。其何處之花矣。汝自可求。於是。長眞膽連。獨尋花。獲干披上室山而獻之。天皇歡其希有。即爲宮名。故謂磐余稚櫻宮。其此之縁也。是日。改長眞膽連之本姓曰稚櫻部造。又號膳臣余磯曰稚櫻部臣。	池・花	磐余市磯池 (しのいけ)
59	允恭14	440頃	允恭	嶋神崇之曰「不得獸者、是我之心也。赤石海底有眞珠、其珠祠於我則悉當得獸。」	島	
60	雄略7	450頃	雄略	秋七月甲戌朔丙子、天皇詔少子部連螺贏曰「朕、欲見三諸岳神之形。或云「此山之神爲大物主神也。」	三輪山	
61	雄略14			夏四月甲午朔、天皇欲設吳人、歷問群臣曰「其共食者、誰好乎。」群臣僉曰「根使主可。」天皇、即命根使主爲共食者、遂於石上高拔原、饗吳人。	共食	
62	顯宗1	460頃	顯宗	三月上巳、幸後苑、曲水宴。	曲水宴	曲水宴初見
63	顯宗2			春三月上巳、幸後苑曲水宴。	曲水宴	
64	顯宗3			三月上巳、幸後苑、曲水宴。	曲水宴	
65	推古14	606	推古	十四年夏四月乙酉朔壬辰、銅繡丈六佛像並造竟。是日也、丈六銅像坐於元興寺金堂。時佛像、高於金堂戸、以不得納堂。於是、諸工人等議曰、破堂戸而納之。然鞍作鳥之秀工、不壞戸得入堂。即日、設齋。	孟蘭盆会	孟蘭盆会に先立つ
66	推古20	612	推古	是歲、自百濟國有化來者、其面身皆斑白、若有白癩者乎。惡其異於人、欲棄海中嶋、然其人曰「若惡臣之斑皮者、白斑牛馬不可畜於國中。亦臣有小才、能構山岳之形。其留臣而用則爲國有利、何空之棄海嶋耶。」於是、聽其辭以不棄、仍令構須彌山形及吳橋於南庭。時人號其人曰路子工、亦名芝耆摩呂。	路子工 須弥山	路子工
67	推古34	626		夏五月戊子朔丁未、大臣薨、仍葬於桃原墓。大臣則稻目宿禰之子也、性有武略亦有辨才、以恭敬三寶。家於飛鳥河之傍、乃庭中開小池、仍興小嶋於池中、故時人曰嶋大臣。	島大臣	
68	舒明7	635	舒明	秋七月乙未朔辛丑、饗百濟客於朝。是月、瑞蓮生於劔池、一莖二花。	蓮	
69	皇極1	642	皇極	乃命健兒、相撲於翹岐前。	相撲	相撲初見
70	皇極3	644		偶預中大兄於法興寺槻樹之下打毬之侶、而候皮鞋隨墮脫落、取置掌中、前跪恭奉。	槻樹・蹴鞠	中大兄皇子と蘇我馬子の出会い (法興寺)
71	皇極3	644		戊申、於劔池蓮中有一莖二萼者。	蓮	
72	皇極4	645		是日、雨下潦水溢庭、以席障子覆鞍作屍。	庭	おほば
73	大化1	645	皇極/ 孝徳	乙卯、天皇・皇祖母尊・皇太子、於大槻樹之下、召集群臣、盟曰。	槻木	
74	大化1	645	孝徳	冬十二月乙未朔癸卯、天皇遷都難波長柄豐碯。	難波	
75	白雉2	651		冬十二月晦、於味經宮請二千一百餘僧尼使讀一切經。是夕、燃二千七百餘燈於朝廷内、使讀安宅・土側等經。於是、天皇從於大郡遷居新宮、號曰難波長柄豐碯宮	庭	おほば
76	白雉5	654	斉明	辛丑、作須彌山像於飛鳥寺西、且設孟蘭盆會、暮饗觀貨邏人或本云、墮羅人。	須弥山 孟蘭盆会 饗宴	孟蘭盆会初見
77	斉明2	656		秋八月癸巳朔庚子、(中略)是歲、於飛鳥岡本更定宮地。時、高麗・百濟・新羅並遣使進調、爲張紺幕於此宮地而饗焉。遂起宮室、天皇乃遷、號曰後飛鳥岡本宮。於田身嶺、冠以周垣田身山名、此云大務、復於嶺上兩槻樹邊起觀、號爲兩槻宮、亦曰天宮。時好興事、廼使木工穿渠自香山西至石上山、以舟二百隻載石上山石順流控引、於宮東山累石爲垣。時人謗曰、狂心渠。損費功夫三萬餘矣、費損造垣功夫七萬餘矣。宮材爛矣、山椒埋矣。又謗曰、作石山丘、隨作自破。若據未成之時作此謗乎。又作吉野宮。(中略)災岡本宮。	岡本宮 (酒舟石遺跡)	
78	斉明3	656		秋七月丁亥朔己丑、(中略)辛丑、作須彌山像於飛鳥寺西、且設孟蘭盆會、暮饗觀貨邏人或本云、墮羅人。	須弥山 孟蘭盆会 饗宴	
79	斉明5	659		三月戊寅朔、天皇幸吉野而肆宴焉。庚辰、天皇幸近江之平浦平、此云毗羅。丁亥、吐火羅人共妻舍衛婦人來。甲午、甘檮丘東之川上、造須彌山而饗陸奥與越蝦夷。	須弥山 饗宴	
80	斉明5	659		是歲、命出雲國造關名修嚴神之宮。	神の宮	
81	斉明6	660		夏五月辛丑朔戊申、高麗使人乙相賀取文等、到難波館。是月、有司、奉勅造一百高座・一百衲袈裟、設仁王般若之會。又、皇太子初造漏刻、使民知時。	漏刻台	
82	斉明6	660		又、阿倍引田臣關名獻夷五十餘。又、於石上池邊作須彌山、高如廟塔、以饗肅慎卅七人。又、舉國百姓、無故持兵往遷於道。國老言、百濟國失所之相乎。	須弥山 饗宴	
83	斉明6	660		十二月丁卯朔庚寅、天皇幸于難波宮。	難波	

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
84	斉明7	661		是時、断除 朝倉社木 而作此宮之故、 神忿 壤殿、亦見宮中鬼火。由是、大舍人及諸近侍病死者衆。	木の祟り	
85	斉明7	661		乙酉、天皇之喪還泊于 難波 。	難波で殯	
86	白鳳2	674	天武	九月癸丑朔庚辰、 饗 金承元等於 難波 、奏種々樂、賜物各有差。	難波（人名）・饗宴	
87	白鳳2	674		是日、更加 佐官 二僧。其有四 佐官 、始起于此時也。	左官	
88	白鳳9	681		秋七月甲戌朔、飛鳥寺西 槻枝 、自折而落之。	槻樹の枝	
89	白鳳10	682		七月甲午 隼人多來貢方物。 是日。大隅隼人與阿多隼人 相撲 於朝廷。大隅隼人勝之	相撲	
90	白鳳13	685		丙午、天皇、御于 東庭 、群卿侍之。時召能 射 人及侏儒・左右舍人等 射 之。	庭・射	東庭おほぼ
91	白鳳14	686		九月甲辰朔壬子、天皇 宴 于舊宮 安殿之庭 。	庭・宴 重陽の節	おほぼ
92	朱鳥2	687	持統	十二月乙酉朔丙申、 饗 蝦夷男女二百一十三人於飛鳥寺西 槻下 、仍授冠位、賜物各有差。	饗・槻木	
93	朱鳥4	690		三月丁丑朔丙申、賜京與畿内人、年八十以上者、 嶋宮 稻人廿束。	嶋宮	
94	朱鳥6	692		辛丑、 饗 祿新羅朴憶德於 難波館 。	饗・難波	
95	朱鳥7	693		秋七月 ～ 辛丑、遣大夫謁者詣諸社 祈雨 。癸卯、遣大夫謁者詣諸社 請雨 。	祈雨	
96	朱鳥8	694		春正月乙酉朔丙戌、以正廣肆授直大壹布勢朝臣御主人與大伴宿禰御行、増封人二百戸、通前五百戸、並爲氏上。辛卯、饗公卿等。己亥、進御薪。庚子、饗百官人等。辛丑、 漢人奏 踏歌、五位以上射。壬寅、六位以下射、四日而畢。癸卯、 唐人奏 踏歌。乙巳、幸藤原宮、即日還宮。	踏歌 藤原宮還宮	
97	朱鳥9	695		五月丁未朔己未、 饗 隼人大隅。丁卯、觀隼人 相撲 於西 槻下 。	饗・相撲・槻下	
100番台～		続日本紀				
101	文武2	698	文武	四月戊午。 奉馬 于芳野水分峯神。 祈雨 也。	奉馬・祈雨	
102				六月丙辰。奉馬于諸社 祈雨 也。	祈雨	
103				十一月己卯。 大嘗	大嘗	
104	文武3	699		一月癸未。幸 難波宮 。	難波	
105	慶雲3	706		三年春正月丙子朔。天皇御大極殿受朝。新羅使金儒吉等在列。朝廷儀衛有異於常。	朝賀	朝堂の庭
106				正月壬午。 饗 金儒吉等于朝堂。奏諸方樂于 庭 。叙位賜祿各有差。	奏楽・庭	朝堂の庭
107				九月丙寅。行幸 難波 。	難波	
108				是年。天下諸國疫疾。百姓多死。始作土牛 大儺 。	追儺	
109	和同1	708	元明	己卯。 大嘗 。遠江但馬二國供奉其事。	大嘗祭	
110				辛巳。宴五位以上于内殿。 奏諸方樂 於 庭 。賜祿各有差。	大嘗祭	
111	和同3	710		辛酉。始遷都于平城。以左大臣正二位石上朝臣麻呂爲留守。	平城京遷都	
112	神龜2	725	聖武	冬十月庚申。天皇幸 難波宮 。	難波	
113	神龜3	726		十月庚午。以式部卿從三位藤原朝臣宇合。爲知造 難波宮事 。陪從无位諸王。六位已上才藝長上并雜色人。 難波宮 官人。郡司已上賜祿各有差。	難波	
114				十月癸酉。車駕至自 難波宮 。	難波	
115	神龜4	727		春正月甲戌朔。 廢朝 。雨也。	廢朝	
116				正月丙子。天皇御大極殿 受朝 。是日。左京職獻白雀。河内國獻嘉禾異畝同穗。	朝賀	
117				正月庚辰。 宴 五位已上於朝堂。	宴	白馬の節会
118				正月壬午。御 南苑宴 五位已上。	南苑宴	
119				二月壬子。造 難波宮 雇民免課役并房雜徭。	難波	
120				五月辛卯。從楯波池。飄風忽來。吹折 南苑樹 二株。即化成雉。	南苑 樹が鳥になった ・アニミズム	
121	神龜5	728		五年春正月戊戌朔。 廢朝 。雨也。	廢朝	雨天中止
122				五月甲寅。（中略）仍宴五位已上及高齊德等。賜大 射 及雅樂寮之樂。宴訖賜祿有差。	射・楽・宴	
123				三月己亥。天皇御 鳥池 塘。 宴 五位已上。賜祿有差。又召文人。令賦 曲水 之詩。	鳥池・宴 曲水	
124	天平1	729		三月癸巳。天皇御松林苑 宴羣臣 。	宴	
125				八月癸亥。又諸國天神地祇者。宜令長官致 祭 。若有限外應 祭山川者聽祭 。	祭	
126				八月壬午。 難波高津宮 御宇大鷦鷯天皇葛城曾豆比古女子伊波乃比賣命皇后（止）	難波（高津宮）	仁徳天皇
127	天平2	730		春正月丙戌朔。 廢朝 。雨也。	廢朝	
128				正月丁亥。天皇御大極殿 受朝 。	朝賀	
129				正月壬辰。 宴 五位已上於 中朝 。賜祿有差。	宴・中宮	
130				正月辛丑。天皇御大安殿宴五位已上。晚頭。移幸皇后宮。百官主典已上陪從 踏歌 。且奏且行。引入宮裏。以賜酒食。因令探短籍。書以仁義禮智信五字。隨其字而賜物。得仁者■也。義者絲也。礼者綿也。智者布也。信者段常布也。	宴・芸能 踏歌	

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
131				三月丁亥。天皇御松林宮。宴五位以上。引文章生等令賦曲水。	松林宮・宴曲水	
132	天平4	732		三月己巳。知造難波宮事從三位藤原朝臣宇合等已下仕丁已上。賜物各有差。	難波	
133	天平6	734		春正月癸亥朔。天皇御中宮宴侍臣。饗五位已上於朝堂。	宴・朝堂	
134				二月癸巳朔。天皇御朱雀門覽歌垣。男女二百■餘人。五品已上有風流者皆交雜其中。正四位下長田王。從四位下栗栖王。門部王。從五位下野中王等爲頭。以本末唱和。爲難波曲。倭部曲。淺茅原曲。廣瀬曲。八裳刺曲之音。令都中士女縱觀。極歡而罷。賜奉歌垣男女等祿有差。	歌垣	後の踏歌
135				三月辛未。行幸難波宮。	難波宮	
136				三月丁丑。陪從百官衛士已上。并造難波宮司。國郡司。樂人等。賜祿有差。免供奉難波宮東西二郡今年田租調。自餘十郡調。	難波宮	
137				三月戊寅。車駕發自難波。宿竹原井頓宮。	難波宮	
138				三月庚辰。車駕還宮。		平城宮
139				秋七月丙寅。天皇觀相撲戲。是夕徙御南苑。命文人賦七夕之詩。賜祿有差。	相撲・南苑	
140				七月辛未。班給難波京宅地。	難波京	
141	天平7	735		七年春正月戊午朔。天皇御中宮宴侍臣。又饗五位已上於朝堂。	宴・朝堂	
142				正月辛卯。天皇御大極殿。大隅。薩麻二國隼人等奏方樂。	大極殿・楽	
143	天平8	736		八年春正月丁酉。天皇宴羣臣於南殿。賜祿有差。	宴・南殿	
144	天平9	737		五月壬辰。詔曰。四月以來。疫旱並行田苗■萎。由是。祈禱山川。奠祭神祇。未得効驗。至今猶苦。	祈禱	
145				十月庚申。天皇御南苑。授從五位下安宿王從四位下。无位黃文王。從五位下圓方女王。紀女王。忍海部女王並從四位下。	南苑	
146				十二月壬戌。外從五位下高麥太爲陰陽頭■陰陽師。	陰陽	
147	天平10	738		春正月庚午朔。天皇御中宮。宴侍臣。饗五位已上於朝堂。信濃國獻神馬。黑身白髦尾。	宴・饗神馬	
148				正月丙戌。皇帝幸松林。賜宴於文武官主典已上。實祿有差。	松林・宴	
149				秋七月癸酉。天皇御大藏省覽相撲。晚頭轉御西池宮。因指殿前梅樹。勅右衛士督下道朝臣眞備及諸才子曰。（後略）	相撲・西池宮	
150	天平12	740		春正月戊子朔。天皇御大極殿受朝賀。渤海郡使新羅學語等同亦在列。	大極殿朝賀	
151				正月癸卯。天皇御南苑宴侍臣。饗百官及渤海客於朝堂。五位已上賜摺衣。	南苑・宴朝堂・饗	
152				正月甲辰。天皇御大極殿南門觀大射。五位已上射了。乃命渤海使已玠蒙等射焉。	大極殿南門射	
153				二月甲子。行幸難波宮。	難波宮	
154	天平13	741		春正月癸未朔。天皇始御恭仁宮受朝。宮垣未就。繞以帷帳。是日。宴五位已上於內裏。賜祿有差。	朝賀	恭仁宮
155				正月戊戌。御大極殿賜宴百官主典已上。	太極殿・宴	
156				三月辛丑。攝津職言。自今月十四日始至十八日。有鶴一百八。來集宮內殿上。或集樓閣之上。或止太政官之庭。每日辰時始來。未時散去。仍遣使鎮謝焉。	難波宮	
157				閏三月己巳。難波宮鎮柩。庭中有狐頭斷絕而無其身。但毛屎等散落頭傍。	難波宮・怪	
158	天平14	742		春正月丁未朔。百官朝賀。	朝賀	
159				正月壬戌。天皇御大安殿。宴群臣。酒酣奏五■田舞。訖更令少年童女踏歌。又賜宴天下有位人并諸司史生。於是六位以下人等鼓琴。歌曰。新年始遷。何久志社。供奉良米。万代摩提丹。宴訖賜祿有差。又賜家人大官百姓廿人爵一級。入都內者。无問男女並賻物。	田舞・踏歌	
160	天平15	743		正月癸卯。天皇御大極殿。百官朝賀。	朝賀	
161				正月丁未。天皇御大安殿宴五位已上。賜祿有差。	宴	
162	天平16	744		春正月丙申朔。廢朝。饗五位已上於朝堂。	廢朝・饗応	
163				閏正月乙丑朔。詔喚會百官於朝堂。問曰。恭仁難波二京何定爲都。各言其志。於是陳恭仁京便宜者。五位已上廿四人。六位已下百五十七人。陳難波京便宜者。五位已上廿三人。六位已下一百卅人。	難波遷都投票	恭仁181VS 難波153
164				閏正月乙亥。天皇行幸難波宮。	難波宮	
165				二月甲寅。運恭仁宮高御座并大楯於難波宮。又遣使取水路運漕兵庫器仗。	難波宮	恭仁宮から高御座を難波に移動
166				二月乙卯。恭仁京百姓情願遷難波宮者恣聽之。	難波宮	希望者は恭仁から難波に移動してよい
167				二月庚申。左大臣宣勅云。今以難波宮定爲皇都。宜知此狀。京戸百姓任意往來。	難波宮	遷都宣言
168				三月甲戌。石上履井二氏樹大楯槍於難波宮中外門。	難波宮	皇都の表示
169				十一月庚辰。授正五位上藤原朝臣八束。正五位下紀朝臣瀨人並從四位下。外從五位下大宅朝臣君子。田邊史難波並從五位下。	難波	人名

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
170	天平17	745		春正月己未朔。 廢朝 。乍遷新京。伐山開地以造宮室。垣牆未成。繞以帷帳。令兵部卿從四位上大伴宿祢牛養。衛門督從四位下佐伯宿祢常人樹大楯槍。〈石上榎井二氏倉卒不及追集。故令二人爲之。〉是日。 宴 五位已上於御在所。賜祿有差。	廢朝・宴	紫香樂宮に遷都
171				五月乙亥。 地震 。天皇親臨 松林倉廩 。賜陪從人等穀有差。	地震・松林宮	
172				六月庚子。(中略)是日。樹宮門之大楯。		平城宮に遷都
173				八月癸丑。行幸 難波宮 。以中納言從三位巨勢朝臣奈豆麻呂。藤原朝臣豐成爲留守。	難波宮	天皇病氣
174	天平18	746		春正月癸丑朔。 廢朝 。	廢朝	
175	天平19	747		春正月丁丑朔。 廢朝 。天皇御 南苑宴 侍臣。	廢朝・南苑・宴	
176				正月丙申。御 南苑 。 宴 五位已上。	南苑・宴	
177				四月丁卯。天皇御 南苑 。大神神主從六位上大神朝臣伊可保。大倭神主正六位上大倭宿祢水守並授從五位下。以外從五位下葛井連諸會爲相摸守。	南苑・叙位	
178				五月庚辰。天皇御 南苑觀騎射走馬 。是日。太上天皇詔曰。昔者五月之■常用 菖蒲 爲纓。比來已停此事。從今而後。非菖蒲纓者勿入宮中。	南苑・騎射・走馬・菖蒲	
179				五月庚寅。於 南苑講說仁王經 。令天下諸國亦同講焉。	南苑・講義・仁王經	仏教
180				六月己未。於羅城門■。(祈雨)	平城宮正門祈雨	
181	天平20	748		春正月壬申朔。 廢朝 。 宴 五位已上於內裏。賜祿有差。其餘於朝堂賜 饗 焉。	廢朝・宴饗	
182	天平勝宝1	749		秋七月甲午。皇太子受禪即位於大極殿。		讓位
183	天平勝宝2	750	孝謙	三月戊戌。駿河守從五位下檜原造東人等。於部內廬原郡多胡浦濱。獲黃金獻之。〈練金一分。沙金一分。〉於是。東人等賜勳臣姓。又賜中衛員外少將從五位下 田邊史難波 等上毛野君姓。	難波(人名)	
184				八月庚申。(中略)從四位下 難波女王 從四位上。	難波(人名)	
185	天平勝宝3	751		正月庚子。天皇御大極殿南院。宴百官主典已上。賜祿有差。 踏歌歌頭 女孀忍海伊太須。錦部河内。並授外從五位下。	宴・踏歌	
186	天平勝宝4	752		夏四月乙酉。盧舍那大佛像成。始開眼。是日行幸東大寺(中略)既而雅樂寮及諸寺種種音樂並咸來集。復有王臣諸氏五■。久米 舞 。楯伏。 踏歌 。袍袴等 哥舞 。東西發聲。 分庭而奏 。	踏歌・歌舞	東大寺大仏開眼供養
187	天平勝宝5	753		春正月癸卯朔。 廢朝 。天皇御中務南院。 宴 五位已上。賜祿各有差。	廢朝・宴	
188	天平勝宝6	754		正月癸卯。天皇御 東院 宴五位已上。	東院・宴	新曆施行の年
189	天平勝宝8	756		二月戊申。行幸 難波 。是日。至河内國。御智識寺南行宮。	難波宮	
190				二月壬子。(中略)是日行至 難波宮 。御東南新宮。	難波宮	
191				三月甲寅朔。太上天皇(聖武帝)幸堀江上。	難波	難波の堀江
192				五月乙卯。(中略)是日。太上天皇 崩 於寢殿。	崩御	聖武帝崩御
193	天平宝字1	757		五月庚辰。詔曰。(中略)正六位上巨曾倍朝臣 難波麻呂 。采女朝臣 淨庭 。	難波(人名)	
194	天平宝字2	758		七月甲戌。勅。(中略) 難波連 奈良並授外從五位下。	難波(人名)	後の常陸員外介
195	天平宝字3	759	淳仁	正月甲戌。停■宴。雨也。	宴中止	廢定例七日の節宴
196				正月乙酉。帝臨軒。(中略) 饗 五位已上。及蕃客。并主典已上於朝堂。作女樂於舞臺。奏內教坊 踏歌於庭 。客主典殿已上次之。事畢賜綿各有差。	饗・踏歌	
197	天平宝字4	760		春正月癸亥朔。御大極殿受朝。文武百官及渤海蕃客。各依儀拜賀。是日。 宴 五位已上於內裏。賜祿有差。	大極殿朝賀・内裏宴	
198	天平宝字5	761		三月乙未。參議正四位下安倍朝臣 嶋麻呂 卒。藤原朝右大臣從二位御主人之孫。奈良朝中納言從三位 廣庭 之子也。	島・庭(人名)	
199				六月庚申。設皇太后周忌齋於 阿弥陀淨土院 。其院者在法華寺内西南隅。爲設忌齋所造也。	阿弥陀淨土院	
200				八月甲子。高野天皇及帝幸藥師寺礼佛。奏與 樂於庭 。施綿一千屯。還幸授刀督從四位上藤原朝臣御楯第。 宴 飲。授御楯正四位上。其室從四位下。藤原惠美朝臣兒從正四位下。	樂・宴・庭	呉樂(伎楽)宴飲(酒宴)
201				八月己卯。詔曰。爲改作 平城宮 。暫移而御近江國保良宮。	平城京	平城宮改造保良宮に移る

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
202	天平宝字6	762		正月戊子。(中略)從五位上巨曾倍朝臣 難破麻呂 爲造宮大輔。	難波 (人名)	こそべあそ んなにわま ろ 翌年仁部大 輔に任じら れる
203				三月壬午。於宮西南。 新造池亭 。設 曲水之宴 。賜五位已上祿有差。	池・曲水之宴	保良宮
204	天平宝字7	763		正月庚戌。帝御閤門。(中略)宴五位已上及蕃客。 奏唐樂於庭 。	宴・唐樂・庭	
205				八月壬午。初遣高麗國船。名曰能登。歸朝之日。風波暴急。漂蕩海中。祈曰。幸賴船靈。平安到國。必請朝廷。酬以錦冠。至是緣於宿禰。授從五位下。其冠製錦表■裏。以紫組爲纓。	舟の靈・ アニミズム	嵐を乗り越 えた船に叙 位
206	天平神護1	765	称徳	十月戊子。幸弓削寺礼佛。奏唐高麗樂於 庭 。刑部卿從三位百濟王敬福等亦奏本國舞。	寺院庭園 樂・舞	
207				閏十月庚寅。詔曰。(中略)事畢幸弓削寺礼佛。奏 唐高麗樂 。及黑山企師部 舞 。	寺院庭園 樂・舞	
208				十一月庚辰。《廿三》詔曰。(中略)復勅〈久〉神等〈乎方〉三寶〈余利〉離〈天〉不觸物〈曾止奈毛〉人〈能〉念〈天〉在。然經〈乎〉見〈末都礼方〉佛〈能〉御法〈乎〉護〈末都利〉尊〈末都流方〉諸〈乃〉神〈多知仁〉伊末〈志家利〉。故是以出家人〈毛〉白衣〈毛〉相雜〈天〉供奉〈仁〉豈障事〈波〉不在〈止〉念〈天奈毛〉本忌〈之可〉如〈久方〉不忌〈之天〉此〈乃〉大嘗〈方〉聞行〈止〉宣御命〈乎〉諸聞食〈止〉宣。	仏教推奨	人々は神々 を信仰し、 仏教になじ まないが、 諸々の神も 仏を敬って いるとして 仏教を奨励
209	神護景雲1	767		正月己巳。御 東院 。詔曰。(中略) 難破連 足人並外從五位下。	東院・難波 (人名)	8月改元
210				二月甲午。幸 東院 。出雲國造外從六位下出雲臣益方奏神賀事。	東院	
211				三月壬子。幸西大寺法院。令文士賦 曲水 。賜五位已上及文士祿。	曲水	
212				四月癸巳。 東院 玉殿新成。群臣畢會。其殿。葺以琉璃之瓦。畫以藻■之文。時人謂之玉宮。	東院	東院玉殿完 成
213				五月癸酉。(中略)外從五位下 難破連 足人爲主殿助。	難波 (人名)	主殿助 とものすけ
214				九月己酉。幸 西大寺嶋院 。授從五位下日置造養麻呂從五位上。	嶋院	西大寺法院 か？
215				十二月壬寅。授外從七位上丈部造 廣庭 外從五位下。以貢獻也。	廣庭 (人名)	
216				十一月壬辰。設 新嘗 豐樂於西宮前殿。賜五位已上祿各有差。	新嘗	新嘗祭
217	神護景雲2	768		二月癸巳(前略) 園池正 如故。(後略)	園池正(園池 司)	
218	神護景雲3	769		正月丁丑。御 東内 始行吉祥悔過。	東内	東院か？
219				正月丙戌。御 東院 賜宴於侍臣。饗文武百官主典已上。陸奥蝦夷於朝堂。賜蝦夷爵及物各有差。	東院・宴・饗	
220				三月辛巳。陸奥國白河郡人外正七位上丈部子老。賀美郡人丈部國益。標葉郡人正六位上丈部賀例努等十人。賜姓阿倍陸奥臣。安積郡人外從七位下丈部直繼足阿倍安積臣。信夫郡人外正六位上丈部 大庭 等阿倍信夫臣。柴田郡人外正六位上丈部嶋足安倍柴田臣。曾津郡人外正八位下丈部 庭虫 等二人阿倍曾津臣。(中略)並是大國造造嶋宿祢嶋足之所請也。	大庭・丈部庭虫 (はつせかべにわ むし) (人名)	
221				十月廿一日(中略) 難波宮 綿二万屯。塩卅石。施入龍華寺。	難波宮	
222	宝龜1	770		正月辛未。宴次侍從已上於 東院 。賜御被。	東院・宴	
223				二月丙辰。破却西大寺東塔心礎。其石大方一丈餘。厚九尺。東大寺以東。飯盛山之石也。初以數千人引之。日去數步。時復或鳴。於是。益人夫。九日乃至。即加削刻築基已畢。時巫覡之徒。動以石崇爲言。於是。積柴燒之。灌以卅餘斛酒。片片破却。棄於道路。後月餘日。天皇不■。 卜之破石爲崇 。即復拾置淨地。不令人馬踐之。今其寺內東南隅數十片破石是也。	石崇	
224				三月丙寅。車駕臨 博多川 。以宴遊焉。」是日。百官文人及大學生等各上曲水之詩。	宴遊・曲水之詩	
225	宝龜2	771	光仁	二月辛丑。進到 難波宮 。	難波宮	
226	宝龜3	772		三月甲申。置酒勅負御井。賜陪從五位已上。及文士賦 曲水 者祿有差。	曲水	
227				四月己卯。震西大寺西塔。卜之。採近江國滋賀郡小野杜木。 搏塔爲崇 。充當郡戸二烟。	杜木・崇	木の祟り
228				八月甲寅。幸 難波内親王 第。是日異常風雨。拔樹發屋。卜之。伊勢月讀神爲崇。於是。每年九月。准荒祭神奉馬。又荒御玉命。伊佐奈伎命。伊佐奈美命。入於官社。又徙度會郡神宮寺於飯高郡度瀬山房。	難波 (人名)	
229				八月丙寅。遣從五位下三方王。外從五位下土師宿祢和麻呂。及六位已下三人。改葬廢帝於淡路。乃屈當界衆僧六十口。設齋行道。又度當處年少稍有淨行者二人。常廬墓側。令修功德。	行道	
230	宝龜4	773		二月壬申。初造宮卿從三位高麗朝臣福信專知造作 楊梅宮 。至是宮成。授其男石麻呂從五位下。」是日。 天皇徙居楊梅宮 。	楊梅宮	竣工 遷宮
231	宝龜8	777		三月乙卯。宴次侍從已上於 内嶋院 。令文人賦曲水。賜祿有差。	内嶋院・曲水	内嶋院 =法華寺

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
232				六月戊戌。 楊梅宮南池生蓮 。一莖二花。	楊梅宮・蓮	
233				九月太師押勝起宅於 楊梅宮南 。 東西構樓 。 高臨内裏 。南面之門便以爲櫓。	楊梅宮	押勝邸
234	宝亀9	778		二月庚子。（中略）從五位下紀朝臣 難波 麻呂爲亮。	難波麻呂（人名）	
235				三月己酉。宴五位已上於内裏。令文人賦 曲水 。賜祿有差。	曲水	
236				十二月甲申。去神護中。大隅國海中有 神造嶋 。其名曰大穴持神。至是爲官社。	神造嶋	
237	宝亀10	779		三月三月甲辰 。宴五位已上。令文人上 曲水 之詩。賜祿有差。	曲水	
238	宝亀11	780		二月神祇官言。 伊勢大神宮寺 。 先爲有崇遷建他處 。而今近神郡。 其崇未止 。除飯野郡之外移造使地者。許之。授正六位上藤原朝臣繼彥從五位下。	崇	
239	天応1	781		六月壬子。遣從五位下勅旨大丞羽栗臣翼於 難波 。令練朴消。（中略）于時 皇后薨 。 梓宮在庭 。	難波・梓宮在庭	梓宮在庭=殯宮
240				十一月己巳。宴五位已上奏雅樂寮樂。及 大歌 於庭。	宴・雅樂寮・大歌・庭	
241	延暦1	782	桓武	七月庚戌。右大臣已下。參議已上。共奏稱。頃者災異荐臻。妖徵並見。仍命龜筮。占求其由。神祇官陰陽寮並言。雖國家恒祀依例奠幣。而天下縞素。吉凶混雜。因■。 伊勢大神 。及諸神社。 悉皆爲崇 。	崇	
242				八月今者 宗社降靈 。幽顯介福。年穀豐稔。徵祥仍臻。	宗社降靈	
243	延暦3	784		三年春正月己卯。 宴 五位已上。	宴	
244				正月戊子。 宴 五位已上於内裏。 饗 百官主典已上於朝堂。	宴・饗	
245				三月甲戌。 宴 五位已上。令文人賦 曲水 。賜祿有差。	曲水	
246				五月癸未。攝津職言。今月七日卯時。 蝦蟇二万許 。長可四分。其色黑斑。從難波市南道。南行池列可三町。隨道南行。入四天王寺內。至於午時。皆悉散去。	蝦蟇二万・怪	
247				六月壬子。遣參議近衛中將正四位上紀朝臣船守於 賀茂大神社 。奉幣。以告遷都之由焉。又今年調庸。并造宮工夫用度物。仰下諸國。令進於長岡宮。	賀茂大神社	
248				九月癸酉。京中大雨。壞百姓廬舍。詔遣使 東西京 賑給之。	東西京	平城京と難波京
249	延暦4	785		三月戊戌。御 嶋院 。 宴 五位已上。召文人令賦 曲水 。賜祿各有差。	嶋院・曲水	
250				十一月壬寅。 祀天神於交野柏原 。賽宿禰也。	交野	お礼参り
251	延暦6	787		三月丁亥。 宴 五位已上於内裏。召文人令賦 曲水 。 宴訖 賜祿各有差。	曲水	
252				十月己亥。主人率百濟王等奏種種之樂。	樂	
253				十一月甲寅。 祀天神於交野 。	交野	
254	延暦7	788		三月甲子。中宮大夫從四位上■民部大輔攝津大夫和氣朝臣濂麻呂言。河内攝津兩國之堺。 堀川築堤 。自荒陵南。導河内川西通於海。然則沃壤益廣。可以墾闢矣。於是。便遣濂麻呂勾當其事。應須單功廿三万餘人給糧從事矣。	堀川築堤	
255				四月癸巳。自去冬不雨。既經五箇月。灌溉已竭。公私望斷。是日早朝。 天皇沐浴 。 出庭親祈焉 。有頃。天闇雲合。雨降滂沱。群臣莫不舞蹈稱万歲。因賜五位以上御衾及衣。咸以爲。聖德至誠。祈請所感焉。	祈雨	桓武自身が祈雨
256	延暦8			正月己酉。 宴 五位已上於 南院 。	宴・南院	
257	延暦9	790		三月庚子。停■宴。以凶服雖除忌序未周也。	宴中止	
258				三月壬戌。（中略）從五位上紀朝臣 難波麻呂 爲宮内大輔。	難波（人名）	
259	延暦10	791		四月丁巳。車駕幸彈正尹神王第宴飲。授其女 淨庭王 從五位下。	淨庭王（人名）	
300～600番台		日本後紀				
301	延暦11	792	桓武	正月壬申。幸 南院 。 觀射 。	南院・射	
302				三月幸 南園 。 禊飲 。命群臣賦詩。賜綿有差。	南園・禊	
303	延暦12	793		正月遷御於 東院 。 緣欲 壞宮也。	東院	
304				三月 禊于南園 。令文人賦詩。五位已上及文人。賜祿有差。	南園	
305				六月乙卯。 祈雨 。	祈雨	
306				七月癸未。御馬埒殿觀 相撲 。	相撲	
307				八月癸丑。翫 蓮葉 。宴飲奏樂。賜祿。	蓮葉	
308				八月丁卯。遊獵于大原野。遷御 南園 。賜五位已上衣。	南園	
309	延暦13	794		十月丁卯。（中略）遷都詔曰。	遷都	
310	延暦15	796		五月乙未。於馬埒殿觀 騎射 。	騎射	
311				秋七月。庚寅朔丙申。御馬埒殿。觀 相撲 。	相撲	
312	延暦16	797		六月壬申。遣使。奉幣畿内。七道諸國名神。皇帝於 南庭 。親臨發焉。以祈萬國安寧也。	南庭	
313				七月辛丑。正五位下-藤原朝臣-緒嗣。授從四位下。是日。 曲宴 。賜物有差。	曲宴	曲宴頻繁
314				八月。甲寅朔乙卯。幸 葛野川 。	川	
315				八月乙丑。幸 葛野川 。	川	
316				八月甲戌。齋内親王。祓于 葛野川 。即移入野宮。	川・内親王・祓	
317				九月。癸未朔丙戌。 曲宴 。賜五位已上衣。	曲宴	曲宴頻繁
318				九月庚寅。 曲宴 。賜五位以上。綿有差。	曲宴	曲宴頻繁
319				十月癸亥。 曲宴 。酒酣。皇帝歌曰。	曲宴	曲宴頻繁
320	延暦17	798		十七年春正月。壬午朔。皇帝御 大極殿 。受 朝賀 。宴侍臣於前殿。賜被。	朝賀	

(表4) 『古事記』および「六国史」関連記事原文一覧

(表4)

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
321				五月, 庚辰朔甲申, 御馬埒殿, 觀騎射.	騎射	
322				六月辛卯, 曲宴. 賜五位已上, 物有差.	曲宴	
323	延暦18	799		十八年春正月, 丙午朔, 皇帝御大極殿, 受朝. 文武官九品以上、蕃客等各陪位. 減四拜, 為再拜, 不拍手. 以有渤海國使也. 諸衛人等並舉賀聲, 禮訖. 宴侍臣於前殿, 賜被.	受朝	唐風に変更
324				正月壬子, 豐樂院未成功. 大極殿前龍尾道上構作借殿, 葺以彩帛. 天皇臨御, 蕃客仰望, 以為壯麗. 命五位已上宴樂. 渤海國使-大昌泰等預焉. 寶祿有差.	大極殿前仮舎	
325				正月辛酉, 御大極殿, 宴群臣并渤海客. 奏樂. 賜蕃客以上綦措衣. 並列庭踏歌.	踏歌	
326				正月癸亥, 於朝堂院觀射. 五位已上射畢, 次蕃客射焉.	射	
327	延暦19	800		五月壬寅, 御馬埒殿, 觀騎射.	騎射	
328				秋七月, 丁酉朔乙卯, 幸神泉苑.	神泉苑	神泉苑初出
329				八月, 丁卯朔己卯, 幸神泉苑.	神泉苑	
330	延暦20	801		廿年春正月, 甲午朔, 皇帝御大極殿, 受朝賀. 宴侍臣於前殿, 賜被.	朝賀	
331				正月丁酉, 曲宴.	曲宴	
332				正月庚戌, 御馬埒殿, 觀射.	觀射	
333				二月戊申, 曲宴. 賜五位已上, 物有差.	曲宴	
334				夏四月, 壬辰朔癸巳, 幸神泉.	神泉苑	
335				六月甲午, 幸神泉.	神泉苑	
336				九月丁卯, 幸神泉苑.	神泉苑	
337	延暦21	802		廿一年春正月, 戊午朔, 廢朝. 雪也.	廢朝	
338				正月甲戌, 御馬埒殿, 觀射.	觀射	
339				二月, 戊子朔, 幸神泉.	神泉苑	
340				二月癸巳, 幸神泉. 神泉泛舟曲宴.	神泉苑・舟・曲宴	
341				二月己亥, 幸神泉.	神泉苑	
342				二月癸卯, 幸神泉.	神泉苑	
343				三月, 丁巳朔丁卯, 幸神泉.	神泉苑	
344				五月, 丙辰朔庚申, 御馬埒殿, 觀騎射.	騎射	
345				五月壬申, 幸神泉.	神泉苑	
346				六月壬寅, 幸神泉.	神泉苑	
347				七月丙申, 幸神泉.	神泉苑	
348				七月辛酉, 御朝堂院, 觀相撲.	相撲	
349				八月, 乙丑朔, 幸神泉.	神泉苑	
350	延暦22	803		三月丙子, 幸神泉終日.	神泉苑	
351				四月甲申, 幸神泉.	神泉苑	
352				四月戊戌, 幸神泉.	神泉苑	
353				五月, 庚戌朔甲寅, 御馬埒殿, 觀馬射.	騎射	
354				五月丁卯, 曲宴. 賜侍臣及近衛、內豎, 布有差.	曲宴	
355				六月, 庚辰朔, 幸神泉.	神泉苑	
356				秋七月, 己酉朔, 幸神泉.	神泉苑	
357				七月乙卯, 觀相撲.	相撲	
358				九月, 己酉朔壬子, 曲宴. 侍臣及近衛, 賜綿有差.	曲宴	
359				九月癸丑, 幸神泉.	神泉苑	
360				冬十月, 戊寅朔, 幸神泉.	神泉苑	
361	延暦23	804		廿三年春正月, 丁丑朔, 御大極殿, 受朝賀.	朝賀	
362				正月辛丑, 幸神泉苑.	神泉苑	
363				四月外從五位下-壬生公-足人, 為園池正.	園池正	園池正初出
364				五月戊寅, 御馬埒殿, 觀馬射.	馬射	
365				秋七月癸酉朔, 幸神泉苑.	神泉苑	
366				七月己卯, 觀相撲.	相撲	
367				八月壬子, 暴雨, 大風. 中院西樓倒, 打死牛. 又墮壞神泉苑左右閣、京中盧舍, 諸國多蒙其害.	神泉苑	暴風被害
368				九月己卯, 幸神泉苑.	神泉苑	
369				冬十月, 壬寅朔甲辰, 行幸和泉國. 其夕, 至難破行宮.	難破	行宮(かりみや)
370				十月丙辰, 御難破行宮.	難破	行宮(かりみや)
371				十月戊午, 車駕至自難破.	難破	
372				十月壬戌, 幸神泉苑.	神泉苑	
373				十一月甲申, 幸神泉苑.	神泉苑	
374				十一月丁亥, 幸神泉苑.	神泉苑	
375				十一月己丑, 幸神泉苑.	神泉苑	
376				十一月戊戌, 幸神泉苑.	神泉苑	
377				十二月, 壬寅朔, 幸神泉苑.	神泉苑	
378				十二月丁未, 幸神泉苑.	神泉苑	
379	延暦24	805		廿四年春正月, 辛未朔, 廢朝. 聖體不豫也.	廢朝	
380				正月丁亥, 於御在所南端門外, 射. 但乘輿不御.	射	
381				六月辛亥, 正六位上-難破連-廣成、若江造-家繼, 授外從五位下.	難破(人名)	
382	大同2	807	平城	五月壬辰, 鸞輿晨駕, 臨御馬臺. 大雨終日, 埒地泥濘. 四衛射畢, 冒雨還宮. 及乎後年, 依無便, 復本處.	馬臺・射	
383				五月癸丑, 幸神泉苑. (中略) 宴飲終日.	神泉苑	
384				七月壬辰, 御神泉苑, 觀相撲. 令文人賦七夕詩.	神泉苑・相撲	幸神泉苑
385				七月壬寅, 御神泉苑.	神泉苑	幸神泉苑

(表4) 『古事記』および「六国史」関連記事原文一覧

(表4)

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
386				七月甲寅, 御 神泉苑 .	神泉苑	幸神泉苑
387				八月癸亥, (中略) 曲宴 .	曲宴	
388				八月己卯, 齋内親王, 禊 於葛野川. 即移入野宮.	禊・川	
389				八月癸未, 幸 神泉苑 .	神泉苑	
390				九月癸巳, 幸 神泉 , 觀射 .	神泉・射	幸神泉苑
391				(390に続く) 今詔久, 弓射都可波須事波, 本與利正月乃行事奈利. 但正月者, 三節 豐樂 聞食之, 雜事毛繁久, 無暇支月奈利. 此月者, 時毛涼久, 射禮 都可波須爾毛便爾在利. 又 九月九日 者, 菊花豐樂 聞食日爾在止毛, 忌避所由爾依呂, 比年乃間停止聞行須. 然時節止云物者, 不可虛擲止, 自昔云來留事毛在仁依依奈毛, 此乃 豐樂 聞食之始賜布. 故是以御酒賜倍, 惠良支退止之奈毛, 酒幣乃大物賜久止宣.	射礼・菊花豐樂・豐樂	重陽節
392				九月乙巳, 幸 神泉苑 . 琴歌間奏. 四位已上共插菊花. 于時, 皇太弟頌歌云	神泉苑・琴歌・菊花	
393				十月壬午, 車駕禊於葛野川. 緣 大嘗 事也.	禊・川・大嘗祭	
394	大同3	808		三年春正月, 癸未朔, 廢朝 . 以風寒異常也.	廢朝	
395				二月丙子, 御大極殿, 祈禱名神. 為天下疫氣方熾也.	大極殿・祈禱	
396				四月乙亥, 幸 神泉苑 .	神泉苑	
397				五月戊子, 幸 神泉苑 . 令畿内・七道諸國, 停貢 相撲 人.	神泉苑・停貢相撲人	
398				五月甲午, 幸 神泉苑 . 宴群臣.	神泉苑・宴	
399				六月甲子, 禁中有一株 橘樹 . 彫枯經日. 生意既盡, 忽生花葉. 楚楚可愛.	右近の橘	
400				七月丁亥, 幸 神泉苑 . 觀相撲 . 令文人賦 七夕詩 .	神泉苑・相撲・七夕詩	
401				八月庚申, 外從五位下- 難波連-廣成 , 為内藥正.	難波 (人名)	
402				八月乙丑, 野狐, 窟朝堂院 中庭 常棲焉. 經十餘日而不見.	野狐・朝堂院中庭	
403				八月辛未, 幸 神泉苑 . 飲宴極歡.	神泉苑・宴	
404				八月丙子, 夜, 左右兵庫, 鉦鼓自鳴 .	怪	
405				九月戊戌, 幸 神泉苑 .	神泉苑	
406				十月乙亥, 行幸近江國大津, 修禊. 以御 大嘗 也.	禊・大嘗	
407				十一月辛卯, 奉幣帛於伊勢大神宮. 以行 大嘗 事也. 是夜, 御朝堂院, 行 大嘗 之事.	大嘗・朝堂院	
408				壬辰, 於 豐樂殿 宴五位已上. 二國奏風俗歌舞 . 賜五位已上物, 及 二國獻物班給諸司 . 癸巳, 宴飲終日 . 賜五位以上衣裳. 甲午, 奏雜舞并大歌・五節舞 等. 賜由貴・主基兩國國郡司役夫物.	大嘗祭	
409				辛亥, (中略) 從五位下-伊勢朝臣-繼麻呂, 為 園池正 .	園池正	
410	大同4	809		四年春正月, 戊寅朔, 廢朝 . 風寒異常也.	廢朝	
411				正月壬辰, 有犬, 登大極殿西樓上吠. 鳥數百群, 翔其上.	怪	
412				九月壬子, 幸 神泉苑 , 觀射 . 兼命文人賦詩.	神泉苑・射・詩	
413				十月丁丑, 天推國高彥天皇, 遷御於 東院 .	東院	
414				十月癸未, 令内藏寮, 奉獻於 東院 . 宴飲終日.	東院・宴	
415				十月丁酉, 中務卿-萬田親王, 奉獻於 東院 .	東院	
416	弘仁1	810	嵯峨	弘仁元年春正月, 壬寅朔, 廢朝 . 以皇帝不豫也.	廢朝	
417				五月甲寅, 令天下諸國, 停進 相撲 人.	相撲人	停進
418				六月庚午, 幸 神泉苑 .	神泉苑	
419				六月丙戌, 幸 神泉苑 .	神泉苑	
420				秋七月, 己亥朔乙巳, 幸 神泉苑 , 觀相撲 .	神泉苑・相撲	
421				九月癸卯, 依太上天皇命, 擬遷都於平城.	平城旧京へ遷都	
422				十月甲午, 禊 於松崎川. 緣 大嘗會 事也.	禊・川・大嘗	
423				十一月乙卯, 行 大嘗 於朝堂院.	大嘗・朝堂院	
424				十一月丙辰, 御豐樂院. 悠紀・主基兩國, 獻翫好雜物, 奏土風歌舞 . 五位已上賜衣被. 戊午, 宴五位已上. 奏雅樂并大歌 .	大嘗祭	
425	弘仁2	811		二年春正月, 丙申朔, 皇帝御 大極殿 , 臨軒. 皇太弟・文武百官・藩客 朝賀 , 如常儀.	大極殿・朝賀	
426				正月壬子, 御豐樂院, 觀射 . 藩客賜角弓射焉.	豐樂院・射	
427				四月己巳. 幸 神泉苑 .	神泉苑	
428				四月乙亥. 幸 神泉苑 .	神泉苑	
429				四月辛巳. 幸 神泉苑 .	神泉苑	
430				四月庚寅. 幸 神泉苑 .	神泉苑	
431				五月戊戌. 御馬埒殿. 觀馬射 .	騎射	
432				五月乙巳. 幸 神泉苑 . 帝自茲以後. 每至假日. 避暑於此.	神泉苑	
433				七月己亥. 幸 神泉苑 . 觀相撲 .	神泉苑・相撲	
434				七月甲辰. 幸 神泉苑 . 陪侍之人. 賜錢有差.	神泉苑	
435				八月甲戌. 幸 神泉苑 .	神泉苑	
436				八月辛卯. 齋内親王 禊 于葛野川. 諸司陪從如常.	禊	
437				九月丁巳. 遊獵于紫野.	狩獵	以下嵯峨天皇だけ狩獵を拾ってみる
438				十月乙酉. 遊獵于栗前野.	狩獵	
439				十月戊子. 遊獵于紫野.	狩獵	

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
440	弘仁3	812		二月辛丑。幸 神泉苑 。覽花樹。命文人賦詩。賜綿有差。 花宴之節始於此矣。	花宴	花見初見
441				二月癸卯。遊獵水生野。	狩獵	
442				二月甲辰。遊獵交野。	狩獵	
443				四月癸巳。幸 神泉苑 。	神泉苑	
444				五月己巳。幸 神泉苑 。木工寮獻物。雅樂寮奏樂。飲宴終日。	神泉苑	
445				七月癸亥。幸 神泉苑 。觀 相撲 。命文人賦七夕詩。	神泉苑・相撲 七夕詩	
446				七月庚辰。幸 神泉苑 。	神泉苑	
447				九月庚辰。遊獵於太原野。	狩獵	
448	弘仁4	813		正月辛酉。宴五位已上於豐樂院。奏樂。	豐樂院・宴・奏 樂	
449				正月辛未。於 南庭觀射 。	南庭・射	
450				正月丙子。曲宴後殿。	曲宴	小宴の意
451				正月庚辰。遊獵於栗前野。	狩獵	
452				二月己亥。遊獵於交野。	狩獵	
453				二月辛丑。遊獵水生野。	狩獵	
454				二月壬子。宴 神泉苑 。命文人賦詩。奏樂賜綿有差。	神泉苑	
455				四月甲辰。幸皇太弟 南池 。命文人賦詩。雅樂寮奏樂。	南池	
456				五月丙辰。御馬埒殿、觀 騎射 。	騎射	
457				七月丁巳。幸 神泉苑 、觀 相撲 、命文人賦七夕詩。	神泉苑・相撲 七夕詩	
458				七月丙寅。緣于 後庭合歡樹 下。	合歡樹	後庭＝後宮 縁＝宴
459				八月乙未。幸皇太弟 南池 。命文人賦詩。雅樂寮奏樂。	南池	
460				九月戊午。幸 神泉苑 。命群臣賦詩。	神泉苑	
461				九月丁丑。遊獵于太原野。	狩獵	
462				十月癸未。遊獵于北野。	狩獵	
463				十月丙戌。遊獵于櫟原野。	狩獵	
464				十月癸卯。遊獵栗前野。	狩獵	
465				十月丁未。從四位下左中弁兼摂津守小野朝臣野主等言。 猿女之興 、国史詳矣。其後不絶、今尚見在。又猿女養田、在近江国和迺村、山城国小野郷。今小野臣和迺部臣等、既非其氏	媛女（さるめ）	祭祀に仕える女官
466				十一月癸酉。遊獵水生野。	狩獵	
467				十一月丙子。遊獵芹川野	狩獵	
468	弘仁5	814		正月丁丑。御馬埒殿觀 射 。	射	
469				二月丙戌。遊獵於栗前野。	狩獵	
470				二月乙未。幸于交野。	狩獵	
471				二月丙申。遊獵水生野。	狩獵	
472				二月丙午。幸 神泉苑 。命文人賦詩。	神泉苑	
473				五月辛亥。御馬埒殿觀 馬射 。	馬射	
474				五月戊午。幸 神泉苑 。曲宴。	神泉苑・曲宴	
475				六月戊寅。 神泉苑 北垣、无故自潰。	神泉苑	
476				五月甲午。 禊 於鴨川。縁神祇官奏也。	川・禊	飢饉
477				七月壬子。幸 神泉苑 。觀 相撲 。	神泉苑	
478				閏七月庚辰。幸 神泉苑 。	神泉苑	
479				閏七月丙戌。幸 神泉苑 。	神泉苑	
480				閏七月辛丑。遊獵北野。	狩獵	
481				八月戊辰。遊獵北野。	狩獵	
482				八月己巳。遊獵栗栖野。	狩獵	
483				九月庚子。遊獵栗前野。	狩獵	
484				十一月壬辰。奏 五節舞 。	五節舞	新嘗祭
485				十一月甲午。遊獵芹川野。	狩獵	
486				十二月壬戌。遊獵芹川野。	狩獵	
487	弘仁6	815		正月戊子。御豐樂院。宴五位已上及蕃客。奏 踏歌 。	踏歌	
488				正月己丑。御同院。觀 射 。	射・樂・宴	
489				二月己未。行幸交野。	狩獵	
490				二月庚午。幸 神泉苑 。花宴。命文人賦詩。	神泉苑	
491				四月壬子。幸 神泉苑 。	神泉苑	
492				七月丙子。幸 神泉苑 。命文人賦七夕詩。	神泉苑	
493				七月癸巳。幸 神泉苑 。	神泉苑	
494	弘仁7	816		正月丁卯朔。 麿朝 。雨也。	麿朝賀	
495				正月癸未。御豐樂院、觀 射 。	射	
496				正月壬辰。遊獵栗前野。	狩獵	
497				二月丙辰。遊獵於水生野。	狩獵	
498				四月辛丑。幸 神泉苑 。	神泉苑	
499				五月庚午。御馬埒殿觀 馬射 。	騎射	
500				七月庚午。幸 神泉苑 、觀 相撲 。	神泉苑・相撲	
501	弘仁8	817		正月丁丑。御豐樂院觀 射 。	騎射	
502				正月乙丑。遊獵芹川野。	狩獵	
503				二月丙申。神祇官言。祈年月次等祭日、諸社祝部等・事須參集 祭庭 、受幣供神。	祭庭	
504				二月己亥。遊獵于瑞野。	狩獵	
505				五月癸巳。御馬埒殿、觀 馬射 。	騎射	

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
506				九月乙未。幸 神泉苑 。令文人賦詩。	神泉苑	
507				九月辛亥。遊獵大原野。	狩獵	
508				十月戊寅。遊獵栗前野。	狩獵	
509				十月己卯。遊獵水生野。	狩獵	
510				十一月戊申。遊獵水生野。	狩獵	
511				十二月戊辰。遊獵于芹川野。	狩獵	
512	弘仁9	818		正月辛丑。御豊楽殿、觀 射 。	射	
513				二月辛酉。遊獵于栗前野。	狩獵	
514				二月壬午。幸 神泉苑 。命文人賦詩。	神泉苑	
515				五月戊子。御武徳殿、觀騎 射 。	騎射	
516				八月己卯。遊獵于北野。	狩獵	
517				九月庚寅。幸 神泉苑 。宴侍臣。命文人賦詩。	神泉苑	
518				十月甲戌。遊獵栗前野。	狩獵	
519	弘仁10	819		正月丙申。御豊楽殿、觀 射 。	騎射	
520				二月己巳。遊獵水生野。	狩獵	
521				二月癸酉。幸 神泉苑 。宴侍臣。並命文人賦詩。	神泉苑	
522				五月甲午。幸 神泉苑 。奉幣貴布禰社、祈雨。	神泉苑	
523				九月甲申。幸 神泉苑 。命文人賦詩。	神泉苑	
524				十月丁未。遊獵於大原野。	狩獵	
525				十一月丙申。遊獵栗前野。	狩獵	
526				十一月庚子。遊獵于芹川野。	狩獵	
527	弘仁11	820		正月己丑。御豊楽殿、奏 踏歌 。宴群臣及蕃客、賜祿有差。	踏歌	
528				正月辛卯。御豊楽殿、觀 射 。	射	
529				正月己亥。遊獵于栗前野。	狩獵	
530				閏正月乙巳。遊獵芹川野。	狩獵	
531				二月己丑。遣使、築大和国高市郡泉池。	泉池	庭園か？
532				八月己卯。幸 神泉苑 。	神泉苑	
533				九月戊申。幸 神泉苑 。宴五位已上、令文人賦詩。	神泉苑	
534	弘仁13	822		正月戊申。御豊楽殿、宴五位已上及蕃客。奏 踏歌 。渤海国使王文矩等打毬。賜綿二百屯為賭。所司奏樂。蕃客率舞。賜祿有差。	踏歌・毬	
535				正月己酉。御豊楽殿、觀 射 。	射	
536				正月丁巳。遊獵于北野。	狩獵	
537				正月己未。遊獵于芹川野。	狩獵	
538				二月己巳。遊獵于栗前野。	狩獵	
539				二月壬午。遊獵于水生野。	狩獵	
540				二月癸未。遊獵于芹川野。	狩獵	
541				九月丙申。御 神泉苑 、宴侍臣、命文人賦詩。	神泉苑	
542				九月甲寅。遊獵于北野。	狩獵	
543				十月甲午。幸河陽宮、遊獵于交野。	狩獵	森田版
544				十一月癸未。遊獵于瑞野。	狩獵	
545	弘仁14	823		正月甲申。遊獵于芹川野。	狩獵	
546				二月丁酉。遊獵于栗前野。	狩獵	
547			淳和	四月辛亥。此日、 零雨庭濕 。群臣百官、皆悉陳列八省殿上、行拝礼事。	庭に雨	屋根がない
548				五月戊午。御紫宸殿、宴侍臣。中務省率諸司、獻 菖蒲 如常。	紫宸殿・菖蒲	
549				五月己未。今年諸国、疫氣流行、百姓窮弊、仍 停止相撲人 。	相撲	停止
550				九月乙亥。幸武徳殿。覽信濃国御 馬 。	馬	
551				十月甲辰。幸佐比河、修御 禊 事也。	川・禊	
552	天長1	824		正月丁卯。御射宮、觀 射 也。	射・賭射	
553				四月辛丑。幸 神泉苑 。	神泉苑	
554				六月庚子。幸 神泉苑 、覽左右馬寮御馬	神泉苑	
555				六月甲辰。幸 神泉苑 、賑給京兆飢民	神泉苑	森田版
556				七月己未。葬於楊柳陵。	楊柳陵	森田版楊梅陵
557	天長2	825		正月庚申。為諒闇、無視 踏歌 。但賜酒肴及祿。	踏歌	中止
558				正月辛酉。勅曰。 射禮 者、国家大事、不可而闕。因遣右大臣於建礼門 南庭 、簡閱六衛。隨中賜祿有差。	射・南庭	
559	天長3	826		正月壬辰。緣左兵衛府失火事、 祓 除於 南庭 。	南庭・祓	
560				四月壬寅。皇帝幸於 南池 、召文人令賦詩、賜祿有差。	南池	
561				四月丁未。幸 神泉苑 。	神泉苑	
562				六月己亥。改七月七日 相撲 、定十六日。避国忌也。	相撲変更	
563				六月丙辰。任 相撲司 。	相撲司	
564				七月辛巳。御豊楽殿、覽 相撲 。	相撲	
565	天長4	827		正月戊寅。(前略)皇太子已下、侍從已上、賜祿觀 踏歌 。詔曰。(中略)天皇《我》見《留》踏歌、(後略)	踏歌	
566				四月丁酉。幸 南池 。召文人有御製。	南池	
567				四月乙巳。幸 神泉苑 。歴覽 垂釣 。	神泉苑・釣	
568				四月癸丑。幸 神泉苑 、遊釣。	神泉苑・釣	
569				六月壬子。幸 神泉苑 。	神泉苑	
570				七月乙丑。皇帝幸 神泉苑 、垂釣。	神泉苑・釣	
571				十月丁未。御紫宸殿。右衛府寮獻走馬輪物。	馬	
572	天長5	828		正月甲戌。皇帝御臨射宮、觀 射礼 。	射礼	
573				二月丁未。御紫宸殿、賜侍臣酒。酒酣、 雅楽寮 奏音声。	雅楽寮	
574				閏三月乙丑。幸 神泉苑 、垂釣。左近衛府獻時味。	神泉苑	
575				閏三月丁酉。幸 南池 。遊魚貪餌、群臣垂竿、効獲無數。御船就涼書殿、即召文人令賦春日閑園。献詩者二十三人。	南池・舟遊び	

(表4) 『古事記』および「六国史」関連記事原文一覧

(表4)

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
576				八月乙亥、幸 神泉苑 。	神泉苑	森田版
577				九月壬辰。幸 神泉苑 。使賦重陽之詩。	神泉苑	
578	天長6	829		四月甲寅。車駕幸 南池 。令文人賦詩。	南池	
579				四月己巳。御武徳殿、覽諸国攸進 駒 。	馬	
580				四月丙子。御武徳殿、覽 馬射 。	騎射	
581				五月丁亥。 園地司 地四段、賜内膳司膳部曹司処。	園地司	
582				六月丁卯。幸 神泉苑 。	神泉苑	
583				六月戊辰。任 相撲司 。	相撲司	
584				七月己卯。幸 神泉苑 。	神泉苑	
585				七月癸巳。御 神泉苑 、覽 相撲 。	神泉苑・相撲	
586				七月甲午。内裏覽 相撲 。	相撲	森田版
587				八月己酉。於是日、亦覽 相撲 。	相撲	
588				八月庚戌。幸 南池 。召文人令賦詩。 雅楽寮 奏楽。	南池	
589				八月己未。幸 神泉苑 。	神泉苑	
590				九月甲午。幸 神泉苑 。召文人、賜祿有差。	神泉苑	
591				九月己亥。御武徳殿、覽信濃国御 馬 。	観馬	
592				十月丁朔。御武徳殿、覽甲斐国御 馬 。	観馬	
593				十二月庚午。天皇幸賀茂川。修 禊 事也。禊畢賜祿。	賀茂川・禊	
594	天長7	830		正月己卯。天皇御紫宸殿。皇太子献御杖。	卯杖	卯杖初出
595				正月辛卯。御紫宸殿、賜宴。奏 踏歌 。	踏歌	
596				正月壬辰。皇帝幸豊楽院、覽 射礼 。	射礼	
597				正月庚子。天皇幸鴨川 禊 之。	賀茂川・禊	
598				四月丙午。皇帝幸 神泉苑 。	神泉苑	
599				四月甲寅。天皇幸 南池 。御涼書殿、命文人賦詩。	南池	
600				四月乙卯。天皇幸鴨川 禊 之。御紫野院釣台、觀遊魚。	賀茂川・禊	
601				四月癸亥。御武徳殿、覽 射礼 。	射礼	
602				四月癸酉。御武徳殿、覽 競馬 。	馬	
603				七月戊子。天皇幸 神泉苑 、覽 相撲 。	神泉苑・相撲	
604				七月庚寅。 相撲司 率相撲等、參冷然院、	相撲司	森田版
605				八月丙辰。右諸衛府奉 相撲 輸物。	相撲	
606				九月乙亥。於建礼門前 大祓 。依掖 庭犬死 也。	祓	掖庭＝後宮
607				九月癸巳。御武徳殿、覽信濃御 馬 。	馬	
608	天長8	831		正月乙卯。皇帝御紫宸殿、覽 踏歌 。	踏歌	
609				正月丙辰。親王已下參議已上、於武徳殿、閱諸衛府 射礼	射礼	
610				二月辛未。召卜徒及陰陽寮於内裡、卜筮殿庭班位下。 物怪 故也。	怪	
611				二月乙丑。天子於 掖庭 曲宴。翫殿前桜華也。后宮弁設珍物。皇太子已下源氏大夫已上、得陪殿上。特喚文人令賦 桜花 。恩杯無算、群臣飽醉。賜祿有差。	花宴	掖庭＝後宮
612				四月丁丑。皇帝幸 南池 。命文人令賦夏日松竹。侍從文人賜祿有差。	南池	
613				四月甲午。皇帝御武徳殿、覽 騎射 。	観騎射	
614				六月丙戌。内裏有 物怪 。仍遣使柏原山陵。	怪	柏原山陵＝桓武天皇陵
615				六月戊子。皇帝幸 神泉苑 。日暮還宮。	神泉苑	
616				六月壬辰。屈廿二口僧、分頭柏原・石作山陵読經。防 物怪 也。	怪	
617				七月辛亥。皇帝御建礼門、觀 相撲 。	相撲	
618				七月壬子。於内裏觀 相撲 。	相撲	
619				七月癸丑。 相撲人 十人、令參冷然院。	相撲	
620				七月庚申。皇帝御紫宸殿、覽 相撲 。	相撲	
621				八月己巳。乘輿幸 南池 。命文人令賦詩。	南池	
622				八月乙亥。皇帝幸 神泉苑 。	神泉苑	
623				八月丁亥。皇帝幸 神泉苑 、令左右近衛、進 相撲 四番。 雅楽寮 奏音楽。	神泉苑・相撲	
624				八月癸巳。皇帝幸 神泉苑 。	神泉苑	
625				九月甲辰。皇帝御紫宸殿、召文人令賦詩。為 重陽節 、賜祿有差。	重陽の節	
626	天長9	832		正月乙未朔。御大極殿、受朝賀。畢御紫宸殿。中務省進七曜曆。宮内省奏氷様。例也。 吉野国栖奏歌笛 。但依新誕皇子薨、不奏音楽。	国栖（くず）	喪中でも実施
627				四月戊辰（戊子）。御武徳殿、覽 騎射 。 雅楽寮 奏音楽。	騎射	
628				六月辛巳。任左右 相撲司 。	相撲司	
629				七月丙午。皇帝御建礼門、觀 相撲 。	相撲	
630				八月己巳。皇帝幸 神泉苑 。喚博士生徒等、令論議。	神泉苑・釈奠	
631	天長10	833		正月乙巳。皇帝御建礼門觀 射 。	射	
632	（年月日未詳）			（北山抄）近衛舍人中達 東遊 者、称之物節、	東遊（あじまあそび）	森田版 舞楽

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
700番台～ 続日本後紀						
701	天長10	833	仁明	二月乙酉。皇帝於淳和院讓位于皇太子。	讓位	
702				七月辛丑。天皇幸 神泉苑 。觀 相撲節 。	神泉苑・相撲	
703				七月壬寅。御紫宸殿。令盡昨節之餘情。將夕乃罷。	相撲再取組み	
704	承和1	834		正月癸丑。天皇朝觀後太上天皇於淳和院。太上天皇逢迎。各於 中庭拜舞 。乃共昇殿。賜群臣酒兼奏音樂。左右近衛府更奏舞。既而太上天皇。	中庭で舞	
705				正月戊午。天皇御豊樂殿。觀 青馬 。宴群臣。	豊樂殿・青馬	
706				正月戊辰。天皇御豊樂院觀 射 。	豊樂院・觀射	
707				正月己巳。亦御同院。閱覽四衛府 賭射 。	賭射	
708				二月甲午。上始御 射場 。左右衛府相共奉獻。兼設賭物。上先射之。一箭中鵠。	射	
709				五月乙卯辛亥朔乙卯。天皇御武德殿。閱覽四衛府 馬射 。	武德殿・騎射	
710				丙辰。亦御同殿。觀親王以下五位已上所貢 競馳馬 。	馬	
711				戊午。亦御同殿。令四衛府騁盡種々 馬藝及打毬之態 。	馬藝・打毬之態	
712				七月丙寅。天皇御紫宸殿。觀 相撲節 。	相撲	
713				八月庚寅。上曲宴清涼殿。号曰芳宜花讌。	清涼殿・花宴	芳宜（萩）
714	承和2	835		正月癸亥。天皇御豊樂院觀 射 焉。	射	
715				正月己巳。天皇御 射場 。	射	
716				三月丙寅。大僧都傳灯 大法師位空海 終于紀伊國禪居。	空海死去	
717				四月甲辰。天皇御武德殿。閱覽左右馬寮御 馬 也。	武德殿・觀馬	
718				七月辛亥。行幸 神泉苑 。觀 相撲節 。	神泉苑・相撲	
719				八月甲戌朔。天皇御紫宸殿。先是。左右四衛府 相撲於殿庭 。右方負籌。今日獻其輸物。各奏音樂。	紫宸殿・相撲・樂	
720				九月辛亥。天皇御紫宸殿。賜菊・宴於侍從已上。但召非侍從。及諸司綠衫官人堪應詔者。并文章生等如常。	紫宸殿・宴	菊酒
721				十二月壬辰。天皇幸 神泉苑 。放隼拂水禽。	神泉苑・狩り	
722	承和3	836		正月丁巳。天皇御豊樂殿。觀 大射 。	豊樂殿・射	
723				正月壬戌。天皇幸 神泉苑 遊賞。	神泉苑・鑑賞	
724				正月戊辰。天皇幸 神泉苑 。放隼拂水禽。	神泉苑・狩り	
725				二月壬午。天皇幸 神泉苑 。放鶴隼。	神泉苑・狩り	
726				二月己丑。天皇幸 神泉苑 放隼。愛其逸氣橫生。麾則應機。招則易呼。	神泉苑・狩り	
727				五月辛丑。天皇御 神泉苑釣臺 。且以垂緇。且以陶暑。	神泉苑・釣り・避暑	
728				五月癸卯。天皇御武德殿。閱覽四衛府 馬射 。	武德殿・騎射	
729				六月戊午。天皇御紫宸殿。賜侍臣酒。且令園菓。天皇依炎熱。脱御靴。勅侍臣同亦脱之。喚 相撲司鼓 。令奏音樂。	紫宸殿・相撲司鼓	相撲司が鼓を奏した
730				九月乙亥。天皇御紫宸殿。宴 重陽節 。	紫宸殿・重陽の節	
731				十月丙午。遣中使於十三箇寺令行讀經事。以綿千屯爲布施。縁内裏有 物恠也 。	物の怪	
732				十一月丙寅朔。勅。護持神道。不如一乘之力。轉禍作福。亦憑修善之功。宜遣五畿七道僧各一口。 每國內名神社。令讀法華經一部 。國司檢校。務存潔信。必期靈驗。	仏教奨励の勅	
733				十二月丙辰。天皇於 神泉苑 放隼。獲水鳥百八十翼。	神泉苑・狩り	
734	承和4	837		正月庚辰。天皇御紫宸殿。觀 踏歌 。	紫宸殿・踏歌	
735				正月辛巳。天皇御豊樂殿觀 射 。	豊樂殿・射	
736				正月壬午。亦欲御同殿。殿上所設御座縁邊。 忽有物恠 。因停降臨。遣大臣閱視六衛府射昨日之餘。	物の怪	
737				四月戊午。天皇於 成涼殿曲宴 。奏音樂。侍臣具醉。賜祿有差。	清涼殿・曲宴	小規模な宴の意
738				四月庚申。天皇御武德殿。閱覽左右馬寮 駒 。	武德殿・觀馬	
739				七月壬戌朔甲子。延十五口僧於常寧殿。晝則讀經。夜便悔過。 以內裏有物恠也 。	物の怪	
740				七月己巳。天皇御紫宸殿。觀 相撲節 。	紫宸殿・相撲	
741				九月己巳。天皇御紫宸殿。宴 重陽節 。命文人。同賦露重菊花鮮之題。	紫宸殿・重陽の節	菊花
742				十一月戊辰。天皇於 神泉苑 放隼。	神泉苑・狩り	
743				十一月丁亥。天皇於 神泉苑 放隼。	神泉苑・狩り	
744				十二月庚子。自旭旦至戌時大風。京中屋舍往々破壊。』大宰府言。管豊前國田河郡香春岑神。辛國息長大姫大目命。忍骨命。豊比・命。惣是三社。元來是石山。而上木惣無。至延暦年中。遣唐請益僧最澄躬到此山祈云。願縁神力。平得渡海。即於山下。 爲神造寺讀經 。尔來草木翳鬱。神驗如在。每有水旱疾疫之災。郡司百姓就之祈禱。必蒙感應。年登人壽。異於他郡。望預官社。以表崇祠。許之。	爲神造寺讀經。	神仏習合
745	承和5	838		正月丙寅。天皇御豊樂殿。覽 青馬 。宴百官。	豊樂殿・青馬	
746				正月乙亥。天皇御紫宸殿覽 踏歌 。	紫宸殿・踏歌	
747				正月丙子。天皇御豊樂殿觀 大射 （云云）。	豊樂殿・射	
748				二月癸巳。天皇御內裏 射場 。命侍臣射之。是日。右大臣從二位藤原朝臣三守奉獻盡美。亦積置錢布。備于 賭物 。	内裏・賭弓	
749				五月辛酉。天皇御武德殿。觀 騎射 。	武德殿・騎射	

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
750				七月庚申。大宰府奏。遣唐使第一四船進發。	遣唐使	最後の遣唐使（前回から30年後）
751				七月丙寅。天皇幸 葛野川 觀魚。賜扈從五位已上祿有差。	川	
752				大宰府奏。 遣唐 第二船進發。	遣唐使	
753				九月甲子。是 重陽 之日也。天皇不豫。停廢節會。但賜菊・見參親王以下侍從已上於廊下。	重陽の節・菊酒	中止の記事
754				十一月癸未。先太上天皇先御冷然院。次御 神泉苑 。放隼擊水禽。天皇猷御馬四疋。鷹鷄各四聯。嗅鳥犬及御屏風。種種翫好物。	神泉苑・狩り	
755	承和6	839		正月庚申。天皇御紫宸殿。 覽青馬 。宴百官。	紫宸殿・青馬	
756				正月己巳。天皇御紫宸殿。 覽踏歌 。宴侍從已上。	紫宸殿・踏歌	
757				正月庚午。天皇觀大 射 於豐樂院。	豊樂殿・射	
758				二月癸丑朔乙丑。天皇先幸 神泉苑 。次遊覽北野。	神泉苑・北野・狩り	
759				四月壬戌。天皇 曲宴 于紫宸殿。	紫宸殿・曲宴	小規模な宴の意
760				五月乙酉。是 端五之節 也。天皇御武德殿。 觀騎射 。	端午の節・武德殿・騎射	
761				七月甲申。延僧六十口於紫宸殿。常寧殿。令轉讀大般若經。 以禁中有物恠也。	物の怪	
762				九月丁亥。是 重陽之節 也。天皇御紫宸殿。宴公卿已下及文人。同賦菊潭引之題。	紫宸殿・重陽の節	
763				九月乙未。天皇御紫宸殿。右大臣從二位兼行皇太子傳藤原朝臣三守奏大唐勅書。獨召大使藤原朝臣常嗣。昇自東階。天顔咫尺。勅曰。遠涉危難之途。平安參來〈乎〉喜賜〈都都〉大坐。常嗣朝臣稱唯。 拜舞庭中。	庭中で舞	
764	承和7	840		正月甲申。天皇御紫宸殿。垂珠簾。 覽青馬 。	紫宸殿・青馬	
765				正月癸巳。天皇御紫宸殿。不卷珠簾。而宴侍從已上。 覽踏歌 。	紫宸殿・踏歌	
766				正月甲午。大納言正三位源朝臣常奉勅。閱視六衛府 射 於豐樂院。	豊樂殿・射	
767				五月癸未。後太上天皇崩于淳和院。（中略）是日。於建礼門 南庭放并鷹鷄篋中小鳥等。	南庭・放鳥	葬送
768				七月己亥。奉授出羽國飽海郡正五位下勳五等大物忌神從四位下。餘如故。兼充神封二戸。詔曰。天皇〈我〉詔旨〈尔〉坐。大物忌大神〈尔〉申賜〈波久〉。頃皇朝〈尔〉縁 有物恠 〈天〉卜詢〈尔〉。 大神爲崇賜 〈倍利〉。加以。遣唐使第二舶人等廻來申〈久〉。去年八月〈尔〉南賊境〈尔〉漂落〈豆〉相戰時。彼衆我寡〈豆〉力甚不敵〈奈利〉。儻而克敵〈留波〉。似有神助〈止〉申。今依此事〈豆〉臆量〈尔〉。去年出羽國言上〈太留〉。大神〈乃〉於雲裏〈豆〉。十日間作戰聲後〈尔〉石兵零〈利止〉申〈世利之〉月日。与彼南海戰間。正是符契〈世利〉。大神〈乃〉威稜令遠被〈太留〉事〈乎〉。且奉驚異。且奉歡喜。故以從四位爵〈乎〉奉授。兩戸之封奉充〈良久乎〉申賜〈波久止〉申。	物の怪 大神の崇り	戦を助けた神に叙位
769	承和8	841		五月壬申。詔曰。天皇〈我〉詔旨〈尔〉坐。掛畏〈支〉神功皇后〈乃〉御陵〈尔〉申賜〈へ止〉申〈久〉。頃者在肥後國阿蘇郡 神靈池無故涸減・丈 。又伊豆國〈尔〉 有地震之變 。乍驚問求〈礼波〉。旱疫之災及兵事可有〈止〉卜申。自此之外〈尔毛〉 物恠亦多 。依此左右〈尔〉念行〈尔〉。挂畏〈支〉神功皇后〈乃〉護賜〈比〉助賜〈牟尔〉依〈天〉。無事〈久〉可有〈止〉思食〈天〉。參議大和守從四位下正躬王〈乎〉差使〈豆〉。奉出狀〈乎〉聞食〈天〉。天皇朝廷〈乎〉無動〈久〉大坐〈之米〉。國家〈乎〉平〈遣久〉護賜〈比〉助賜〈倍止〉。恐〈美〉恐〈ミ毛〉申賜〈久止〉申〈須〉。	物の怪 怪異	神功皇后陵に救済を祈願
770				六月辛酉。詔曰。天皇〈我〉詔旨〈止〉。掛畏〈支〉伊勢度會〈乃〉五十鈴之川上〈尔〉坐大神〈乃〉廣前〈尔〉申賜〈へ止〉申〈久〉。先〈尔〉肥後國阿蘇郡〈尔〉在〈流〉 神靈池 。 常〈与利〉涸竭■丈 。又伊豆國〈尔〉 有地震之變 。是〈乎〉卜求〈礼波〉。旱疫及兵事可有〈止〉卜申。自此之外〈尔母〉 物恠亦多 。依此〈天〉左右〈尔〉念行〈尔〉。掛畏〈支〉大神〈乃〉護賜〈比〉。矜賜〈牟尔〉依〈天〉。無事〈天〉可有〈止〉思食〈天〉。令擇吉日良辰〈豆〉。大監物從五位下嶋江王。中臣民部大丞正六位上大中臣朝臣楯雄等〈乎〉差使〈天〉。礼代〈乃〉大幣〈乎〉令捧持〈天〉奉出。此狀〈乎〉聞食〈豆〉。國家〈乎〉平〈介久〉有〈志女〉。天皇朝廷〈乎〉實位無動〈久〉護賜〈比〉助賜〈止〉。恐〈美〉恐〈美毛〉申賜〈久止〉申。』又遣使於賀茂御祖社。祈申亦同焉。	物の怪 怪異 （前項に同じ）	伊勢神宮と賀茂神社に祈願
771				七月戊子。天皇御紫宸殿。令左右近衛兵衛 相撲 。	紫宸殿・相撲	
772				閏九月辛亥。請僧廿口沙弥廿口於常寧殿。限二ケ日令讀經。謝 物恠也 。	物の怪	
773				十月丁朔。天皇御紫宸殿。宴于侍臣。親王已下五位以上。歌舞庭中。	紫宸殿・庭・歌舞	
774	承和9	842		正月戊戌。天皇朝觀太上天皇及太皇太后「宮」於嵯峨院。于時 雅樂寮 奏音樂。公卿醉中不勝感興。各起更舞。	嵯峨院・雅樂寮・樂・舞	

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
775				五月庚申。勅。 近有物恠 。卜食。疫氣告咎。宜令五畿内七道諸國及大宰府。敬祭疫神。以饗咎徵也。	物の怪	
776				六月。勅。前者。 令陰陽寮占物恠 。奏可有疫氣。宜遣使奉幣伊勢大神宮。祈攘之。	物の怪（前項）	伊勢に祈願
777				七月庚子。停 相撲節 。以太上天皇不豫也。	相撲	停止
778	承和10	843		五月丙申。「又」爲鎮内裏 物恠并日異 。屈百法師。限三ケ日。讀藥師經於清涼殿。修藥師法於常寧殿。轉大般若於大極殿。諸司酣食。兼禁殺生。	内裏・物の怪・怪	太陽に異変
779				八月庚辰。請百僧於大極殿。轉讀大般若經。亦分卅僧於眞言院修法。五箇日間。諸司潔齋。爲攘 物恠也 。	物の怪	
780				九月甲午。是 重陽節也 。天皇御紫宸殿。宴群臣及文人。	重陽の節	
781				九月丙午。天皇御紫宸殿。皇太子侍焉。左右諸衛府共有奉獻。親王公卿 列立中庭 。謝座謝酒。同節會儀。奏音樂。	紫宸殿中庭	
782				十月丙辰朔。天皇御紫宸殿。 曲宴 于皇太子已下侍臣已上。	紫宸殿・曲宴	
783				十月甲戌。始賜諸陵。圖書。雅樂。 園池 。正親寮司。印各一面。	園池司・雅楽寮他	
784	承和11	844		正月甲申朔。 廢朝賀 。大雪也。天皇御紫宸殿。宴侍從已上。	廢朝・宴	
785				正月己亥。天皇御紫宸殿。宴侍從已上。 覽踏歌 。	紫宸殿・踏歌	
786				五月癸未朔丁亥。天皇御武德殿。 覽四衛府騎射 。	武德殿・騎射	
787				五月戊子。御武德殿。 覽中衛府騎射種々馬藝 。	武德殿・馬	中衛府は誤りか
788				八月辛巳朔。天皇御死寢殿。 覽芳宜花宴 。	紫宸殿・花宴	芳宜（萩）
789				八月癸巳。幸北野。駐蹕於雲林院。閱 覽池塘 。	池を觀覽	
790				十一月壬子。鴨上下大神宮祢宜外從五位下賀茂縣主廣友等款云。所謂 鴨川 。經二神社指南流出。而王臣家人及百姓等。取鹿於北山。便洗水上。其末流來觸神社。因茲。汚穢之祟屢出御卜。雖加禁制。曾無順慎者。』勅。宜仰當國迄于河源。嚴加禁斷。若違犯者。禁其身申送。國郡司并祢宜祝等許容之者。必處重科。	賀茂川	賀茂社の陳情
791	承和12	845		承和十二年（八四五）正月戊申朔。 廢朝賀 。大雪也。天皇御紫宸殿。宴侍從已上。	廢朝・宴	
792				正月乙卯。（前略）是日。外從五位下尾張連濱主於 龍尾道上舞和風長壽樂 。觀者以千數。初謂。背之老。不能起居。及于垂袖赴曲。宛如少年。四座僉曰。近代未有如此者。 濱主 本是伶人也。時年一百十三。自作此舞。上表請舞長壽樂。表中載和歌。其詞曰。那々都義乃。美与尔万和倍留。毛々知万利。止遠乃於支奈能。万飛多天萬川流。	（大極殿最勝会初日）龍尾道・舞・樂	老人（浜主）の見事な舞
793				正月丁巳。天皇召尾張連 濱主 於清涼殿前。令 舞長壽樂 。	清涼殿・舞樂	浜主の再演
794				正月癸亥。天皇御紫宸殿。 觀踏歌 。	紫宸殿・踏歌	
795				正月甲子。天皇御建礼門。 觀射也 。	建礼門・射	
796				二月戊寅朔。天皇御紫宸殿。賜侍臣酒。於是。 攀殿前之梅花 。挿皇太子及侍臣等頭。以爲 宴樂 。	紫宸殿・花宴	梅。内裏の花宴初出
797				二月壬寅。行幸 河陽宮 遊獵。兵部卿四品忠良親王及百濟王等獻御贄。	河陽宮	初出
798				三月壬子。請名僧百口。限以五箇日。於紫震清涼常寧等殿及眞言院。轉讀大般若經。兼修陀羅尼法。以 有物恠也 。	物の怪	
799				九月癸丑。是日 重陽節也 。天皇御紫宸殿賜宴。	重陽の節	
800	承和13	846		正月戊午。天皇御紫宸殿。宴侍從已上。 覽踏歌 。	踏歌	
801				正月己未。天皇御豐樂殿。 觀射也 。	豐樂殿・射	
802				正月戊辰。召外從五位下尾張連濱主於清涼殿前。令 奏舞 。	清涼殿・奏舞	
803				九月丁未。是 重陽節也 。天皇御紫宸殿。	紫宸殿・重陽の節	
804				十月癸巳。白鷺集建礼門上。須臾降集 大庭 版位。	大庭・怪	
805	承和14	847		閏三月丙寅朔己巳。 天有鳴聲 。餘響殷々。良久而止。	異常現象	
806				閏三月戊寅。 群鳥億萬 。繞日上下。自日中到黄昏。仰看空中。不知何鳥。	異常現象	
807				閏三月是月。 數々有群鳥 。遲明自西方度東方。其多覆天。終始不見。訪諸故老。皆云。未曾聞之者。	異常現象	
808				五月乙丑朔己巳。天皇御武德殿觀 馬射 。	武德殿・騎射	
809				六月甲寅。（前略）左 相撲司 伐葛野郡々家前槻樹作大鼓。 有崇 。	相撲司・祟り	
810				九月辛未。是重陽之節也。天皇御紫宸殿。宴于親王已下侍從已上。但召非侍從諸司綠衫知文者如常。同賦 草木言之題 。	草木が言う	アニメズム
811	承和15	848		正月丁丑。天皇御紫宸殿。宴侍從已上。 覽踏歌 。	紫宸殿・踏歌	
812				正月戊寅。右大臣奉勅。率百官。 觀射禮 於豐樂院。	豐樂院・射	
813				正月己卯。天皇御内裏射場。閱 覽四衛府踏射 。	内裏・踏射	
814				正月辛巳。上幸 神泉苑 放隼。獲水鳥百廿翼。	神泉苑・狩り	
815				正月壬午。上御仁壽殿。内宴如常。 殿前紅梅 。便入詩題。	仁壽殿・宴・紅梅	
816				三月甲子。（前略）是日。永安門西廊 有火 。近衛及今良等。競口水沃之即滅。初是 作物所治師 行火之所延也。	作物所・冶金師	火災
817				三月乙丑。 神泉苑 東垣瓦八丈餘無故頽落。聲不異雷。	神泉苑・東垣の瓦剥落	翌々日地震の記事あり

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
818				四月庚寅朔。上御紫宸殿。皇太子侍焉。公卿及侍從已上。 鐘鼓歌舞。	紫宸殿・楽舞	
819				四月甲午。上幸 神泉苑 。轉御冷然院。次幸北野。	神泉苑	
820				四月丙辰。上御武德殿。閱覽諸牧 細馬 。兼令四衛二府驍才者 騎射 。	武德殿・細馬・騎射	
821				五月癸亥。天皇御武德殿觀馬射。	武德殿・騎射	
822				七月甲子。有 飄風 。起自春興殿 庭 。	春興殿・つむじ風	
823				十月辛卯。行幸 神泉苑 。	神泉苑	
824				十月戊申。行幸 神泉苑 。轉幸北野遊獵。	神泉苑・北野・狩り	
825	嘉祥2	849		正月丙辰朔。 廢朝 賀。緣去年天下有洪水害。秋稼不登也。天皇御紫宸殿。宴侍從已上。	廢朝・宴あり	
826				正月壬戌。天皇御紫宸殿。 覽青馬 。宴群臣。	紫宸殿・青馬	
827				正月壬申。左右大臣奉勅。行 射礼 於豐樂院。	豐樂院・射	
828				三月庚辰■御藥。俱來祇候。及浦嶋子暫昇雲漢。而得長生。吉野女眇通上天而來且去等像。副之長歌奉獻。其長歌詞曰。(中略)此國〈乃〉。云傳〈布良久〉。日本〈乃〉。倭之國〈波〉。 言玉〈乃〉。幸國〈度會〉 。古語〈尔〉。流來〈礼留〉。神語〈尔〉。傳來〈礼留〉。傳來。事任〈万尔〉。本世〈乃〉。事尋者。歌語〈尔〉。詠反〈志天〉。神事〈尔〉用來〈利〉。皇事〈尔〉。用來〈利〉。本〈乃〉世〈尔〉。依遵〈弓〉。佛〈尔毛〉。神〈尔毛〉申。舉陳〈天〉。禱〈里志〉誠〈波〉。丁寧〈度〉。聞〈許志〉食〈弓牟〉。嬰兒〈乃〉咳語〈仁〉折箸〈乃〉。本末不知。乱絲〈乃〉。乱〈天〉有〈礼度〉。九重〈能〉。 御垣之下〈尔〉 。常世鷹。率連〈天〉。狹牡鹿〈乃〉。膝折反〈志〉。侯。聞〈曾〉言〈須〉。何〈尔〉以聞〈睿牟〉。汗流〈志〉。兢恐〈留〉。何〈尔〉以聞〈睿牟〉者。夫倭歌之體。比興爲先。感動人情。最在茲矣。季世陵遲。斯道已墜。今至僧中。頗存古語。可謂礼失則求之於野。故採而載之。	言霊・垣下(えんが)	アニミズム 垣下の座 (=庭)
829				四月壬子。天皇御武德殿。閱諸牧 駒 。兼覽 騎射 。	武德殿・騎射	
830				五月戊寅。幸 神泉苑 。公卿集美福門。終日宴樂。	神泉苑	
831				九月己未。是 重陽節 也。天皇御紫宸殿。錫宴如常。	紫宸殿・重陽節	
832				十月癸卯。嵯峨太皇太后遣使奉賀天皇・寶算也。(中略)既而天皇御紫宸殿。音樂遞奏。歡樂終日。賜諸大夫祿。	紫宸殿・楽	天皇40才祝 後日に続く
833	嘉祥3	850		正月庚辰朔。終日雨降。先是。去月廿九日亦大雨焉。因 停朝賀 。天皇御紫宸殿。宴侍從已上。	廢朝・宴あり	
834				正月丙戌。不御紫宸殿。勅令左右大臣行事。不奏 女樂 。	青馬節会・女樂	大臣代行
835				正月乙未。垂御簾覽 踏歌 「也」。宴侍從已上。	踏歌	御簾内で御 覧
836				正月己亥。此日内 宴 也。緣聖躬不豫。不御仁壽殿。於清凉殿。垂御簾。覽 舞妓 。	舞妓	御簾内で御 覧
837				三月壬辰。卜食。申柏原山陵告崇。仍遣使奉宣命曰。天皇〈我〉大命〈止〉掛畏〈岐〉柏原〈乃〉御陵〈尔〉申賜〈倍止〉申〈久〉頃間 物恠在 〈尔〉依〈天〉。卜求〈礼波〉。掛畏〈岐〉御陵爲崇賜〈倍利止〉申〈利〉。因茲。恐畏〈己止〉無極。若〈久波〉御陵内〈尔〉 犯穢〈世留)事〈毛也〉在 〈止〉令巡察〈无止〉爲〈天奈毛〉。	物の怪	桓武天皇陵 で穢れあり
838				三月丁酉。於清凉殿。修七佛樂師法。畫七佛像。懸御簾前。七重輪 燈立於庭中 。復於紫宸殿 南庭 。新度十人。	庭に燈明 南庭で出家	
839				三月己亥。地震。帝崩於清凉殿。	地震・崩御	仁明天皇崩 御
900番台～				文徳天皇実録		
901	嘉祥3	850	文徳	三月己亥。仁明皇帝崩於清凉殿。于時皇太子下殿。 御宜陽殿東庭休廬 。左右大臣率諸卿及少納言左右近衛少將等。獻天子神璽寶劔符節鈴印等。須臾駕輦車。移御東宮雅院。陣列之儀。一同行幸。但無警蹕。	踐祚	
902				四月癸丑。地震。帝公除。百官吉服。 大祓 於朱雀門前。有魚虎鳥。飛鳴於東宮樹間。	大祓・朱雀門前	
903				四月癸亥。(前略)掛畏〈支〉天皇 朝庭 〈尔〉。恐〈見〉恐〈見毛〉申賜〈久〉。掛畏〈支〉天皇 朝庭 〈乃〉矜賜〈牟〉厚慈〈乎〉蒙戴〈豆之〉。天之日嗣〈乃〉政者平〈久〉。天地日月〈止〉共〈尔〉守仕奉〈倍之止〉思食事〈乎〉。	朝庭	
904				七月甲申。皇女晏子内親王爲伊勢齋。惠子内親王爲賀茂齋。 大祓 於建礼門前。以命兩齋内親王也。	大祓・建礼門前	
905				七月丙戌。(前略)天皇 朝庭 〈乎〉 堅磐 〈尔〉 常磐 〈尔〉。護賜〈比〉助賜〈倍止〉申賜〈波久止〉申。	朝庭・堅磐・常盤	(詔)

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
906				七月己亥。大雨。 大極殿前龍尾道 十二丈。爲水潦所決壊	龍尾道	
907				八月庚戌。遣使五畿七道。班幣諸神。告以即位之由。 大祓 於建礼門前。以遣使也。	大祓・建礼門前	
908				九月壬午。遣宮主正六位下占部雄貞。神琴師正六位上菅生朝臣末繼。典侍正五位下藤原朝臣泉子。御巫无位榎木連淨子等。向攝津國 祭八十嶋 。是日。右京人村住岑成。於攝津國嶋上郡河上。獲白龜獻之。	八十嶋祭	初見
909				九月庚子。遣侍從五位上嶋江王向伊勢大神宮。神祇大副從五位下中臣朝臣逸志向賀茂大神社。神祇權少祐正六位上占部業基向尾張大神社。告以賀瑞之由。 大祓 於建礼門前。以遣使也	大祓・建礼門前	
910				十月甲子。(前略)天皇 朝廷 〈乎〉常磐〈尔〉 堅磐 〈尔〉護幸奉賜〈比〉。天下平安〈尔〉矜賜〈比〉助賜〈倍止〉。恐〈見〉恐〈見毛〉申給〈波久止〉申。』同日。遣同貞守於坐伊太祁曾神社。策命曰。天皇〈我〉詔旨〈尔〉申給〈久〉。(中略)天皇朝廷〈乎〉常磐〈尔〉 堅磐 〈尔〉護幸奉賜〈倍止〉申給〈久止〉申。』亦遣右中辨兼右近衛中將從四位下藤原朝臣氏宗向園神韓神等社。策命曰。天皇〈我〉詔旨〈尔〉申給〈久〉。(中略)天皇 朝廷 〈乎〉 常磐 〈尔〉 堅磐 〈尔〉護幸奉賜〈倍止〉申給〈久止〉申。	朝廷・堅磐・常磐	(詔)
911	仁寿1	851		五月乙未。地震。有 死蛇 。在 南殿前 。頭有傷處。似有物嚙之。何以書之。 記異 也。	地震・南殿前・怪	
912				七月壬辰。 夜 。有如火光者。 墜於殿前 。左右驚乱。須臾乃定。	怪	発光体墜落
913				九月戊寅。以有水災。廢 重陽宴 。但公卿於近伏下。與諸侍臣。聊進菊酒。	重陽の節・菊酒	中止
914				十月甲子。帝幸鴨川。大脩 禊 事。爲大嘗祭豫除群穢也。	禊	
915				十月戊辰晦。 大祓 於朱雀門前。	大祓・朱雀門前	
916				十一月辛卯。帝有事於八省院。緣 大嘗祭 也。	大嘗祭	
917				十一月壬辰。幸豐樂院。賜宴群臣。	大嘗祭	
918				十一月癸巳。頻御豐樂院宴飲。 悠紀主基二國奏風俗歌舞 。献物同如昨儀。	大嘗祭	
919				十一月甲午。御豐樂院。策命曰。天皇〈我〉大命〈良万止〉勅大命〈乎〉諸聞給〈止〉宣。悠紀主基〈尔〉仕奉〈流〉二國〈乃〉國司等。(中略)奏 大歌五節舞 。又如舊儀。	大嘗祭	
920				十一月乙未。策命曰。天皇〈我〉大命〈良万止〉大命〈乎〉衆聞給〈止〉宣。神祇官人等〈乎〉始〈天〉。大嘗會〈尔〉參出來〈天〉仕奉〈流〉 悠紀主基二國 〈乃〉國司郡司百姓。及司司人〈止毛〉番上已上〈尔〉御物賜〈布〉。又悠紀主基兩國〈乃〉主典〈與利〉以下。國醫師〈尔〉至〈万弓〉。及諸郡司主帳已上〈乃〉把笏者〈尔〉。位一階上賜治賜〈布〉。又悠紀國〈乃〉今年庸物。主基國〈乃〉今年田租免賜〈布〉。兩國〈乃〉卜相郡司〈尔波〉特御物賜〈波久止〉宣。』	大嘗祭	
921				十一月丁酉。 大祓 於朱雀門前。謂之解齋。	大祓・朱雀門前	
922	仁寿2	852		正月甲戌。幸豐樂院。以覽 青馬 。	豐樂院・青馬	
923				正月癸未。賜宴侍臣。 踏歌 如舊儀。	踏歌	
924				正月甲申。帝幸豐樂院。以觀 射礼 也。	豐樂院・射	
925				正月乙酉。亦幸豐樂院。觀諸衛府 踏射 。	豐樂院・踏弓	
926				閏八月丁亥。 大祓 於建礼門前。伊勢齋内親王將參太神宮。故有此祓	大祓・建礼門前	
927				閏八月癸巳。 大祓 於朱雀門前。伊勢齋内親王。將參太神宮。故重有此祓。	大祓・朱雀門前	
928				九月壬寅。 重陽節 也。帝不御南殿。勅公卿。喚侍從文人等宴賞。	重陽の節	
929	仁寿3	853		正月戊戌。幸豐樂院。 觀青馬 。	豐樂院・青馬	
930				正月丁未。賜宴侍臣。 踏歌 如常。	踏歌	
931				正月戊申。停大 射礼 。但勅公卿。令諸衛府。於豐樂殿前 射 。	豐樂殿・射	大射停止
932				九月丙申。 重陽宴 也。帝不御南殿	重陽の節	
933	齊衡1	854		正月丙戌朔。停朝賀。以 雨後泥深 也。帝御南殿。賜宴侍臣如常儀。	廢朝・宴	雨後泥深
934				正月壬寅。停大 射 。但令諸衛府等於殿前射。	射	大射停止
935				正月癸卯。亦停 踏射 。	射	踏射停止
936				四月辛巳。 有鳥 。 集殿前松樹 。俗名古古鳥。其鳴自呼。	鳥	
937				五月戊子《甲申朔五》。停 騎射走馬 之觀。	騎射・走馬	停止
938				七月乙巳。備前國貢一伊蒲塞。斷穀不食。有勅。安置 神泉苑 。男女雲會。觀者架肩。市里爲之空。數日之間。遍於天下。呼爲聖人。各乞私願。伊蒲塞仍有許諾。婦人之類。莫不眩惑奔咽。後月餘日。或云。伊蒲塞夜人定後。以水飲送數升米。天曉如廁。有人窺之。米糞如積。由是聲價應時減折。兒婦人猶謂之 米糞聖人 。	神泉苑 米糞聖人	偽陰陽師
939				九月辛卯。 重陽節 也。帝御南殿。賜宴侍臣。	南殿・重陽の節	
940				十一月癸巳。左近衛府獻生■魚。詔放御池中。	池	神泉苑か？
941	齊衡2	855		正月壬午朔。帝不御大極殿。以雪後泥深。仍 停朝賀 。	廢朝・宴あり	
942				正月戊子。帝御南殿。 覽青馬 。	南殿・青馬	
943				正月戊戌。帝停觀 大射 。勅公卿。就豐樂殿下。令諸衛府 次射 。	豐樂殿・射	
944				正月癸卯。帝御新成殿。以觀 踏射 。	踏射	

(表4) 『古事記』および「六国史」関連記事原文一覧

(表4)

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
945				四月庚戌。地震。＜以下に齊衡3年までの地震関連記事をあげる＞	地震	
946				五月壬子。停 騎射走馬 之觀。不御武徳殿。盖據御 馬多斃 也。	騎射・走馬	停止
947				五月丁巳。地震。	地震	
948				五月戊午。地亦震。	地震	
949				六月癸未。震建礼門前柳樹。	地震	
950				六月戊戌。地震。	地震	
951				六月壬寅。地震。	地震	
952				七月壬申。地震。	地震	
953				八月丁丑朔。地震。	地震	
954				八月戊寅。地亦震。	地震	
955				八月丙戌。 兵庫中鼓自鳴 。	地震・怪	
956				八月辛丑。地震。	地震	
957				九月乙卯。 重陽節 也。帝御南殿。賜宴侍臣。命樂賦詩如常也。是夜。地震。	重陽の節・地震	
958				九月丙辰。地亦震。	地震	
959				九月乙丑。地震。	地震	
960				九月丙寅。地亦震。	地震	
961				九月乙亥。九月乙亥晦地震。	地震	
962				十月戊寅。地震。	地震	
963				十一月庚申。地震	地震	
964				十二月丁亥。地震。	地震	
965	齊衡3	856		正月乙巳朔。 停朝賀 。以陰雨也。帝御南殿。賜宴侍臣如舊。唯不作音樂。	廃朝・宴あり	
966				正月辛亥。帝殿南殿。 觀青馬 。	南殿・青馬	
967				正月壬戌。帝 觀賭射 。	賭射	
968				二月癸巳。地震。有聲如雷。	地震	
969				二月甲午。地亦震。	地震	
970				三月是月。地數震。京師及城南。或屋舍毀壞。或佛塔倚傾。	地震	
971				四月癸酉朔。地震。	地震	
972				四月甲戌。地震。	地震	
973				五月丙午。停 騎射走馬 之觀。不御武徳殿。	騎射・走馬	停止
974				六月壬申朔。地震。	地震	
975				六月癸酉。地亦震。	地震	
976				七月丙辰。地震	地震	
977				七月戊午。地震。	地震	
978				七月戊辰。地震。	地震	
979				九月己酉。 重陽宴 也。天皇御南殿。命樂賦詩如常。	重陽の節	
980				九月辛酉。地震。	地震	
981				九月乙丑。地震。	地震	
982				十月辛未朔。地震。	地震	
983				十月戊子。地震。	地震	
984				十月。地震。	地震	
985				十月乙未。地亦震。	地震	
986				十一月庚子朔。地亦震。	地震	
987				十一月辛丑。地震。	地震	
988				十一月癸丑。地震。	地震	
989				十一月丁巳。御 池水色變黑 。數日乃復。	池	変色
990				十二月己卯。地震	地震	
991				十二月丁酉。美作國獻白鹿。詔放 神泉苑	神泉苑	
992				十二月戊戌。常陸國上言。鹿嶋郡大洗磯前有神新降。初郡民有■海爲塩者。夜半望海。光耀属天。明日有 兩佐石 。見在水次。高各尺許。體於神造。非人間石。塩翁私異之去。後一日。亦有廿餘小石。在向石左右。似若侍坐。彩色非常。或形像沙門。唯無耳目。時神憑人云。 我是大奈母知少比古奈命也 。昔造此國訖。去往東海。今爲濟民。更亦來歸。	少比古奈命	『古事記』 石立たす少 名彦名命 (寄神)
993	天安1	857		正月丙午。天皇不幸豊樂院。御南殿而觀 青馬 。宴會即據常儀。	南殿・青馬	
994				正月丙辰。天皇不幸豊樂院。止觀 大射 。公卿於豊樂殿下。令諸衛府次射之。	射	
995				正月戊午。於新成殿前。觀 賭射 。	賭射	
996				二月己巳朔庚午。地震。	地震	
997				二月乙亥。地震	地震	
998				二月壬午。地震。	地震	
999				二月甲申。地震。	地震	
1000				二月己丑。地震。	地震	
1001				三月丁卯。有勅。遣使 神泉苑 馬場。角御馬之走足也。	神泉苑・馬	
1002				五月庚子。有勅。遣使武徳殿 馬場 。令角走左右馬寮御馬各十疋。	武徳殿・馬	
1003				五月辛丑。天皇不幸武徳殿。人心寂寥。	武徳殿閑	
1004				五月丁未。地震。		
1005				五月丙辰。地震。雷雨。近來霖雨不霽。今日京中水溢。	地震・水害	
1006				九月癸卯癸卯。 重陽節 也。天皇不御南殿		
1007				九月己未。地震。		
1008				十一月丙辰。不御豊樂院。便於冷然院。命公卿開宴。百寮供張。 五節舞 態。	五節舞	

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
1009				十一月戊午。喚 大歌 及 五節舞妓 。令歌舞。	大歌・五節舞	
1010	天安2	858		正月甲午朔。天皇不聽 朝賀 。以陰雪也。	廃朝	
1011				正月庚子。天皇不幸豊樂院。唯御南殿而觀 青馬 。	青馬	
1012				正月庚戌。停觀 大射 。命公卿於豊樂殿下。令諸衛府次 射 之。	豊樂殿・射	公卿が代行
1013				正月辛亥。亦停 賭射 。	賭射	停止
1014				二月癸酉。天皇別召四衛府射手等。令賭射之。前日廢觀。今日更射。	賭射	
1015				三月甲申。地震。	地震	
1016				四月甲寅。地震。	地震	
1017				五月乙丑。停騎射 走馬 之觀。不幸武德殿。	騎射・走馬	停止
1018				五月戊辰。有勅。公卿於武德殿馬場令角走左右馬寮御馬各十疋。令左右近衛各十六人。左右兵衛各三人。春宮坊帶刀舍人三人而 騎射 。	騎射	
1019				五月壬午。大雨。洪水■溢。河流盛溢。水勢滔々。平地浩浩。橋梁斷絶。道路成川。東堀川水入冷然院。 庭中如池 。	大雨・庭	水没
1020				五月己丑。(前略)是日。於 南大庭大祓 。	南大庭・大祓	
1021				六月壬寅。地震。	地震	
1022				七月庚辰。左右 相撲司 率樂人。於新成殿前。盛奏乱聲。即使左右 相撲 。	相撲司・相撲	
1023				八月乙卯。帝崩於新成殿。	崩御	
1100番台～		日本三代実録				
1100	貞観1	859	清和	正月戊午朔。天皇不受 朝賀 。	廃朝	諒闇
1101				正月甲子。(前略)是日。天皇不覽 青馬 。停節會之事也。	青馬	停止諒闇
1102				正月丁卯。所司獻剛 卯杖 。天皇不御前殿。付内侍奏。是日。始奉作天下諸社神寶。仍 大祓 於建礼門前。	卯杖・建礼門前・大祓	
1103				正月癸酉。停 踏歌 之節。諒闇也。	踏歌	停止諒闇
1104				正月己卯。(前略)大宰府言。筑前國志摩郡兵庫 鼓自鳴 。庫中弓矢有聲聞外。	怪	
1105				四月丙午。 大祓 於建礼門前。	建礼門前・大祓	
1106				六月癸丑晦。 大祓 於朱雀門前。例也。	朱雀門前・大祓	
1107				七月丙寅。 大祓 於建礼門前。	建礼門前・大祓	
1108				八月壬辰。自五月至今月霖雨。仍遣使者於大和國丹生河上雨師社。奉幣 青馬 等。祈以 止雨 也。	青馬・止雨	
1109				八月壬子。 大祓 於朱雀門前。	朱雀門前・大祓	
1110				九月辛酉。 停重陽節 。以先帝忌景近也。於右仗頭賜菊酒。	重陽の節	停止諒闇
1111				九月壬戌。 大祓 於朱雀門前。爲行大嘗會事也。	朱雀門前・大祓	大嘗祭準備
1112				十月甲午。 大祓 於朱雀門前。以定伊勢賀茂齋内親王也。	朱雀門前・大祓	伊勢・賀茂齋王
1113				十月癸卯。爲來月將奉大嘗會。行幸 鴨水 。修 禊 事。例也。	賀茂川・禊	大嘗祭準備
1114				十一月丁卯。車駕幸朝堂院齋殿。親奉 大嘗祭 (～三十日の解斎まで続く)	大嘗祭	
1115				十一月戊辰。未鷄鳴。 大嘗宮祭礼 既訖。天皇幸豊樂院。御悠紀帳。賜宴群臣。悠紀國獻物。移御主基帳。群臣移就主基座。悠紀國奏風俗歌舞。日暮。以悠紀國所獻衣被。賜親王已下。五位已上。諸有雜念及内外官未得解由者皆預焉。是夜。天皇留御豊樂殿後房。文武百官侍宿。親王已下參議已上侍御在所。琴歌神宴。終夜歡樂。賜御衣。	大嘗祭	
1116				十一月己巳。天皇御悠紀帳。賜宴群臣。主基國獻物。移御主基帳。群臣移座。乃 主基國奏風俗歌舞 。賜主基國所獻衣被。一如昨儀。是夜。天皇留御。親王已下百官侍宿亦如昨。	大嘗祭	
1117				十一月庚午。 撤去悠紀主基兩帳 。天皇御豊樂殿廣廂。宴百官。 多治氏奏田舞 。 伴佐伯兩氏久米舞 。 安倍氏吉志舞 。 内舍人倭舞 。入夜宮人 五節舞 。並如舊儀。宴竟賜綃綿各有差。諸司官人五位已上有雜念。及諸國司就事入京。并新除外吏過裝束程未向任之輩皆預之。但未得解由者不在預限。詔曰。天皇〈我〉大命〈良万止〉勅大命〈乎〉諸聞給〈止〉宣。悠紀主基〈尔〉仕奉〈流〉二國〈乃〉國司等。日夜無怠事〈久〉務結〈利〉勤〈之久〉仕奉〈尔〉依〈天〉治賜〈不〉。又仕奉人等中〈尔〉。其仕奉狀〈乃〉隨治賜人〈毛〉在。又御意〈乃〉愛盛〈尔〉治賜人〈毛〉一二在。故是以冠位上賜治賜〈波久止〉詔天皇大命〈乎〉衆聞食〈止〉宣。』(中略)日暮。車駕還宮。	大嘗祭	
1118				十一月辛未。詔曰(同上)悠紀主基二國〈乃〉國司郡司百姓及司司人〈止毛〉。番上已上〈尔〉御物賜〈布〉。又悠紀主基兩國〈乃〉主典〈与利〉以下。國醫師〈尔〉至〈万互〉。及諸郡司主帳已上〈乃〉把笏者〈尔〉。位一階上賜治賜〈布〉。又悠紀國〈乃〉今年庸物。主基國〈乃〉今年田租免賜〈布〉。兩國〈乃〉卜相郡司〈尔波〉。特御物賜〈波久止〉宣。』(後略)	大嘗祭	

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
1119				十一月辛巳。大祓於朱雀門前。大嘗祭解齋也。	大嘗祭・解齋	
1120				十二月辛亥。大祓於朱雀門前并大饗如常儀。	饗	
1121	貞観2	860		正月壬子朔。天皇不受歲賀。雨也。御前殿賜宴侍臣。(中略)舉音樂。	廃朝・前殿宴・楽	雨天
1122				正月戊午。車駕幸豊樂院。觀覽青馬。賜宴奏樂。	豊樂院・青馬・楽	
1123				正月丁卯。踏歌之節。天皇御前殿。賜宴奏樂。踏歌如常儀。	踏歌	
1124				正月戊辰。天皇幸豊樂院。觀射礼。	射	
1125				正月己巳。車駕幸豊樂院。觀賭射。	賭射	
1126				六月戊申。(前略)大祓於朱雀門前如常。	朱雀門前・大祓	
-				＜この年地震頻発、大水・大風の被害甚大＞		
1127				十二月乙亥。從五位上源朝臣舒爲次侍從。』大祓於朱雀門前。并大饗如常。	朱雀門前・大祓・饗	
1128	貞観3	861		正月丙子朔。天皇不受朝賀。雨也。御前殿。賜宴侍臣。	廃朝・宴あり	雨天
1129				正月壬午。天皇御豊樂殿。觀青馬。賜宴奏樂如常儀。	豊樂院・青馬・楽	
1130				正月辛卯。帝御前殿。賜宴侍臣。踏歌賜祿如常。	踏歌	
1131				正月壬辰。降雨。』於豊樂殿行射礼。上不臨御。勅公卿。令監射焉。	豊樂殿・射	公卿が代行
1132				五月甲戌朔。授園池司無位御氣津神從五位下。	園池司	
1133				五月戊寅。天皇御武德殿。觀覽騎射。親王以下五位以正貢競走馬。	武德殿・騎射・走馬	
1134				五月己卯。天皇御同殿。觀覽競走馬並如舊儀。	競走馬	
1135				六月壬子。任伊勢齋內親王裝束使。大祓於建礼門前。	建礼門前・大祓	
1136				六月辛未。天皇御前殿。觀童相撲。先是。近臣分頭。相折各爲左右。以右大臣正二位兼行左近衛大將藤原朝臣良相爲左方首。以大納言正三位兼行右近衛大將源朝臣定爲右方首。左右標并樂人相撲童等。經左右仗下。入住殿前。九番相撲後。有勅令停。左右互奏音樂。種々雜伎。散樂。透撞。咒擲。弄玉等之戲。皆如相撲節儀。	童相撲	
1137				六月壬申晦。帝御南殿。觀童相撲如昨儀。』朱雀門前大祓如常	童相撲・朱雀門前・大祓	
1138				七月戊戌。帝御前殿。觀相撲。左右近衛府奏音樂。	相撲・楽	
1139				八月十八日己未。大祓於建礼門前。	建礼門前・大祓	
1140				八月庚午。大祓於朱雀門前。	朱雀門前・大祓	
1141				九月庚辰。重陽節。天皇不御前殿。於殿庭賜菊酒親王以下。	重陽の節・殿庭・菊酒	
1142				十一月辛卯。新嘗祭也。帝不御神嘉殿。	新嘗祭	
1143				十二月己巳。大祓大饗如常。	大祓・饗	
1144	貞観4	862		正月庚午朔。天皇不受朝賀。雨也。御前殿。賜宴侍臣。	廃朝・宴あり	雨天
1145				正月丙子。帝御前殿。觀青馬。宴於群臣。	青馬	
1146				正月乙酉。踏歌之節。天皇御前殿。宴於侍臣。踏歌如常儀。	前殿・踏歌	
1147				正月丙戌。車駕幸豊樂院。觀射礼。	豊樂院・射	
1148				正月丁亥。停四衛府賭射之事。勅公卿。向豊樂院。令諸衛府後參者射	賭弓・豊樂院・射	賭弓停止
1149				四月乙丑。天皇御武德殿。閱覽左右馬寮御馬。如常儀。	武德殿・馬	
1150				五月壬申。端午之節。天皇御武德殿。觀諸衛騎射。親王以下。五位以上。貢競走馬如常。	武德殿・馬	
1151				五月癸酉。亦御同殿。觀馬藝雜弄如昨儀。	馬藝	
1152				六月丁未。大祓於建礼門前。以宮內省有馬死穢也。	建礼門前・大祓	馬死穢
1153				七月壬申。天皇御前殿。觀童相撲。其儀一如去年。	童相撲	
1154				七月癸酉。亦御同殿。觀童相撲。	童相撲	
1155				七月己卯。天皇御前殿。觀相撲。奏樂。如去年。	相撲・楽	
1156				七月庚辰。亦御同殿觀相撲。	相撲	
1157				七月癸未。相撲節改六月十五日。定七月上旬之内。	相撲節	
1158				七月甲申。於中宮喚伶人舞童子等。奏音樂。如童相撲日之儀。	舞・楽・童相撲	
1159				九月癸未。是月。京師人家井泉皆悉枯竭。所有水之處。人相借汲用。是日。勅開神泉苑西北門。聽諸人汲水。	神泉苑・諸人汲水	渴水・給水
1160				一月己卯。新嘗祭。天皇不御神嘉殿。勅親王公卿。向神祇官奉祭。	新嘗祭	親王が代行
1161				十一月庚辰。天皇御前殿。賜宴群臣。奏大歌五節舞。賜祿如常。	大歌・五節舞	
1162				十二月癸亥晦。大祓大饗如常。	大祓・饗	
1163	貞観5	863		正月甲子朔。天皇不受歲賀。雨也。御前殿。賜宴侍臣。(中略)所司緩怠不奏於庭。附内侍奏。	廃朝・宴あり庭(みかど)	雨天
1164				正月庚午。天皇御前殿觀青馬。賜宴群臣。奏樂賜祿如常。	前殿・青馬	
1165				正月己卯。踏歌之節。天皇御前殿賜宴。侍臣奏樂。踏歌。賜祿。其儀如常。並如舊儀。	前殿・踏歌	
1166				正月庚辰。勅公卿。於豊樂院令行射禮。	豊樂院・射	
1167				正月辛巳。天皇御射場殿。觀四府賭射。	射場殿・賭射	
1168				正月壬午。侍從所庭中。鬼足遺跡。	庭・鬼	
1169				二月乙未。大祓於朱雀門前。以觸死穢人入禁中也	朱雀門前・大祓	

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
1170				四月壬寅。於建礼門前 大祓 。	建礼門前・大祓	
1171				五月壬午。於 神泉苑 修 御靈會 。勅遣左近衛中將從四位下藤原朝臣基經。右近衛權中將從四位下兼行內藏頭藤原朝臣常行等。監會事。王公卿士赴集共觀。 靈座六前設施几筵 。盛陳花果。恭敬薰修。延律師慧達爲講師。演說金光明經一部。般若心經六卷。命雅樂寮伶人作樂。以帝近侍兒童及良家稚子爲舞人。大唐高麗更出而舞。雜伎散樂競盡其能。此日宣旨。開苑四門。聽都邑人出入縱觀。所謂御靈者。崇道天皇。伊豫親王。藤原夫人。及觀察使。橘逸勢。文室宮田麻呂等是也。並坐事被誅。冤魂成口。近代以來。疫病繁發。死亡甚衆。天下以爲。此災。 御靈之所生也 。始自京畿。爰及外國。每至夏天秋節。修御靈會。往々不斷。或礼佛說經。或歌且舞。令童貫之子口粧馳射。臂力之士袒裼 相撲 。 騎射 呈藝。 走馬 爭勝。倡優口戲。遞相誇競。衆而觀者莫不填咽。遐迹因循。漸成風俗。今茲春初咳逆成疫。百姓多斃。朝廷爲祈。至是乃修此會。以賽宿禱也。	神泉苑・御靈會	
1172				五月甲申。天皇御雅院。召見 神泉苑御靈會舞童 。雅樂寮奏音樂。	神泉苑・御靈會	
1173				閏六月庚寅晦。朱雀門前大祓如常。	朱雀門前・大祓	
1174				七月壬辰。(前略) 勅遣參議正四位下行式部大輔兼播磨權守春澄朝臣善繩。從五位下行神祇少副大中臣朝臣豐雄。於大極殿。奉禱伊勢大神。去月有流星。神祇官卜云。 天照大神成祟 。故禱以防不祥也。	天照大神・祟り	
1175				七月乙未。天皇御南殿。觀 相撲 。	南殿・相撲	
1176				七月戊戌。天皇御南殿。觀 童相撲 。	南殿・童相撲	
1177				九月己亥。 大祓 於建禮門前。以明日將發奉幣伊勢太神宮使也。	建礼門前・大祓	
1178				十一月癸卯。 新嘗「會」祭 。天皇不御神嘉殿。以主殿寮有 狐死穢 。而官人參入御在所也。	新嘗祭・穢れ	穢れのため 不出御
1179				十一月甲辰。天皇御前殿。宴於群臣。奏 大歌五節舞 。賜祿如常。	前殿・宴・大 歌・五節舞	
1180				十二月丁亥晦。大祓 大饗 如常。	大祓・饗	
1181	貞観6	864		正月甲午。天皇御前殿覽 青馬 。賜宴群臣。奏樂賜祿如常	青馬・奏樂	
1182				正月癸卯。 踏歌之節 。天皇御前殿。賜宴侍臣。伶官奏樂。宮人 踏歌 如常儀。	踏歌	
1183				二月壬午。車駕幸於太政大臣東京染殿第。 觀櫻花 。累路駐蹕於一條第。即是帝降誕之處也。太政大臣以肴口賜恩從群臣文武官。積祿物於庭中令帝覽。訖班賜有差。遂幸染殿花亭。親王已下。侍從已上並侍焉。太政大臣別令伶人教習樂一部。喚能屬文者五位已上十人。諸司六位十人。文章生廿人。命樂賦詩。具醉歡樂。移自花亭。御於射場。帝御弓矢。一發中鵠。群臣稱万歲。親王已下以次遞射。山城國司守正四位下紀朝臣今守等率郡司百姓於東垣外。 行耕田之礼 。欲令帝覽之。知農民之有事也。自晨至暮。極樂而罷。賜親王公卿文武百僚祿各有差。夜分還宮。』	桜花 庭中に祿を積む 耕田の禮	
1184				四月癸酉。 賀茂祭 如常。	賀茂川・禊	
1185				五月丙戌朔。五日庚寅。 端午之節 。天皇御武德殿。觀諸衛騎射。親王已下競馳馬。	武德殿・馬	
1186				五月辛卯。天皇御武德殿。觀左右馬寮走馬。諸衛 騎射 。馬上雜藝。皆如舊儀。	武德殿・左右馬 寮	
1187				七月戊戌。天皇御前殿。觀 相撲 。	相撲	
1188				七月癸卯。天皇御前殿。觀 相撲 。	相撲	
1189				九月癸巳。 重陽之節 。天皇御前殿。賜宴於群臣。如常儀。	前殿・重陽の節	
1190				十月甲戌。天皇御前殿。右近衛。右衛門。右兵衛等三府及右馬寮獻物。去五月六日 競馬走馬 之輪物也。音樂備舉。百戲皆作。極醉方罷。宴竟賜祿各有差。	競馬走馬之輪 物・音楽・百戲	走り馬の負 け態
1191				十一月癸卯。 新嘗祭 。天皇不御神嘉殿。勅親王公卿。於神祇官奉祭。	新嘗祭	不御
1192				十一月甲辰。天皇御前殿。賜新嘗豐樂宴於群臣。 大歌五節舞 。賜祿如常	新嘗豐樂・大 歌・五節舞	
1193				十二月己卯。大宰府言。肥後國阿蘇郡正二位勳五等健磐龍命神靈池。去十月三日夜。有聲震動。池水沸騰空中。東南洒落。其落東方者。如布延縷。廣十許町。水色如漿黏着草木。雖經旬日。不消解。又比賣神嶺。 元來有三石神 。高四許丈。同夜二石神頽崩。府司等決之龜笠云。應有 水疫之災 。	石神・怪	水害の予告
1194				十二月壬午晦。 大祓大饗 如常。	大祓・饗	
1195	貞観7	865		正月癸未朔 是日立春。天皇 不受朝賀 。以雨雪地濕也。	廢朝賀	
1196				正月戊戌。 踏歌之節 。天皇不御前殿。宴于侍臣。 踏歌 賜祿如常。	踏歌	
1197				正月己亥。勅公卿。於建礼門前行 射礼 。	建礼門・射礼	
1198				正月辛丑。天皇於御在所 射場 。觀四府 踏射 。	射場・踏射	
1199				五月癸巳。延僧四口於 神泉苑 。讀般若心經。又僧六口。七條大路衢。分配朱雀道東西。朝夕二時讀般若心經。夜令佐比寺僧惠照。修疫神祭以防災疫。預仰左右京職。令東西九箇條男女人別輸一錢。以充僧布施供養。欲令京邑人民賴功德免天行也。	神泉苑・読経 修疫神祭以防災 疫	
1200				七月庚子。天皇御建礼門。觀 相撲 。	建礼門・相撲	
1201				七月壬寅。天皇於南殿御簾中觀 相撲 。左右司遞奏音樂。百戲偕作。	南殿・相撲・奏 樂	

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
1202				十一月辛卯。新嘗祭。天皇不御神嘉殿。勅遣親王公卿。向宮内省奉祭。	新嘗祭	不御
1203				十一月壬辰。天皇御紫宸殿。賜宴群臣。 大歌五舞 如常儀。宴竟賜祿各有差。	大歌五舞	
1204				十二月丁丑。大於朱雀門前。 大饗 並如常儀。	朱雀門前・饗	
1205	貞観8	866		正月甲申。天皇御紫宸殿。 觀青馬 。	青馬	
1206				正月 踏歌 之。天皇御紫宸殿。宴于侍臣。雅樂寮奏樂。宮人 踏歌 如常。	紫宸殿・踏歌	
1207				正月甲午。勅公卿。於建礼門前。行 大射 之礼。	建礼門前・射	
1208				正月癸巳。 踏歌 之。天皇御紫宸殿。宴于侍臣。雅樂寮奏樂。宮人 踏歌 如常。	踏歌・紫宸殿・踏歌	
1209				正月甲午。勅公卿。於建礼門前。行 大射之礼 。	射礼	
1210				正月丙申。天皇御内裏射場。觀四府賭射。親王已下侍焉。	賭射	
1211				三月廿三日己亥。鸞輿幸右大臣藤原朝臣良相西京第。 觀櫻花 。喚文人賦百花亭詩。預席者册人。四位四人。五位八人。六位廿八人。天皇御射庭。賜親王以下侍從以上射。左右近衛中少將預焉。中鵠者賜布。 伶官奏樂 。玄髻稚齒十二人遞出而 舞 。 晚奏女樂 。歡宴竟日。賜扈從百官祿各有差。夜分之後。乘輿還宮。	觀櫻花	藤原良相邸
1212				閏三月丙午朔。鸞輿幸太政大臣東京染殿第〈良房〉。 觀櫻花 。王公已下及百官扈從。天皇御釣臺。觀釣魚。遷射殿。御弓矢。王公已下以次射。御東門覽耕田農夫田婦。雜樂皆作。還御望遠亭。覽斷花樹。伶人陪於歌。鼓鐘陳。絲竹繁會。童男妓女。花間迭舞。喚能属文者數人。賦落花無數雪詩終日樂飲。皇歡是洽。群臣具醉。宴竟。親王已下五位已上及六府將尉已下賜祿各有差。五位已上未得解由者預焉。日暮車駕還宮。』	觀櫻花・釣り射殿・弓矢 觀花樹	藤原良房邸
1213				閏三月丁卯。會百官。大於會昌門前。以應天門火也。	大祓・応天門・怪	
1214				六月壬寅晦。先是。大和國言。楯列山陵守等 多伐樹木 。〈神功〉神祇官卜云。災旱之。實因伐木。是日。遣使申謝告文云。天皇掛畏〈岐〉御陵〈尔〉恐〈美〉恐〈美毛〉申賜〈部止〉申〈久〉。比來涉旬〈天〉不雨〈之天〉。農業失便〈利〉。是有何祟咎〈天〉所致〈乃〉災〈奈良牟止〉。左右〈尔〉憂歎〈岐〉賜〈布〉間〈尔〉。大和國司言上〈多良久〉。掛畏〈岐〉御陵〈乃〉木〈乎〉陵守等數多〈久〉伐損〈利〉。依此〈天〉。旱災〈波〉所致〈奈留部之度〉申〈世利〉。此〈尔〉驚畏〈利天〉。御卜〈尔〉令問求〈尔〉。此事實〈奈良止〉卜申〈世利〉。是以。謹恐懼〈己止〉限量〈毛奈之〉。犯過〈留〉陵守。并能不巡檢〈留〉諸陵司等〈乎波〉。今任法〈尔〉勘〈倍〉賜〈比〉罪〈奈良倍〉賜〈波牟止須〉。此状〈乎〉參議正四位下行右衛門督兼讃岐守藤原朝臣良繩。散位從四位下秀世王等〈乎〉差使〈天〉。謝申〈天〉畏申〈尔〉奉出〈須〉。掛畏〈岐〉御陵平〈久〉聞食〈天〉。時〈毛〉換〈左須〉甘雨令零〈女〉賜〈比〉。國家無事〈久〉農稼無妨〈久〉矜惠〈比〉助賜〈波牟止〉恐〈美〉恐〈美毛〉申賜〈波久止〉申。』大於朱雀門前「前」如常。	木の祟り	
1215				九月辛未晦「日」。 大於 朱雀門前。	朱雀門前・大祓	
1216				十二月辛丑。大於朱雀門前。并大饗如常。	朱雀門前・大祓・饗	
1217	貞観9	867		正月壬寅朔。天皇 不受歳賀 。〈中略〉天皇御紫宸殿。宴于侍臣賜被。	廃朝・宴	
1218				正月戊申。天皇御紫宸殿。 觀青馬 。	青馬	
1219				正月丁巳。 踏歌 之。天皇御紫宸殿。賜宴侍臣。宮人 踏歌 如常。	踏歌	
1220				正月戊午。勅公卿。行 射礼 於建礼門前。	射礼	
1221				三月壬子。天皇 曲宴 皇太后於常寧殿。天皇稱觴奉壽。申之語。自旦訖暮。極歡而罷。太后去年十一月自東宮還此殿。新居可慶。故有此宴焉。	曲宴	
1222				四月壬申。平野祭如常。令豐後國 鎮謝火男火賣兩神 。兼轉讀大般若經。縁三池震動之怪也。	怪	
1223				七月壬戌。地震。天皇御紫宸殿。 觀相撲 。	相撲	
1224				八月壬申。延六十僧於紫宸殿。限以三日。轉讀大般若經。大宰府言。肥後國阿蘇郡正二位勳五等健磐竜命神。正四位下姫神所居山嶺。去五月十一日 夜奇光照耀。十二日朝震動乃崩 。廣五十許丈。長二百五十許丈。	怪	
1225				八月甲戌。下知大宰府。令豐後國 鎮謝神山崩之恠焉 。	怪・鎮謝	
1226				九月乙巳。 重陽 之。天皇御紫宸殿。宴於群臣。召文人。命樂賦詩。	重陽	
1227				十一月丙辰。天皇御紫宸殿。賜宴於群臣。 大歌五舞 如常儀。	五節舞	
1228				十二月乙未。大於朱雀門前。并大饗如常。	朱雀門・大祓・饗	
1229	貞観10	868		正月（戊子）丙申朔。天皇 不受朝賀 。七曜曆。藏氷様。腹赤魚。所司付内侍奏。帝御紫宸殿賜宴侍臣。	廃朝・宴	
1230				正月壬寅。天皇御紫宸殿。 覽青馬 。	青馬	
1231				正月辛亥。 踏歌 之。天皇御紫宸殿。宴于侍臣。宮人 踏歌 。	踏歌	
1232				正月壬子。天皇御建礼門。 觀大射之礼 。	射礼	
1233				正月癸丑。御射殿。覽四衛府 賭射 。	賭射	

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
1234				正月丙辰。内宴於仁壽殿。喚文人賦詩。 内教坊奏女樂。	仁壽殿・宴・内教坊	
1235				＜四月～十二月 地震頻発。＞	地震	
1236				十一月癸卯。 新嘗會 。遣親王公卿。就神嘉殿奉祭。	新嘗祭	
1237				十一月甲辰。天皇御紫宸殿。賜宴群臣。 大歌 五如常儀。	大歌・五節舞	
1238				十二月午晦。大并 大饗 如常。	饗	
1239	貞観11	869		正月己未朔。天皇 不受朝賀 。停賜宴侍臣之儀。	廃朝・停宴	喪中
1240				正月乙丑。天皇御紫宸殿。覽 青馬 。賜宴于群臣。奏女樂。	青馬・宴・奏樂	
1241				正月申戌。 踏歌 之節。天皇御紫宸殿。宴於侍臣。雅樂寮奏樂。宮人 踏歌 如常。	踏歌・宴・奏樂	
1242				正月乙亥。勅遣公卿於建礼門前。行 大射之礼 。	建礼門前・射礼	
1243				正月丙子。天皇御射殿。覽 踏射 。	射殿・踏射	
1244				九月癸亥。停 重陽 宴。以秋稼不登也。	重陽の節中止	秋稼なし
1245				十一丁卯。 新嘗祭 。	新嘗祭	
1246				十一月十五日戊辰。天皇御紫宸殿。賜宴群臣。 大歌五舞 如常。	大歌五舞	
1247				十二月癸丑。大於朱雀門前。并 大饗 如常。	朱雀門前・饗	
1248	貞観12	870		正月甲寅朔。天皇 不受朝賀 。宴群臣於紫宸殿。	廃朝・宴	
1249				正月庚申。天皇御紫宸殿。賜宴群臣。奉引 青馬 。奏女樂。	青馬・奏樂	
1250				正月己巳。地震。 踏歌 之。天皇不御紫宸殿。賜宴群臣。諸仗案列。開閤門。宮人 踏歌 。	踏歌・開閤門	
1251				正月庚午。勅公卿。於建礼門前行 大射之礼 。	射礼	
1252				正月辛未。天皇御 射殿 。覽四府 踏射 。	踏射	
1253				六月辛卯。自五月霖雨。至此未止。奉幣 賀茂 。 貴布祢神祈止雨 。	賀茂・貴布祢神祈止雨	
1254				九月丙辰。明日應遣使於伊勢大神宮。由是大於建礼門前。	建礼門前・大祓	
1255				九月戊午。 重陽 。天皇御紫宸殿。賜宴群臣。喚文人賦天錫難老詩。 内教坊奏女樂 。	重陽・紫宸殿・宴・奏樂	
1256				九月庚申（十一日）。去八日。内裏有 犬産穢 。仍停奉伊勢大神宮幣使。遣大舍人頭從五位上磯江王。神祇大副從五位下大中臣朝臣國雄。申事由。大於建礼門前而發之。	犬産穢・幣使を停止・建礼門前・大祓	
1257				十一月八日丙辰。先是九月十一日。内裏有 犬産穢 。 停奉幣伊勢大神宮使 。	犬産穢	前行の記事
1258				十一月丁卯。夜。天皇御神嘉殿。齋肅親奉 新嘗祭 。	新嘗祭	
1259				十一月戊辰。天皇御紫宸殿。賜宴群臣。 大歌五舞 如常。	大歌・五節舞	
1260				十二月丙午。（中略）大於朱雀門前。并 追饗 如常。	朱雀門前・大祓・饗	
1261	貞観13	871		正月戊申朔。天皇 不受朝賀 。依雨也。宴侍臣於紫宸殿。	廃朝・宴	
1262				正月甲寅。天皇御紫宸殿。覽 青馬 。賜宴群臣。 内教坊奏女樂 。	青馬・奏樂	
1263				正月癸亥。 踏歌 之。天皇御紫宸殿。賜宴侍臣。雅樂奏樂。宮人 踏歌 。	踏歌・奏樂	
1264				正月甲子。天皇御建礼門。觀 大射之礼 。	建礼門前・射礼	
1265				正月乙丑。天皇御 射殿 。觀四府 踏射 。	射殿・踏射	
1266				四月丁酉。停賀茂祭。 依有死穢也 。	死穢	祭停止
1267				五月戊申。去四月上申當平野祭。而觸人 死穢之人入於内裏 。仍以停焉。	死穢	祭停止
1268				七月壬申。天皇於綾綺殿前。覽 相撲 。	相撲	
1269				九月壬午。停 重陽 之。於宜陽殿西廂。賜菊酒侍臣。	重陽	服喪停止
1270				十一月十九日辛卯。停 新嘗會 。	新嘗祭	服喪停止
1271				十二月辛未。大朱雀門前。并 追饗 如常。	朱雀門前・大祓・饗	
1272	貞観14	872		正月壬申朔。天皇 不受朝賀 。	廃朝	
1273				正月戊寅。天皇不御紫宸殿。以停會也。召左右馬寮 青馬 各七疋於内殿前覽之。青馬及人並不裝飾。	青馬	不裝飾
1274				正月丁亥。停 踏歌 之。	踏歌	服喪停止
1275				正月戊子。不行 射礼 。	射	服喪停止
1276				正月辛卯。是月。京邑 咳造病發 。死亡者衆。人間言。渤海客來。異土毒氣之令然焉。是日。 大於 建礼門前以厭之。	伝染病・大祓	
1277				三月癸巳。今春以後。内外 頗見佐異 。由是。分遣使者諸神社奉幣。便於近社道場。每社轉讀金剛般若經。	怪	読経
1278				七月丁酉。是日。有宣旨。停 相撲 。	相撲	停止
1279				九月九日丙子。九日丙子。停 重陽 也。	重陽節会	停止
1280				九月十一日。不奉伊勢大神宮幣。以太政大臣薨也。 大於 建礼門前。	建礼門前・大祓	
1281				十一月己卯。修 新嘗祭 於神祇官。所司供祭如常。	新嘗祭	
1282				十二月丙寅。 大大饗 並如式。	大祓・饗	
1283	貞観15	873		正月卯朔。天皇 不受朝賀 。以雨後地濕也。（中略）天皇御紫宸殿。賜宴侍臣。停 雅樂寮音樂并吉野國栖風俗歌	廃朝・宴・雅樂寮・吉野國栖風俗歌	
1284				正月七日癸酉。天皇御紫宸殿。覽 青馬 。	青馬	
1285				正月壬午。停 歌 之。	踏歌停止	
1286				正月癸未。勅公卿於建礼門前行 射礼 。	建礼門前・射礼	

(表4) 『古事記』および「六国史」関連記事原文一覧

(表4)

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
1287				正月甲申。停 賭射 。	賭射停止	
1288				二月廿九日甲子。 大於 建礼門前。縁春宮廳院火也。	建礼門前・大祓	
1289				三月乙丑朔。三日丁卯。停御 潔齋 。以春宮 失火之穢 也。	穢	潔齋停止
1290				五月戊辰。停 端午之 。神祇官陰陽寮言。雨雹之恠。賀茂松尾等神 成崇 。	端午節・崇り	停止
1291				九月辛未。停 重陽 之。	重陽節会	停止
1292				十一己卯。天皇御神嘉殿。親供 新嘗祭 。礼畢還宮。	新嘗祭	
1293				十一月庚辰。天皇御紫宸殿。賜宴群臣。 五舞 如常。	紫宸殿・五節舞	
1294				十二月辛酉。 大大饗 如式。	大祓・饗	
1295	貞観16	874		正月壬戌朔。天皇 不受朝賀 。 雨後地濕 也。御紫宸殿宴于群臣。	廃朝・宴	庭湿
1296				正月戊辰。天皇御紫宸殿。 覽青馬 。賜宴群臣。奏女樂。	青馬・奏楽	
1297				正月丁丑。 踏歌 之。天皇御紫宸殿。賜宴群臣。雅樂奏樂。宮人 踏歌 如常儀。	踏歌・奏楽	
1298				正月戊寅。勅。公卿行 射礼 於建礼門前。	建礼門前・射礼	
1299				正月己卯。天皇御 射殿 。 覽諸衛賭射 。	射殿・賭射	
1300				二月甲辰。地震。十五日乙巳欲修魂饗祭而十二日皇太后宮 犬死 今日内裏 犬産 神祇官卜云園韓神今年春秋不祠仍 成崇	地震・犬死・犬産・崇り	
1301				三月庚午。麋鹿一入宮城内。於神祇官北門頭。有人捉得。以放 神泉苑 。	神泉苑	
1302				五月壬辰。停 端午 之。	端午節	停止
1303				七月甲寅。天皇御紫宸殿。 觀相撲 。	紫宸殿・相撲	
1304				八月庚辰。大風雨。折樹發屋。紫宸殿 前櫻 。東宮 紅梅 。侍從局 大梨 等樹木有名皆吹倒。内外官舍。人民居廬。	台風	櫻・紅梅・大梨
1305				九月甲午。停 重陽 之。於宜陽殿西廂。賜飲侍臣。	重陽節会停止	
1306				九月乙未。(中略)明日將發奉幣伊勢太神宮使。 以此穢故 。仍停廢焉。 大於 建礼門前。	穢れ・発遣停止・大祓	
1307				九月甲寅。 鷲集 紫宸殿前 庭沙上 。	鳥・庭沙	
1308				十一月癸卯。 修新嘗祭 於神祇官。公卿行事。	新嘗祭	
1309				十一月甲辰。宴群臣於紫宸殿。不卷御簾。 大歌五舞 如常儀。	大歌・五節舞	
1310				十二月甲申。 大大饗 如式。	饗	
1311	貞観17	875		正月乙酉朔。天皇 不受朝賀 。御紫宸殿簾中。引親王公卿於殿上。侍從侍於殿 庭幄座 。飲宴奏樂。	廃朝・宴・庭幄座	
1312				正月辛卯。(中略)天皇御紫宸殿。 覽青馬 。賜宴群臣。奏女樂如常儀。	紫宸殿・青馬奏楽	
1313				正月庚子。 踏歌 之。天皇御紫宸殿。賜宴侍臣。宮人 踏歌 如常儀。	踏歌	
1314				正月辛丑。於建礼門前行 射礼 。	建礼門前・射礼	
1315				正月壬寅。天皇御射殿。 覽四府賭射 。	射殿・賭射	
1316				二月癸未晦。地震。大於建礼門前。	建礼門前・大祓	
1317				六月甲子。分遣使者於十五大寺。轉讀大般若經。每寺新錢。或二貫。或三貫。祈雨也。 比日每夜有鼠跡。無万數 。滿兩京路。或自北向南。或入宮城。或出城外。	怪	
1318				六月丙寅。除目二人。屈六十僧於大極殿。限三箇日。轉讀大般若經。十五僧於 神泉 。修大雲輪請雨經法。並 祈雨 也。	神泉苑・祈雨	
1319				六月辛未。大宰府言。大鳥二集肥後國玉名郡倉上。向西鳴。 群鳥數百 。噬拔菊池郡倉舍葦草。	大宰府で怪	
1320				六月甲戌。不雨數旬。農民失業。轉經走幣。祈請佛神。猶未得嘉注。古老言曰。 神泉池中有神竜 。昔年炎旱。焦草礫石。決水乾池。發鍾鼓聲。應時雷雨。必然之驗也。於是勅遣右衛門權佐從五位上藤原朝臣遠經。率左右衛門府官人衛士等於神泉。決出池水。正五位下行雅樂頭紀朝臣有常諸樂人。泛竜舟陳鐘鼓。或歌或舞。聒聲震天。	神泉苑・祈雨	
1321				六月丁丑。自廿四日。迄今日。神泉 乾池 舉樂。晝夜不輟。至是賜樂人衛士等祿而罷焉。	神泉苑・祈雨・乾池	池干し
1322				七月丙午。霖雨不止。遣使大和國 丹生川上神社 。 奉幣白馬 。 祈止雨 也。	祈止雨	馬を奉幣する例
1323				八月戊午。(中略)是日。未漏上二刻。陰陽寮漏刻 鼓自鳴一聲 。	怪	
1324				九月戊子。 重陽 。天皇御紫宸殿。親王已下侍宴賦詩。奏樂如常。	重陽	
1325				十一月癸卯。令親王公卿於神嘉殿。行 新嘗祭 之事。	神嘉殿・新嘗祭	
1326				十一月甲辰日。宴群臣於紫宸殿。帝御簾中。親王公卿侍殿座。五位已上侍幄。 奏五舞 如常。	五節舞	
1327				十二月戊寅晦。大於朱雀門前。 大饗 。例也。	朱雀門前・大祓・饗	
1328	貞観18	876		正月己卯朔。天皇 不受朝賀 。雨也。春宮坊及所司獻卯杖。付内侍奏。賜宴侍臣於紫宸殿。雅樂寮奏樂。	廃朝・宴	
1329				正月乙酉。天皇御紫宸殿。 覽青馬 。宴「」群臣。奏女樂。如常儀。	紫宸殿・青馬奏楽	
1330				正月甲午。 踏歌 之。天皇御於紫宸殿。賜宴侍臣。宮人 踏歌 如常儀。	踏歌	
1331				正月乙未。於建礼門前。行六府射礼。春宮坊帶刀舍人依次射之。天皇不御。公卿行事。	建礼門前・射礼	公卿が代行

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
1332				正月丙申。停四府 踏射 。	踏射	停止
1333				二月乙卯。停大原野祭。以大膳觸 死穢也 。大於建礼門前。承前之例。有事故停春日大原野祭之時。不修大。辨官依神祇官解而行之。由是責神祇官。令進過状。	死穢・祭祀中止	過去に穢いをせず祭祀を行い責められた
1334				四月丁卯。於建礼門前修大。以大極殿火災也。	建礼門前・大祓	過日賀茂祭も中止
1335				五月辛巳。停 端午 之。	端午節停止	
1336				五月戊子。風起紫宸殿前。轉出脩明門。	紫宸殿前・つむじ風	
1337				六月丙辰。停月次并神今食祭。以 内裏有穢也 。大於建禮門前。	穢れ・祭祀停止・建礼門前・大祓	
1338				九月癸未。停 重陽 。於宜陽殿西廂。賜侍臣酒。	重陽節	停止
1339				十一月辛卯。 新嘗祭 。天皇不御。遣親王公卿於神嘉殿供事。壬辰十九日。於紫宸殿。賜宴群臣。 五舞 如常。	新嘗祭・五節舞	
1340				十二月壬申晦。(中略)是日。大於朱雀門前。并 追儺 一如舊儀。	朱雀門前・大祓・儺	
1341	元慶1	877	陽成	正月癸酉朔。乙亥三日。天皇即位於豐樂殿。	豐樂殿・即位	大極殿未成
1342				正月己卯。天皇御前殿。所司獻剛卯杖如舊儀。覽青馬。宴群臣。	青馬	
1343				正月戊子。 踏歌 之。天皇於前殿。賜宴侍臣。雅樂寮奏樂。宮人 踏歌 如常儀。賜祿有差。	踏歌	
1344				正月己丑。天皇御建礼門。 觀射礼 。	建礼門前・射礼	
1345				正月庚寅。停 踏射 。	踏射	停止
1346				二月癸卯朔。(中略) 園池正 正六位上春日朝臣宅成爲通事。	園池正	
1347				三月甲辰。皇帝潔齋奉燈如舊儀。後國獲 白鹿 一而獻之。雪白可愛。奉覽太上天皇。後放於 神泉 。	神泉苑	
1348				四月戊戌。天皇御武德殿。閱覽諸牧御馬。四府 騎射 。	武德殿・騎射	
1349				五月乙巳。 端午 之。天皇御武德殿。覽四府 騎射 。親王已下五位已上貢馬如常。	端午節・武德殿・騎射	
1350				五月丙午。天皇御武德殿。覽左右馬寮 競走馬 。	武德殿・走馬	
1351				七月壬寅。比月 炎旱 。神功皇后楯列 山陵成祟 。遣使巡檢。守喪儀倉者、於倉下、解鹿 喫肉 。百姓 伐取南北二陵樹木 三百卅二株。守倉人及諸陵官人科罪。	肉食伐木の祟り	
1352				七月己酉。引 神泉苑水 、漑灌城南民田、一日一夜。而水脈涸竭。是日。遣使於楯列山陵、 申謝伐木解鹿之祟 。	神泉苑・祟り・申謝	
1353				七月丙寅。天皇於綾綺殿、 觀覽相撲 。 大嘗会 行事奏。	綾綺殿・相撲・大嘗会	
1354				八月丁亥。是日、可行積糞之礼。大学寮 犬産成穢 。因而停止。	犬産穢れ・積糞	中止
1355				八月戊戌。 大祓 於朱雀門前。以資十一月可修 大嘗会 也。	朱雀門前・大祓	
1356				九月丁未。停 重陽節 。	重陽節	停止
1357				九月辛亥。遣使奉幣伊勢大神宮。去九日內裏犬産。仍十一日不行此事。故延而奉之。	犬産	穢れ・延期
1358				十一月癸丑。於建礼門前、修 大祓 是夜。	建礼門前・大祓	
1359				十一月乙卯。夜。天皇御豐樂院、自供 大嘗祭 。王公畢会。百官供奉如式。	大嘗会	
1360				十一月丙辰。悠紀国献物并奏 風俗歌舞 。	風俗歌舞	
1361				十一月丁巳。主基国献物。 風俗歌舞 一同悠紀。	風俗歌舞	
1362				十一月寅晦。 大祓 於朱雀門前。大嘗会祭祀解齋也。	朱雀門前・大祓	
1363				十二月丙申。 大祓追儺 如常。	大祓・追儺	
1364	元慶2	878		正月丁酉朔。天皇 不受朝賀 。(中略)宴侍臣於紫宸殿。雅樂寮奏樂。	廃朝・宴	
1365				正月癸卯。所司付内侍、献剛卯杖。天皇御紫宸殿、覽 青馬 。賜宴群臣、奏女樂。	紫宸殿・青馬・宴・奏樂	
1366				正月壬子。 踏歌 之節。天皇在御簾中、賜宴侍臣。雅樂寮奏樂。宮人 踏歌 如常儀。	踏歌・奏樂	
1367				正月癸丑。皇帝御建礼門、 觀射礼 。	建礼門前・射礼	
1368				二月癸巳。(中略)先是、越前国言。氣比大神宮祝部等申曰。神宮忽見火災、驚走入宮、実無失火。陰陽寮占云。為穢神社。 因現祟怪 。彼国須慎疫癘風水之災。是日。下知国宰、洒掃神宮、転説仏経。	怪・祟り・説経	
1369				六月己卯。有白 鷺 一双、飛闕紫宸殿前。其一下集殿庭版位側。	鳥	
1370				七月辛丑。授内膳司從四位下 庭火神 從四位上。	庭火神	叙位
1371				八月己丑。伊勢齋内親王、欲以明日入野宮。仍於建礼門前、修 大祓 。	建礼門前・大祓	
1372				八月辛卯。伊勢齋内親王、出而雅樂寮飯宮、 禊於鴨河 、即入野宮。	禊・賀茂川	伊勢齋王
1373				九月辛丑。 重陽 之節。天皇御紫宸殿、宴於群臣。喚文人賦詩。内教坊奏女樂。	重陽節	

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
1374				九月癸卯。大祓於建礼門前。昨日 弁官有人穢 、今日 不得免奉幣 伊勢太神宮使。故修此禊也。	穢れ・禊	奉幣中止
1375				九月辛酉。夜地震。是日。 関東諸国地大震裂 。相模武蔵特為尤甚。其後五六日、振動未止。公私屋舍、一無全者。或地窪陷、往還不通。百姓压死、不可勝記。	関東地方大地震	
1376				十月丙戌。左近衛左衛門左兵衛左馬等府寮献物。天皇御紫宸殿、王公侍宴。命酌奏楽、終日酣暢。日暮酒闌、公卿降殿、於 庭中歌舞 、（後略）	庭中歌舞	
1377				十一月壬子。停大原野祭。以去十七日 内裏犬死 也。	犬死	祭祀停止
1378				十一月乙卯。 新嘗祭 。天皇御神嘉殿、親以奉祭。	新嘗祭	
1379				十一月丙辰。天皇御紫宸殿、賜宴群臣。 五節 如常。	紫宸殿・五節舞	
1380				十二月壬申。月次神今食祭。 中院犬死 。仍天皇不御神嘉殿。	犬死	天皇不出御
1381				十二月甲寅晦。 大祓 於朱雀門間前、并 大饗 如常。	朱雀門前・大祓・饗	
1382	元慶3	879		正月辛卯朔。天皇 不受朝賀 。御紫宸殿、賜宴侍臣。	廢朝・宴	
1383				正月丁酉。天皇御紫宸殿、覽 青馬 。賜宴群臣、	紫宸殿・青馬	
1384				正月丙午。 踏歌 之節。天皇御紫宸殿（前殿？）、賜宴侍臣。雅楽寮奏楽、 宮妓踏歌 如常。	踏歌・宮妓	
1385				正月丁未。詔遣公卿於建礼門前、行 射礼 。	建礼門前・射礼	
1386				正月戊申。天皇御射殿、觀四府 賭射 。	射殿・賭射	
1387				二月辛酉朔。四日甲子。停祈年祭。以 左馬寮牛死 也。	牛死	祭祀停止
1388				五月甲午。停 端午之節 焉。	端午節	停止
1389				七月乙卯。於仁寿殿東庭、覽左右 相撲 人等。但不令角力。	仁寿殿東庭・相撲	取組みなし
1390				九月乙未。 大祓 於朱雀門前。以明日伊勢斎内親王可進発也。	朱雀門前・大祓	
1391				九月丙申。伊勢斎内親王入斎宮。是日。早朝、臨 葛野河 、以 修禊 事。（中略）是日、停 重陽 之節。不賜侍臣菊酒也。	河・禊・重陽節	斎王停止
1392				十月甲子。 大極殿成 。右大臣設宴於朝堂院含章堂。鬱落也。饗預作事四位已下雑工已上及飛騨工等。親王公卿、百寮群臣畢会。喚大学文章生等、礼賦詩。雅楽寮举音楽。楽■一曲之間、飛騨工等廿許人、不任感悦、起座、拍手歌舞。合座大為咲楽。	大極殿・雅楽寮	殿落成饗宴の様子
1393				十一月己卯。天皇御神嘉殿、親奉 新嘗祭 。	神嘉殿・新嘗祭	
1394				十二月甲寅晦。 大祓追饗 如常。	大祓・饗	
1395	元慶4	880		正月乙卯朔。天皇 不受朝賀 。（中略）天皇御紫宸殿、賜宴侍臣。雅楽寮奏音楽、宴竟賜被。	廢朝・宴	
1396				—		
1397				正月辛酉。天皇、紫宸殿に御して 青馬 を覽給ひき。宴を群臣に賜ひ、女楽を奏し、祿を賜ふこと差有りき。	青馬	データなし、テキスト引用
1398				正月庚午。 踏歌 之節。天皇御紫宸殿、賜宴侍臣。雅楽寮奏楽。宮妓踏歌如常儀。	踏歌	
1399				正月辛未。天皇、建禮門に御して、六府の 射禮 を觀給ひき。	建礼門前・射礼	データなし、テキスト引用
1400				正月壬申。天皇御射殿、覽四府 賭射 。	射殿・賭射	
1401				二月乙未。卯時。天東 空中有声 。一声而止。	空中に声	
1402				二月辛丑。内裏 犬産之穢 。延及所司。仍停園韓神祭。	犬産穢れ	祭祀停止
1403				五月乙亥。自廿日大雨。漸没苗稼。由是、於 神泉苑 、修灌頂經法。限以三日。 祈止雨 也。	神泉苑・祈止雨	
1404				六月癸巳。月次神今食祭。天皇不御神嘉殿。所司於神祇官行事。先是、弁官有 犬死穢故 也。	犬死穢れ	天皇不御
1405				六月乙巳。右兵庫寮中央 兵庫自鳴 。	怪	
1406				六月壬子。 大祓 朱雀門前。（日本紀略）	朱雀門前・大祓	
1407				七月庚辰。御仁寿殿覽 相撲 。	仁寿殿・相撲	
1408				七月辛巳晦。御仁寿殿覽 相撲 。左右近衛府、遞奏音楽。散楽雑伎各尽其能。	仁寿殿・相撲	
1409				九月庚申。 重陽 之節、天皇御紫宸殿、賜宴群臣。喚文人等賦詩。内教坊奏女楽及賜祿如常。	重陽節	
1410				九月壬戌。 禁中犬死 。仍不免奉伊勢大神宮幣使。大祓於建礼門前。	犬死	奉幣中止
1411				十月癸卯。天皇御紫宸殿。右近衛・右兵衛・右衛門・右馬等三府一寮献物。五月六日 競走馬之輸物 なり。親王公卿並侍。举觴無■算）、奏楽尽態。向暮王公降殿、列坐階前、楽飲歌舞、極酔而罷。賜祿各有差。	競走馬・輸物 (キリウマ・マケリサ)	負態 (マケリサ)
1412				十一月丙寅。停鎮魂祭。以有禁省 犬産穢 也。	犬産穢れ	祭祀停止
1413				十一月丁卯。新嘗「会」祭。天皇負不御神嘉殿。公卿向神祇官奉祭。以 内裏犬産穢 也。	新嘗祭・犬産穢れ	天皇不御
1414				十一月戊辰。天皇御紫宸殿、賜宴群臣。 大歌五節舞 如常。	紫宸殿・大歌五節舞	
1415				十二月戊戌。先是、自太上天皇崩、公卿於伏下聽弁官政。是日。就太政官候庁。〈謂外記庁也。〉聽常政。戌時、 天有声二度 。地亦震動。（類聚国史・日本紀略）	太上天皇崩御・空中に声	
1416				十二月己酉。 大祓追饗 如常	大祓・饗	

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
1417	元慶5	881		正月庚戌朔。天皇 不授朝賀 。諒闇也。	廃朝	諒闇
1418				正月丙寅。停 射礼 。	射礼	停止
1419				正月丁卯。停 賭射 。諒闇也	賭射	停止
1420				正月丁丑。(中略)是月。諸衛陣多恠異。右近衛陣、大將以下將曹已上座、 狐頻遺尿 。府掌下毛野安世宿侍陣座狐溺其上。左近衛府生佐伯安雄餽胡禄等緒、 有鼠嚙 断而将去。近衛笠吉人胡禄緒、為狐所嚙去。人驚而引之。狐猶不放、遂嚙断而将去。 左兵衛陣有狐 、嚙所納之劍而遁走。兵衛等追得取留。右兵衛陣肝腎劍胡■等緒、 數為鼠所嚙 。又東京一条兒童數百会聚、相闘作戰陣之法、若成人之為也。	怪異	
1421				二月辛巳。地震。是日。於建礼門前修 大祓 。(類聚国史・日本紀略)	建礼門前・大祓	
1422				六月丙午。 大祓 。(日本紀略)	大祓	
1423				九月甲寅。停 重陽 之節。諒闇也。	重陽節	停止
1424				十二月己卯晦。(日本紀略)。 大祓追儺 如常。	大祓・儺	
1425	元慶6	882		正月甲辰朔。烈風大雨雪、平地二尺。天皇 不受朝賀 。	廃朝	
1426				正月庚戌。天皇御紫宸殿、賜宴群臣、覽 青馬 。奏女樂如常儀。	青馬	
1427				正月己未。 踏歌 之節。天皇御紫宸殿、賜宴侍臣。雅樂奏音樂。宮人 踏歌 如常。	踏歌	
1428				正月庚申。於建礼門前、行 射礼 。	建礼門前・射礼	
1429				正月辛酉。天皇、射殿に御して、四府の 賭射 を覧給ひき。	射殿・賭射	データなし、テキスト引用
1430				二月辛丑。天皇於弘徽殿前、覽 闘鶏 。	弘徽殿前・闘鶏	(とりあわせ)
1431				三月己巳。(中略)雅樂寮陳鼓鐘、童子十八人、遁出舞殿前。先宴、廿許日、扨取五位以上、有容貌者、於左兵衛府習 舞 也。貞教親王、舞陵王。上下觀者、感而垂淚。(後略)	(清涼殿)・舞	舞に感涙
1432				四月甲午。於朱雀門前前、修大祓。去八日大膳職人死、十日 大藏省人死 。平野・松尾・賀茂等祭停止故也。臨時大祓於建礼門前行之。 因穢不可用大藏省幄 。仍用朱雀門前也。	朱雀門前・大祓	役人死・祭祀停止・幄も使用不可
1433				五月丙午。 端午 之節、如常。天皇御武德殿、觀四府 騎射 、	武德殿・騎射	
1434				五月丁未。天皇御同殿(武德殿)、觀左右馬寮 競走馬 、諸衛馬上 雜芸 。	競走馬・馬上雜芸	
1435				六月壬午。月次神今食祭並於神祇官行事。天皇不御神嘉殿。以今月六日、 内裏犬死 也。	犬死	天皇不御
1436				六月庚子晦。朱雀門前前 大祓 。(日本紀略)	朱雀門前・大祓	
1437				七月己巳。天皇御紫宸殿、覽 相撲 。	紫宸殿・相撲	
1438				七月庚午。天皇御紫宸殿、覽 相撲 。左右司通奏音樂。	紫宸殿・相撲・奏樂	
1439				閏七月癸酉。天皇御紫宸殿、覽左右 相撲人 。即令 相撲 。左右司奏音樂、如前日儀。	相撲・奏樂	
1440				九月戊寅。 重陽 之節。天皇御前殿、賜宴侍臣。(『類聚国史』七四九月九日・『日本紀略』御紫宸殿)菊花酒。(『類聚国史』七四九月九日・『日本紀略』喚文人賦詩。)奏女樂。文人賦詩。(『類聚国史』七四九月九日。如常日暮)	重陽節	
1441				十一月辛卯。 新嘗祭 。天皇不御神嘉殿。親王公卿向神祇官行事。所司供奉如常。	新嘗祭	
1442				十一月壬辰。天皇御紫宸殿、賜宴侍臣。 五節舞 如常儀。	五節舞	
1443				十二月丁卯晦。於朱雀門前大祓及 追儺 、如常。	朱雀門前・大祓・儺	
1444	元慶7	883		正月戊申朔。天皇 不從朝賀 。雨也。(中略)御紫宸殿、宴於侍臣。雅樂寮奏音樂。	廃朝・宴	
1445				正月甲戌。天皇御紫宸殿、覽 青馬 。賜宴群臣、奏女樂。	青馬	
1446				正月癸未。 踏歌 之節。於紫宸殿、宴于侍臣。雅樂寮奏音樂。宮人 踏歌 於殿上。	踏歌	
1447				正月甲申。勅公卿、於豐樂院、行 射礼 。	豐樂院・射礼	
1448				正月乙丑。停 賭射 。	賭射	停止
1449				四月癸亥。天皇御武德殿、觀覽諸 牧駒 。諸衛 騎射 。	武德殿・騎射	
1450				五月戊辰。天皇御豐樂殿、賜宴 渤海客徒 。親王已下參議已上侍殿上、五位已上侍顯陽堂。大使已下廿人侍承歡堂。百官六位已下相分侍觀德・明義兩堂。授大使文籍院少監正四品賜紫金魚袋裴■從三位、副詞正五品賜緋銀魚袋高周封正四位下、判官録事授五位。其次叙六位。已下有等級。隨其位階賜朝衣。客徒拌舞退出。更衣而入、拌舞昇堂就食。雅樂寮陳鼓鐘、内教坊奏女樂。妓女百四十八人、遁出舞。酒及數杯、別賜御余枇杷故銀■。大使已下起座拌受。日暮、賜客徒禄有差。	豐樂殿・宴	渤海使節の宴の次第
1451				五月五日庚午。天皇御武德殿、覽四府 騎射 及五位已上貢馬。喚渤海客徒觀之。	武德殿・騎射	
1452				五月辛未。天皇御武德殿、觀左右馬寮 競走馬 。及四府 馬芸 。	武德殿・競走馬・馬芸	
1453				六月乙巳。於神祇官、修月次神今食祭如常。天皇不御神嘉殿。以 内裏犬死 也。	犬死	天皇不御

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
1454				七月壬辰。天皇御紫宸殿、於簾中觀 相撲 。親王公卿侍殿南廂。左右司通奏音楽。	相撲・奏楽	
1455				八月乙卯。 大祓 於建礼門前。	建礼門前・大祓	
1456				八月丁巳。伊勢斎掲子内親王、臨 鴨河修禊 。便入野宮。	川・禊	
1457				九月壬申。 重陽 之節。天皇御紫宸殿、賜群臣菊花酒。奏女楽、文人賦詩。	重陽節	
1458				十一月己卯。停 新嘗祭 。於建礼門前、修 大祓 。以 内裏人死 、諸祀停廢也。	新嘗祭・建礼門前・大祓・人死	祭停止
1459				十二月癸卯。停月次神今食祭、 大祓 於建礼門前。從四位上行山城權守恒基王卒。	建礼門前・大祓・人死	
1460				十二月壬戌。朱雀門前 大祓 并 追儺 如常。	朱雀門前・大祓・儺	
1461	元慶8	884		正月癸亥朔。天皇 不受朝賀 。雪也。御紫宸殿、賜宴侍臣。雅楽寮奏音楽、如常儀。	廃朝・宴	
1462				正月己巳。宴群臣於紫宸殿。左右馬寮奉引 青馬 。天皇不臨御。	青馬	天皇不御
1463				正月戊寅。 踏歌 之節。於紫宸殿、賜宴侍臣。天皇不臨御。雅楽寮奏楽、宮人 踏歌 。	踏歌	天皇不御
1464				正月己卯。於建礼門前、行 射礼 。帝不臨御、公卿行事。	建礼門前・射礼	天皇不御
1465				正月庚辰。停 踏射 。	踏射	停止
1466				二月丙申。親王公卿引文武百官、奉迎天皇。即日鸞輿入御東宮。		光孝天皇即位
1467				二月己酉。 大祓 於建礼門前。	建礼門前・大祓	
1468				三月丙寅。喚左右馬寮十列 細馬 於仁寿殿 東庭 覽之。	仁寿殿・東庭	細馬（よきうま）
1469				五月甲子。 端午 之節。天皇御武徳殿、觀覽四府 騎射 及五位已上貢馬。	端午節・武徳殿・騎射	
1470				五月乙丑。天皇御武徳殿、觀覽左右 競走馬 ・四府武芸。	武徳殿・競走馬・武芸	
1471				六月戊午晦（『類聚国史』・『日本紀略』）地震。」（『日本紀略』） 大祓 於朱雀門前。	地震・朱雀門前・大祓	
1472				七月丁亥。天皇御紫宸殿、觀覽 相撲 。不改閣門、親王公卿侍殿上、侍從侍宜陽殿西廂。 相撲 既訖、左右近衛奏音楽。	相撲・奏楽	
1473				七月戊子。天皇御紫宸殿、覽 相撲 。	相撲	
1474				八月甲午。天皇御仁寿殿、 覽弄玉童 於庭。左近衛府奏音声。	仁寿殿庭・童	
1475				八月丁巳晦。以平朝臣等子為女御。「於朱雀門前 大祓 。以可修 大嘗会 也。（『日本紀略』）」	朱雀門前・大祓・大嘗会	
1476				九月丙寅。 重陽 之節。天皇御紫宸殿、賜宴群臣、喚文人賦詩。内教坊奏女楽。	重陽節・紫宸殿・奏楽	
1477				十一月己卯。天皇御朝堂院、親奉大嘗祭。先御 悠紀殿 、後御 主基殿 。（後略）	大嘗祭	
1478				十一月庚辰。未鷄鳴、大嘗宮祭礼既訖。天皇幸 豊楽殿 。巳時、御悠紀帳、賜宴群臣、悠紀国献物。未時、移御主基帳。群臣移執主基座。主基国奏 風俗歌舞 。日暮、以 悠紀国献物衣被 、賜親王已下五位已上。諸有雜怠及内外文武官未得解者、皆預焉。是夜、天皇留豊楽殿後房。文武百官侍宿。親王已下参議已上、侍御在所。 琴歌神宴 、 徹夜飲楽 、賜御被。	大嘗祭	
1479				十一月辛巳。巳時、天皇御悠紀帳、賜宴群臣、主基国献物。未時、移御主基帳、群臣移座。及 主基国奏風俗歌舞 、賜主基国所献衣被、一如昨日儀。是夜、天皇留御、王公以下百官、侍宿亦如昨。	大嘗祭	
1480				十一月壬午。鉄撤去悠紀主基両帳。天皇御豊楽殿廂、宴百官。多氏奏 田舞 。伴佐伯宿祢両氏奏 久米舞 。安部氏 吉志舞 。内舍人 倭舞 。 入夜 、宮人 五節舞 、並如旧儀。（後略）	大嘗祭	
1481				十二月丙辰。朱雀門前 大祓 。公卿行事。夜、天皇御紫宸殿、 追儺 如旧儀。	朱雀門前・大祓・儺	
1482	仁和1	885		正月丁巳朔。天皇御大極殿、受朝賀。（中略）是日、 奏於庭 焉。礼畢鸞輿還宮。宴侍臣於紫宸殿。雅楽寮奏音楽、如旧儀。宴享賜被。	大極殿・朝賀・庭	奏楽
1483				正月癸亥。天皇御紫宸殿、覽 青馬 。賜宴群臣、奏女楽、如儀。	青馬	
1484				正月壬申。 踏歌 之節。天皇御紫宸殿、賜宴侍臣。宮人 踏歌 如常。	踏歌	
1485				正月癸酉。天皇御建礼門、觀 射礼 。	建礼門前・射礼	
1486				正月甲戌。天皇御射殿、觀覽四府 踏射 。	射殿・踏射	
1487				四月甲子。是日、賀茂斎内親王、擬 祓河辺 、便入紫野院。今月八日、弁官 有人死穢 。因而停止、於建礼門前 大祓 。	河辺・祓・死穢・建礼門前	停止
1488				四月癸酉。停賀茂祭、縁 有人死穢 。	死穢	祭祀停止
1489				四月壬午。天皇御武徳殿、觀覽諸 牧御馬 諸衛 騎射 。	武徳殿・騎射	
1490				五月己丑。 端午 之節。天皇御武徳殿、飲四府 騎射 。	武徳殿・騎射	
1491				五月庚寅。天皇御武徳殿、觀左右馬寮 競走馬 、及四府 馬上雜芸 。	武徳殿・競走馬・馬上雜芸	
1492				六月壬午晦。 大祓 於朱雀門前。例也。	朱雀門前・大祓	
1493				七月丁未。天皇御紫宸殿、觀覽 相撲 。左右近衛府奏楽。	相撲	

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
1494				七月戊申。天皇御紫宸殿、觀覽 相撲 、如昨儀。	相撲	
1495				八月丁卯。行幸 神泉苑 。先御釣台、觀魚下網、所獲數百。	神泉苑	
1496				九月庚寅。 重陽 之節。天皇御紫宸殿、賜宴侍臣、喚文人賦詩。教坊奏女樂、如常儀。	重陽節	
1497				九月十丁酉。（中略）是日。於建礼門前 大祓 。	建礼門前・大祓	
1498				十月甲戌。天皇御紫宸殿。右近衛・右衛門・右兵衛三府并右馬寮獻物。是、去五月六日、武德殿前競走馬之 輪物 也。諸親王及太政大臣已下、出居侍從已上、侍殿上。 奏音樂種種散樂 。日暮、親王已下降殿、於 玉階前奏神樂 。 歌舞極敏 。喚諸衛官人内堅等、 能歌者預之 。賜次侍從已上祿、各有差。	輪物（まけわざ、負態）・神樂	
1499				十一月丙戌。天皇御射殿。太政大臣獻物。親王公卿並侍。及于日暮、結棚 賭射 。太政大臣、獻新錢四十貫、 為賭物 。酒酣、皇帝御衣一襲、賜太政大臣。拌舞起座、脱却常服、着御衣、入就座。譙樂畢景、夜分方罷。	射殿・賭射	
1500				十一庚寅。定左右近衛・左右衛門・左右兵衛等府所送積奠祭牲。其一。応送進鮮牲事。檢太政官去延暦十二年五月十一日格云。 祭礼之事、潔淨為本 。亦割牲体、明在 礼法 。然而、頃年諸国進牲、既以割穢供礼、積奠多乖礼制。須並用全体、令進 祭庭 。	祭礼・潔淨・礼法・祭庭	供物に関する通達まつりのにわ
1501				十一月辛丑。「(『日本紀略』)園韓神祭。」是日。勅遣散位從六位上大中臣朝臣罕雄、判官一人、主典一人、造伊勢大神宮。拋式、廿年一度改作。去貞觀十「一」年修造、其後十八年于茲矣。」去六月廿一日、出羽国秋田城中及飽海郡神宮寺西浜、雨石鏃。陰陽寮言。当有凶狄陰謀兵乱之事。神祇官言。彼国飽海郡大物忌神・月山神、田川郡由豆佐乃壳神、俱成此 怪 。 崇在不敬 。勅、令国宰恭祀諸神、兼慎警固。	怪・祟り	
1502				十一月癸卯。夜、天皇御神嘉殿、親供新嘗祭、如常。	新嘗祭	
1503				十一月甲辰。天皇義由寢殿、賜宴群臣。奏大歌五節舞如常儀。	五節舞	
1504				十二月丁巳。天皇幸神泉苑、放鷹弘水禽。	神泉苑	
1505				十二月庚午。天皇御建礼門、班荷前幣諸山陵墓、如常儀。巳時、天東南有聲。如高樓壞落。 夜分地震。有聲如雷 。	地震・空中に声	
1506				十二月庚辰。朱雀門前 大祓 并 追儺 如常。	朱雀門前・大祓・儺	
1507	仁和2	886		正月辛辛巳朔。天皇御大極殿、受朝賀如常儀。礼畢御紫宸殿、賜宴侍臣。雅樂寮奏樂。	朝賀・宴・奏樂	
1508				正月丁亥。天皇御紫宸殿、賜宴群臣、觀覽 青馬 。奏女樂、賜祿如常儀。	青馬	
1509				正月丙申。 踏歌 之節、天皇御紫宸殿、宴于侍臣。宮人 踏歌 、賜祿如常。	踏歌	
1510				正月丁酉。天皇御建礼門、觀 射礼 。	建礼門前・射礼	
1511				正月戊戌。帝御射殿覽四府 賭射 。日暮帝 射 。	射殿・賭射	
1512				四月乙卯。 大祓 於建礼門前。以去三日有死人穢也。	建礼門前・大祓・人死・穢れ	
1513				四月丙子。天皇御武德殿、閱覽諸牧御馬。	武德殿・御馬	
1514				五月甲申。天皇御武德殿、觀覽左右馬寮 競走馬 、及四府種種 馬芸 。	武德殿・競走馬・馬芸	
1515				五月甲辰。降雨、 天東南有聲 、如雷。是日。山城国石清水八幡大菩薩官自鳴、 如擊鼓聲 。南樓鳴、如風波相激成聲。經數剋而不停。神祇官卜云。大菩薩心有所願。陰陽寮占云。可警兵事。	空中に声・石清水八幡に怪	兵事を戒むべし
1516				六月癸酉。任相撲司。（後略）	相撲司（すまいのつかさ）	左司12人、右司12人
1517				六月甲戌。勅、以三品行中務卿 貞保親王 、為 右相撲司別当 。去元慶八年、以二品行式部卿 本康親王 、為 左相撲司別当 、今不改。	親王・相撲司別当	
1518				六月丁丑晦。 大祓 於朱雀門前如常。	朱雀門前・大祓	
1519				七月壬寅。天皇御紫宸殿、觀 相撲 。	相撲	
1520				七月癸卯。天皇御紫宸殿、觀 相撲 。左右司、遞奏音樂。日暮雜樂競作。	相撲・奏樂	
1521				七月甲辰。天皇御紫宸殿、閱覽左右相撲人等形体訖。較量強弱、召合令 相撲 。日暮右近衛府奏樂。	相撲・奏樂	天皇が取り組みを決める
1522				七月丙午。夜亥時、紫宸殿前、有長人往還徘徊。内堅殿点者見之、惶怖失神。右近衛陣前燃炬者、又復得見。其後左近衛陣辺、有如絞者之聲。世謂之 鬼絞 也。	鬼	
1523				八月辛酉。天皇幸 神泉苑 觀魚。	神泉苑・魚	
1524				八月乙亥日。 大祓 於朱雀門前前。以齋内親王来月応入伊勢大神宮也。	朱雀門前・大祓	
1525				九月庚辰。停齋内親王行 禊 之事。以去二日 中務省犬死穢 、未滿忌限也。	犬死穢れ・齋王禊	禊停止
1526				九月壬午。齋内親王、今日 修禊葛野河 。	禊・河	
1527				九月甲申。 重陽 之節。天皇御紫宸殿、宴于群臣。奏樂賦詩如常。	重陽節	

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
1528				九月丙戌。奉伊勢神宮例幣之使、是日可初。去七日有 犬斃穢 。因停止、亦不廢務。午時地震。」自亥至子、有 大鈴声 。当左仗上、鳴於空中。寅時亦鳴焉。	地震・犬死穢・空中に声	奉幣停止
1529				九月丁亥。為發遣奉伊勢大神宮幣使、天皇欲御大極殿、有人奏聞、 画所犬死 。於是、太政大臣及諸公卿議曰。画所者、在宮門左右衛門陣之内。若当行神事、 諸司有穢 、立札於衛門陣、告知事由、不聽出入、為潔禁中也。依此論之、可謂禁中穢也。仍不臨御。即便遣中納言從三位藤原山陰、於建春門陣外、召散位從五位下幸世王、授告文令發行。其告文取太政大臣里第紙、召在外之内記令書之。在局紙并内記、居禁中、染穢故也。	犬死穢	禁中の穢対策
1530				十月丁未。天皇御紫宸殿、賜宴侍臣。太政大臣及參議已上並侍殿座。 六府奏番上簿於庭 。右近衛府進奏音楽。	紫宸殿・宴・奏番上の簿・庭	
1531				十月甲寅。令陰陽寮、於承明門前、修祭祀。攘邪氣也。	承明門前・祭祀	
1532				十一月丙子朔。天皇御紫宸殿、中務省率陰陽寮官人曆博士等、 於庭奏進御曆 。六府奏番上簿。	庭・奏曆	
1533				十一月辛卯。天皇御神嘉殿、親奉 新嘗祭 。	神嘉殿・新嘗祭	
1534				十一月壬辰。天皇御紫宸殿、賜宴侍臣。 奏大歌五節■ 。	大歌五節舞	
1535				十二月己巳。行幸 神泉苑 觀魚。放鷹隼、令擊水鳥。自彼便幸北野從禽。御右近衛府馬埒庭、令馳走左右馬寮御馬。	神泉苑・御右近衛府馬埒庭	
1536				十二月甲戌。 大祓追儺 如常。	大祓・儺	
1537	仁和3	887		正月乙亥朔。 廢朝 。雨也。天皇御紫宸殿、賜宴侍臣。雅樂寮奏音楽。（中略）是日。七曜御曆、蔵氷様、腹赤御賀等、諸司附内侍所奏。 緣雨湿、不奏於庭 。	廢朝・宴・不奏・雨	庭が濡れていたため
1538				正月辛巳。天皇御紫宸殿、賜宴侍臣、觀覽 青馬 。奏女樂。	青馬	
1539				正月庚寅。 踏歌 之節、天皇御紫宸殿、宴于侍臣。王公並侍。雅樂寮奏樂、宮人 踏歌 。	踏歌	
1540				正月辛卯。天皇御建礼門、觀 射礼 。	建礼門前・射礼	
1541				正月壬辰。詔、遣參議藤原朝臣国經、尽昨余未射者。天皇御射殿、覽四府 賭射 。	射殿・賭射	
1542				五月戊寅。 端午 之節、天皇御武德殿、觀覽四府 騎射 。	端午節・武德殿・騎射	
1543				五月己卯。天皇御武德殿、覽左右馬寮 競走馬 。四府 騎射 、種種 馬芸 。	武德殿・競走馬・騎射・馬芸	
1544				六月癸丑。禁中有孕婦胎 傷穢 。由是、停月次神今食祭焉。	穢れ・祭祀停止	
1545				六月丁卯。任 相撲司 。（後略）	相撲司（すまいのつかさ）	左司12人、右司12人
1546				六月辛未晦。（中略）於朱雀門前 大祓 如常。	朱雀門前・大祓	
1547				七月丁丑。（中略）是日。綾綺・仁寿兩殿之間、獲白龜一、放 神泉苑 。	放龜・神泉苑	
1548				七月丙申。天皇御紫宸殿、覽 相撲 。	相撲	
1549				七月丁酉。天皇御紫宸殿、覽 相撲 。左右司通送音楽。光景既暮、雜樂備拵。	相撲・音楽・雜樂	
1550				七月戊戌。天皇御紫宸殿、閱覽左右 相撲 人体骨強弱之形。其後、扨拔喚其名、令角撲焉。	相撲	天皇が取り組みを決める
1551				七月辛丑。申時、 地大震動 、經歷数剋震猶不止。天皇出仁寿殿、御紫宸殿南庭。命大藏省、立七丈輦二、為御在所。諸司倉屋及東西京廬舍、往往顛覆、圧殺者衆。有失神頓死者。亥時又震三度。五畿内七道諸国、同日大震。官舍多損、 海潮漲陸、溺死者不可勝計 。其中摂津国尤甚。 夜中東西有聲 、如雷者二。	地震東西声あり	大地震・津波八月まで余震続く
1552				八月戊午。今夜亥時、或人告。行人云。武德殿東縁松原西、有美婦人三人、向東步行。有男在松樹下、容色端麗、出来与一婦人、携手相語。婦人精感、共依樹下。数剋之間、音語不聞。驚恠見之、其婦人手足、折落在地、无其身首。右兵衛右衛門陣宿侍者、聞此語往見、无有其屍。所在之人、忽然消失。時人以為、 鬼物變形、行此屠殺 。又明日可修輓經之事。仍諸寺衆僧被請、來宿朝堂院東西廊。夜中不覺聞騷動之声、僧侶競出房外。須臾事靜、各問其由、不知因何出房。彼此相恠云。是自然而然也。」是月。宮中及京師、有如此不根之妖語、在人口卅六種、不能委載焉。	怪・京中及び京師に妖語	
1553				八月己未。延宿德名僧百口於紫宸大極兩殿、 転読大般若經 。限三個日、 攘災異祈年數 也。	転読大般若經・攘災異祈年殺	
1554				八月辛酉。自卯及酉、 大風雨 、拔樹斃屋。東西京中、居人廬舍、顛倒甚多、被圧殺者衆矣。（中略）鴨水葛野河、洪波氾溢、人馬不通。	台風・鴨水葛野河氾溢	台風

(表4) 『古事記』および「六国史」関連記事原文一覧

(表4)

No	和暦	西暦	天皇	原文データ	キーワード	備考
1555				八月丁卯。(中略)是日、巳二刻。 天皇崩 於仁寿殿。于時春秋五十八。	崩御	光孝天皇崩御/宇多天皇踐祚
				日本三代実録 六国史 了		

(表5) 庭園の中島の形状比較 (単位m)

庭園・遺構名称	幅－1	幅－2	幅①	高さ②	比 (① : ②)	摘要
飛鳥京跡苑池遺構			トンボ型で築山不可能			写真判定
平城宮東院庭園	10.00	4.65	7.33 (平均)	0.50	1 : 0.06	『古代庭園研究Ⅰ』 p. 345
平等院庭園				ほぼ水面		写真判定
鳥羽離宮庭園 (北殿) -1			18.00 (最大)	1.00	1 : 0.06	『平安京提要』 p. 558
鳥羽離宮庭園 (北殿) -2	42.00 (東西最大)		15.00 (南北最大)	1.10	1 : 0.07	『平安京提要』 p. 558
毛越寺庭園 (池中立石)	14.50	10.00	12.30 (平均)	3.50	1 : 0.28	発掘調査報告書の図面を計測
毛越寺庭園 (中島Ⅰ期目)	35.00	21.00	28.00 (平均)	1.30	1 : 0.05	発掘調査報告書の図面を計測
正倉院南倉蔵「仮山」	0.87	0.45	0.66 (平均)	0.31	1 : 0.46	宮内庁正倉院宝物資料より

(表6) 『古事記』にみる島と國と名

島名	國名	名
さわけの 狭別島（淡路島）		
いよ ふたなの 伊豫の二名島（四国）	いよの 伊豫國	え ひ め 愛比賣
	さぬきの 讃岐國	いはりひ こ 飯依比古
	あわの 粟國	おお つ ひ め 大げ都比賣
	とさの 土佐國	たけよわけ 建依別
おき みつごの 隠伎の三子島（隠岐）		あめのおしころわけ 天之忍許呂別
つくしの 筑紫島（九州）	ちくしの 筑紫國	しろひわけ 白日別
	とよ 豊國	とよひわけ 豊日別
	ひの 肥國	たけひむかひとよくじひねわけ 建日向日豊久土比泥別
	くまそ 熊曾國	たけひわけ 建日別
いきのしま 伊伎島（壹岐）		あめひとつばしら 天比登都柱
つ 津島（対馬）		あめのさでよりひめ 天之狭手依比賣
さどの 佐渡島（佐渡島）		
おおやまよあきづしま 大倭豊秋津島（畿内）		あまみ そらとよあきづねわけ 天御虚空豊秋津根別
おおやしまぐに 大八島國（上記の八島）		
きひのこじま 吉備兒島（兒島半島）		たけひかたわけ 建日方別
あづきしま 小豆島（小豆島）		おおのでひめ 大野手比賣
ひめじま 女島（姫島か）		あめひとね 天一根
ちかの 知訶島（五島列島）		あめのおしお 天之忍男
ふたごの 兩兒島（長崎県男女群島）		あめふたや 天兩屋
あきづしま あきつしま 蜻蛉島、秋津洲（日本列島）	倭の國	
おおやしま 大八洲（日本列島）	倭の國	生島神・足島神（一対）＊

参考文献：倉野憲司校注『古事記』岩波書店、1991年

＊「生島これ大八洲靈」『古語拾遺』807年成立

(表7) 聖武天皇と東院庭園関連年表

西暦/ 和暦		聖武天皇の難波への行幸歴	後期難波宮	平城宮 東院庭園
710	和同3	平城遷都		前期
720	養老4頃			
724	神亀元	聖武天皇即位		
725	神亀2	大嘗祭、難波に行幸		
726	神亀3	播磨国から難波に立ち寄る	知造難波宮事を任命	
728	神亀5	萬葉集に難波行幸の御製あり		
732	天平4頃		難波宮造着手	
734	天平6	難波行幸		汀線・改修 ・改修一回 ・出島目 ・蛇行溝
740	天平12	難波行幸		中期
744	天平16	難波宮から紫香楽宮へ行幸	難波宮を皇都と宣言	
745	天平17	難波行幸、一時危篤		
749	天平感宝元	退位		
〃	天平勝宝元	(孝謙天皇即位)		
756	天平勝宝8	重病の身で難波行幸。同年崩御		
~~~~	~~~~	~~~~	~~~~	~~~~
767	神護景雲元頃			後期 石組・改修二回 ・建物・目 ・池底・橋 ・石貼
784	延暦3頃		解体開始	
786	延暦5		長岡京に移築完了	

(表8) 「こはんにしたかひて」の解釈

研究者	見解・見解を示す引用文（ ）は筆者附記	引用元
森蘊	従来「こはむ」を「ごばん」（碁盤）と解釈して居たが、「その石のこはむにしたかひて」は「その石の乞」即ちその石の要求によつての意であり、後に揚ぐる「えうじ」を「こうし」（格子）として共に平安時代に於ける石組に幾何学的な配置を主張する説の成立せざる事を附記して置かう。	『平安時代庭園の研究』、桑名文星堂、1940年 註記p. 159
〃	依頼者の好みよりも、もっと石の心即ち、石のバランスの方を優先させるということに他ならないであろう。①要求する ②随つて ③希望に随つて ④要望する ⑤求める気持ち ⑥調和する	『NHKブックス「作庭記」の世界』、日本放送出版協会、1986年 p. 122。
田村剛	私は本書を通読して、それが後に出て来るただ一箇所漢字にあてられている「乞に従いて」の乞はんであるとしたい。石を心あるもの見てその石が要請するついった心持である。今日でも石を遣う場合に、そうした石の気持ちになって、石を配ることのあるのは、実際家の体験するところである。又本書にも立石口伝の条には、石を擬人したり動物に擬えて、立てることを教えている所がある。すべて同じ心持である。即ちここでは主石が要請するだけのものを据える。余計にすることを戒めたものである。乞はんは、石がほしいだろうと、石の心を推しはかった用い方である。	『作庭記』、相模書房、1964年 p. 205-206。
田中正大	私は、この言葉の中に、作庭記の全内容が凝縮されていると考えている。（中略）主石の要求に従つて立てるという意味である。（中略）作庭家が「自然石」の要求に従うためには、自然石とへだてない親しみをもっていることが必要であろう。（中略）自然石と作庭家の間に中間項が入るのではなくて、直接に自然石と触れるというのが「乞はんに従う」の真意であろう。 （尚、田中はこの項で作庭家と石の関係を母親と赤ちゃんに例え、その間に「愛情」がある、また石は無生物であるが作庭家とは「有機的關係」を結ぶもの、としている。）	『SD選書23日本の庭園』、鹿島出版会、1967年 pp. 55-63。
武居二郎	①気持ちを汲み取りながら ②意見に従つて ③雰囲気に合わせて ④気持ちを汲み取ったうえで ⑤気持ちを汲み取りながら ⑥気持ちを汲みながら（中略）この言葉の解釈は実に様々であるが、作庭記の編者の思想を表現しているとも思える言葉である。（中略）その石が希望している気持ちを汲み取つてと訳するのが適當である。	『作庭記 現代語訳と解説』、京都芸術短期大学ランドスケープデザイン研究室武居二郎教授定年講義実行委員会、1995年

(表8)

研究者	見解・見解を示す引用文（ ）は筆者附記	引用元
近藤公夫	この言葉の解釈は実に様々であるが、作庭記の編者の思想を表現しているとも思える言葉である。（中略）その石が希望している気持ちを汲み取ってと訳するのが適当である。	「作庭記の「こはんにしたかひて」に関する一考察」日本造園学会、『造園雑誌』34（3）、1971年 pp. 41-44。
〃	①depend ②depend ③accord ④require ⑤accord ⑥request（英訳掲載のみ）	「“SAKU-TEI-KI” in English」日本造園学会、『造園雑誌』39（3）、1976年
斉藤勝雄	実際の石組技法では、そのように先きに据えた石に対して大小高低の調子を合わせるように、恰も先に据えた石と相談をしながら仕事を進めるように、次々の石を組んで行くのであるから、＜乞はん＞は誠にぴったりと呼吸のあった表現である。筆者も上記のとおり＜乞はん＞組だが、これほどまでに石を擬人的に徹して扱った表現例は作庭記の本文中、他に見られないところに、少々先入観的、希望的な解釈であるような気持ちが、わが心の片隅にしこりとなっているようで仕方がない。（中略）石が人間に向かって希望を述べるというような無理な解釈をしなくても（後略）	『斉藤勝雄作庭技法集成 第一巻 日本庭園伝統の基盤』、河出書房新社、1976年、p. 56。
オギユスタン・ベルク	オギユスタン・ベルク『風土の日本—自然と文化の通態』、筑摩書房、1975年、pp. 222-223。	『風土の日本—自然と文化の通態』、筑摩書房、1975年、pp. 222-223。
山本学治	次の石がこう置いてほしいという「乞わんにしたがって」置く、というのだ。（原文改行）もちろん、地形や石がものをいうわけではない。その地形、その石の形がもっている可能性を読み取るだけの才能と見識が必要だということだ。	『森のめぐみ—木と日本人』、筑摩書房、1975年 pp. 137-138。
水尾比呂氏	（森蘊、田中正大の説を用いて）古代の庭で早くも石は、単なる素材ではなく、その形状や性状についての観照批評の意識をも喚起する役割を果していたことを、私たちは知らされるのである。	「石組と石庭」相賀徹夫編『探訪日本の庭7京都（三）洛西』、小学館、1978年、p. 30。
久恒秀治	乞はんに従ひて。要求に従って。据え終わった廉ある主石がその極まった姿、形からその次々の石を欲しくなる、その要求。	『作庭記秘抄』、誠文堂新光社、1979年、p. 31。

(表8)

研究者	見解・見解を示す引用文（ ）は筆者附記	引用元
木村三郎	「石」といった自然物を擬人化させて使っている。甚だ飛躍した感じを与えていることは確かである。(中略) 禅門の議解が前提となって初めて自然物にこのような擬人的な石のこはんに従ふ表現が生かされて使い得ることはあり得ることと言える。	「『作庭記』新考」、日本造園学会『造園雑誌』47(4)、1984年 p. 242。
飛田範夫	立てた石が望んでいるように、立てていくべきだという意味である。「石のこはんにしたがふ」ということは、一度でも石を据えた経験のある人には実感として理解できるであろう。現代的に言えば、バランスよく石を並べていくということ、即ち先に置いた石をよく見ながら、周囲との均衡を保つように次の石を並べていくということである。 (さらに飛田は「この言葉にはさらに深い意味があるとして現場における作庭者の臨機応変な対応を「こはんにしたがふ」ことであるとしている。	『SD選書193「作庭記」からみた造園』鹿島出版会、1985年 p. 162。
尼崎博正	「こはん（こわん）という言葉が石の気持ちの表現としてもちいられている。(中略) 作庭の現場では実際に石が語りかけてくるものなのである。その石の言葉に耳を傾けないで、巧く配置しようと必死になって頭をめぐらせるだけでは石は据わらない。(中略) 「こはんにしたかう」の意味は一つ一つの素材の持ち味を五感で受けとめることによってはじめて理解できるのである。	中村一・尼崎博正『風景をつくる』昭和堂、2001年 p. 219。
萩原義雄	人的請うではなく自然の請う	『日本庭園学の源流『作庭記』における日本語研究』勉誠出版、2011年。
針ヶ谷鐘吉	①～⑤「小半」、⑥「色」	「『作庭記』中の「こはん」の意義について」、日本造園学会『造園雑誌』、1966年 p. 7。
上原敬二	①～③小半 ④拒む ⑤小半 ⑥乞または気	『解説山水並に野形図・作庭記』加島書店、1982年



# 図版一覧

- (図1) 矢瀬遺跡の水場・祭祀場の構成  
月夜野町(現みなかみ町) 教育委員会編集・発行『上組北部遺跡群Ⅱ《矢瀬遺跡》  
埋蔵文化財発掘調査報告書』2005年「水場・祭祀場全体図及び木柱根分布図」
- (図1-2) 矢瀬遺跡の祭祀場の立石  
月夜野町(現みなかみ町) 教育委員会『上組北部遺跡群Ⅱ《矢瀬遺跡》  
埋蔵文化財発掘調査報告書』2005年「口絵4祭壇の全景」
- (図2) 池上曾根遺跡の祭祀遺構  
上 和泉市教育委員会編集・発行『史跡池上曾根遺跡保存整備事業報告書  
史跡池上曾根遺跡発掘調査報告書2011～2013—史跡整備に伴う第3期発掘調査—』  
2017年「集落中心部の弥生時代中期後半の遺構」部分  
下 大型建物と井戸の推定復元模型のスケッチ 筆者作画
- (図3) 六大A遺跡の構成  
三重県埋蔵文化財センター編集・発行『三重県埋蔵文化財調査  
報告115-16 一般国道23号中勢道路(8工区)建設事業に伴う六大A遺跡  
発掘調査報告』2002年、「SD1付施設配置図」
- (図4) 藤江別所遺跡の井泉と流れ  
明石市立文化博物館編『明石市藤江別所遺跡—藤江ポンプ場建設工事に伴う  
発掘調査報告書—』明石市教育委員会1996年、「第9図検出遺構平面図」
- (図5) 城之越遺跡の大溝祭祀遺構の構成  
三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財報告書99-3城之越遺跡  
—三重県上野市比土—』1992年(2004デジタル版)「大溝上流貼石部分実測図」
- (図6) 阪原阪戸遺跡の全体図  
奈良県立橿原考古学研究所編集・発行『奈良県遺跡調査概報1992年度』1993年
- (図7) 屋代遺跡群の祭祀遺構と出土遺物  
長野県埋蔵文化財センター・日本道路公団・長野県教育委員会  
『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書54 上信越自動車道埋蔵  
文化財発掘調査報告書28 更埴条里遺跡・屋代遺跡群—総論編』2000年  
「古墳時代～中世の祭祀関連遺構」の部分
- (図8) 南郷大東遺跡の導水施設の構成  
奈良県立橿原考古学研究所編『南郷遺跡群Ⅲ奈良県立橿原考古学研究所調査報告  
第74冊』奈良県教育委員会2003年「SX03全体図」(横版)
- (図9) 中溝・深町遺跡の集石土坑と建物の構成  
新田町(現太田市) 教育委員会編集・発行『新田町文化財調査報告書—新田東部  
遺跡群Ⅱ/新田東部工業団地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書』2000年  
上 第1024図 第4段階の遺構(第3分冊) 赤線筆者加筆  
下 I号掘立柱建物跡とI号・2号集石土坑(1)(第1分冊)
- (図10) 三ツ寺Ⅰ遺跡の構成と石敷き遺構  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 編集・発行『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘  
調査報告書第8集三ツ寺Ⅰ遺跡—古墳時代居館の調査(本編)—』1988年  
上 第108図1号石敷き遺構 下 第114図2号石敷き遺構  
右 第35図古墳時代Ⅱ期遺構配置図 赤線筆者加筆

- (図11) 南紀寺遺跡の概要  
奈良市埋蔵文化財調査センター速報展示資料No28 1993年  
「南紀寺遺跡の濠で囲まれた区画遺構」
- (図12) 下市瀬遺跡の井戸と木樋  
岡山県教育委員会発行『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 (3)  
中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1』1973年
- (図13) 纏向遺跡の土壌と出土遺物  
奈良県立橿原考古学研究所編『纏向』桜井市教育委員会1976年
- (図14) 忍路の環状列石  
小樽市教育委員会ホームページ <https://www.city.otaru.lg.jp/>
- (図15) 保久良神社の磐座  
スケッチ 筆者作画
- (図16) 天白磐座遺跡の巨岩の形状  
辰巳和弘編『引佐町の古墳文化Ⅴ：天白磐座遺跡』 引佐町（現浜松市）教育委員会 1992年  
上 「天白磐座遺跡測量図」  
下 「磐座中心部の縦・横断見取り図」
- (図17) 上之宮遺跡（4期）の構成  
桜井市文化財協会編集・発行『上之宮遺跡第5次調査概報 桜井市内埋蔵文化財  
1989年度発掘報告書2』1990年
- (図18) 古宮遺跡の構成  
奈良文化財研究所編・発行『古代庭園研究Ⅰ』2006年
- (図19) 島庄遺跡の大規模方形池と小池の構成  
奈良県立橿原考古学研究所編・発行 「明日香村飛鳥京跡一島庄遺跡  
第20～22次および飛鳥京跡第114次発掘調査概報一」  
『奈良県遺跡調査概報1988年度』1989年
- (図20) 酒船石遺跡北部地域の導水施設をもつ遺構  
上 明日香村教育委員会編集・発行 『酒船石遺跡発掘調査報告書』2006年  
下 亀形石導水施設の構造模式図 奈良文化財研究所編集・発行『古代庭園研究Ⅰ』  
2006年
- (図21) 飛鳥京跡苑池遺構の園池平面プランと南池中島の形状  
上 北池 奈良県立橿原考古学研究所「平成30年10月25日第12次調査現地説明会資料」  
2018年  
下 南池 「橿原考古学研究所現地学習館配布資料」2019年
- (図22) 飛鳥京跡苑池遺構 北池の推定祭祀遺構  
奈良県立橿原考古学研究所「史跡・名称飛鳥京跡苑池遺構  
第13次調査（飛鳥京跡第182次調査）現地説明会資料」 2019年
- (図23) 石神遺跡の石組池の形状  
奈良国立文化財研究所編集・発行『古代庭園研究Ⅰ』2006年

(図24) 平城宮東院庭園の平面プランの変遷

奈良文化財研究所編集・発行「東院園池と周辺の調査（第99次）」  
『昭和51年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1977年、  
同『奈良文化財研究所学報第69冊平城宮発掘調査報告XV—東院庭園地区の調査—  
一本文編』2003年 写真 筆者撮影 平成31年4月 図版レイアウト筆者

(図25) 平城宮東院庭園の蛇行溝・州浜の層序

奈良文化財研究所編集・発行『古代庭園研究Ⅰ』2006年、  
同『奈良文化財研究所学報第69冊平城宮発掘調査報告XV—東院庭園地区の調査—  
一本文編』2003年

(図26) 神泉苑 復元想定図

京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館編集・発行  
「リーフレット京都」No. 73、1995年

(図27) 神泉苑の遣水遺構

上 京都市埋蔵文化財研究所編集・発行『高速鉄道東西線建設工事に伴う史跡旧二条  
離宮内の第2次発掘調査 2～4期調査終了報告書』1991年

(図28) 旧嵯峨院・大沢池（大覚寺御所跡）の遣水

舊嵯峨御所大覚寺『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告—大沢池北岸域復原整備事業  
に伴う調査』1997年

(図29) 鳥羽離宮模型

京都市歴史資料館  
京都市埋蔵文化財研究所編集『院政期の京都 白河と鳥羽 付法金剛院・法住寺殿』  
京都市・京都市埋蔵文化財研究所発行、2008年

(図30) 平城京左京三条二坊宮跡庭園

奈良国立文化財研究所編集・発行『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告書』  
1986年 写真

(図31) 長屋王邸西庭園の池の州浜敷の遺構

山下信一郎「平城京左京三条二坊二坪（長屋王邸）の調査—第303-8次」  
奈良文化財研究所編集・発行『年報2000-Ⅲ』2001年

(図32) 平城京左京一条三坊十五・十六坪庭園遺跡の州浜位置と石組

右 奈良文化財研究所編集・発行『古代庭園研究Ⅰ』2006年  
左 藤原武二、宮本長二郎「平城京の遺跡 左京一条三坊十五・十六坪  
（6AFB-F～J地区）」奈良文化財研究所編集・発行『奈良文化財研究所学報第23冊』  
1975年

(図33) 高陽院で検出された州浜、池、中島、景石

左 奈良文化財研究所編集・発行『発掘庭園資料』1998年  
右 京都市埋蔵文化財研究所編集・発行「平安京左京二条二坊・高陽院跡2」  
『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』1994年

(図34) 法華寺阿弥陀浄土院の庭園遺構

奈良文化財研究所「法華寺阿弥陀浄土院の調査—第312次」  
現地説明会資料、2000年 第312次調査遺構平面図

- (図35) 法華寺旧境内庭園遺構の州浜  
奈良文化財研究所編集・発行 『古代庭園研究Ⅰ』2006年
- (図36) 平安時代の発掘遺構を含む平等院境内の構成1990年頃  
宇治市歴史資料館編集『史跡及び名勝平等院庭園保存整備報告書』  
(宗) 平等院、2003年、「平等院境内発見の平安遺構概要図  
(平成2年測量図使用)」
- (図37) 毛越寺庭園の構成  
平泉町教育委員会『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書  
—第13次調査—』1991年「第13次調査 中島発掘調査位置図」
- (図38) 無量光院庭園の構成  
上 平泉町教育委員会編集・発行 『特別史跡 無量光院跡発掘調査報告書Ⅲ  
第17次調査—』2006年、「主要遺構配置図」  
右下 平泉文化遺産センター「無量光院跡第46次現地説明会資料」2019年
- (図39) 浄瑠璃寺庭園の構成  
(宗) 浄瑠璃寺『特別名勝及び史跡浄瑠璃寺庭園保存修理事業報告書Ⅰ  
(発掘調査編)』2019年、「庭園池泉汀ライン復元図」
- (図40) 鴨社古図  
「鴨社古図」(明治38年大崎直一模写・賀茂御祖神社〈下鴨神社〉所蔵)
- (図40-2) 下鴨神社付近の遺跡分布  
京都市埋蔵文化財研究所編集・発行『京都市埋蔵文化財研究所  
発掘調査報告2005-15 史跡賀茂御祖神社境内』2006年  
「図3 調査地周辺の遺跡分布図(1:25,000)」
- (図41) 兵主神社の池、島、流れの構成  
(宗) 兵主神社『名勝兵主神社庭園保存整備報告書-保存整備編』2002年  
上 「主庭園遺構推定図」  
下 「拝殿前遺構推定図」
- (図42) 建章宮 太液池図に描かれた蓬萊三山  
佐藤 昌『中国造園史 上巻』「漢建章宮 太液池図」 国会図書館蔵、  
陝西通志所蔵、発行(社)日本公園緑地協会、1991年 より転載
- (図43) 洛陽上陽宮 卵石護岸 中国社会科学院考古研究所調査  
小野健吉『日本庭園の歴史と文化』 吉川弘文館、2015年  
上 唐洛陽上陽宮遺構平面図  
下 唐洛陽上陽宮園池西部遺構
- (図44) 雁鴨池の垂直石積み護岸  
スケッチ 筆者作画
- (図45) 法成寺推定復元図  
杉山信三「法成寺建築配置図(試案)」『院家建築の研究』吉川弘文館、1981年
- (図46) 流れと遣水  
写真 城之越遺跡、毛越寺庭園

(図47) 州浜と石敷き

上 奈良県立橿原考古学研究所「史跡・名勝飛鳥京跡苑池第13次調査  
(飛鳥京跡第182次調査) 現地説明会資料」より転載

下 奈良文化財研究所編集・発行『学報第69冊平城宮発掘調査報告XV—東院地区の調査—  
一本文編』 「Fig. 8下層園池北半部実測図」

(図48) 仮山 正倉院宝物 南倉174

宮内庁ホームページ <https://shosoin.kunaicho.go.jp>

(図49) 飛鳥京跡苑池遺構 南池の中島の形状

奈良県立橿原考古学研究所「史跡・名勝飛鳥京跡苑池第8次調査(飛鳥京跡  
第174次調査) 現地説明会資料」

(図50) 平城宮東院庭園 上層園池の中島

奈良文化財研究所編集・発行『古代庭園研究Ⅰ』2006年  
写真

(図51) 平城宮東院庭園 上層園池北岸の石組み

奈良文化財研究所編集・発行『古代庭園研究Ⅰ』2006年  
写真

(図52) 平等院庭園の中島の形状(断面)

宇治市歴史資料館「史跡及び名勝平等院庭園保存整備報告書」(宗) 平等院、  
2003年 「Fig. 50 庭園の地形断面概念図2」

(図53) 毛越寺庭園 池中立石の立つ中島(出島)

平泉町教育委員会編集・発行『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書—第一—  
—第13次調査—一岩手県平泉町文化財調査報告書第26集』1991年  
写真

(図54) 毛越寺庭園 中島の形状

平泉町教育委員会編集・発行『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書  
13次調査—一岩手県平泉町文化財調査報告書第26集』1991年「中島発掘調査断面図」  
写真

(図55) 浪華古図

浪華古図 大阪天満宮御文庫所蔵

(図56) 島台(州浜台)

新村出編『広辞苑第2版補訂版』岩波書店、1976年、【州浜】の項

(図57) 州浜形と黄櫨染御袍の州浜紋

左 尚学図書編『文様の手帳』小学館、1987年

右 風俗博物館HP <https://costume.iz2.or.jp/color/480.html>  
(令和1年11月23日検索)

(図58) 碁盤の目を入れた庭坪地形取図

龍居松之助『日本造庭法秘傳』雄山閣、1929年「嵯峨流庭古法秘傳の書」  
庭坪地形取図

(図59) 古代都城の位置と変遷

奈良文化財研究所編集『図説平城京事典』柊風舎2010年「都城位置変遷図」

(図60) 宮城中枢部

小墾田宮 関西大学文学部考古学研究室編『飛鳥宮跡 解説書』奈良県明日香村、  
2017年

他 奈良文化財研究所編集『図説平城京事典』柊風舎、2010年

(図61) 奈良時代前半の平城宮・奈良時代後半の平城宮

奈良文化財研究所編集『図説平城宮』2010年

(図62) 平安宮宮城図（陽明文庫本による）

上 古代学協会・古代学研究所編集・京都市埋蔵文化財研究所編集協力

『平安京提要』角川書店発行、1994年 口絵より「豊楽院図」「八省院図」

（公財）陽明文庫より許可受

下 奈良文化財研究所編集『図説平城京事典』柊風舎、2010年

(図63) 平安宮内裏（陽明文庫本による）

上 古代学協会・古代学研究所編集・京都市埋蔵文化財研究所編集協力

『平安京提要』角川書店発行、1994年 口絵より「内裏図」

（公財）陽明文庫より許可受

下 橋本義則 『平安宮成立史の研究』塙書房、1995年

(図64) 立石

写真

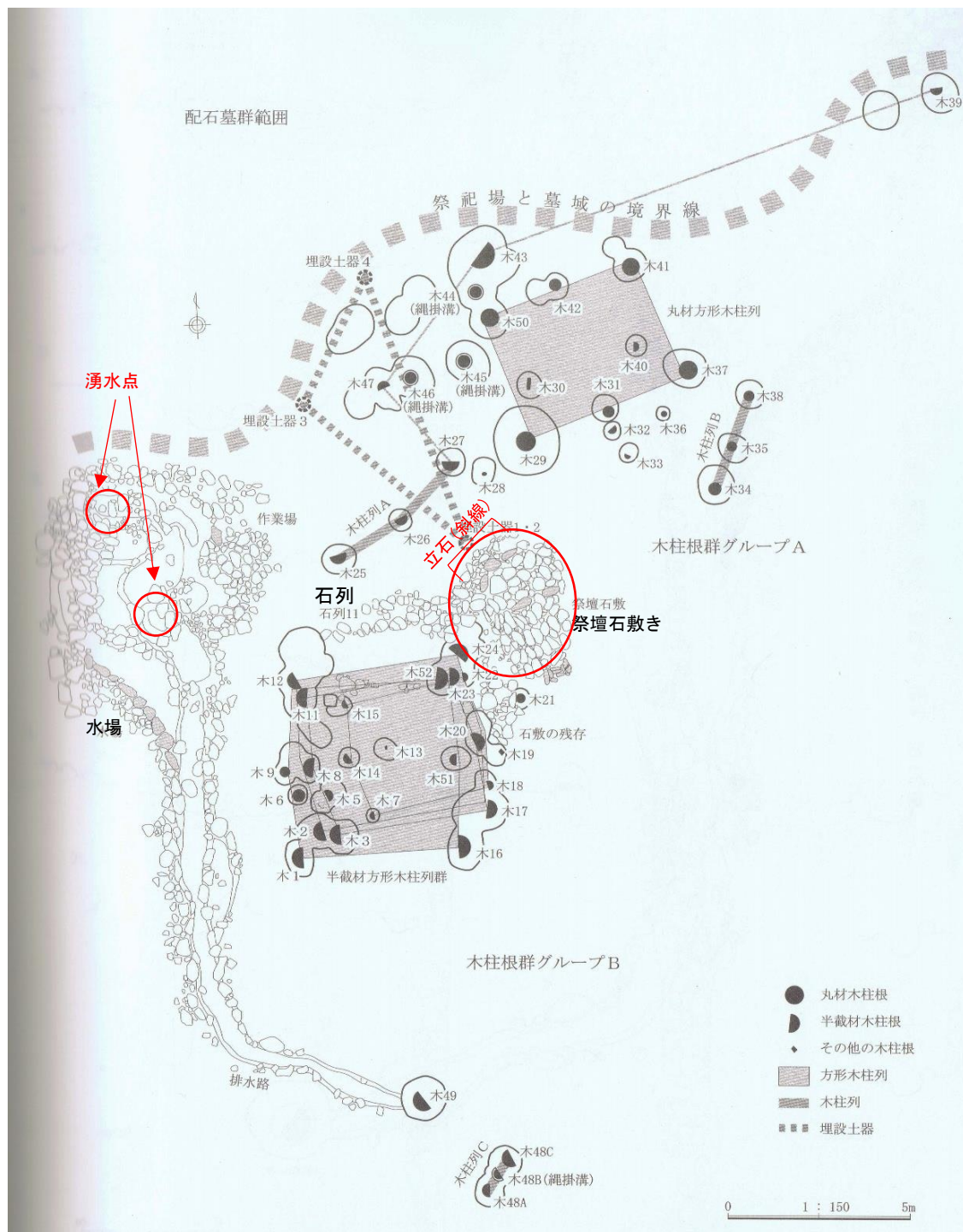
(図65) 天の川

写真

(図66) 古代庭園の概念

注) 1. 奈良文化財研究所の法人格を省略している

2. 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所の法人格を省略している



(図 1) 矢瀬遺跡の水場・祭祀場の構成

群馬県 縄文時代後期

出典： 月夜野町（現みなかみ町）教育委員会編集・発行『上組北部遺跡群Ⅱ《矢瀬遺跡》埋蔵文化財発掘調査報告書』2005 年「水場・祭祀場全体図及び木柱根分布図」  
赤線赤字筆者加筆





祭壇の全景（三つの立石は調査中に復元）

（図 1-2）矢瀬遺跡の祭祀場の立石

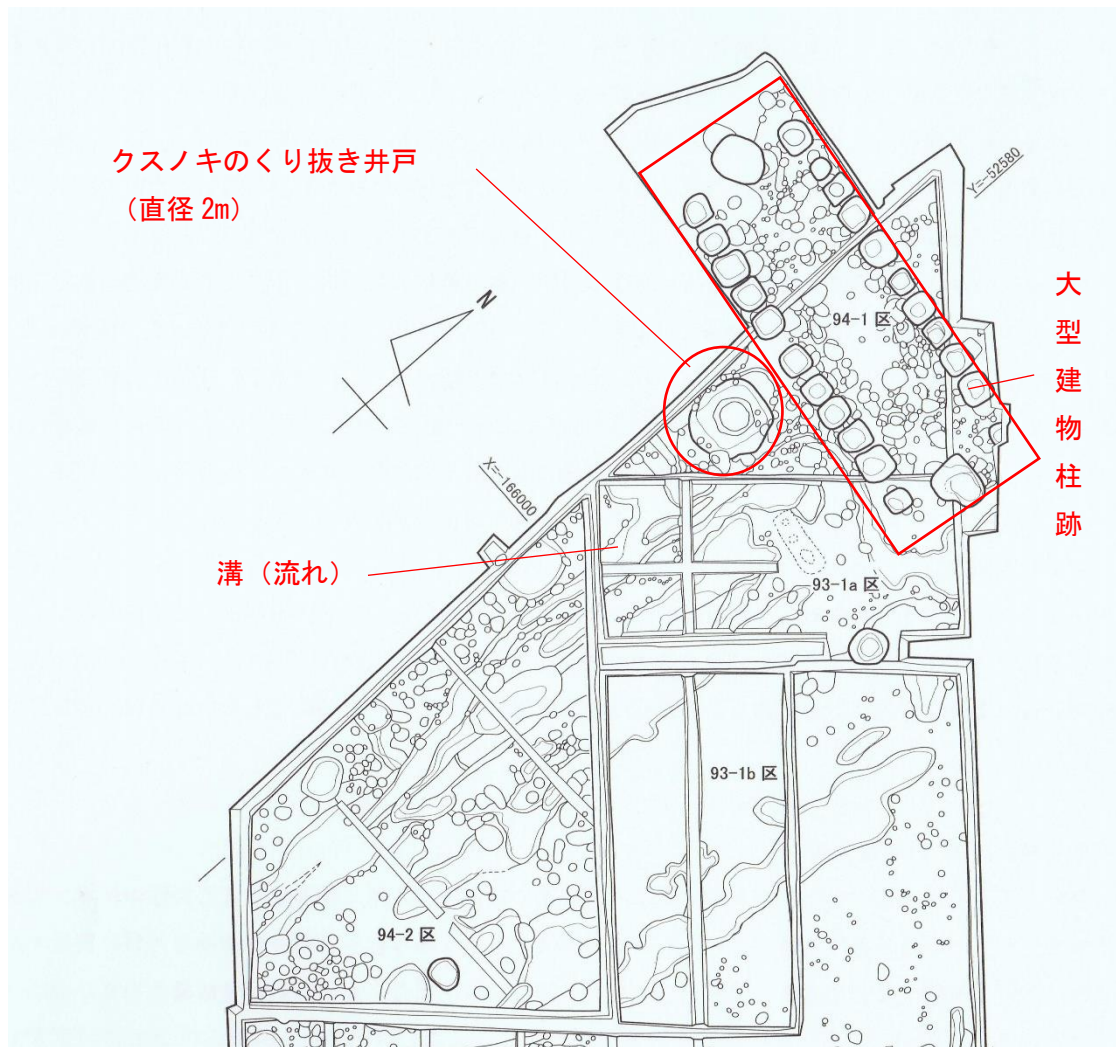
群馬県 縄文時代後期

流れに臨んで石敷きの祭壇が設けられている。

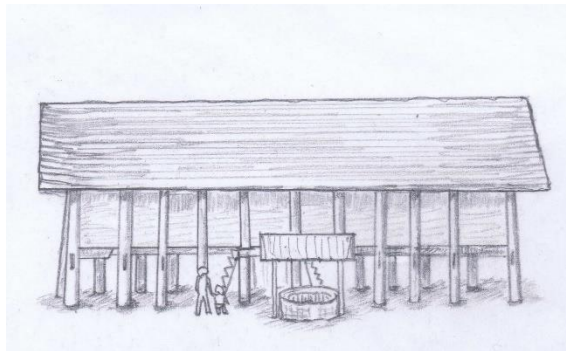
出典：月夜野町（現みなかみ町）教育委員会『上組北部遺跡群Ⅱ《矢瀬遺跡》

埋蔵文化財発掘調査報告書』2005 年「口絵 4 祭壇の全景」





(図 2) 池上曽根遺跡の祭祀遺構  
大阪府 弥生時代前期後半



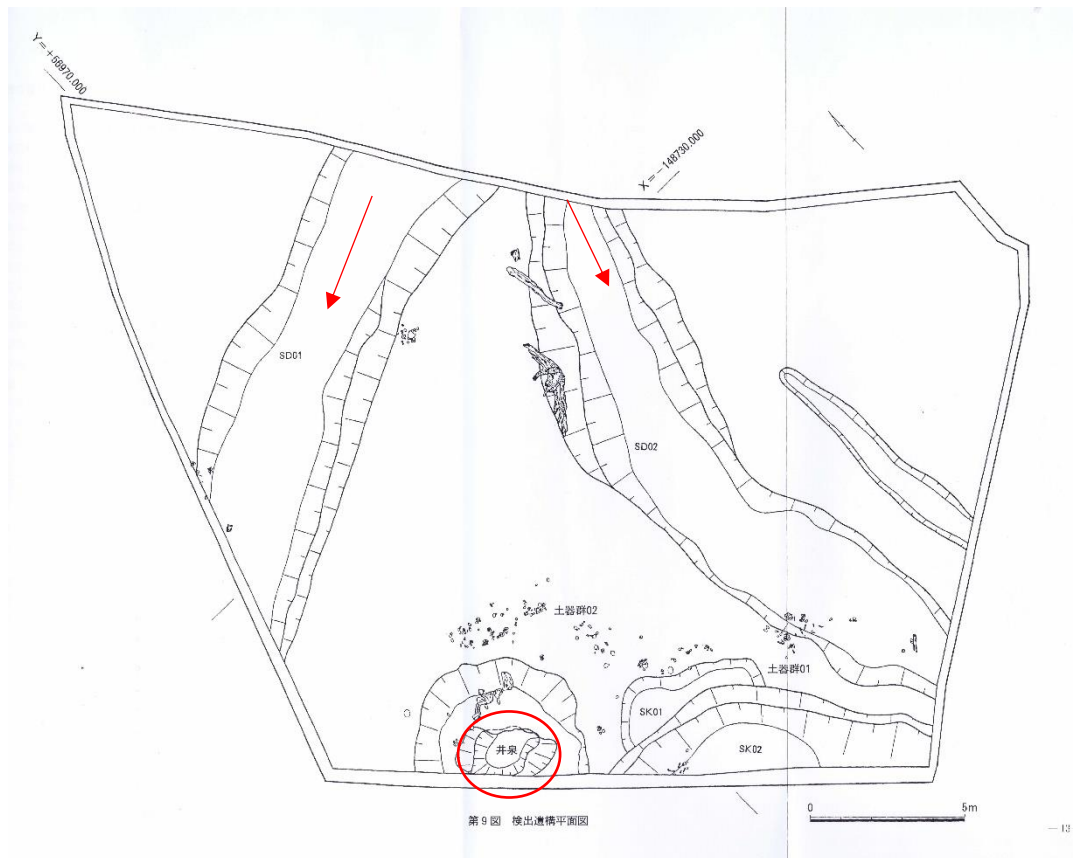
上 出典：和泉市教育委員会編集・発行『史跡池上曽根遺跡保存整備事業報告書 史跡池上曽根遺跡発掘調査報告書 2011～2013—史跡整備に伴う第 3 期発掘調査—』2017 年「集落中心部の弥生時代中期後半の遺構」部分 赤線赤字筆者加筆

下 大型建物と井戸の推定復元模型のスケッチ 筆者作画

(図 3) 六大 A 遺跡の構成  
三重県 弥生時代

出典：三重県埋蔵文化財センター  
編集・発行『三重県埋蔵文化財調査  
報告 115-16 一般国道 23 号中勢道路  
(8 工区) 建設事業に伴う六大 A 遺跡  
発掘調査報告』2002 年  
「SD1 付施設配置図」  
赤線筆者加筆



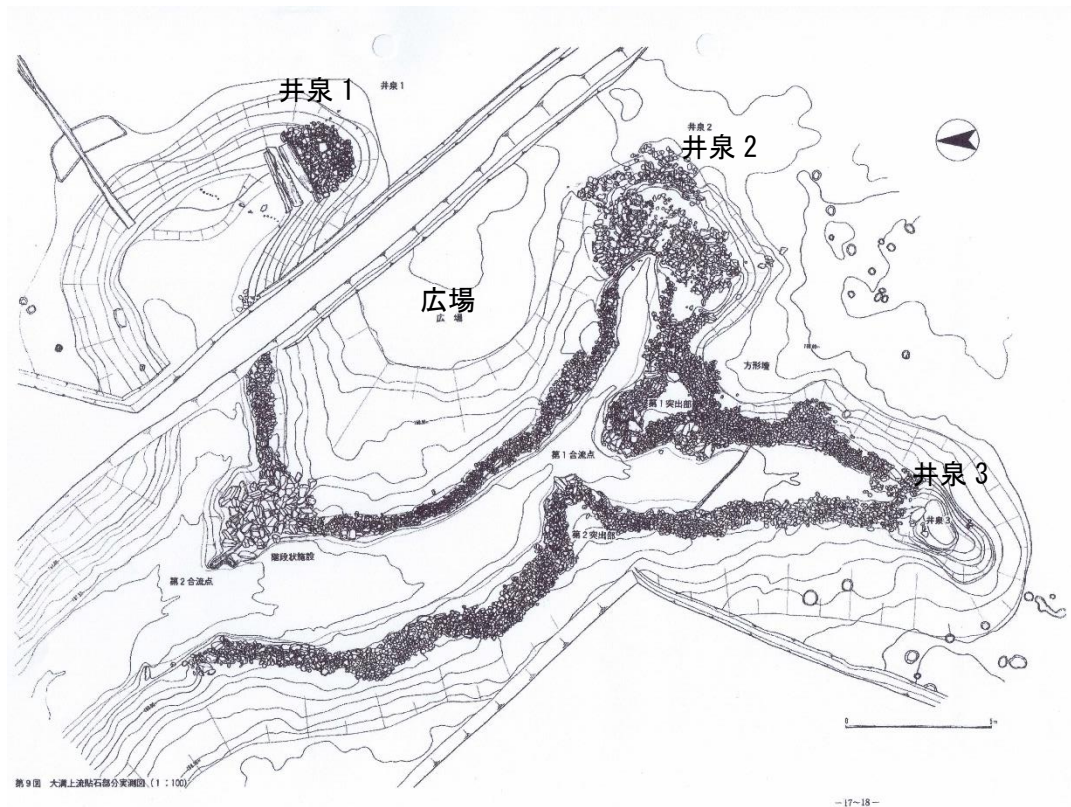


(図4) 藤江別所遺跡の井泉と流れ  
兵庫県 弥生時代

出典：明石市立文化博物館編『明石市藤江別所遺跡―藤江ポンプ場建設  
工事に伴う発掘調査報告書一』明石市教育委員会 1996 年

「第9図検出遺構平面図」

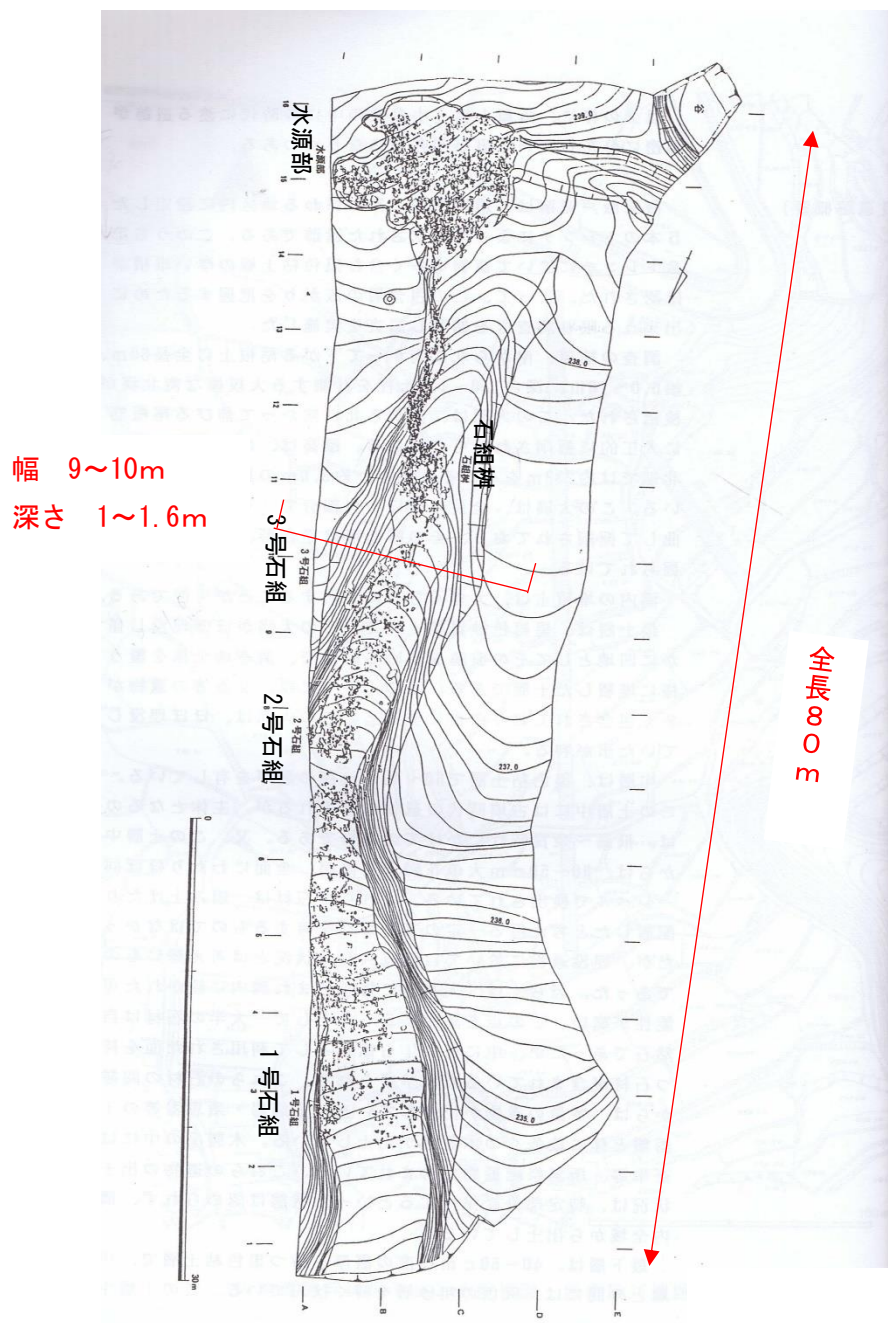
赤線筆者加筆 赤矢印は流水方向を示す



(図 5) 城之越遺跡の大溝祭祀遺構の構成  
三重県 古墳時代 (5 世紀)

出典：三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財報告書 99-3 城之越遺跡  
—三重県上野市比土—』1992 年 (2004 デジタル版)「大溝上流貼石部分実測図」





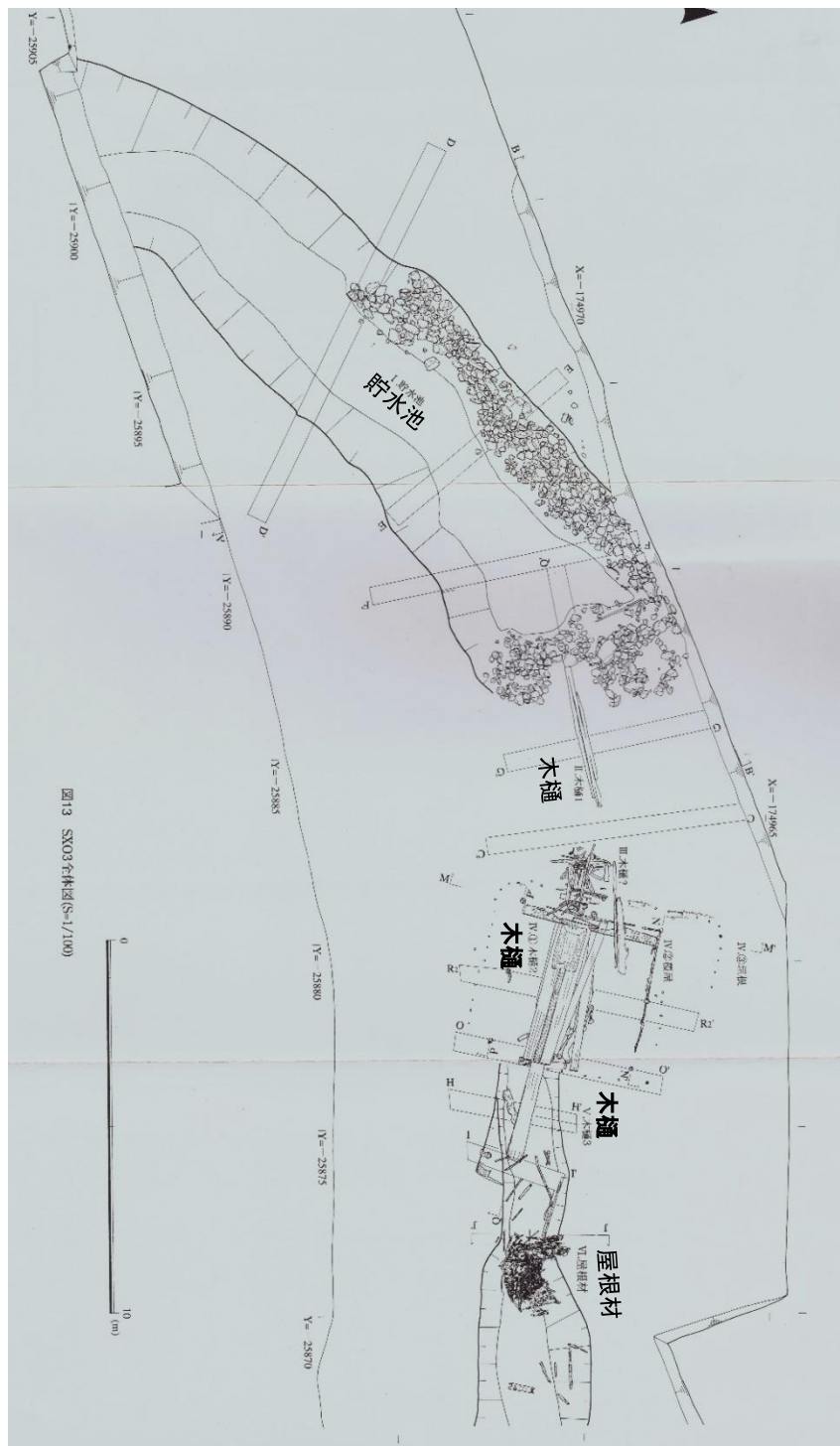
(図 6) 阪原阪戸遺跡の全体図  
奈良県 古墳時代

出典：奈良県立橿原考古学研究所編集・発行

『奈良県遺跡調査概報』1992 年度（第一分冊）1993 年

「図 3 阪原阪戸遺跡全体図」赤線赤字筆者加筆

出典：長野県埋蔵文化財センター・日本道路公団・長野県教育委員会  
『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 54 上信越自動車道埋蔵  
文化財発掘調査報告書 28 更埴条里遺跡・屋代遺跡群－総論編』2000 年  
「古墳時代～中世の祭祀関連遺構」の部分



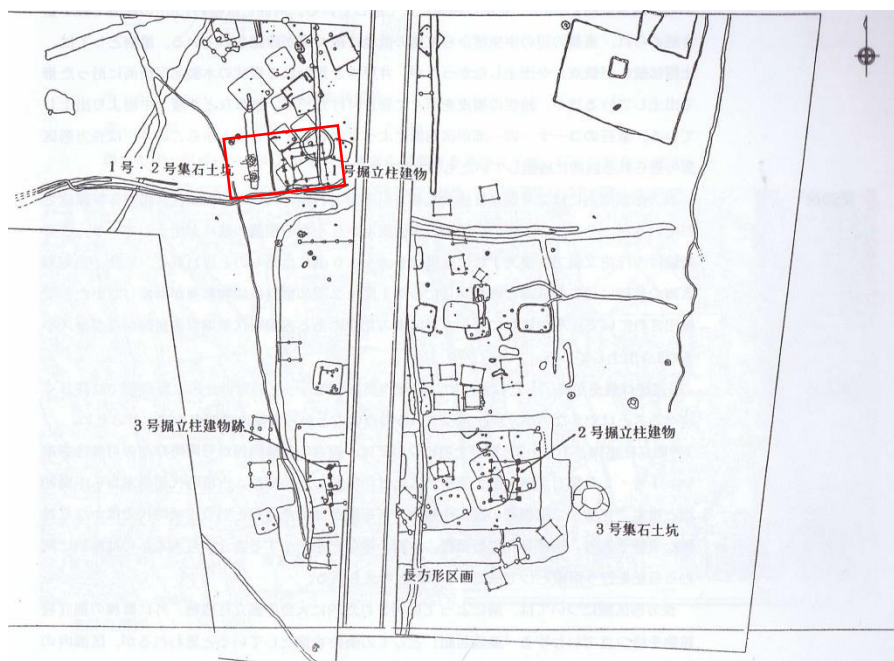
(図 8) 南郷大東遺跡の導水施設の構成

奈良県 古墳時代 (5 世紀)

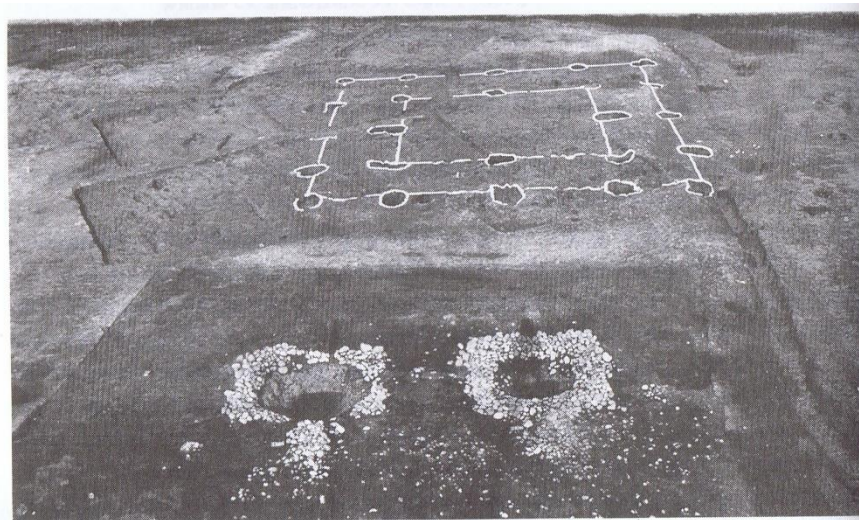
出典：奈良県立橿原考古学研究所編『南郷遺跡群Ⅲ奈良県立橿原考古学研究所

調査報告第 74 冊』奈良県教育委員会 2003 年「図 13 SX03 全体図」

ゴチック体黒字筆者加筆 西を上にして掲載



遺構配置図



I号掘立柱建物とI号・2号集石土坑

(図9) 中溝・深町遺跡の集石土坑と建物の構成

群馬県 古墳時代

上 遺構配置図

下 I号掘立柱建物とI号・2号集石土坑

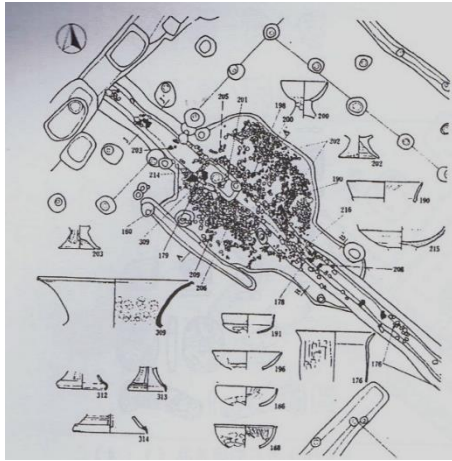
出典：新田町（現太田市）教育委員会編集・発行『新田町文化財調査報告書—新田東部遺

跡群Ⅱ/新田東部工業団地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書』2000年

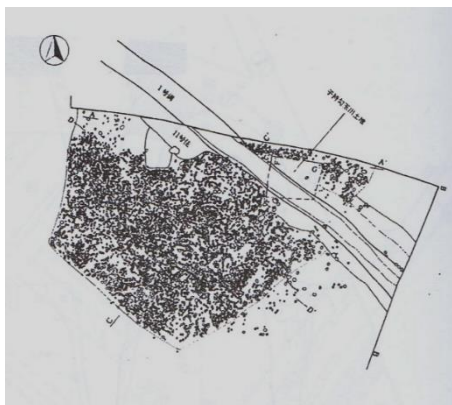
上 第1024図 第4段階の遺構（第3分冊）赤線筆者加筆

下 I号掘立柱建物跡とI号・2号集石土坑（1）（第1分冊）

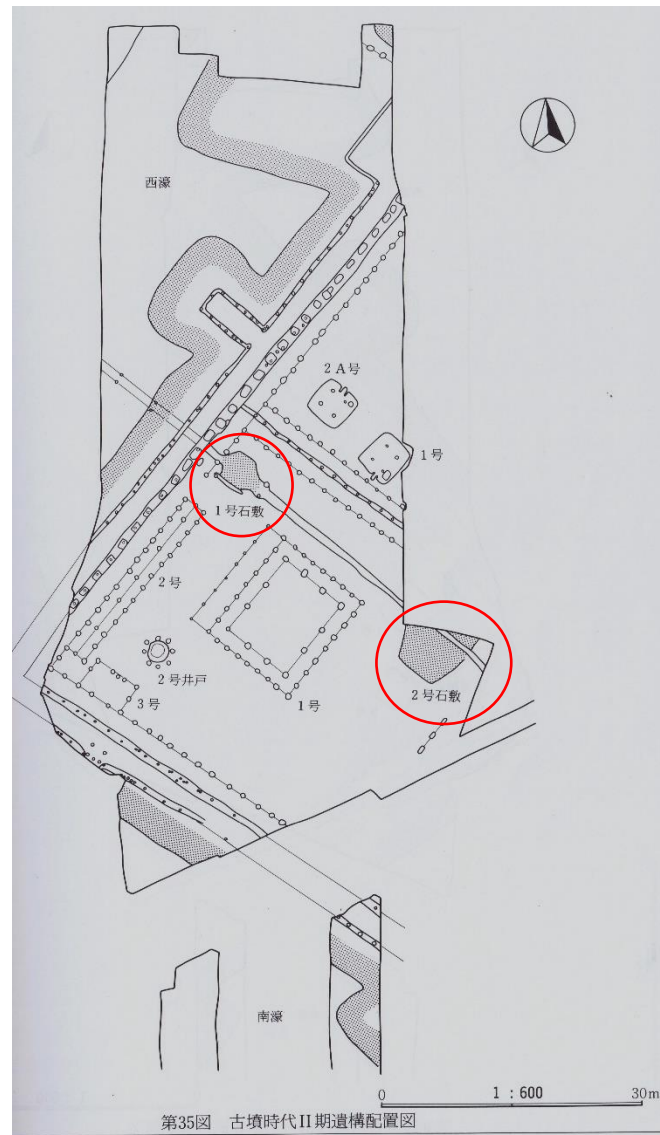




1号石敷き遺構



2号石敷き遺構



遺構配置図

(図 10) 三ツ寺 I 遺跡の構成と石敷き遺構

群馬県 古墳時代

上 2号石敷き遺構

右 遺構配置図

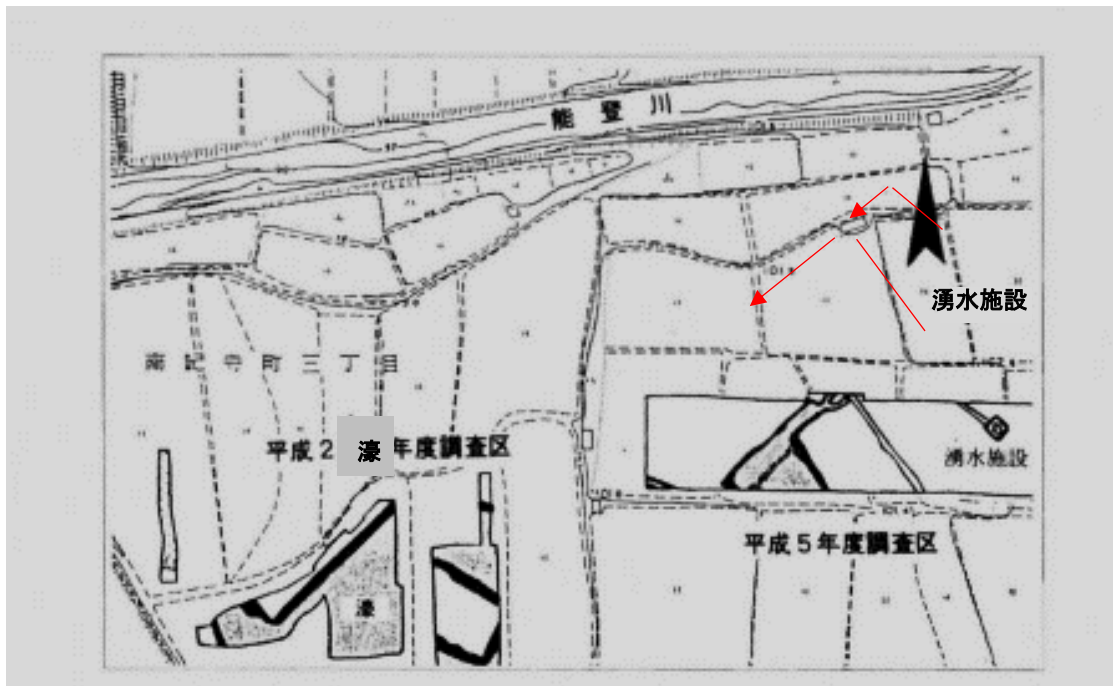
下 1号石敷き遺構

出典：(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 編集・発行『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査

報告書第 8 集三ツ寺 I 遺跡—古墳時代居館の調査 (本編)』1988 年

上 第 108 図 1 号石敷き遺構 下 第 114 図 2 号石敷き遺構

右 第 35 図古墳時代Ⅱ期遺構配置図 赤線筆者加筆



(図 11) 南紀寺遺跡の概要

奈良県 古墳時代前期

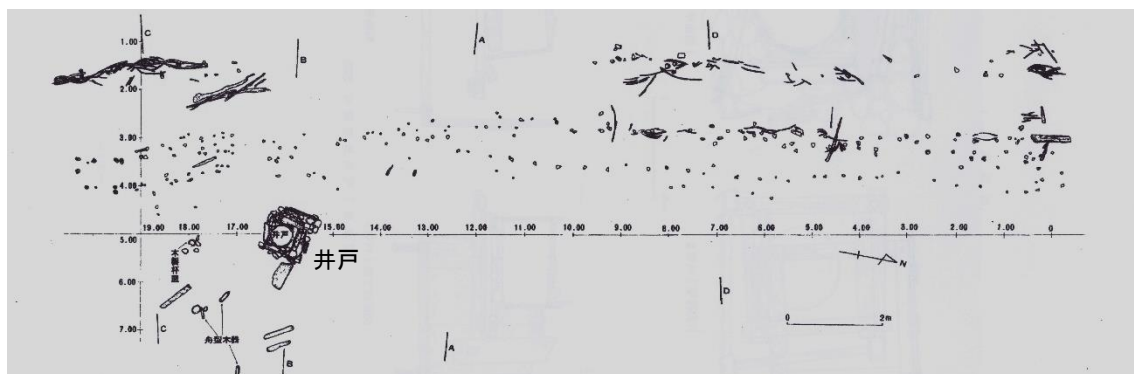
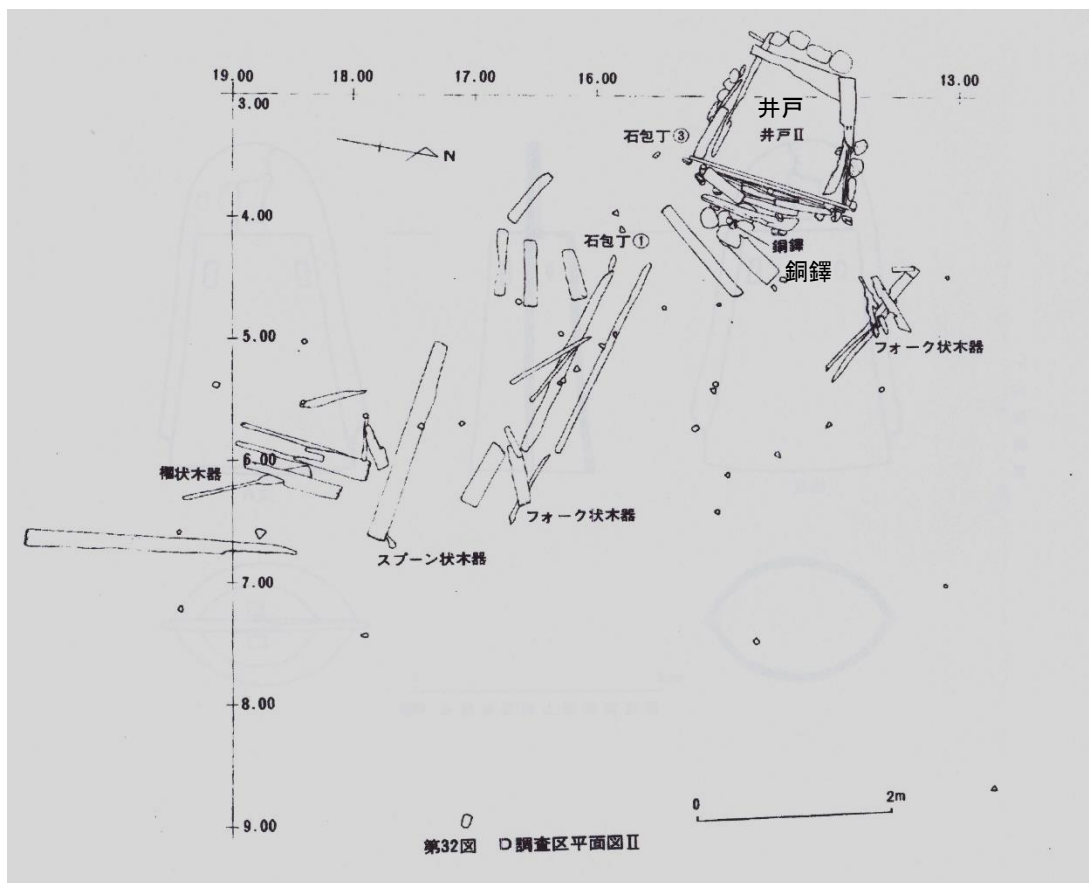
井泉から溝を引き濠に流れ込む遺構。

流れの護岸に州浜、濠（池）内に中島がある。

出典：奈良市埋蔵文化財調査センター速報展示資料 No28 1993 年

「南紀寺遺跡の濠で囲まれた区画遺構」

赤線赤字筆者加筆（導水方向を示す）



(図 12) 下市瀬遺跡の井戸と木樋

岡山県 弥生時代

上 D 調査区平面図Ⅱ 下 D 調査区平面図Ⅰ (用水路杭列と井戸Ⅰ)

出典：岡山県教育委員会発行『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 (3)

中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査 1』1973 年 黒字 (井戸・銅鐸) 筆者加筆







(図 14) 忍路の環状列石  
北海道 縄文時代

出典：小樽市教育委員会ホームページ

<https://www.city.otaru.lg.jp/>

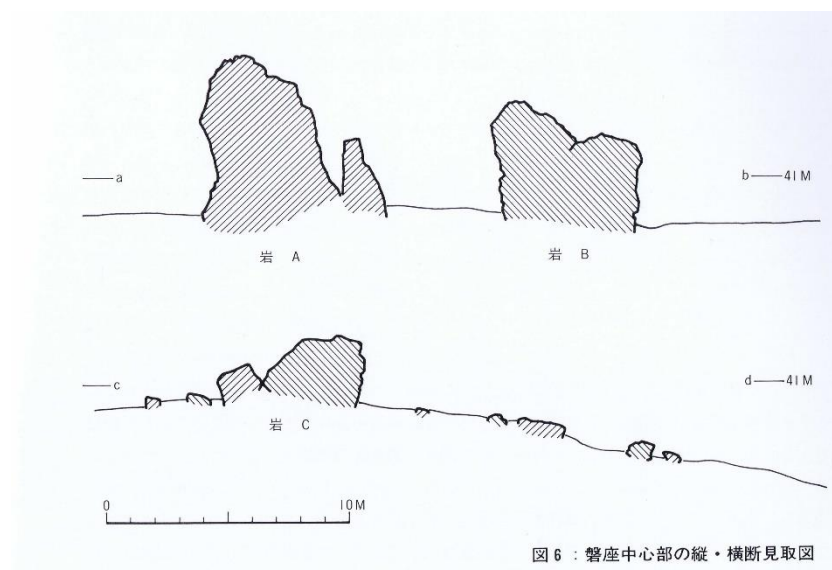
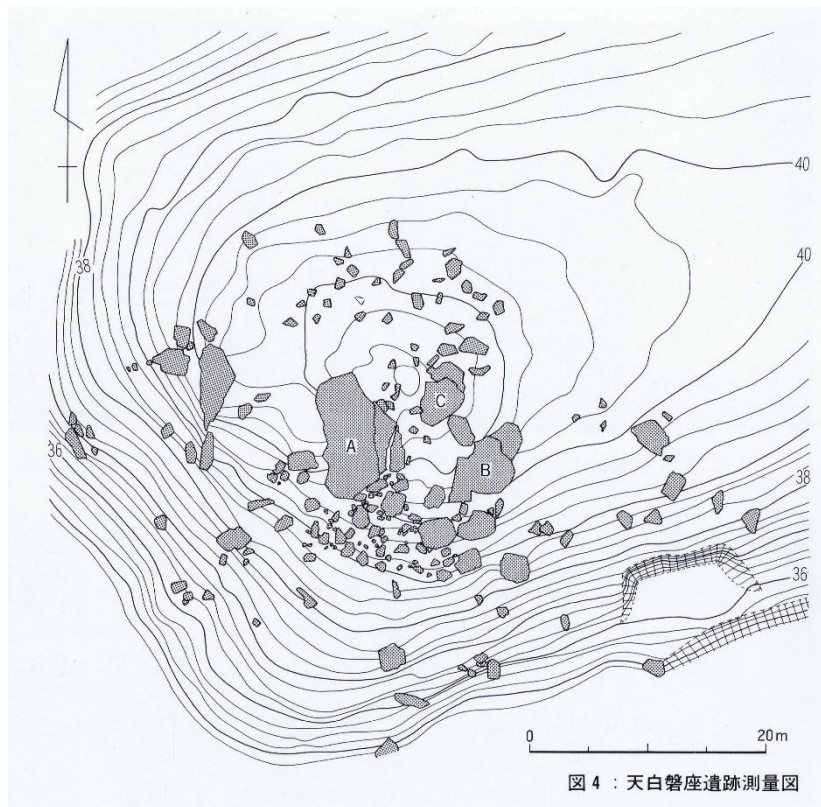
令和4年10月31日検索

画像提供 小樽市教育委員会



(図 15) 保久良神社の磐座  
兵庫県

スケッチ 筆者作画



(図 16) 天白磐座遺跡の巨岩の形状

静岡県 古墳時代

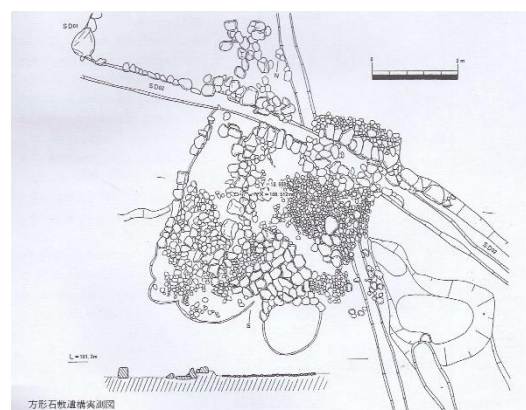
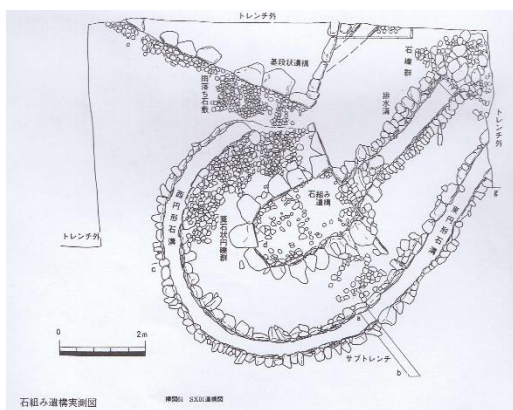
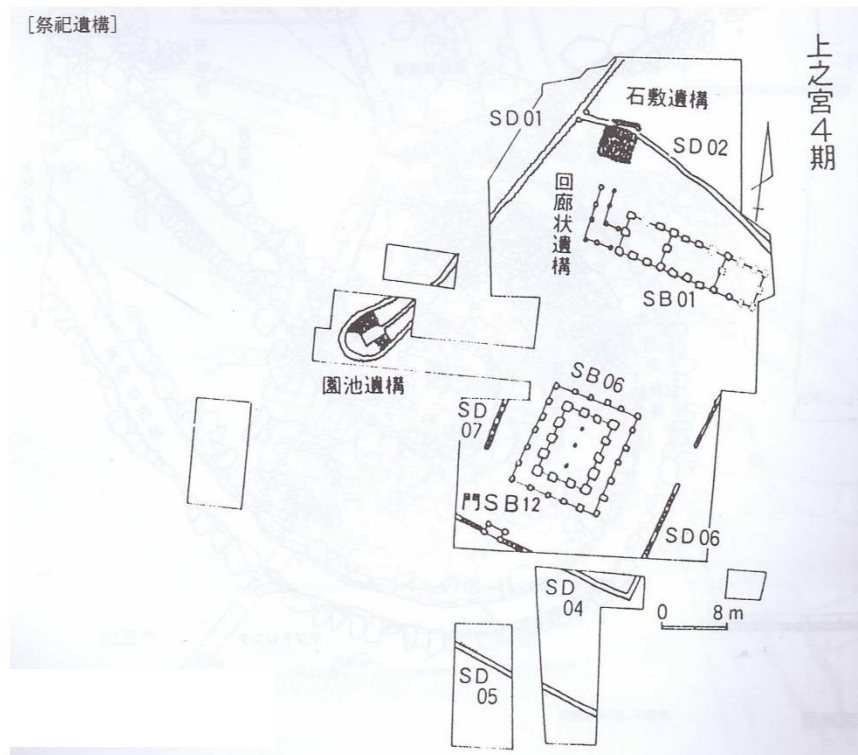
上 周囲 40m 四方の実測図 下 岩 A B C の見取図

出典：辰巳和弘編『引佐町の古墳文化Ⅴ：天白磐座遺跡』

引佐町教育委員会（現浜松市）1992 年

「天白磐座遺跡測量図」「磐座中心部の縦・横断見取り図」





(図 17) 上之宮遺跡 (4 期) の構成  
 奈良県 飛鳥時代初期  
 上 遺構配置図 下左 石組遺構実測図 下右 方形石敷遺構実測図

出典：桜井市文化財協会編集・発行『上之宮遺跡第 5 次調査概報  
 桜井市内埋蔵文化財 1989 年度発掘報告書 2』1990 年



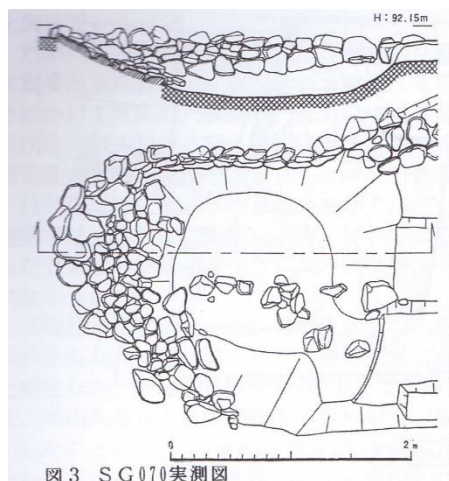


図3 SG070実測図

SG070 実測図

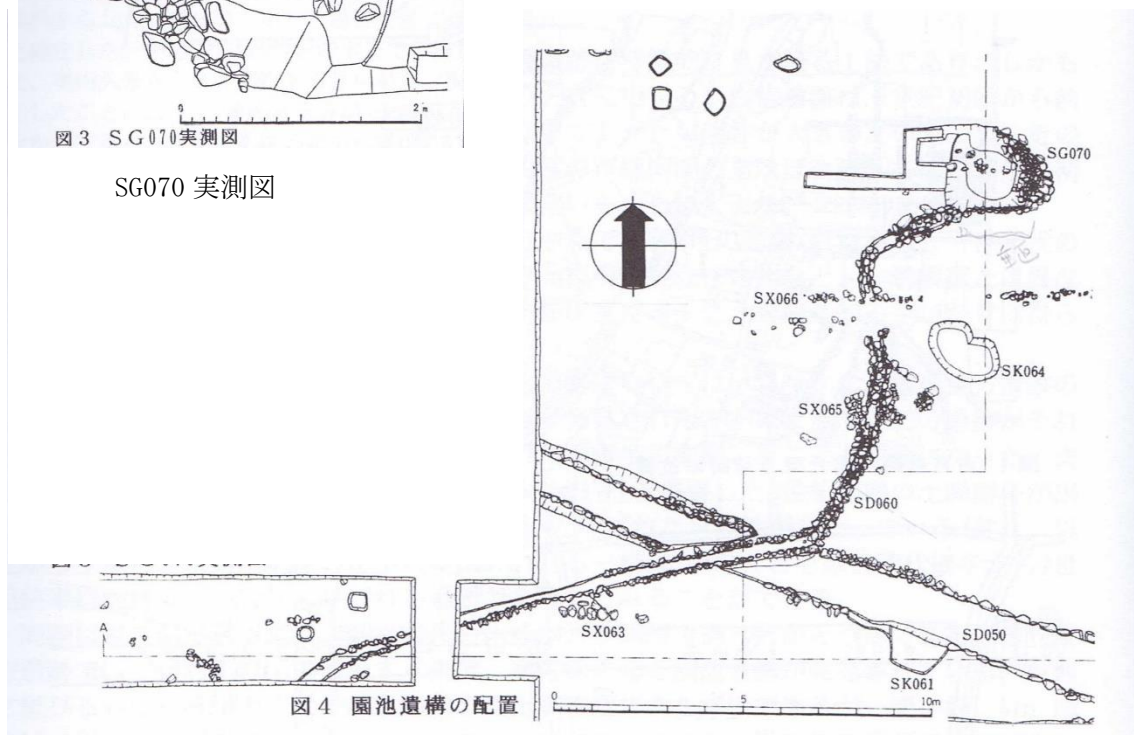


図4 園池遺構の配置

(図18) 古宮遺跡の構成

奈良県 飛鳥時代

上 小池 (SG070) 実測図      下 園池遺構の配置

出典：奈良文化財研究所編・発行『古代庭園研究Ⅰ』2006年









(図 21) 飛鳥京跡苑池遺構の園池平面プランと南池中島の形状  
奈良県 飛鳥時代

出典：上 北池：奈良県立橿原考古学研究所「平成 30 年 10 月 25 日第 12 次  
調査現地説明会資料」2018 年

下 南池：奈良県立橿原考古学研究所現地学習館配布資料 2019 年

画像提供 奈良県立橿原考古学研究所

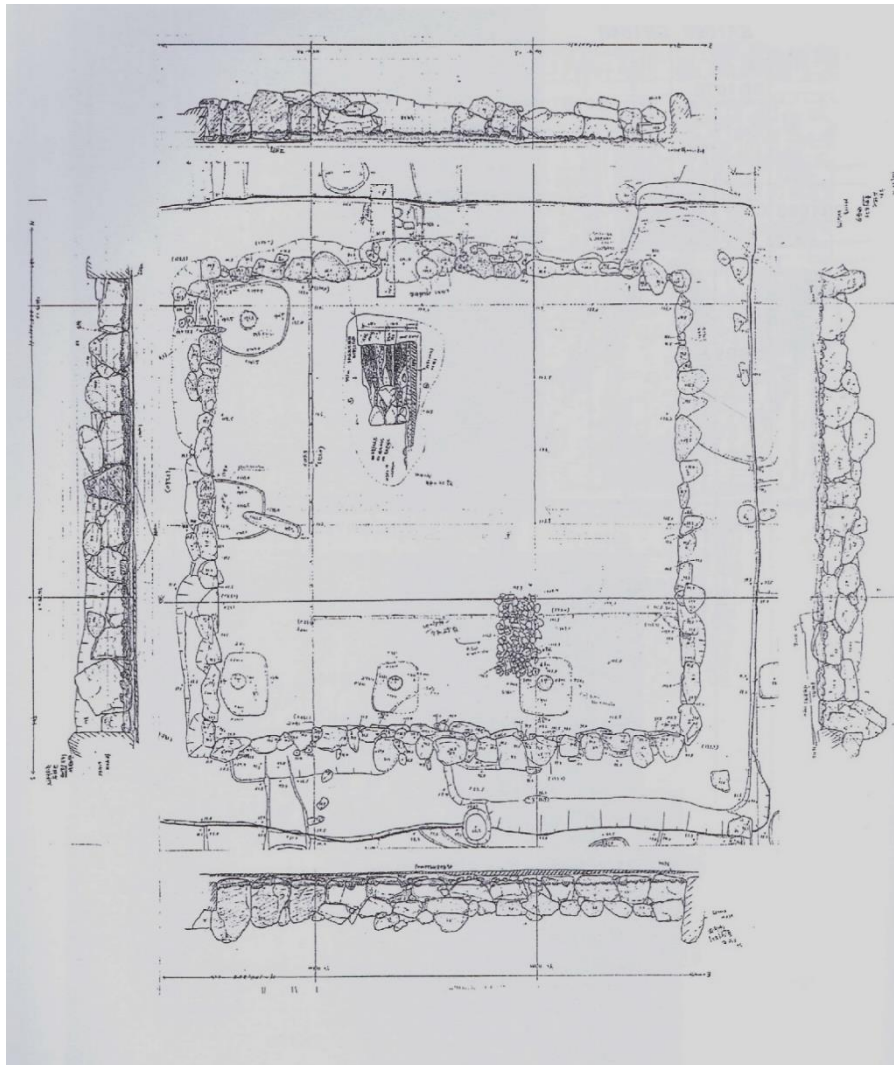


(図 22) 飛鳥京跡苑池遺構 北池の推定祭祀遺構  
奈良県 飛鳥時代

出典：奈良県立橿原考古学研究所「史跡・名称飛鳥京跡苑池遺構  
第 13 次調査（飛鳥京跡第 182 次調査）現地説明会資料」

画像提供 橿原考古学研究所





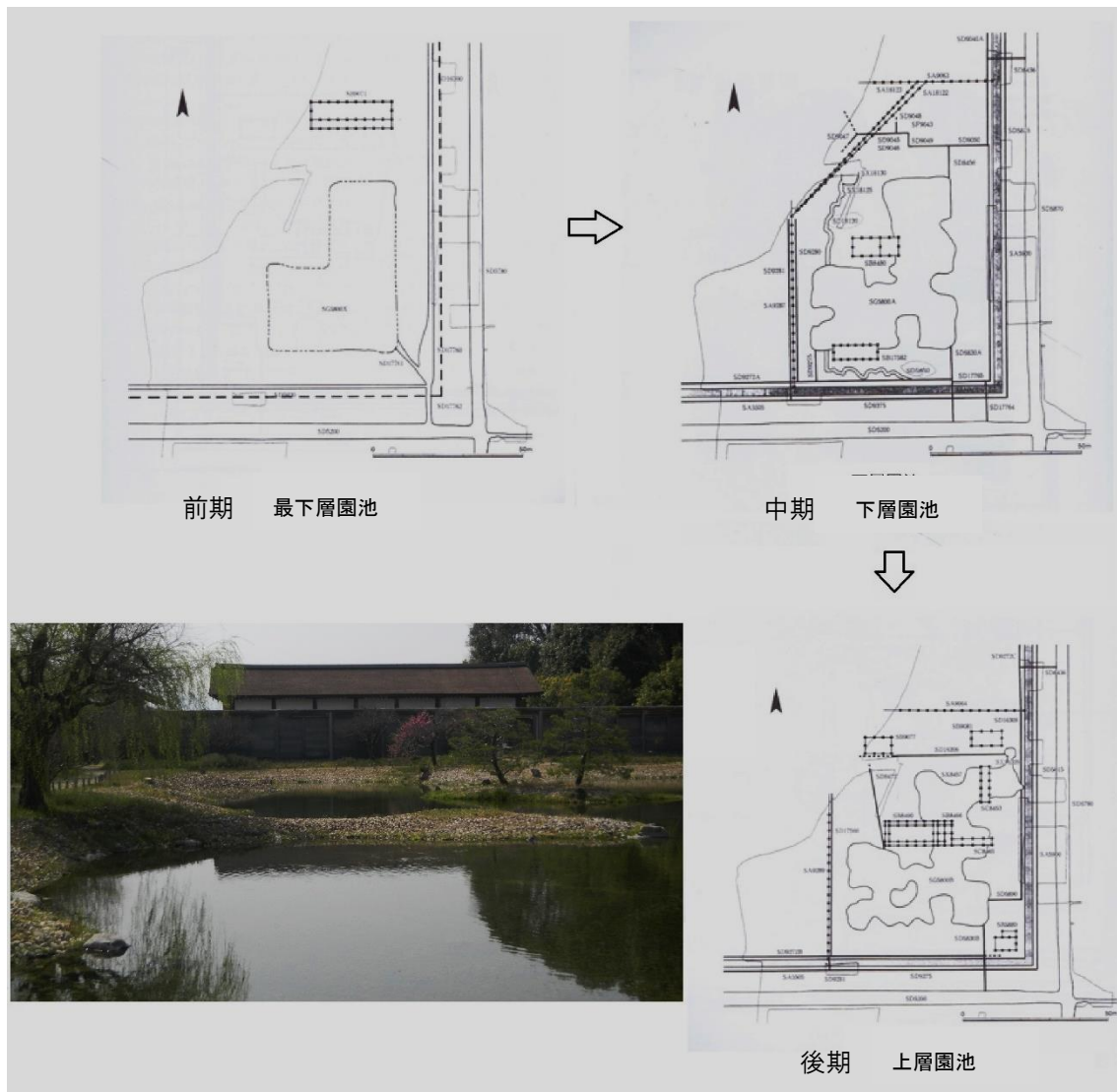
(図 23) 石神遺跡の石組池の形状

奈良県 飛鳥時代

上 平面・立面図

下 護岸石組、四隅の立石

出典：奈良国立文化財研究所編集・発行『古代庭園研究 I』2006 年



(図 24) 平城宮東院庭園の平面プランの変遷

奈良県 奈良時代

上左：前期最下層園池

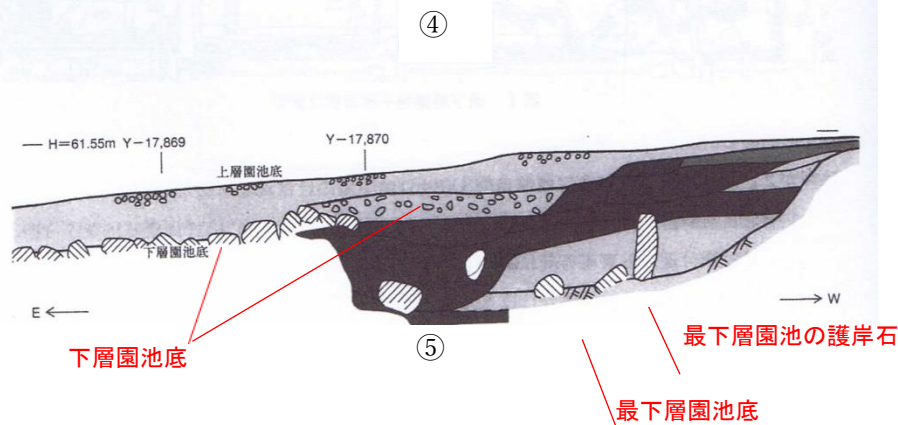
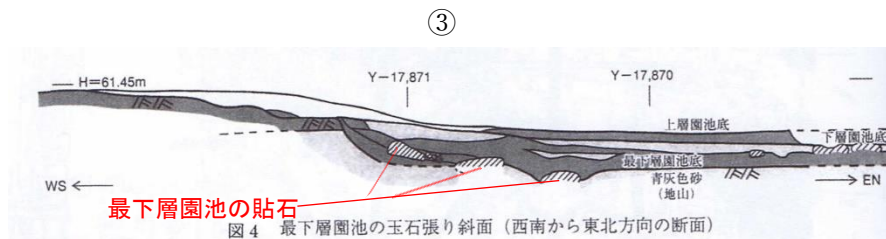
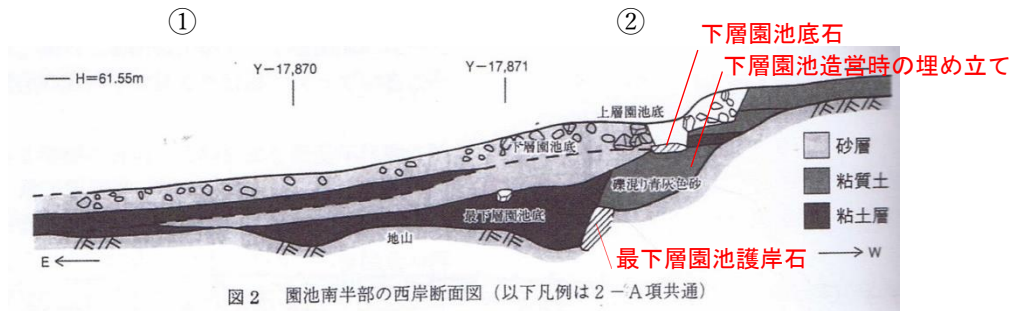
上右：中期下層園池

下左：整備公開状況（上層園池を復元）

下右：後期上層園池

出典：奈良文化財研究所編集・発行「東院園池と周辺の調査（第 99 次）」『昭和 51 年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1977 年、同『奈良文化財研究所学報第 69 冊平城宮発掘調査報告 XV—東院庭園地区の調査—本文編』2003 年

写真 筆者撮影 平成 31 年 4 月 図版レイアウト筆者



（図25）平城宮東院庭園の蛇行溝・州浜の層序

①②中期下層園池時代の蛇行溝

③園池南半部の西岸断面図—三時期の施工法がわかる。前期最下層園池の護岸石が立ててある。

④最下層園池の玉石貼り斜面—前期最下層園池には玉石を張りつけた地点もある。

⑤州浜勾配が緩やかな部分—中期下層・後期上層の礫敷きと三時期の池が重なる様子がわかる。

出典：奈良文化財研究所編集・発行『古代庭園研究Ⅰ』2006年、同『奈良文化財研究所学報第69冊平

城宮発掘調査報告 XV—東院庭園地区の調査一本文編』2003年 赤線赤字筆者加筆











(図 28) 旧嵯峨院・大沢池（大覚寺御所跡）の遺水  
京都府 平安時代初期

出典：舊嵯峨御所大覚寺『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告  
一大沢池北岸域復原整備事業に伴う調査』1994 年  
赤字筆者加筆 北（名古屋滝跡）を上にして掲載



(図 29) 鳥羽離宮模型

所蔵 京都市歴史資料館 (1994)

出典：京都市埋蔵文化財研究所編集『院政期の京都 白河と鳥羽 付法金剛院・法住寺殿』

京都市・(財)京都市埋蔵文化財研究所発行 2007 年





(図 30) 平城京左京三条二坊宮跡庭園

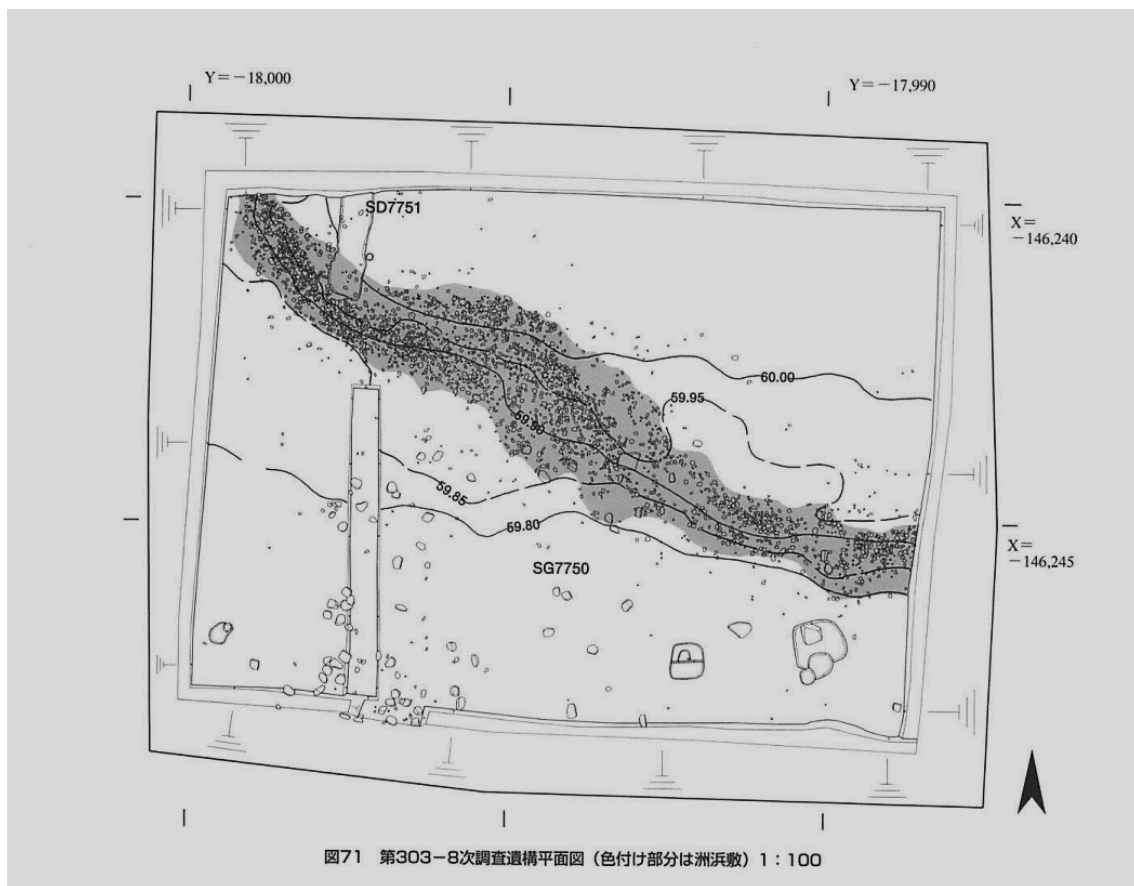
奈良県 奈良時代

右 遺構平面図

左の上・中・下：汀線の立てた縁石、州浜、池底の礫敷き  
要所の立石

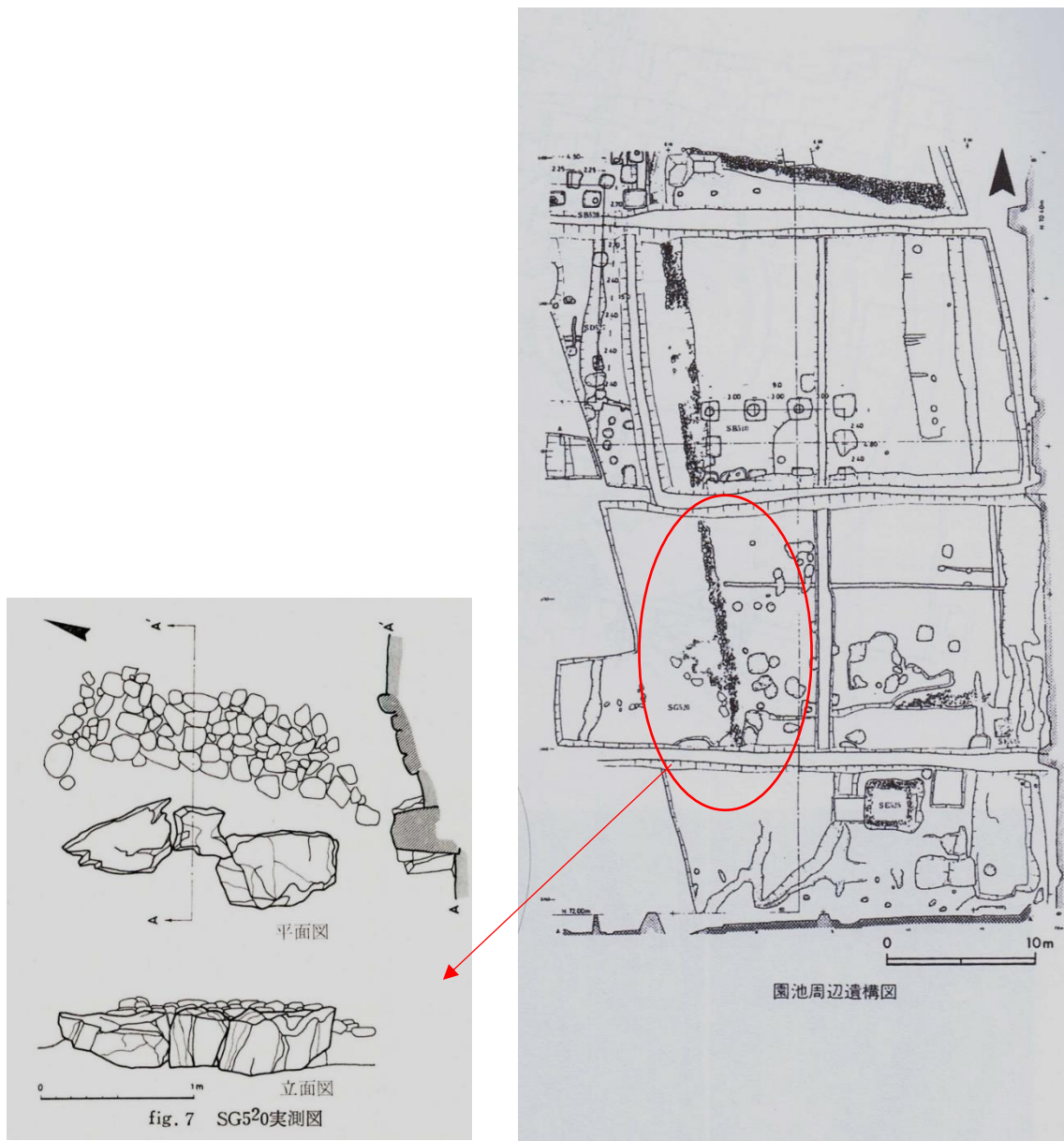
出典：奈良国立文化財研究所編集・発行『平城京左京三条二坊六坪  
発掘調査報告書』1986 年

写真 筆者撮影 令和元年 11 月整備工事中



（図 31）長屋王邸西庭園の池の洲浜敷の遺構  
奈良県 奈良時代

出典：山下信一郎「平城京左京三条二坊二坪（長屋王邸）の調査―第 303-8 次」  
奈良文化財研究所編集・発行『年報 2000-Ⅲ』2001 年



(図 32) 平城京左京一条三坊十五・十六坪庭園遺跡の州浜位置と石組  
奈良県 奈良時代初期及び末期

右 古墳の外掘の葺石を州浜として利用した園池周辺遺構図

出典：奈良文化財研究所編集・発行『古代庭園研究Ⅰ』2006年

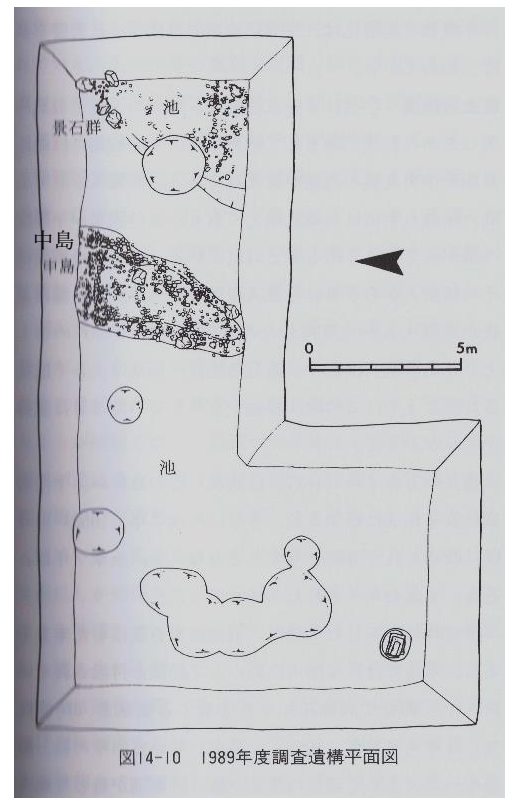
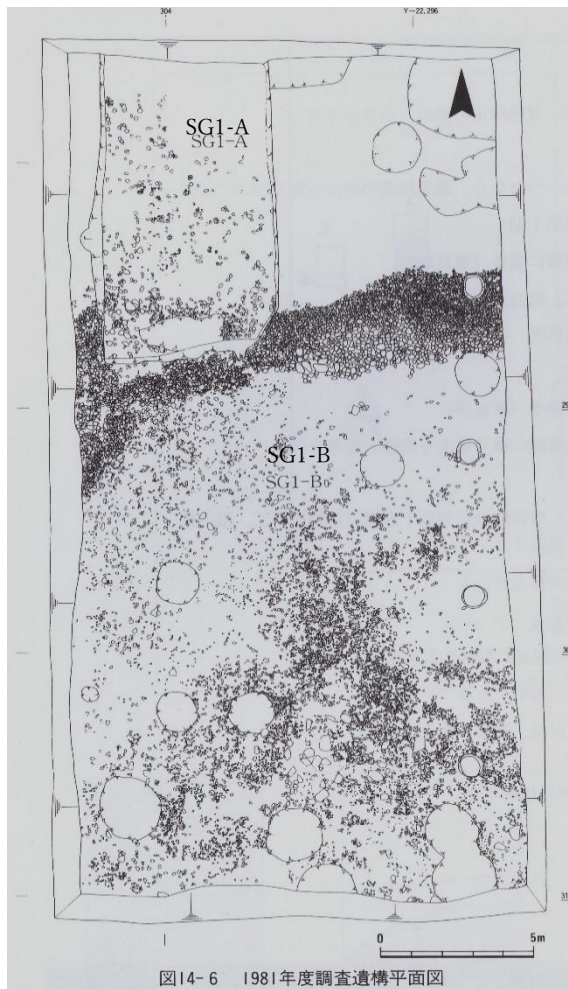
左 州浜を背にした石組の実測図

出典：藤原武二、宮本長二郎「平城京の遺跡 左京一条三坊十五・十六坪

(6AFB-F～J 地区)」奈良文化財研究所編集・発行『奈良文化財研究所学報第23冊』1975年

赤線筆者加筆





(図 33) 高陽院で検出された州浜、池、中島、景石  
京都府 平安時代

左 SG 1-A期の最も古い池跡。西岸から東へ突き出す州浜  
SG 1-B期は A の州浜が砂礫で埋められ、東西方向に新しく  
つくられた州浜

出典：奈良文化財研究所編集・発行『発掘庭園資料』1998 年 黒字筆者加筆

右 中島、池、景石が検出された。

出典：京都市埋蔵文化財研究所編集・発行「平安京左京二条二坊・高陽院跡 2」『平成  
元年度京都市埋蔵文化財調査概要』1994 年 P. 18 図 14 遺構平面図  
黒字筆者加筆



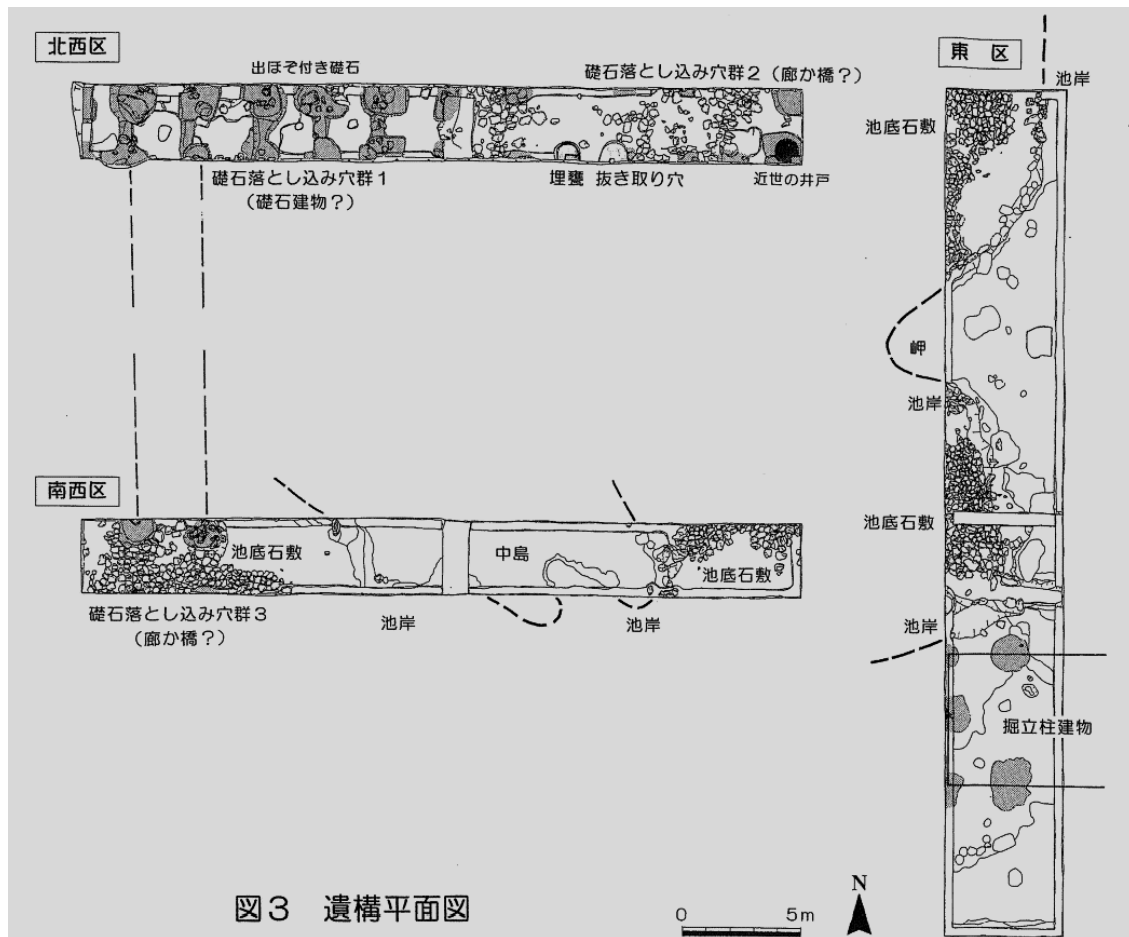
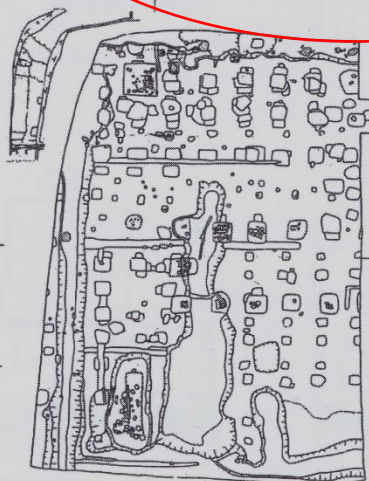
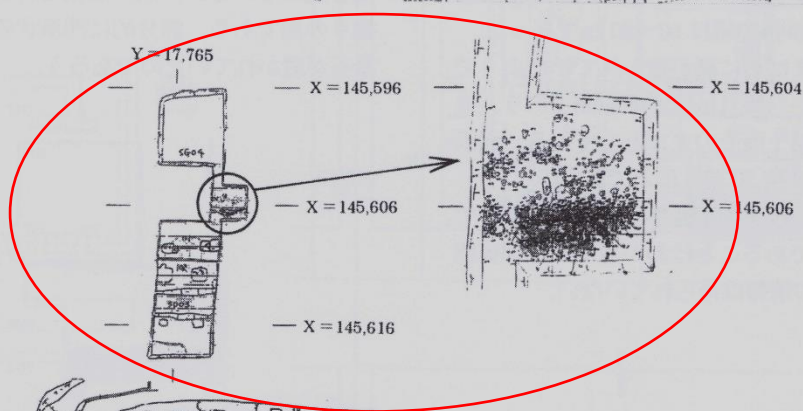
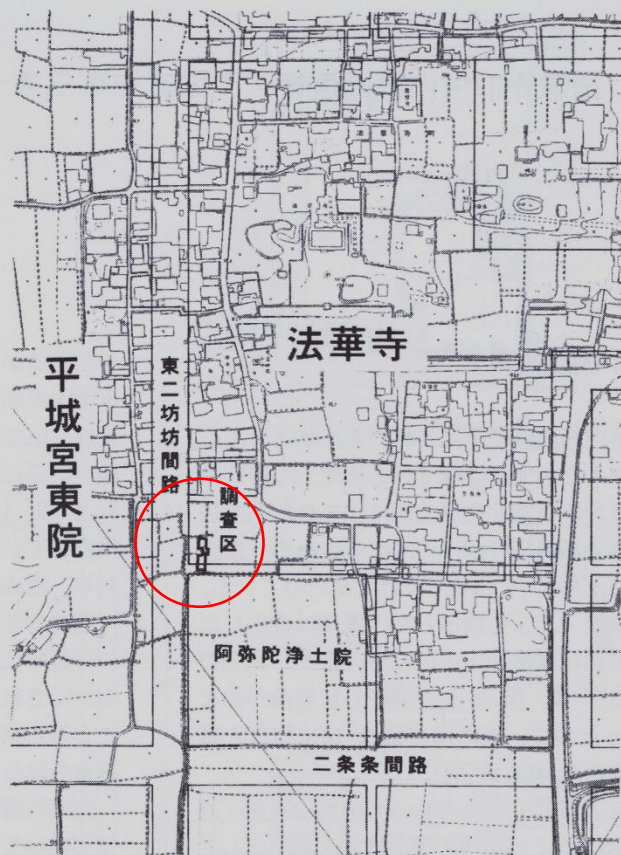


図3 遺構平面図

(図 34) 法華寺阿弥陀浄土院の庭園遺構  
奈良県 奈良時代

出典：奈良文化財研究所「法華寺阿弥陀浄土院の調査—第 312 次」  
現地説明会資料、2000 年 第 312 次調査遺構平面図

法華寺旧境内庭園遺構



(図 35) 法華寺旧境内庭園遺構の州浜  
奈良県 奈良時代  
池と州浜護岸が検出された。

出典：奈良文化財研究所編集・発行  
『古代庭園研究 I』2006 年  
赤線筆者加筆



(図 36) 平安時代の発掘遺構を含む平等院境内の構成 1990 年頃  
京都府 平安時代

出典：宇治市歴史資料館編集『史跡及び名勝平等院庭園保存整備報告書』

(宗) 平等院、2003 年、「平等院境内発見の平安遺構概要図 (平成 2 年測量図使用)」

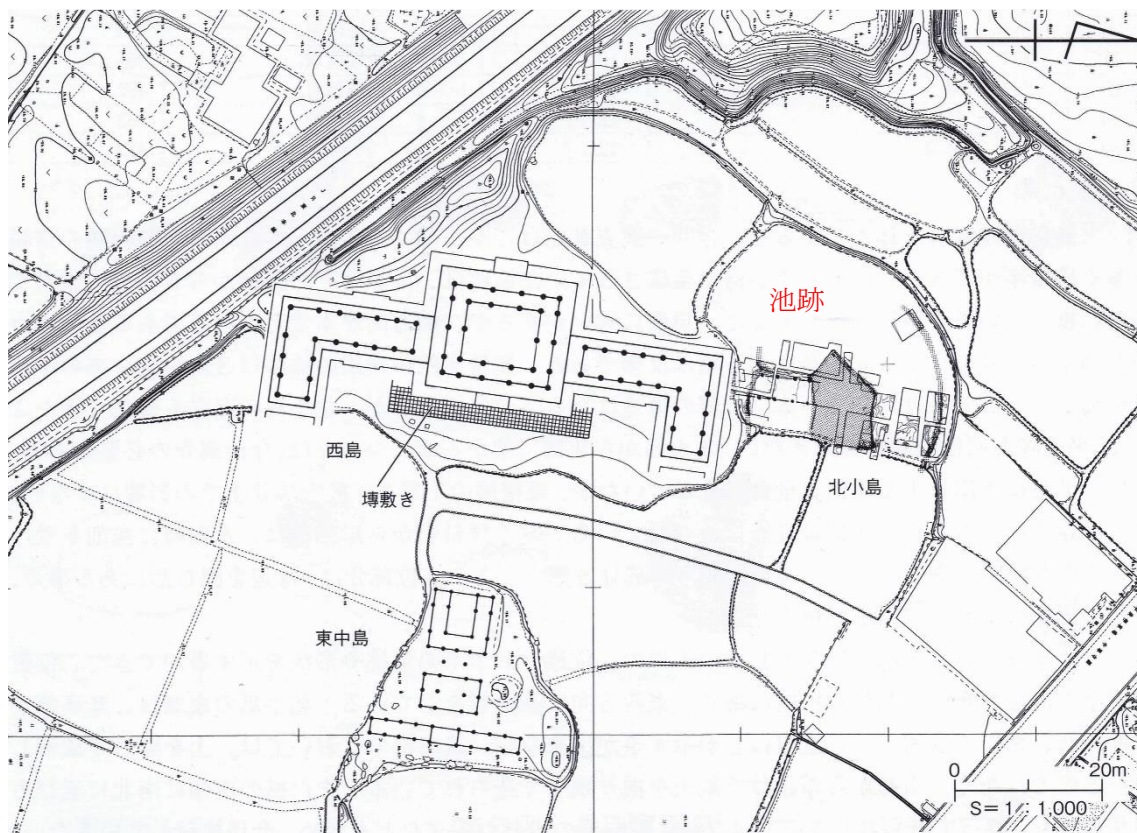
赤線筆者加筆 (平安時代はこのあたりにもう一つの池があった。)





(図 37) 毛越寺庭園の構成  
岩手県 平安時代

出典：平泉町教育委員会『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書  
—第13次調査—』1991年「第13次調査 中島発掘調査位置図」



(図 38) 無量光院庭園の構成  
岩手県 平安時代

#### 上 遺構配置

出典：平泉町教育委員会編集・発行

『特別史跡 無量光院跡発掘調査報告書Ⅲ

-第17次調査-』2006年、p.17「主要遺構配置図」

赤字筆者加筆

#### 右下 庭園概要

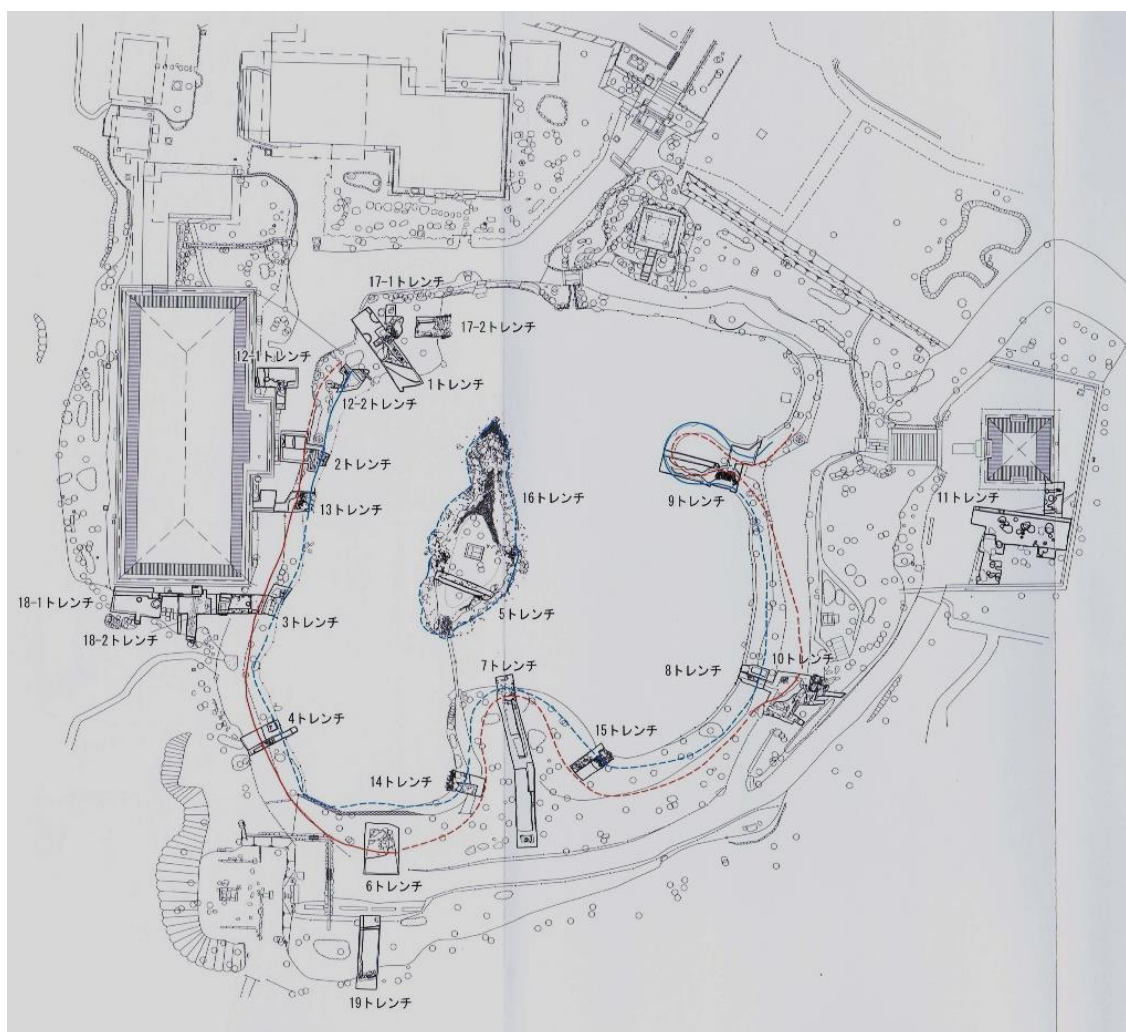
出典：平泉文化遺産センター

「無量光院跡第46次現地説明会資料」2019年

「無量光院跡遺構配置図」北を右にして掲載







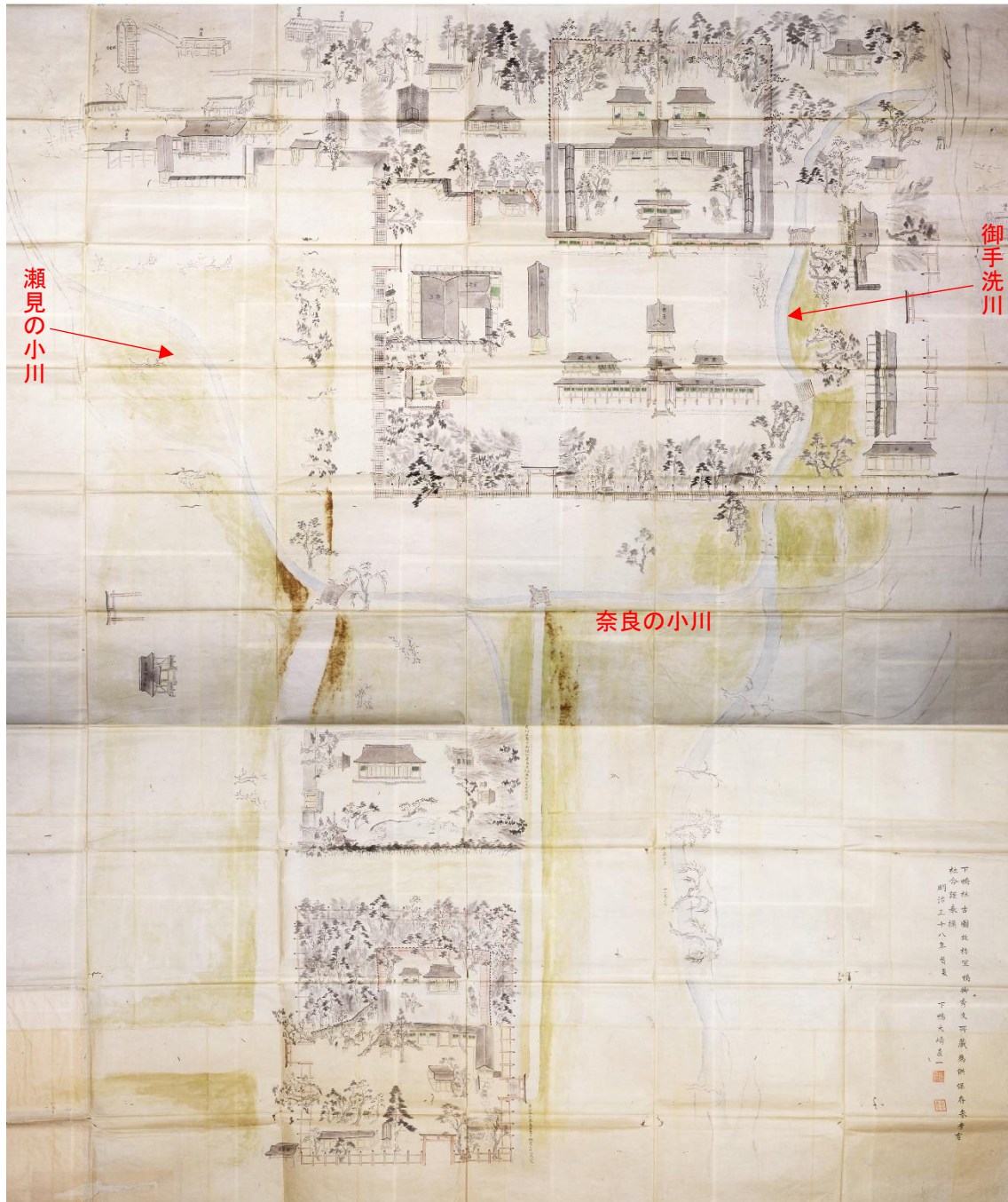
(図 39) 浄瑠璃寺庭園の構成  
京都府 平安時代

推定護岸ライン

赤色実線 作庭当初の遺構上端を結んだライン  
赤色破線 時期不明の遺構上端を結んだライン  
青色実線 作庭当初の遺構下端を結んだライン  
青色破線 時期不明の遺構下端を結んだライン

□ 花崗岩集石

出典：(宗) 浄瑠璃寺『特別名勝及び史跡 浄瑠璃寺庭園保存修理事業報告書Ⅰ  
(発掘調査編)』2019年「庭園池泉汀ライン復元図」



(図 40) 鴨社古図

平安時代の御祖社社頭図

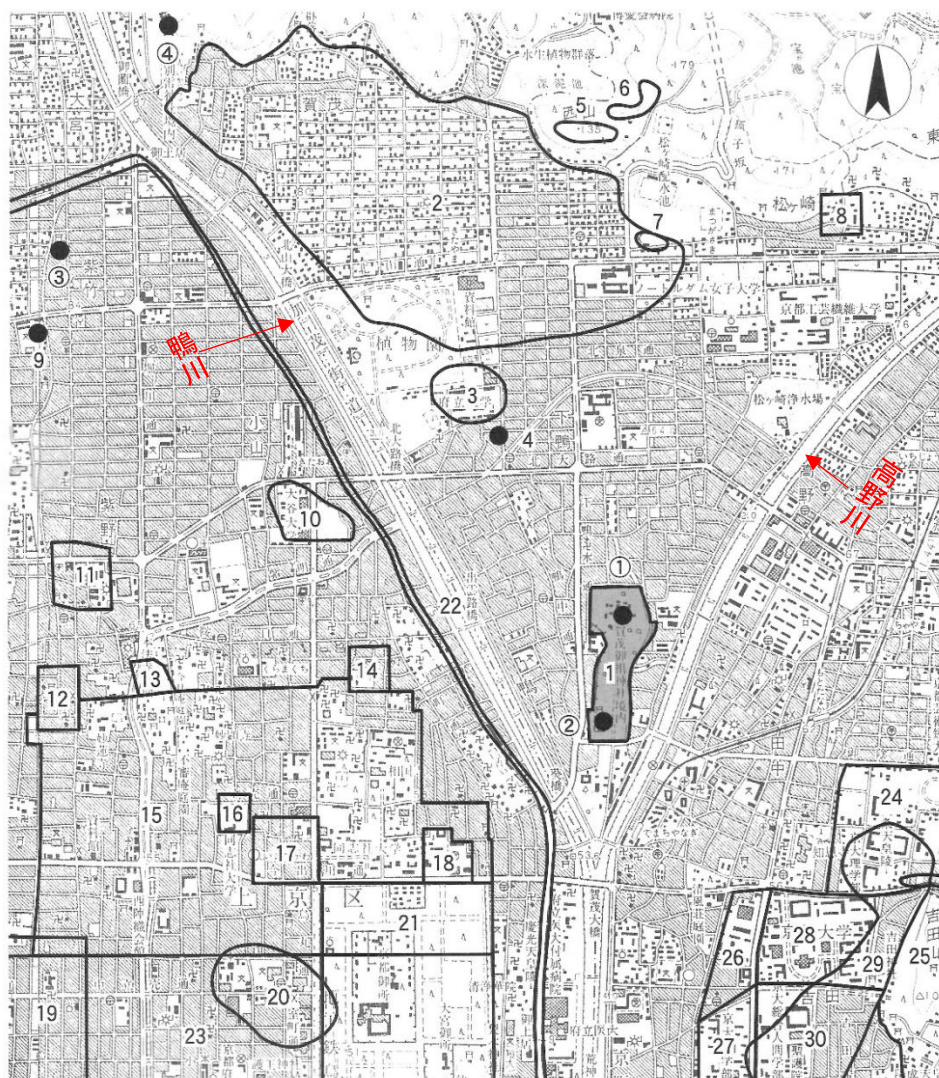
出典：「鴨社古図」（明治 38 年大崎直一模写・賀茂御祖神社〈下鴨神社〉所蔵）

赤線赤字筆者加筆

画像提供 賀茂御祖神社〈下鴨神社〉

賀茂御祖神社の許可なく転載不可





※ 京都市遺跡地図（1：25,000）をもとに作図

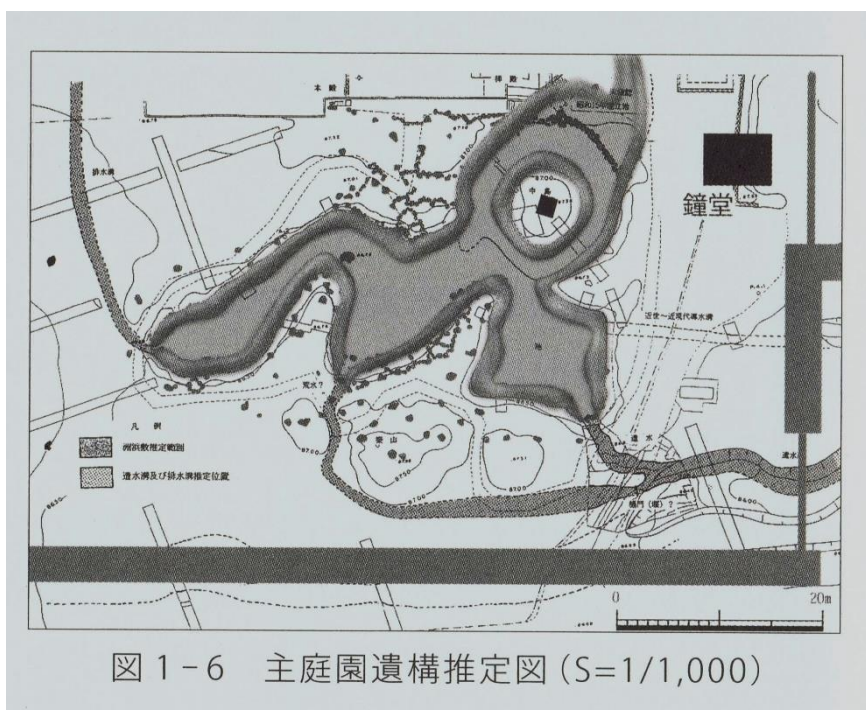
- |                    |                       |          |
|--------------------|-----------------------|----------|
| 1. 賀茂御祖神社境内（縄文～江戸） | 16. 新町校地遺跡（室町～桃山）     | ① 賀茂御祖神社 |
| 2. 植物園北遺跡（縄文～室町）   | 17. 室町殿跡（室町）          | ② 河合神社   |
| 3. 下鴨半木町遺跡（平安）     | 18. 常盤井殿遺跡（鎌倉～桃山）     | ③ 久我神社   |
| 4. 半木町塚跡（古墳）       | 19. 聚楽第跡（桃山）          | ④ 賀茂別雷神社 |
| 5. 西山古墳群（古墳）       | 20. 内善町遺跡（弥生前期）       |          |
| 6. 深泥池窯跡（飛鳥）       | 21. 公家町遺跡（桃山～江戸）      |          |
| 7. 芝本瓦窯跡（平安前期）     | 22. 御土居（桃山）           |          |
| 8. 松ヶ崎廃寺跡（平安中期）    | 23. 平安京跡（平安）          |          |
| 9. 西北町遺跡（平安）       | 24. 北白川追分町遺跡（縄文晩期～近世） |          |
| 10. 上総町遺跡（飛鳥～奈良）   | 25. 追分町古墳群（古墳）        |          |
| 11. 雲林院跡（平安前期）     | 26. 吉田泉殿町遺跡（平安後期～室町）  |          |
| 12. 紫野斎院跡（古墳・平安）   | 27. 吉田橋町遺跡（弥生～近世）     |          |
| 13. 悲田院跡（鎌倉）       | 28. 吉田本町遺跡（縄文晩期～近世）   |          |
| 14. 出雲寺跡（奈良前期～平安）  | 29. 吉田上大路町遺跡（弥生）      |          |
| 15. 上京遺跡（鎌倉～室町）    | 30. 吉田二本松町遺跡（縄文～近世）   |          |

（図 40-2）下鴨神社付近の遺跡分布

出典：京都市埋蔵文化財研究所編集・発行『京都市埋蔵文化財研究所  
発掘調査報告 2005-15 史跡賀茂御祖神社境内』2006 年

「図 3 調査地周辺の遺跡分布図（1：25,000）」赤線赤字筆者加筆





(図 41) 兵主神社の池、島、流れの構成  
滋賀県 平安時代

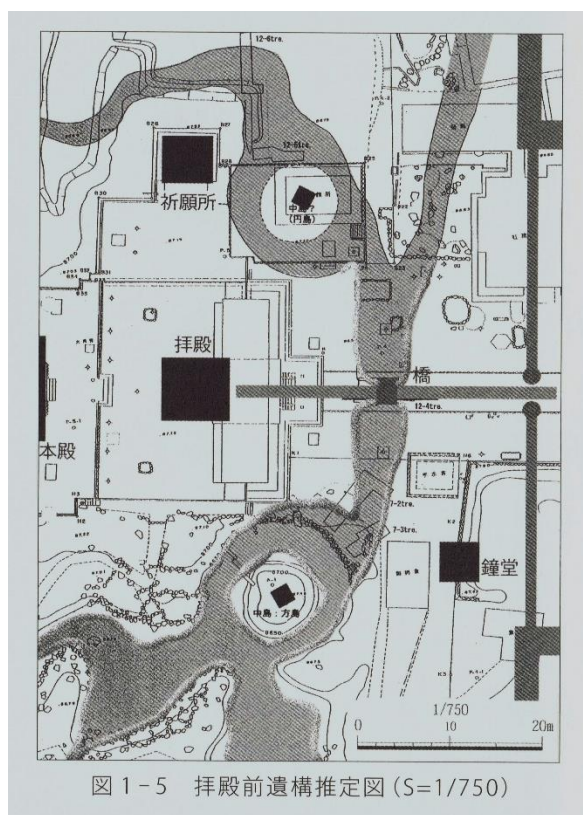
上 現存する主庭園の構成。

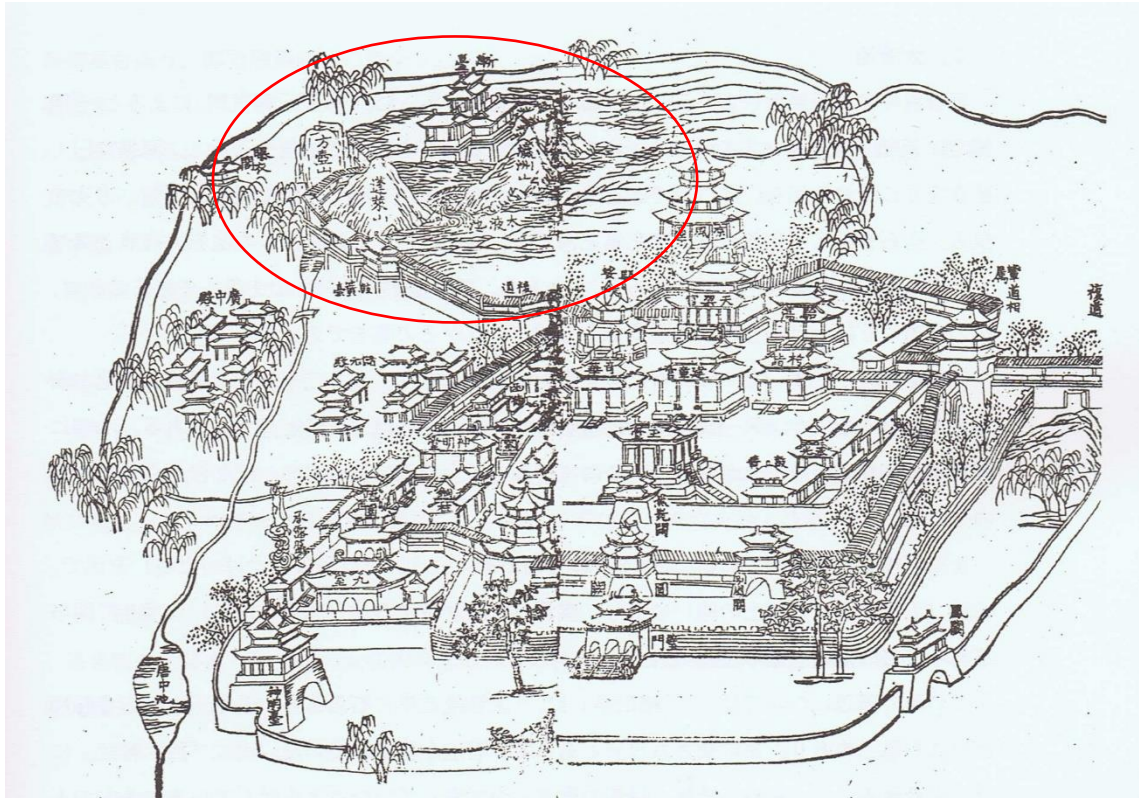
下 推定される平安時代の全体の構成  
(遣水・池・島の左右対称配置)

出典：(宗) 兵主神社『名勝兵主神社  
庭園保存整備報告書-保存整備編』  
2002 年

上：「図 1-6 主庭園遺構推定図」

下：「図 1-5 拝殿前遺構推定図」





(図 42) 建章宮 太液池図に描かれた蓬萊三山

漢代

上 漢建章宮太液池図

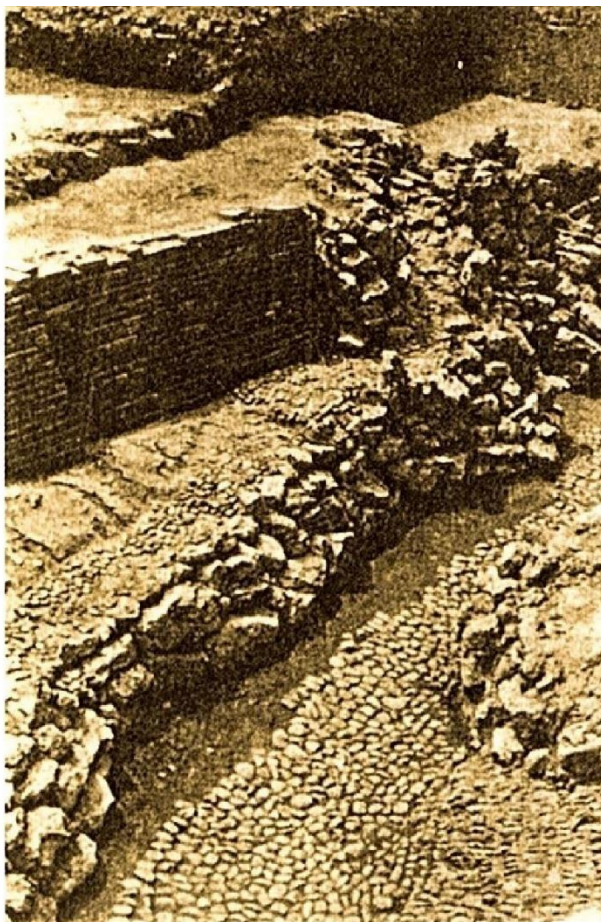
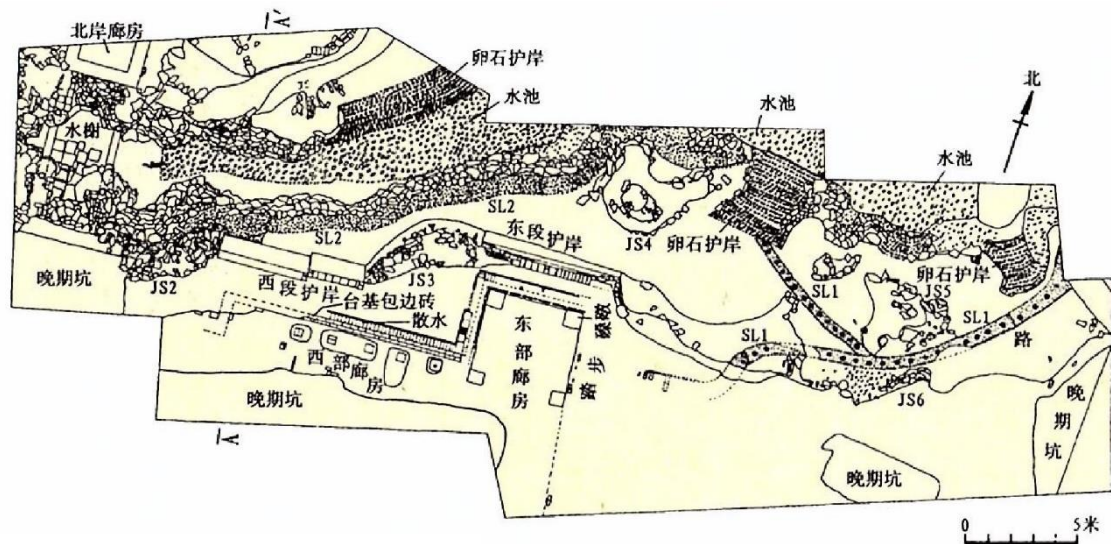
下 園池部分 (赤枠内拡大)

出典：佐藤 昌『中国造園史 上巻』「漢建章宮 太液池図」 国会図書館蔵、

陝西通志所蔵、発行（社）日本公園緑地協会、1991 年 より転載

赤線筆者加筆





(図 43) 洛陽上陽宮 卵石護岸  
7 世紀後期 唐代  
大陸で護岸に卵石を用いた例。  
州浜のモデルとする説がある。

上 唐洛陽上陽宮遺構平面図  
下 唐洛陽上陽宮園池西部遺構  
中国社会科学院考古研究所調査

出典: 小野健吉『日本庭園の歴史と文化』  
(株)吉川弘文館、2015 年



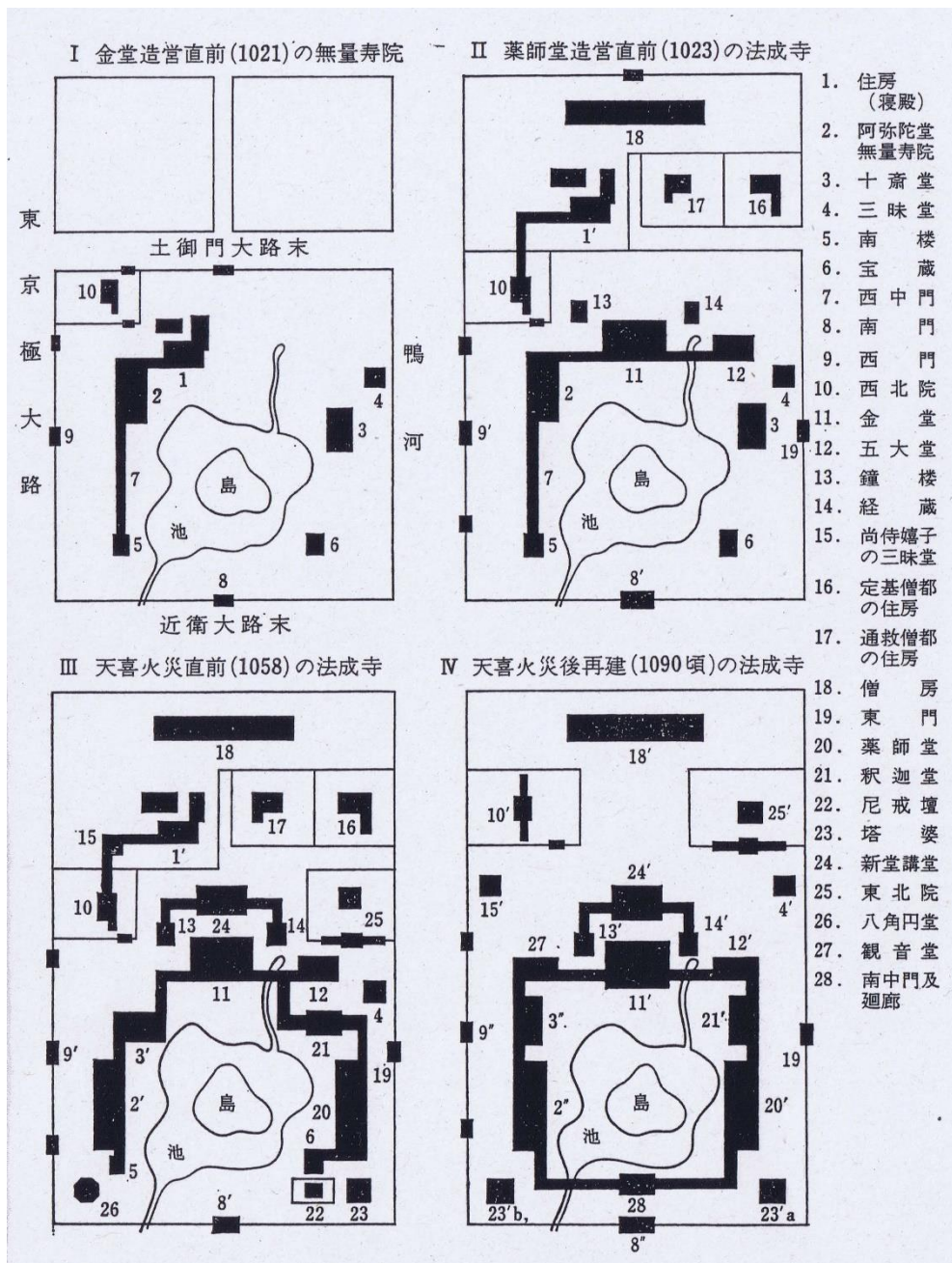
(図 44) 雁鴨池の垂直石積み護岸

慶州 三国時代（統一新羅 676 年より下る）

汀の形は入り組んでいるが、護岸は垂直石積みである。

他に導水部の流れ、滝石組の遺構もある。

スケッチ 筆者作画



(図 45) 法成寺推定復元図

出典：杉山信三「法成寺建築配置図（試案）」

『院家建築の研究』(株)吉川弘文館、1981 年





(図 46) 流れと遣水

上：城之越遺跡の湧水点から引く流れ（古墳時代）

下：毛越寺庭園の遣水（平安時代）

写真 筆者撮影 平成 30 年 7 月



(図 47) 州浜と石敷き

上 飛鳥京跡苑池遺構北池の石敷き（飛鳥時代）

出典：奈良県立橿原考古学研究所「史跡・名勝飛鳥京跡苑池第 13 次調査（飛鳥京跡第 182 次調査）

現地説明会資料」2019 年「流水施設全景」 画像提供 **奈良県立橿原考古学研究所**

下 平城宮東院庭園の州浜（中期下層園池）（奈良時代）

出典：奈良文化財研究所編集・発行『学報第 69 冊平城宮発掘調査報告 XV—東院地区の調査—本文

編』「Fig. 8 下層園池北半部実測図」分割図を筆者合成



(図 48) 仮山

出典：正倉院宝物 南倉 174

宮内庁ホームページ <https://shosoin.kunaicho.go.jp>

(令和 3 年 1 月 9 日検索)





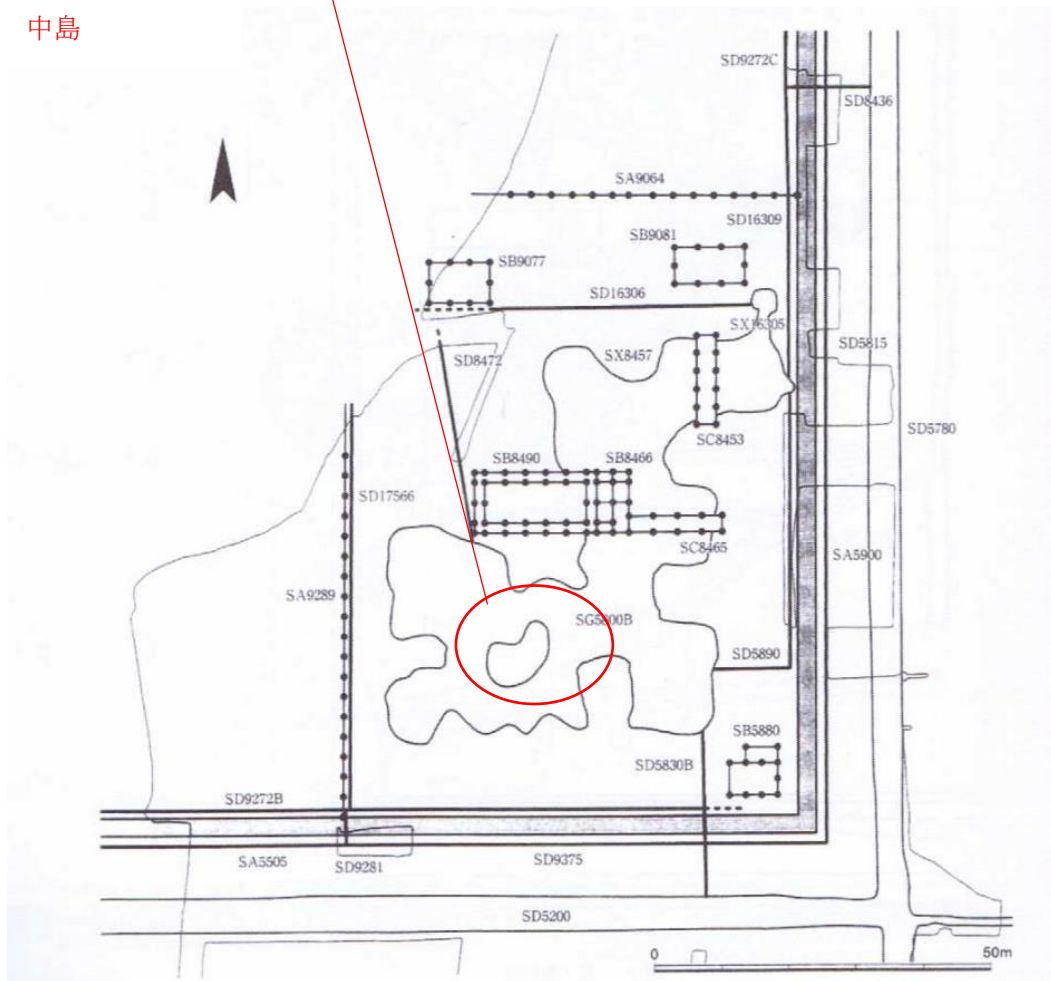
(図 49) 飛鳥京跡苑池遺構 南池の中島の形状

出典：奈良県立橿原考古学研究所「史跡・名勝飛鳥京跡苑池第 8 次調査  
(飛鳥京跡第 174 次調査) 現地説明会資料」

**画像提供 奈良県立橿原考古学研究所**



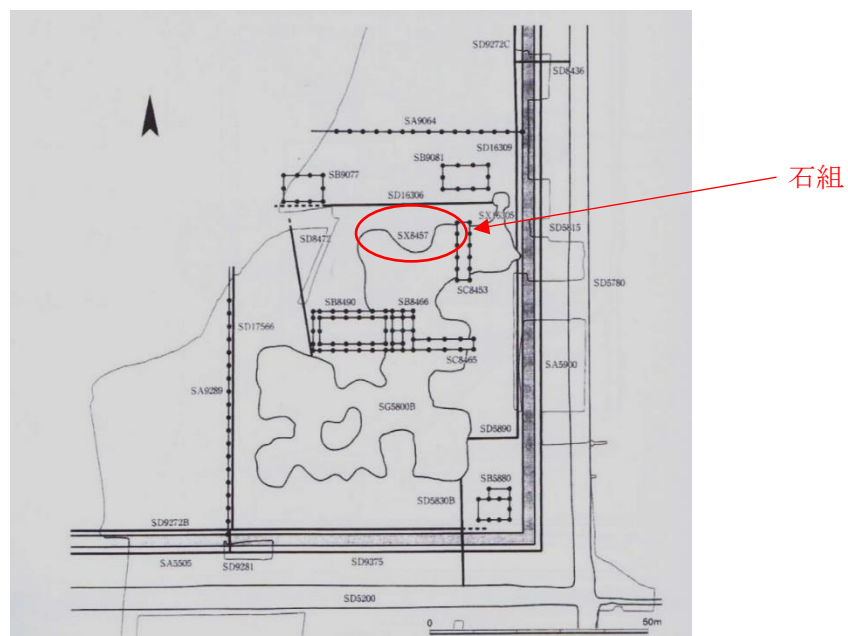
中島



(図 50) 平城宮東院庭園 上層園池の中島

出典：奈良文化財研究所編集・発行『古代庭園研究Ⅰ』2006年

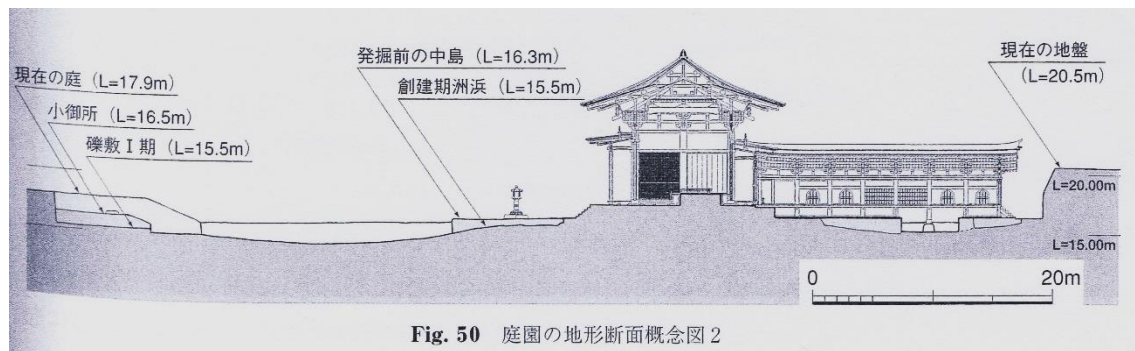
赤線赤字 筆者加筆 写真 筆者撮影 平成31年4月



(図 51) 平城宮東院庭園 上層園池北岸の石組み

出典：奈良文化財研究所編集・発行『古代庭園研究Ⅰ』2006年

写真 筆者撮影 平成31年4月 赤線赤字 筆者加筆



(図 52) 平等院庭園の中島の形状 (断面)

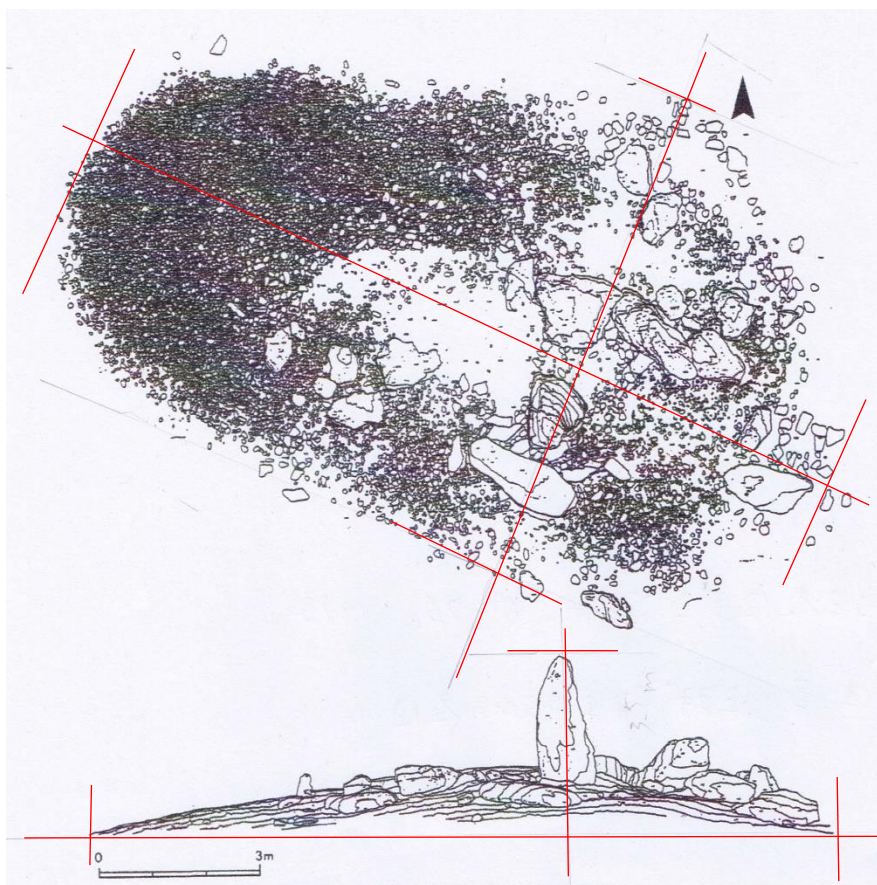
京都府 平安時代

平安時代の池と中島及び州浜の高低差

出典：宇治市歴史資料館「史跡及び名勝平等院庭園保存整備報告書」

(宗) 平等院、2003 年「Fig. 50 庭園の地形断面概念図 2」





(図 53) 毛越寺庭園 池中立石  
の立つ中島 (出島)

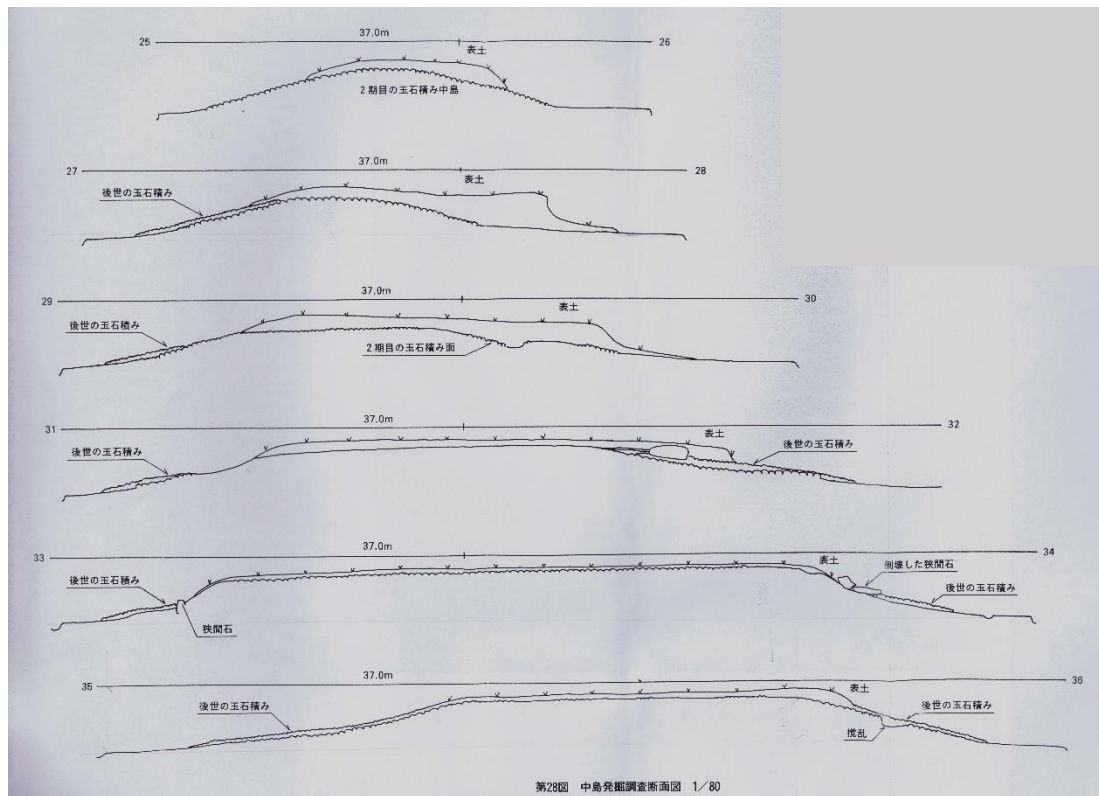
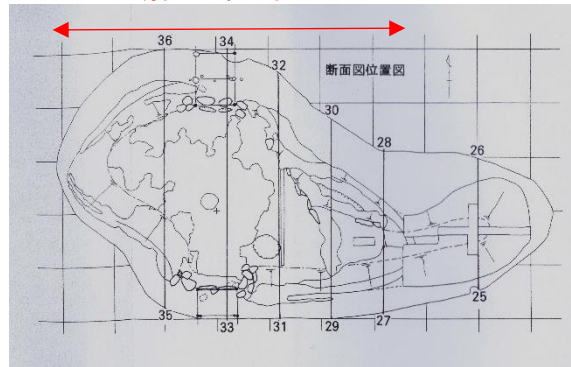
出典：平泉町教育委員会編集・発行『特別史跡特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書—第13次調査—岩手県平泉町文化財調査報告書第26集』1991年

赤線筆者加筆

写真 筆者撮影 平成30年7月

## 1 期目の東西径

1 期目の中島は地山に玉石を敷く。  
2 期目の中島は1 期目の池岸玉石敷面の東端を削りこみ、盛土東方に伸びた。



(図 54) 毛越寺庭園 中島の形状  
上と中 中島平面図・断面図



出典：平泉町教育委員会編集・発行『特別史跡  
特別名勝毛越寺庭園発掘調査報告書—第一—13 次  
調査—岩手県平泉町文化財調査報告書第 26  
集』1991 年「中島発掘調査断面図」  
赤字筆者加筆

下左 現在の中島

写真 筆者撮影 平成 30 年 7 月



◆難波津  
(港)

★難波宮所在地  
上町台地



(図 55) 浪華古図

平安時代頃の大阪湾

称徳2年(1098)に描かれたものを明治41年(1888)に模写したと伝わる。

出典：大阪天満宮御文庫所蔵「浪華古図」 画像提供 大阪天満宮

原図は北が左側になるものを上にして掲載し赤線赤字を筆者が加筆



(図 56) 島台 (州浜台)

出典：新村出編『広辞苑第2版補訂版』岩波書店、1976年、  
【州浜】の項





(図 57) 州浜形と^{こうろぜんのごほう}黄櫨染御袍の州浜紋

左 州浜形

右 ^{こうろぜんのごほう}黄櫨染御袍の州浜紋「桐竹鳳凰」

出典：左 尚学図書編『文様の手帳』小学館、1987 年

右 風俗博物館ホームページ

<https://costume.iz2.or.jp/color/480.html>

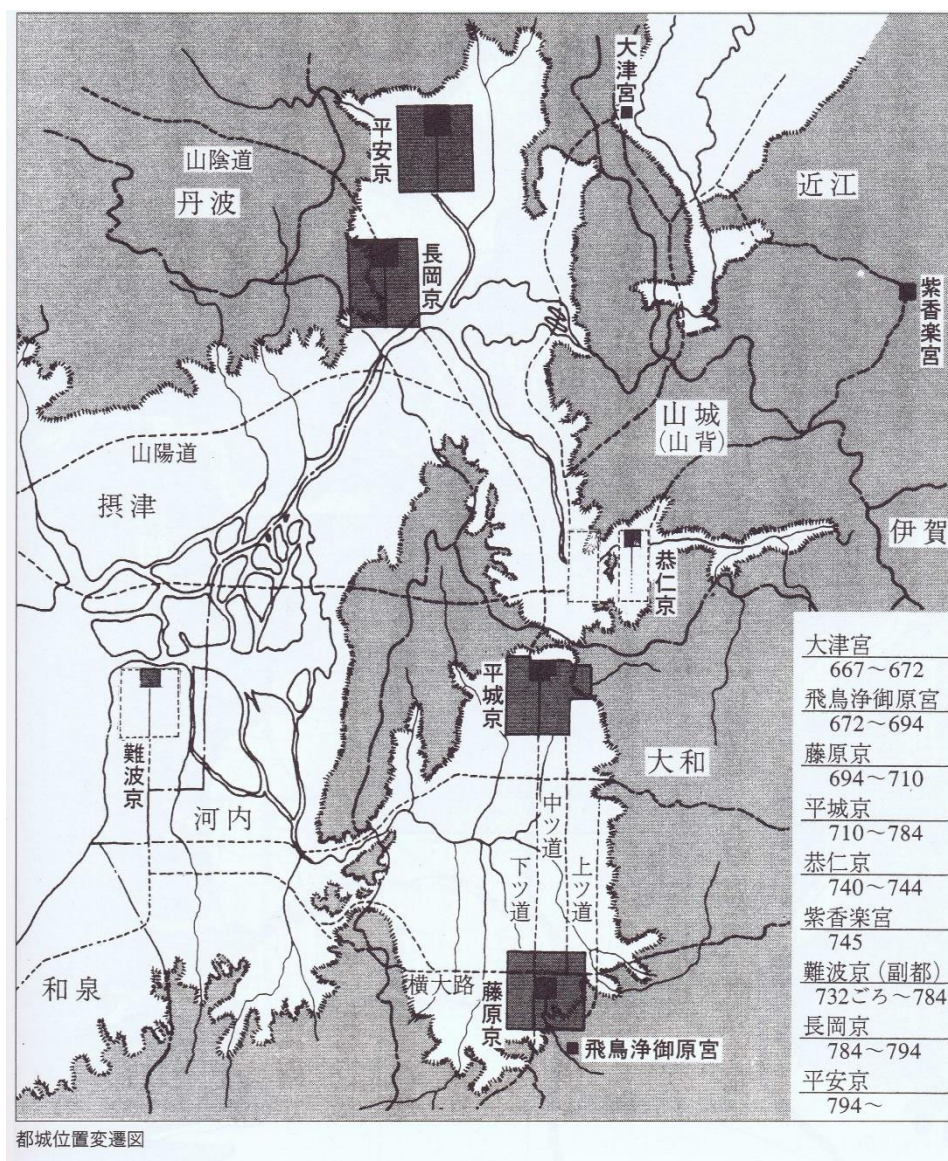
(令和 1 年 11 月 23 日検索) 風俗博物館より許可受

庭 坪 地 形 取 圖

(図 58) 碁盤の目を入れた庭坪地形取圖

出典：龍居松之助『日本造庭法秘傳』雄山閣、1929年

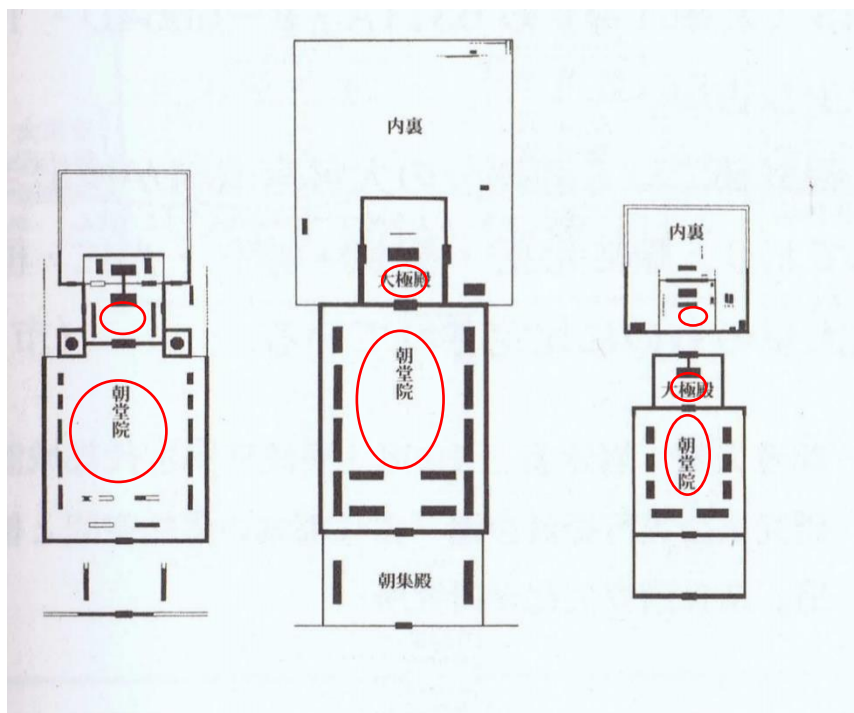
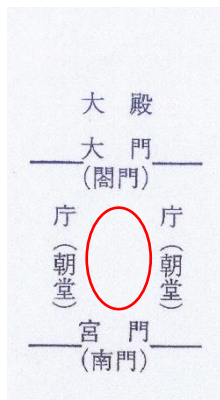
「嵯峨流庭古法秘傳の書」より「庭坪地形取圖」



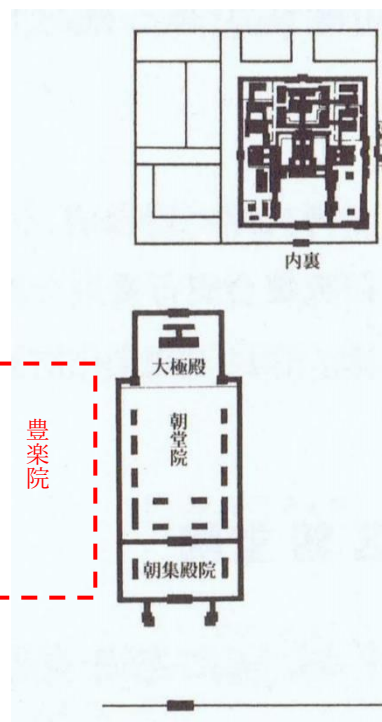
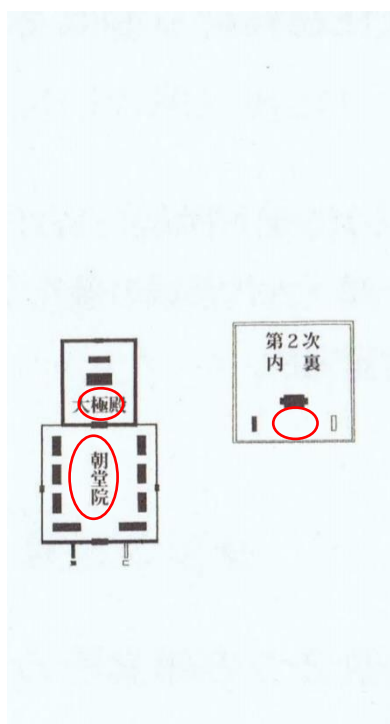
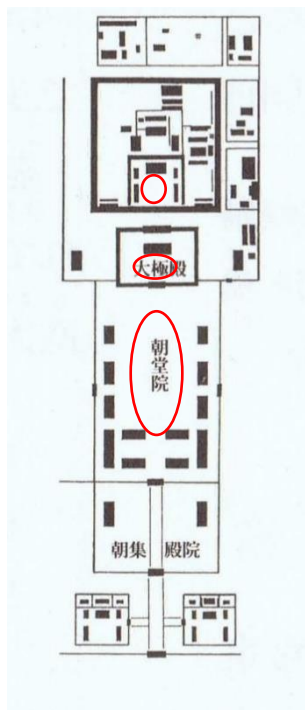
(図 59) 古代都城の位置と変遷

出典：奈良文化財研究所編集『図説平城京事典』柊風舎、2010 年  
「都城位置変遷図」





小墾田宮 (603 年～) 前期難波宮 (652 年～) 藤原宮 (694 年～) 後期難波宮 (744 年～)



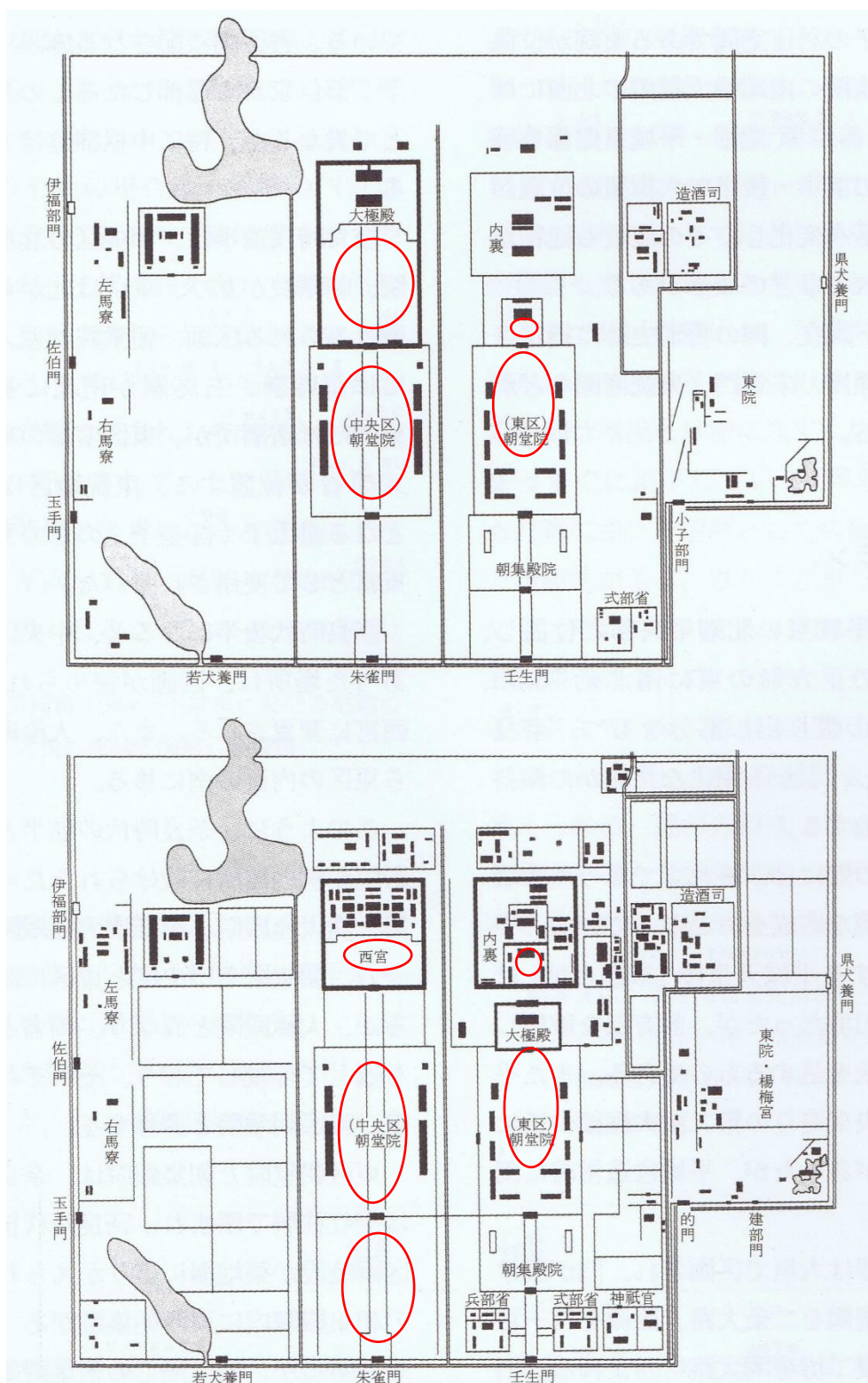
平城宮 (710 年～

長岡宮 (784 年～)

平安宮 (794 年～)

(図 60) 宮城中枢部

出典：上左 小墾田宮 関西大学文学部考古学研究室編『飛鳥宮跡 解説書』奈良県明日香村 2017 年  
他 奈良文化財研究所編『図説 平城京事典』柊風舎、2010 年 赤線赤字筆者加筆

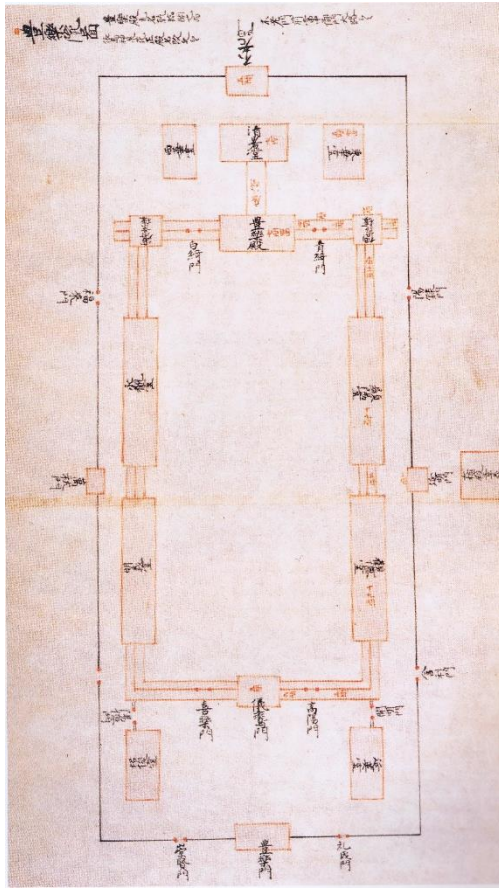


(図 61) 奈良時代前半の平城宮 (上)・奈良時代後半の平城宮 (下)

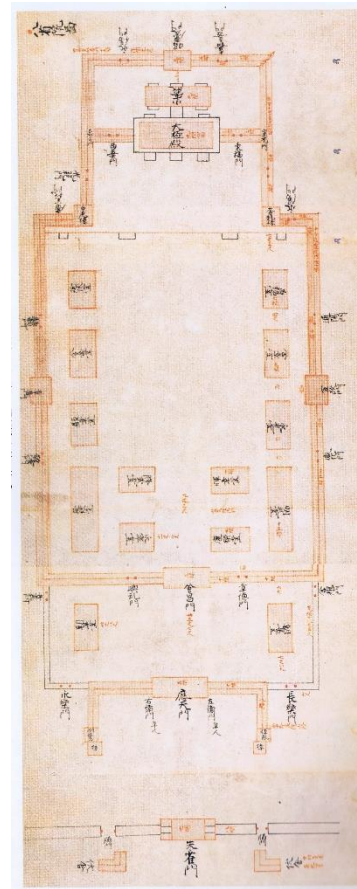
出典：奈良文化財研究所編『図説 平城宮』2010 年 赤線赤字筆者加筆



豊楽院図



八省院図



(図 62) 平安宮宮城図  
(陽明文庫本による)

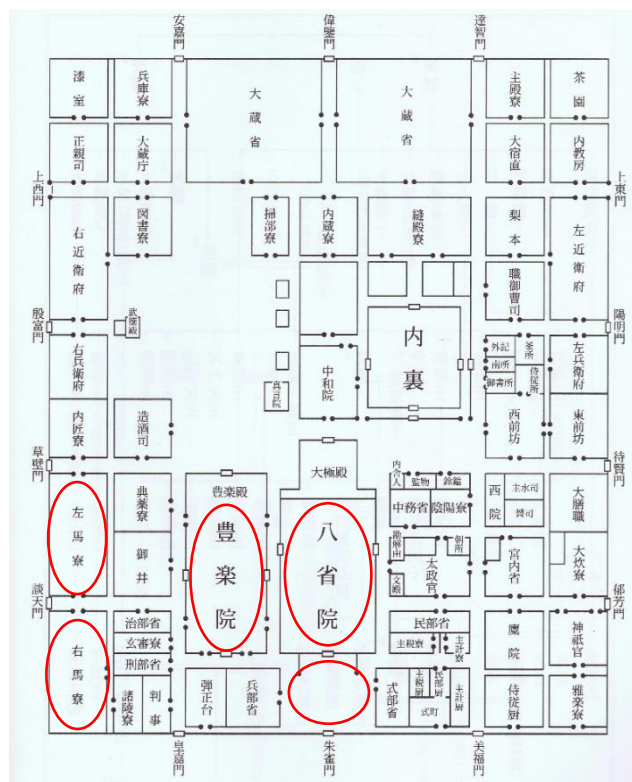
上 出典：古代学協会・古代学研究所編集・  
京都市埋蔵文化財研究所編集協力『平安  
京提要』角川書店、1994 年

「口絵」より「豊楽院図」「八省院図」

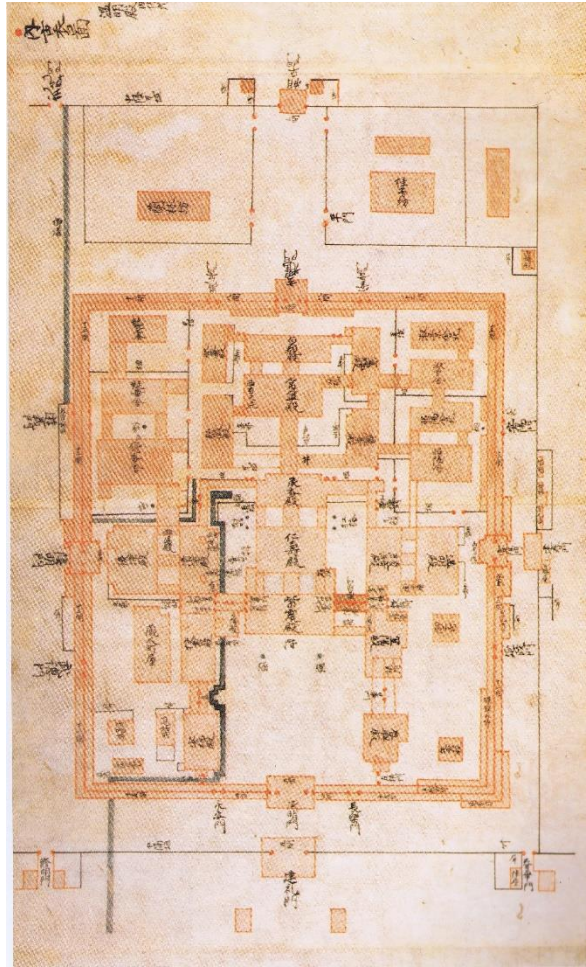
(公財) 陽明文庫より掲載許可受

下 出典：奈良文化財研究所編集『図説平城  
京事典』終風舎、2010 年

赤線筆者加筆



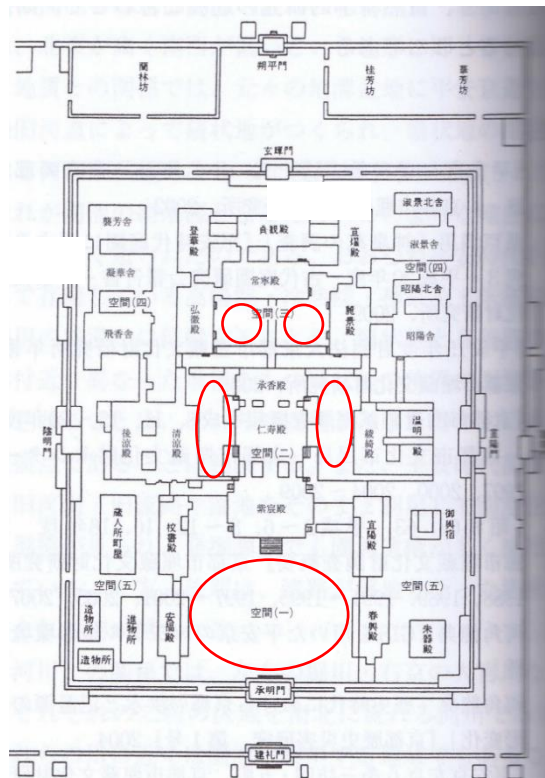
内裏図



(図 63) 平安宮内裏図  
(陽明文庫本による)

上 出典：古代学協会・古代学研究所編集・  
京都市埋蔵文化財研究所編集協力  
『平安京提要』角川書店、1994 年  
「口絵」より「内裏図」  
**(公財) 陽明文庫より掲載許可受**

下 出典：橋本義則『平安宮成立史の研究』  
塙書房、1995 年  
赤線筆者加筆







(図 64) 立石

上 城之越遺跡

中 平城宮東院

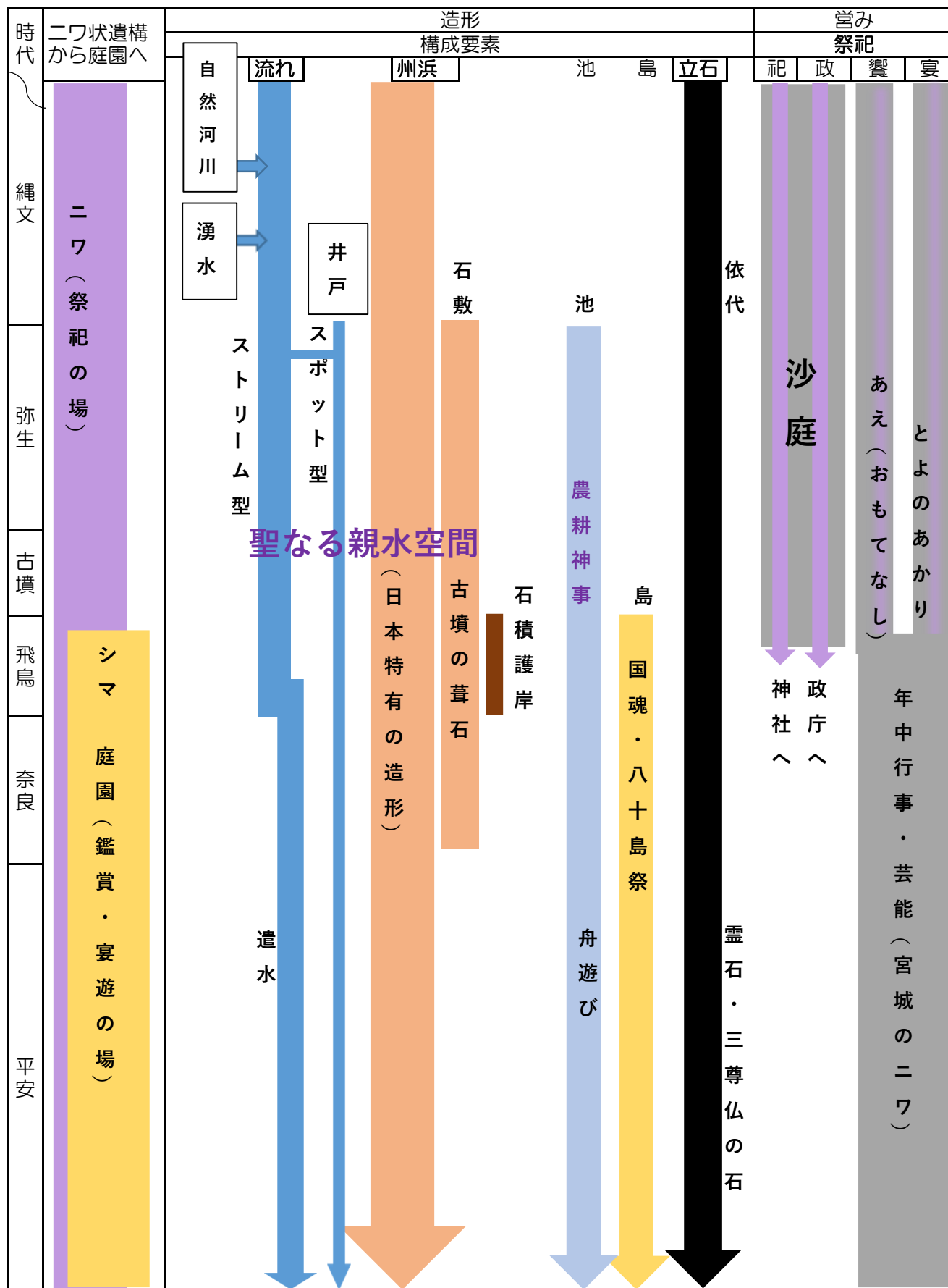
下 毛越寺庭園

写真 筆者撮影 平成 30 年 7 月～31 年 4 月



(図 65) 天の川

撮影 手嶋千羽 令和3年阿蘇にて



(図66) 古代庭園の概念図

# 発表論文リスト

## 1. 「長崎県平戸市国指定史跡名勝「棲霞園」の復旧」

西日本短期大学総合学術研究論集 第10号、2020年3月

## 2. 「古代庭園における島と州浜」

京都芸術大学大学院紀要1号、2020年（2021年1月電子公開）

<https://kyoto->

[art.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=94&pn=1&count=20&order=17&lang=japanese&page_id=13&block_id=61](https://kyoto-art.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=94&pn=1&count=20&order=17&lang=japanese&page_id=13&block_id=61)

## 3. 「『作庭記』の底流にあるアニミズム—立石を中心に」

京都芸術大学大学院紀要2号、2021年（2021年11月電子公開）

<https://kyoto->

[art.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=358&item_no=1&page_id=13&block_id=61](https://kyoto-art.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=358&item_no=1&page_id=13&block_id=61)

## 謝辞

本論文の執筆にあたっては様々な分野の多くの方々にご指導とご教示を賜わった。修士課程以来五年間にわたり一貫してご指導をいただいた本学教授 尼崎博正先生、准教授 町田香先生には研究の方法と論文の書き方の初歩から教わり、途中たびたび暗礁に乗り上げたときも緻密で明晰な見通しと考え方をもって導いていただいたことは、論文にとどまらず研究者としての生涯の賜りものとなった。

厳正なる審査のうえ助言をくださった高瀬要一先生（公益財団法人琴の浦温山荘園理事長・元奈良国立文化財研究所文化遺産部長）、本学大学院芸術専攻（博士課程）専攻長 河上眞理先生、歴史遺産学科教授 杉本宏先生に心より御礼申しあげる。

また執筆中にはこの分野の先行研究者でおられる本中眞先生（奈良文化財研究所所長）と高瀬要一先生に拙論をご一読いただき、本中先生には論文構成についてのご指摘を、高瀬先生には東院庭園に関するご教示だけでなく最終審査に立ち会っていただいたことはこの上ない光栄であり、鈴木久男先生（京都産業大学日本文化研究所客員研究員・元京都産業大学教授）には具体的な遺構の詳細にとどまらず、考古学の考え方を細やかにご教示賜わったことに御礼申し上げるとともに、後塵を拝する者としてご指導の榮に浴したことを生涯の喜びとするものである。そして本学教授の仲隆裕先生、河合健先生、加藤友規先生に折りにふれいただいた助言やご指摘は、暖かい励ましそのものだったのであり、ここまで来ることができたと実感している。

三重県埋蔵文化財センターの穂積裕昌先生、三重県立斎宮歴史博物館の榎村寛之先生にも造園とは異なる考古学、文献史学の考え方をお示しいただいたことは、造園しか知らなかった筆者にとって望外の喜びであった。また、京都市内の遺構について、多くの知見と資料を賜わった公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所の南孝雄先生、内田好昭先生、京都市考古資料館の山本雅和先生に感謝とともに今後とも変わらぬご指導を賜りたくお願い申し上げる次第である。そして貴重な古図の詳細情報と画像をお送りいただいた下鴨神社資料調査室室長・下鴨神社資料館館長 新木直安先生、大阪大学招聘教授・

大阪天満宮文化研究員の高島幸次先生には画像とともに難波と東院庭園についてもご意見を賜り、奈良県立橿原考古学研究所にも遺構埋設前の貴重な写真を提供いただいた。このように多数の図版の詳細な情報と掲載許可をくださった全国の関係諸機関の皆様とこの五年間に会った方々に敬意と感謝の意を表し、幾重にも御礼を申し上げたい。ありがとうございました。

令和5年3月